

正十一年九月十三日第三種郵便物認可
正十二年九月一日發行 大正十二年八月十三日印刷納本


ハリキン石鹼本舖
ハリキン化粧品株式會社
東京馬喰町四
友よ、
歌へ、舞へ、
うれしき夕
ハリキン石鹼
良品
廉價
本邦人の洗顔と入浴に最も良し。

近代の戀愛觀

厨川白村著

此書は無用の閑文字でない。今や時代人心の内部より迫り來れる性的生活革命の、強く止みがたき要求に對して、その至上至高の道德目標を提示したる一大豫言であり警告である。出版以來半歳にして數萬部を賣盡し、本社は今なほ連日の註文に忙殺されてゐる。新秋の讀書期に入つて、又更に多大の增刷をなし、江湖の需用に待つ事とした。

◇定價貳圓五拾錢◇

四六判上製◇送料十九錢◇

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

賀川氏の散文は天下獨歩である。清かな魂の持主である氏の
此二名著は初秋の好時節に尤も讀書子に歡迎さるるであらう。

賀川豊彦著

星より星への通路

定價2圓
送料17錢

雷鳥の目醒むる前

定價2圓30錢
送料17錢

秋來る！詩の秋來る！此二書の時來る！讀めこの高貴なる斷想錄を。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

谷崎潤一郎二名著

愛すればこそ

價 1 圓 6 0 錢
送料 1 5 錢

恐ろしき魅力を有つたる藝術として、變態心理を深刻に描き出した名著として日本創作壇をアッと叫ばした本書が八十六版を出すに至つたことは全く斯界の驚異とせられてゐます。餘韻長へに讀者の肺腑に殘る感銘多き名作です。

愛すればこそ（三幕）
永遠の偶像（一幕）
彼女の夫（一幕）
或調書の一節（對話）

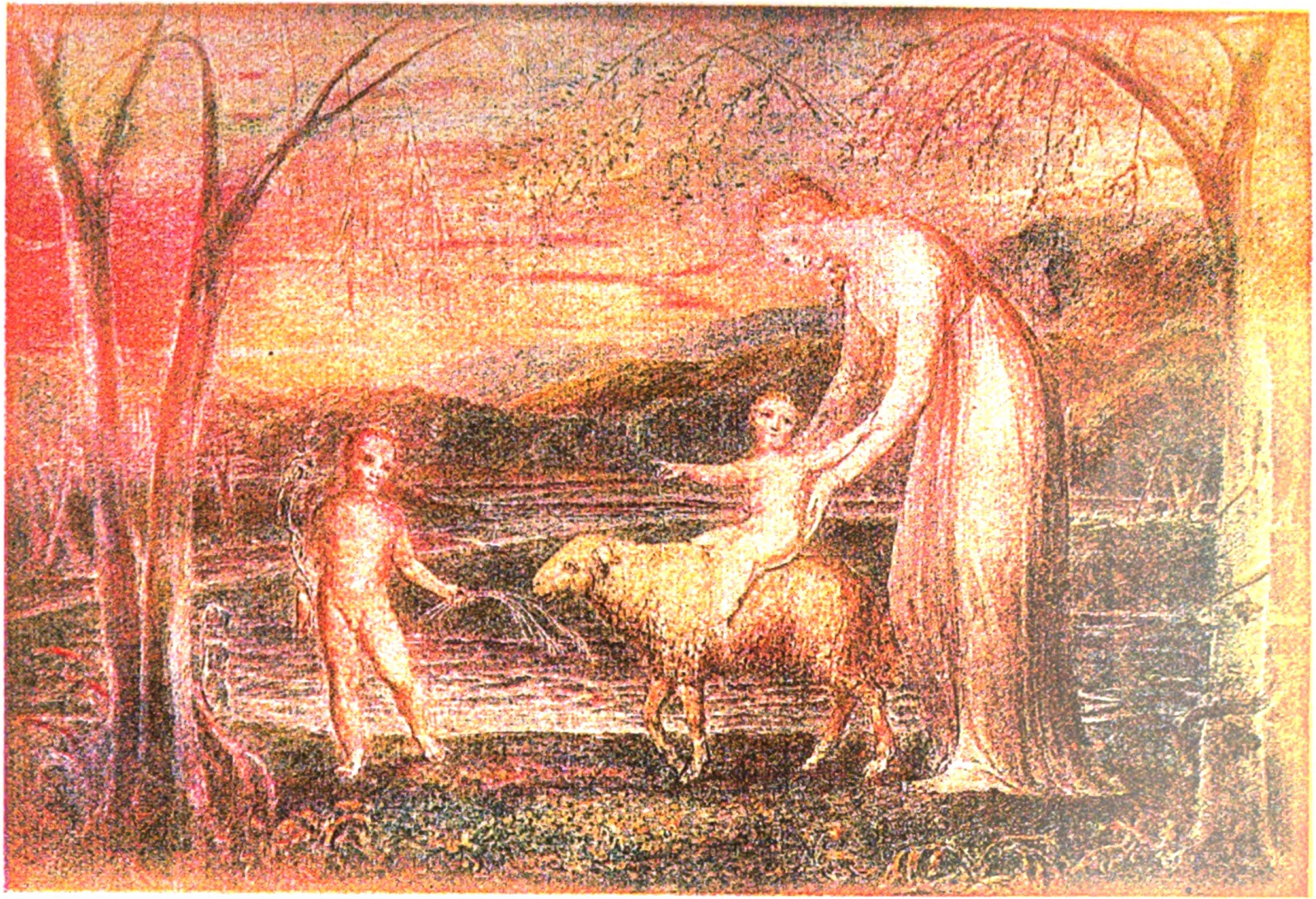
愛なき人々

價 2 圓
送料 1 7 錢

「愛すればこそ」の續篇として大正文壇の二大壯觀とせられてをる。狭隘なる日本文壇に獨占すべき作物でもなく作家でもない、全く全世界の尊き光輝、高貴なる尊敬を集注し得る藝道の誇である此姉妹篇は此意味で英譯さるゝことになります。

愛なき人々（三幕）
本牧夜話（三幕）
お國と五平（一幕）
白狐の湯（一幕）

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二



小羊に乗れる耶蘇　ウイリアム・ブレーク筆

著輔

書第貳篇

版

世界青年の眞の勇氣を代表する競技なりとの前提のもとに筆を下ろされたるものであれば競技者も、看技者も一讀して野球の心髓を味へば其處に世界元氣の縮圖が公式となつて現れる。

送料十九錢

重版小說

吉田

絃二

160錢

15錢

超法律的人生へ

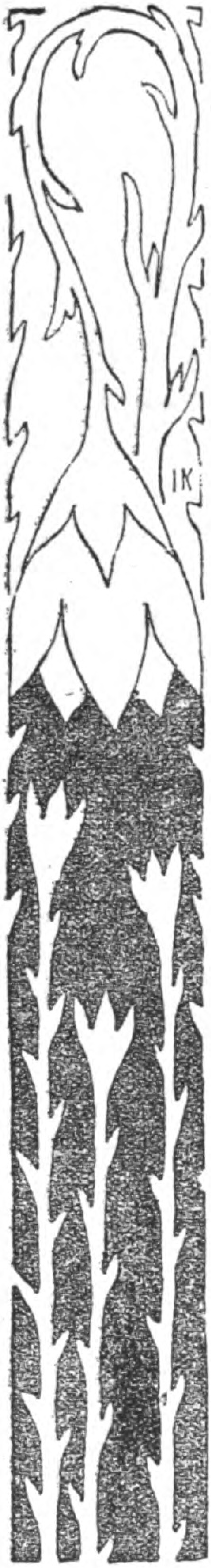
卷頭言

殺人、姦淫、心中とずゐぶん血なまぐさい事件がふえてきます。いつも木の芽の吹く頃から八月にかけてはそうしたことが多いと云はれていますが、しかしその手段なり、その度數なりがいつもの季節病として打すておかれぬやうないたましさを感ぜしめます。

それは世界的經濟難の行詰りから來たものでもありませうが、しかし死によりてすべてを償ふと云ふ從來の因襲的感念がずゐ分手助けておることと思ひます。死そのものですべての責任を果たすとか、死そのものですべてを淸ふするとか云ふのは、從來の道德があまりに峻酷であり、あまりに慈悲の薄いものであつたためでありました。孔子や、基督さへ人間の行爲は謝罪によりて許さるべきものだと云ひました。

今のやうなせまつた社會には、すべての人がモツト寛かであり、モツト溫かい氣持であつて欲しい。そして個人にわたるものに對してはなるべくそのままソツとしておく風尙を助長せしめたら、そこに溫かい道德が樹立せられ、餘裕のある人生が發見せらるゝことと思ひます。社會に對し、家人に對しすまぬからといふてすぐにつきつめてのぼせ上げ、そして死より他に選ぶ途がないと思ふその心情は實に純眞であり、そしていぢらしい限りではあるが、私どもはそのときいかに考へねばならぬか、いかに行爲せねばならぬか。その場合は健闘して死を排擊し、そして社會に敗れたる地位を逆轉して、勝利への道德に向つて戰ふべきであり、生への奮闘に力戰すべきではありますまいか。

現代社會の道德的準據がやゝもすれば――法律――といふ極めて人情味の乏しい、そして苛竦で、人生を不愉快なものにするが、私どもはやはりその基調が、溫かい隣人ある新道德であつて欲しいと思ひます。そして、そうしたゆとりのある新らしい世界の建設にまたねばならぬと思ひます



ある對話

武者小路實篤

A'。お前は人間に生れたことを幸福に思つてゐるか。

A。別に思つてゐない。しかし不幸にも思つてゐない。生れないはづのものが生れたとは自分には思へないのだ。生れるのが、當然なことのやうに自分には思へるのだ。世の中に自分が生れてゐることのやうにたしかなことはないやうに思ふ。父と母が結婚したから自分が生れたとか、父と母の××によつて自分が生れたなぞとは考へずに、生れるのが實に當然なことであり、現在生てゐることは絶對的に眞であるやうな氣になつて生てゐる　之は理窟ではおかしなことだが、事實だから仕方がない。だから生れたと云ふことは幸不幸以上の問題だ。

A'。それなら、お前はお前の子にたいしても別に生る機會を與へたことを、氣の毒には思はないか。

A。思はないね。實際この世に生てゐることは樂ではない。生れなかつたものは一番太平だと思ふ。この世に呼びさまさ

れたものは理窟では氣の毒だと思ふ。だが僕達をつくつたものは、理窟で僕達をつくつたのではなく、事實によつて僕達を作つたのだ。だから僕達は生れてしまつた以上、そして地上に人間として生てゐる以上、それを事實として見る。そしてその事實は、人間が子を生むことを要求し、又生れたものに死ぬまで生ることを要求してゐる。僕達はその事實のままに生てゐるのだ。だから、僕達は生れたことを、又子を生むことも、事實として見る、そして子は親を愛するやうにつくつてゐる。少なくも親の不名譽を子はよろこばない。だから僕は自分の生れたことが親のよろこびだつたことをよろこぶ。そして僕の子が、もし生れたとしたら、矢張り、僕達を愛してくれ。そして自分の生れたことを後悔はしてくれないと思ふ。

A'。今の世は隨分つらい世の中ではないか。今後の世の中は恐ろしい世の中ではないか。

A。自分はさう思つたこともあつた。しかしこの二三年前から僕の考へかた、いや感じ方は非常にかはつて來た。自分は今後恐ろしい時代がくるとは考へられなくなつてゐる。自分は理窟でものを見ない。實感でものを見る。すると、七八年前までは自分は何となく恐怖を感じてゐた。之はトルストイのものなぞから來たのか、又は世界の大戰爭の前の人類の不安から來たのかそれは知らない。しかし實際不安を感じた。所がこの頃は段々明るい氣持になつて來てゐる。自分は今後、恐ろしいことが起らないとは理窟では斷言出來ないが、感じの方では、人類は病氣のなほりかけの人間のやうに、希望とよろこびをとりもどしたのではないかと思ふ。少くも僕自身の實感は、恐怖は感じられなくなり、明い感じになつてゐる。このことは、僕のこの一二年にかいたものにあらはれてゐるはづだ。自分は不思議に思ふ。しかしさう感じてしまつた以上仕方がない。新しい希望、新しい光は生れたり、人々よろこべと自分は言ひたい。

A'。お前は實に樂天家だね。

A。人類が樂天家のやうにだ。人類には今迄不隨筋が隨分あつた。しかしこの頃さう云ふ處に新鮮な血が通ひ出して來た。希望が生れ出して、人類の生命が生々して來たことは實と思ふ。

A'。それならお前は、お前の子供がこの世に生れることをよろこぶのか。

A。よろこぶね。しかしまだ生れて來ないのだ。自分は生れて來るものの前に帽子をとつて謹み深かく待つてゐるが、生れてくるものが、男か、女か、利口か、馬鹿か、丈夫か、病身か、それは知らない。又その子の運命も知らない。それは自分の智慧のおよばない處だ。ただ自分は禮拜してそれを靜かに待つ許りだ。よき子よ生れよ。丈夫で、そして人類のよしと見る子よ生れてくれと思ふ。

A'。それならお前に聞くがね。男女の關係、男女間の道德と云ふものについてはどう考へる。

A。僕はその點から云つて、自分の行爲は非難されていゝと思つてゐる。決して自分は自分の態度を理想的だとは主張しない。自分はたゞ個人の尊嚴を傷つけなかつた。又妻を瞞さなかつた。自分達夫婦のことについては今云ひたくない。ともかくお互に愛してゐる。又尊敬してゐるが、性慾はお互に殆ど感ぜずにゐる。それで僕の方から××××××許しあふことを申し出た。このことは非難に値ひすることゝ思ふ。しかし僕は妻と離れたくなかつた。赤の他人になることはつらすぎた。事實、お互に十年以上も一緒にゐたのだから、もう他人とは思へない。二人の間に子が出來なかつたのも何處かで元因してゐるのだらう。お互に何處かでなほたよりあい、なほ同情しあつてゐる。くはしくは云ひたくないが、自分は妻の缺點と、それ以上の美點――之は僕達の友人が皆、認めてくれてゐる――を知つてゐる。ともかく自分達の夫婦は理想的夫婦とは云へないが、仲のいゝ夫婦とは云へるのだ。それに僕は隨分妻によつて利益も得てゐる。

妻と僕の性質は正反對だ。其處が僕の世界を廣くするのに大へん役に立つてくれた。このことは僕の一生を愛してくれる人は、すべて妻に感謝してくれていゝことゝ思つてゐる。僕達夫婦は例外夫婦であつて、變り咲きである、他の人が眞似しては危險である。その點、僕はすまない氣もする。しかしそれは自惚れにすぎない。僕は缺點の多い人間である。女にかけてだけ理想的でない許りでなく、僕の怠けものゝ點や、肉體的に辛棒の不足の處や、頭の頑固な點や、不純この上ない點などは、他人が眞似してはよくない點で、僕はさう云ふ點で自分より優れた人を尊敬してゐる。とにかく僕は、理想としては一夫一婦を主張する。二人が變らずに愛しあい、そして他の異性と淸くつきあつてゆける人は自分は尊敬する。しかしそれが世間を恐れたり法律を恐れたりして、いや〳〵辛抱してゐるのを、理想的とは云へない。勿論自分はいや〳〵でも辛抱するものゝ方が、辛抱しないものよりわるいとは云はない。但し、妻子を虐待するものや、妻子を束縛しすぎるものには組しない。妻子も一個の人間として尊敬しないものは尊敬しない。僕は妻以外の女を愛した。之はやむを得なかつたが、元より自慢すべきことゝも思つてゐない。たゞ自分はこゝではつ切り云ひたいのは、女の方は僕より淸かつたと云ふことである。僕が女を誘惑したと云はれても、僕は八分通り切り、否定出來ないが、女の人が僕を誘惑したと云ふ人があつたら僕は十分否定する。僕だけが、女が如何に自分の愛慾と戰つたかを知つてゐる。女は始めに僕と何處までも淸淨につきあふのを理想にしてゐた。しかしそれが女にとつて幸福だとは云へなかつた。その時分よく女は死にたがつてゐたから、少くも生る力を強くはもつてゐなかつた。女は僕に何にもかもくれたがつてゐたが、先入主がそれをさまたげてゐた。自分は妻において正反對の世界の人を知つたと共に、この女で、僕と共通な世界にゐる女を知つた。非常に氣が樂である。妻によつて自分の世界や、人生觀はひろめられて、もうそれ以

上、妻から教はるものはなくなつた時、その女が出て來て、自分の世界への自覺をましてくれた。自分の妻はその時、自分のそばにゐなかつた。自分はくわしく云ふのはよさう。ともかく今、その女が今迄になく、人生を愛しだして來たことは事實である。自分の妻も最も絶望的な時に僕に近づいて生るよろこびを得たが、今度の女も僕によつて生るよろこびを得た。それは戀愛によつてゞはない。生命の力によつてだ。僕は戀愛と云ふものを誇張して考へない。それは一時的には人をして死をも恐れさゝない魔力をもつてゐるが、それがやがてさめた時に、おちついた力が生れる。平和が生れる。眞面目に生ることを考へる力がわいてくる。戀愛の魔力の強いのも面白い。だがそれがやがてさめるのも面白い。腹がへつた時のものゝ甘さ。だがすぐ腹がはつて、もうたべたくなくなるので、人間は仕事が出來るのだ。自然は、僕達を醉はし、又醒ます。そのぬけ目なさが面白い。自然は僕達が地上に生ることによろこびを感じられるやうに僕達をつくつてくれてるのだ。

A'。お前はその生るよろこびを得さいすればいゝと云ふのか。

A。さうさ、他人の生るよろこびを奪はないで、自他ともに生るよろこびを得るのはいゝことだ。

A'。だがお前はあの女を戀した若い男の人が三四人ゐたことは知つてゐたらう。そしてこれ等の人の戀はお前より、遙かに美しかつたらう。

A。僕はそれを知つてゐた。しかし女はその人達を愛してゐなかつた。少くもまだ愛するまでの氣持になれない前に僕を愛してしまつた。その人達は僕によつてその女を知つた。しかしその時分には女は僕を愛してゐたのだ。そしてよし僕を愛さなかつたにしろ、女の人はその三四人の人と結婚はしなかつたらう。女がもし結婚すれば、その人達よりもあと

に出て來る人々の内の一人であつたらう。その人は永遠に出てくる必要がなかつた。僕は女が他の人を戀したら、僕はいつでも引こまうと覺悟してゐた。それはどんなに苦しくつても、僕は他人の意志を尊敬してゐる。しかし僕はその女が僕にすべてをさゝげてくれて、他のものが入る餘地のないことを信じた。このことは不思議であるが、僕の心がよんだので僕の所へ來たのだ。僕は他の女の人は何處かの部分が自分からはみ出ることを感じた。しかしこの女の人は全部が自分の内に入ることを自分は感じた。そしてその女の祈りは自分の仕事を高めることを感じた。自分はその女にかう云ふ詩を與へた。

　自分の心の平和を守護する天使
　我が大きな仕事をたすけよ。

自分は女を愛するが、仕事を更に愛する。自分はこの女によつて、嫉妬にうちかつて、一人ゐても、静かに仕事をすることが出來る。自分の心の平和のために、一人の女を愛したことを、自分は恥づべきことか、恥づべからざることか知らない。たゞ自分はさう云ふ女を與へられたことをよろこぶのだ。そしてその女の内に、自分の始めての子供が宿つて、胎内で動いてゐることを知るのは自分には不思議に、神々しい事實なのだ。このためには自分達は世間のあざけりを甘受する。元より生れてくる子は、生れるだけの價値のある子かどうか知らない。しかし、自分は生れない前に、見切りはつけない。そして僕の持つてゐる缺點のないいゝ子が生れることを望んでゐる。しかしあまり大きくのぞみすぎて罰を受けることを恐れる。どんな子が生れても、僕はそれを感謝してうけようと思ふ。僕は臆病この上ないが、又圖太いことにかけても、中々小面憎い男だ。僕が惡人になつたら大した惡人になるだらうとは、妻も、Y子も云ふ處だが、僕

には殘酷性が皆無で、一方珍らしく恥を知つてゐるから、惡人にはなれない。しかしあまり、淸い人間ではなささうだ。だから他人から非難されても、相手が僕よりも淸い人間なら、おとなしく頭をさげる。しかし、相手が俺よりも惡いことをしてゐたり、したい氣は十分もつてゐながら出來ないので我慢してゐる人間には頭はさげない。尤も僕はこの頃至つて呑氣になつてゐて、惡口にはおどろかない。たゞ自分が積極的に仕事が出來ないことを恥てゐる。

A′。それならお前は、お互に愛しさへすれば誰と子供を生んでもかまわないと思つてゐるのか。

A。僕はその點、はつ切りしたことは云へない。僕は相手に貞操を強いるものは自分も貞操を守らなければならないと云ふことを知つてゐる。自分が道樂しながら、女が他の男を愛するのを責めるのは今にはやらなくなると思ふ。お互が自然に貞操を守れるのが上の部である。お互が自由でしかもすべての人が平和な心をもつて生てゆける、之は中の部である。一方が勝手をして、他方に犠牲を強いるのは下の部である。下の部が得意になつてゐる時代の今、自分のやうな人間が本氣でゐるのは當然である。子供が出來た點を非難する人があつたら、僕はその人を僞善者だと思ふ。元より子供を育てることに自信のないものが子供をつくるのは冒險である。僕は子供が出來るやうなことをしたのは、之で二度目である。妻が最初であつて、今度の人が二人目である。恐らく之が最後であらう。今度は子供をつくつても立派に育てられる自信があつた。世間體を恐れて不自然なことを女に一生強いることは自分は更に恐れる。自分は一生を通じてお互に愛せることを信じられた結果、子供の出來るのを恐れない方が自然と思つた。この考がまちがつてゐるか、どうか、未來に生れる僕達より賢い時代に生れたものに任せる。僕は自分の行爲の善も美も主張しない。たゞ僕のために一生を捧げてくれた女に自分は心から感謝し、そして生れて來る子の幸福を靜かに祈り、そしてこのことの故に僕を非難しな

かつた妻に涙ぐみながら愛を感じるのである。罪がもしあれば僕一人の罪である。僕の弱さと僕の虫のよさとが、すべての人のつまづきにならないことをのぞんでゐる。自分は自分の友達その他から自分が値ひしない許しと信頼を得てゐる。自分は感謝とよろこびをもつて、益々自分の仕事のために働きたく思つてゐる。自分の仕事が自分を愛してくれるもの、自分に期待してくれるものを裏切らないことを望んでゐる。生れてくる者よ。汝の親は罪によつて汝を生んだのではない。又やむを得ずお前を生んだのでもない。お前の生れることをのぞんでお前の生れる機會を與へたのだ。お前は生れたことを當然と思ひ、そして私達を恨まないでくれるだらう。自分は親達に生れるのを呪はれながら生れた、多くの人間の生命をも讃美するものだが、お前のためにお母さんは生き甲斐を益々感じるやうになつたら僕はこの上ない幸福ものだ。しかしまだお前が生れる迄には間がある。無事に生れておくれ、このことに不快を感じる私をあやまつた信じ方をしてくれた人には私は謙遜に謝罪する。自分は自分の行爲の善を主張しない。自分の行爲は善ではないであらう。だが自分はそれ以上に事實に忠實になる。自分は二三年前の中學時代を通り越した。あたらしい心のおちつきと、平和をもつて、更に得た力をもつて、自分の仕事を果してゆきたい。自分の今後の仕事や、生命に價値があつたら、自分は今度のことは惡くなかつたと思ふだらう。どつちにしろ大したことではないのかも知れない。自分はどんな時でも自殺は考へなかつた。自分は自分の一生が空なものでないとも思はないが、自分が死んだからと云つて人生がなほ意味の出來るものとは思はない。自分は自分の一生を人類のため、又個人として一寸の間地上に生てゆくことを運命とする人々の生命に愛と美と力と希望を與へることに役立てたく思つてゐる。今の自分はまだだめだが、もう少し生られたら今より遥かに人々のお役に立てるつもりだ。今度のことはよろこんでもらへるものにはよろこんでもらいたい。許せる

ものには許してもらいたい。非難してくれるものには非難してもらつて結構だ。噂話としてのいゝ話題を得た人には話題を差し上げる。何とも思はない人が一番利口かと思ふ。自分はそれによつてあまりひけ目を感ぜず。却つて感謝とかを得て、更に決心強く生られるものである。僕の今度のことについての善惡は未來の人類が、正しく評價してくれるだらう。僕はころんでも只は起きない人間だ。よき子を地上に捧げることが出來ることを祈るが。あまり期待をすると反て力まけをすると云ふから。どんな子が生れても。それは寛大な人類がよしと見給ふことを信じて、安心することにしやう。自分は何事も知らないY子の兩親にだけは頭が上らない。だが寛大なる親の愛はそれを許して下さることを信じてゐる。其處さへ無事にすぎれば萬事目出たしである。

A′。お前は神妙なことを云つてゐるが、もしお前から兩親がY子を奪はうとしたら。お前は神妙にはしてゐまい。

A。その時の用意が出來て居ないで、どうする。僕がおちついて謙遜な氣持でゐられるのは。僕に大きな逃げ場があるからだ。いつでも居なほれる用意が出來てゐるからだ。其處が僕の惡人らしい處だ。そして善人は惡人よりも圖々しくなければならないと云ふ點だ。一人の人の生命は。他人の非難よりも僕には尊い。僕は他人の生命と意志を尊敬する。同じく自分の生命と意志を尊敬する。自分は自分の根のとゞく限りから。生命の糧。生長の力素をとる。僕は頭をさげながらも。次の用意が出來てゐる。自分は自分の圖太さを其處に感じる。自分はこんな詩をつくつた。

生れたり。死ぬるまでは生くるなり。

しかし自分は魔業的の戀愛は澤山だ。之からはおちついた生活をしたい。　（二三、八、二）

勞農ロシヤに於ける夫婦と親子

東大教授　高柳賢三

一、

嘗てヨツフエ夫人がある人に語つて、勞農ロシヤでは既に男子と女子との法律上の平等が確保せられ、婦人にして國家最高の地位を占めて居る者もある位なのであるから、既に婦人問題などは勞農ロシヤには無いと誇つたと傳へられた。又最近ドイツから來朝したドレツシユ教授夫人も亦、ドイツ共和國では男女の地位が平等になつたので、最早や婦人問題は過去の問題であつて、現在の問題ではないと言つた事が、新聞紙で傳へられた。

此二つの宣言を見て、私は微笑を禁ずる譯に行かなかつた。それは右二夫人の所説の中に素人法律觀が鮮かな形で現はれて居るからである。素人は法律である種の「理想」が規定さるゝに到ればそれで萬事が解決されたものと考へる傾向がある。法律の明文で男女の平等が保障せらるれば、既に此問題が解決せられたものと考へるのは即ち此考へ方の表現である。兩氏が勞農ロシヤ乃至ドイツ共和國に於て、最早や婦人問題が無いと言明して居るのは、此素人法律觀の典型的な現れである。

事實はそれ程までに簡單ではあり得ない。法律で保障された男女平等も事實上に於て裏切られる可能性がある事は「法律」の性質に就て多少の洞察力の有る者の直ちに觀取し得る處であらねばならぬ。殊に男女の不平等と云ふが如き永い歴史と傳統を有する問題が一片の法令に依て既に解決せられたるが如く考ゆるのは餘りに「法律」の性質に無智なるもので

あると云はねばならぬ。私は勞農ロシヤにしてもドイツ共和國にしても婦人問題は尚ほ當分實際上の問題として、色々な形式で殘るものであると信ずるものである。法律の章句は平等無差別を保障せらるるかも知れない。併し事實上の平等は尚ほ幾多の困難を排して實現されるのだ。殊にロシヤやドイツの樣な激變に伴つて男女の平等が宣言せられた國々にあつては。

併しながら、假令「婦人問題」はヨツフエ夫人の宣言した樣に既に解決を終つた問題でないにしても、ロシヤが男女平等を法律的に解決したのは事實であつてそれが將來ロシヤ婦人の地位に對して多大の影響を及ぼす事は疑ふべくもない。此意味で婦人問題の一部である婚姻及離婚の問題及び之れと密接な關係を有つ親子の問題についてロシヤが採用した解決方法を攻究して見る事も亦無益なる事ではあるまい。

二、

現代各國に於ける重要な法律政策の一つは社會の一單位としての「家」の保持である。そして「家」の構成は我國では封建的色彩が強く、戸主に依て統一せられた家族の團體であるに反し、西洋では夫婦を中心とし、子供を包擁する團體である。それが西洋の「フアミリー」である「フアミリー」の保持は當然に一夫一婦主義の保護をその內容とせねばならない。一夫一婦主義は一面金持の間に行はれる「妾」制度に依て脅威を受け、他面「人格主義」的な自由結合論に依て攻擊せられて居るにかゝはらず、現代人大多數の支持を受けて居る制度なのであるから、法律も亦此保護を完ふせねばならなくなる。

然らば共産主義を國是として採用した勞農ロシヤでは、此問題を如何に解決したのであらうか？

私が丁度英國に居つた頃、新聞紙では盛にロシヤでは「婦人國有」が行はれるに至つたと書き立てゝ居つた。兎に角「國

有」と云ふ事が社會主義の好んで用ゆる言葉である丈に、只表面的にのみ事物を考察する一般公衆は半信半疑の中にも、さる事は共產主義のロシヤには有り得べき事だらうと考へた。私の知つて居るある婦人は人事でない樣に大に憤慨の意を洩して居つた。兎に角「婦人國有」がロシヤで行はれるに到つたと云ふ報導は「共產主義」の恐るべきもの、嫌惡すべきものであると云ふ觀念を一般民衆の頭の中に描かしむるには成功したらしい。

併し、事實は全く反對であつた。一夫一婦主義は共產主義的なロシヤでも亦之を認めざるを得なかつたのである。從つて法律的な婚姻手續を規定し、夫婦相互の法律關係を詳細に規定して居る。此點に於て勞農ロシヤの法律は近代各國の法律と趣を異にして居るものでなく、變更の加へられたる諸點も決して之を「革命」と見做す事を得ないので單に「改革」と見做さる可き程度に過ぎない。如何なる社會革命も深く人生に根ざす一夫一婦主義を覆し得べきものでない事を我々に教ゆる。

三、

私が丁度アメリカに居つた時、ロシヤからの新歸朝者談として下の樣な記事が新聞紙に出て居つた。

「ロシヤの婚姻及離婚の手續は到つて簡單である。新郎新婦は登記所に行つて登記をすればそれで夫婦となる。又登記所に出かけて行つて、右の登記をすれば離婚が成立する。それは頗る簡易迅速である。併しながらウスノロのロシヤ人だから簡易迅速の精神が徹底しない。一層鋭敏なアメリカ人であつたら、ホテルへ行つて宿帳に夫婦として記入する事に依て夫婦關係が成立し、宿を去る事に依て離婚が成立する事としたであらう。」

これは勿論一のジョークとして、云はれたに過ぎないのであつた。併しながら、在米人がロシヤの婚姻及離婚手續の簡易迅速に就て語る處は、ロシヤよりもむしろ日本の婚姻及離婚に就て語つたものと見れば一層適切なものであると見る可

きであらう。日本では、婚姻屆を代書人に書かせて、戸籍役場へ郵送すれば、それで婚姻が成立し、離婚が成立するのであるから、簡易迅速と云ふ點から云へば恐らく世界無比である。勞農ロシヤの婚姻手續は之に比較すれば一層面倒であつて、それは大體左の如き手續を要する事となつて居る。

（一）婚姻を爲さんと欲する新郎新婦は其居住地記の「地方登記局の出生婚姻死亡登記課」と云ふお役所に口頭又は書面で其希望を申立てる。そして此申立には人違なき證明書、自由承諾で婚姻するので且つ法律上何等婚姻に支障ないのだと云ふ主旨の宣言書を添附せねばならぬ。

（二）此申立があると右のお役所では其婚姻が何年何月何日何時に擧行せらるべきかを豫告して之を公告する 婚姻擧行の右の日までに誰でも法律上の障害がある事を申立てる事が出來る。故障申立に理由がない事明白な場合にはお役所では之を却下するが、問題となる時は事件を地方裁判所へ廻してその裁判が確定するまで婚姻擧行を延期せしめる。地方裁判所では三日以内に之に就て裁判をせねばならぬ。

（三）右の期間内に故障の申立が無いか又は故障申立が理由なしと判決された場合には婚姻手續が行はれる。その擧式の行はれる場所は地方登記局又は地方ソヴイエツトの書記局であつて、其處に婚姻の爲めに特に指定された公開の式場があつて、此場所以外で行ふ事は出來ない只當事者が病氣の爲め式場に出られない事が診斷書で證明された場合丈私宅で行つても宜い。

（四）登記局で行はれる場合には登記局長又は登記次長と書記又書記補、又地方ソヴイエツト書記局で行はれる場合には書記長及書記の面前で行はれる。是等の官吏は婚姻登記簿に其婚姻を登載し、之を當事者に讀み聞かせ、婚姻が法律上成立した旨を宣言する。又請求があれば、婚姻證明書を交附する。そして婚姻は婚姻登記簿に登載せられた時から婚姻は效力を生ずる。

法律行爲の歴史は大體に於て「形式主義」から「意志主義」へ移つて居る。併し「形式」にも近代的意義を有するものが多い。婚姻手續の如きはその一例であると云へよう。我國の簡易主義がもたらした事實上の不都合や弊害は「形式」の必要に就て考へさせらるゝ一大教訓であらねばならぬ。ロシヤの婚姻法が「形式」を尊重した處に大きな教訓がある。

四、

婚姻の實質的要件に就ての勞農ロシヤ法は極めて常識的で取立てゝ云ふべきものが少い。

婚姻年齡は男に就ては滿十八歳女に就ては滿十六歳である、只「滿八十歳ヲ越エタル者ノ婚姻ハ之ヲ禁ズ」とした。ロシヤ舊法獨特の規定を廢止した文である。「茶飲み友達」としての夫婦を禁止する必要は無いからであらう。

重婚禁止も一夫一婦主義の採用の當然の結果である。只回教徒の多妻主義が舊ロシヤ法では許されて居つたのが今では特別の除外例が書いてないため、禁止せらるゝに至つたのは、舊法以上に一夫一婦主義を徹底せしめたものであるとも云へよう。

近親相婚の禁止範圍が直系血族間と兄弟姉妹間のみに限られ、伯叔父と姪又は伯叔母と甥との結婚も許され、姻族間の婚姻はすべて自由とした。前者に就ては優生學上一の問題となるであらう。後者に就ては從來の Sense of propriety には反するかも知れない。

父母の同意を全然排除して「婚姻ハ契約當事者ノ合意ニ依リテノミ締結セラル」としたのも「家長的封建的婚姻障碍を一掃する」主旨であらうが「一定の年齡以上は父母の同意を要せぬ」とする近代各國の法律と五十歩百歩の差に過ぎない。殊に晩婚に傾く近代の傾向に着眼すれば。

五、

婚姻の效果に就てのロシヤ法は、夫婦平等主義を徹底せしめた點に於て顯著である。身分上の效果に就ても、財産上の效果に就ても夫婦平等主義が徹底的に採用せられて居る。從つて從來の歐米に於けるファミリーの構成としての夫唱妻從主義が破棄せられて居る。夫が家長 (head of the family) であると云ふ主義が捨てられて居るのである。

婚姻をすると妻は夫の姓を名乘り夫の國籍を取得すると云ふのが從來各國の法律であつた。處が勞農ロシヤでは此考を捨てゝ了つた。婚姻關係に在る男女は同一の姓を稱すべきもので、それは婚姻が夫婦の一方の死亡又は失踪宣言で解消して後も繼續すべきものとし、此意味で夫婦が別々の姓を稱する事は禁止して居るが、しかも、その姓は夫の姓と限らずして「當事者ハ夫タルベキモノヽ姓、妻タルベキモノヽ姓、又ハ兩姓ヲ連結セルモノヲ今後ノ姓トスベキ旨ヲ表示スルコトヲ得」として居る。又國籍に就ては「婚姻當事者ノ一方ガ、ロシヤ人ニシテ他方ガ外國人ナル場合ニハ當事者ガ相當ノ手續ヲ履ミテ其請求ヲ爲サヾル限リ、各當事者ノ國籍ニ變更ヲ生ズルコトナシ」として居る。姓に關する問題は畢竟形式丈の問題で、そんなに荒筋を立てゝ爭ふ程の問題では無いのであらうが革命法丈に仲々徹底させた。又國籍に就ては可成り實益が多いので此點でロシヤの採つた政策は國家的思想から國際的思想に向つて居るが、夫と妻とが別々の國籍にあると云ふ事が現在の國際情勢の上から便宜であらうかどうか一個の問題となるであらう。

夫婦同居の義務は各國の法律で認める處である。併しながら、配偶者の一方が之を守らなかつた場合、國家の「强制力」を以て同居せしむる事は之れ又困難である。それは遺棄として離婚原因とする事は出來よう、又之に刑事的制裁を課する事も可能であらう。併し同居を事實上國家の「力」で實現せしむる事は不可能である。しかも尚ほ各國では表面上は夫婦の同居義務を法文に書きあらはして居る。處がロシヤでは「配偶者ノ一方ノ住所ノ變更ハ他方ニ隨從ノ義務ヲ生ズルコト

ナシ」と規定して居る。實際上の結果は各國と同樣なのであらうが、兎に角之を表面にあらはした處は革命法的であり、勞農ロシヤ式である。

夫婦財産制に就ても婚姻は從來當事者の財産關係に影響を及ぼさぬものとした。即ち夫の財産は夫の財産として止まり、妻の財産は妻の財産として止まるのである。「婚姻ハ配偶者間ニ財産ノ共有ヲ惹起スコトナシ」とあるは即ちこれである。これは從來のロシヤでも同樣であつたので英、米等と其趣を同うする。フランスの樣な「財産の共有」も我國の樣に「夫の管理」も惹起されない。只英米殊に英國では夫婦財産契約が結ばれて法律で定めた夫婦財産制度と異つたアレンジメントを爲す事が通常であるけれど、ロシヤでは之れは許されぬものと解すべきものであらう。

婚姻生活に要する費用、子供の養育費等は誰が負擔するかと云ふと、從來各國では夫が負擔すべきものと云ふ主義を採つて居つた。アメリカなどでは妻が財産を持ち夫が貧困である場合でも妻に扶養請求權を認め、妻は夫を扶養する義務がないものとした樣な極端な州もある。夫婦間の財産が分離された今日では稍夫に過酷な點がないでもないので、立法者は「女子優越」から「男女平等」への引き下げ運動をして居る。勞農ロシヤでは妻子は夫の扶養すべきものと云ふ從來の考を捨てゝ男女平等思想を採用して居る。即ち夫は妻を扶養する義務はなく妻も夫を扶養する義務が無いものとして居るらしい。子供の扶養に就ても「父母ハ未成年勞働無能力又ハ窮乏ノ子ヲ扶養スベシ」とし此「扶養義務ハ父及母ニヨリテ分擔セラルヘシ、扶養料ノ額ハ父母ノ資力ニ應ズベシ、但シ父母ノ各自ガ負擔スベキ額ハ當該地方ニ於ケル子ノ爲メノ生計最小限度ノ半額ヲ下ルコトヲ得ズ、其負擔額ノ全部ヲ支拂フコトヲ得ザル父又ハ母ハ其一部ヲ支拂フベシ」とあるに見ても子供扶養は夫婦共同に負擔すべきものとなつて居る事が分る。

只配偶者の一方が生活資料の最小限度を缺ぎ且つ虚弱なる時は之を扶助する事を得る地位に在る配偶者の他方に之を扶養する義務ある事を認めて居る。自分に幾分でも食つて行く丈の財産があるか或は勞働能力を持つて居る妻は夫に對し扶

養を請求する事は出來ぬ。彼女はその腦力又は筋肉を働かしてその生命を維持せねばならぬ。

六、

一夫一婦を基礎とした「ファミリー」は社會の神聖なる單位でなければならない。其處に男女勞働の源泉があり、又其處に將來の國民たる子女の敎養の大部分が行はれる。少くもそれが現在各國の實狀である。從て「ファミリー」の保持は各國立法者が苦心する處である。

離婚は「ファミリー」解散の原因であり殊に子女の地位を不幸なる地位に陷るゝものである。從て各國で最近に於ける離婚數の增加を歎いて居るのはしかあるべき事であると云はねばならない。西洋各國で自由離婚、協議離婚なるものを認めないで、離婚には必ず裁判所の介入を必要とする事は必ずしもキリスト敎會の影響丈でなく社會的見地からしても相應に理由のある事であると云はねばならぬ。

併し實際生活の上では、どうしても一所に居られないと云ふ夫婦が數多くある。從て協議上の離婚を禁止し、又離婚原因を嚴重に規定して置いても、是等の夫婦は或は離婚原因を假裝したり、或は離婚原因の輕い地方に行つて離婚を行ふと云ふ樣な事が行はれるのである。

我國では協議上の離婚が許され、しかもそれが當事者一方の屆出に依て完成せられるのであるから西洋とは全然正反對の地位に立つて居り、知らぬ間に離婚になつて居ると云ふ樣な弊害が起り、事實上女人の壓迫を來して居るのみならず、之を利用し「家風」を理由として生木を割く親も少くない樣である。

ロシヤでも舊來は協議上の離婚は之を許さぬ事にしてあつたが、勞農ロシヤでは之を許す事とした。此點では我國と同樣な法律を採用するに至つたのである。併しその手續は我國の樣に簡略には行かないのであつて左の如き手續を要する

事になつて居る。

(一) 離婚を爲さんとする夫婦は地方裁判所又は婚姻の記錄を保存する地方登記局出生婚姻死亡登記課へ申し出る。

(二) 地方裁判所に申立があつた場合には、判事は裁判期日を指定し兩配偶者又は其代理人を裁判所に召喚し離婚の請求が眞に兩配偶者の眞意に出たか如何かを確かめた後に離婚許可決定を宣言し、請求があれば離婚證書を交付する。そして判事は三日以内に其決定の謄本を出生婚姻死亡登記課又は右離婚せられた婚姻の記錄を保存する機關に送附する。

(三) 出生婚姻死亡登記課に申出があつた場合には出生婚姻死亡登記課長は離婚請求が眞に兩配偶者に依て爲されたものであるかを確めた後離婚の宣告を爲す。そして請求があれば離婚證書を交付する。

協議離婚主義を採用したのは歐米の法律として見れば新しいのであるが然し我國に於ける程「自由」ではない。

當事者の間に協議が調へば右の方法で行くのであるが、若し之が調はないと裁判離婚と云ふ事になる。從來の離婚法では離婚原因が嚴重に規定されてあつたのであるが、そしてそれは離婚を輕々しく行はしめぬと云ふ主旨から來たものであるが、ロシヤでは離婚原因を法律で定めないで一に裁判官の認定に委したのは斬新であらう。勿論離婚原因法定主義の獨逸やスウイスなどでも「其他正當ノ事由アルトキ」と云ふ附加的規定を設けてあるから是等の立法と實際上は殆んど同樣ではあるが。

要するにロシヤの離婚法は「フアミリーの維持」よりも「當事者の意志」に重きを置いた點に於いて面白味がある。此利益較量が正しいか如何か。それは今後の實驗の結果に照して論定すべきであらう。

七、

一夫一婦の基礎の上に成立する「フアミリー」を支持する上の一大支障は私生兒である。法律は一方面に於て婚姻年齡

を低下し、又事後婚姻による嫡出化即ち所謂準正の方法に依つて私生兒の發生を防止せしめて、正常な「フアミリー」の支持に努め、他面に於て、私生子は神聖なる婚姻關係に對する謀反人として親の罪を子に報いてあらゆる方面から之を虐待したのであつた。併しながら、私生子の發生は之を防止する事が出來なかつた。勿論私生子も婚姻關係から生れた嫡出子と同一の地位に置く事にすると、理論上婚姻制度を輕視する事になる許りでなく又實際上婚姻關係にある他の配偶者に迷惑を及ぼすといふ結果に立ち到るがため、各國の法律も「私生子」に特別の地位を與へざるを得なかつたのである。

併しながら、私生子自身には何等の罪がない。之を法律が餘りに酷遇する事は近代人の「人情」に反する許りでなく、是等私生子をして社會的に墮落せしめて不良少年と化せしむるの恐がある。法律は此點をも顧慮せねばならない。かゝる事情の下に各國の法律は私生兒と嫡出子の差別を撤廢する事なくしてしかも成るべく私生兒の保護を厚うせんとする傾向にある。

ロシヤ法は此點に於て、更に一歩を進めて、嫡出子と私生兒の差別を撤廢した。即ち「親子關係ノ基礎ハ眞實ノ血統タルベシ私生血統ト嫡出血統トノ間ニ何等ノ差別ヲモ設クベカラズ」とするに至つた。

此制度の下にあつて、私生兒の親の配偶者──殊に妻──には稍酷な結果が來されよう。又それ丈一夫一婦主義に對する脅威だと見られよう。併し他面私生兒には好都合である許りでなく殊に私生兒の母親の保護ともならう。二個の衝突せる利益は後者の利益に於て立法的に解決されたのである。此解決が正當なものであるかどうか、それは將來その運用に着眼して論斷すべきものであらう

私生兒に厚い事は同時に私生兒の母に厚い事になる。「私生兒を慘く捨てられた母」は一個の社會問題となる丈の重大な問題である。從來の「私制兒認知制」が色々な點で私生兒の母に過酷な樣に出來上つて居るに反し、ロシヤの制度は、かゝる母に對し非常に利益なる地位を與へて居るのは注目に價する。その手續は左の如くである。

（一）妻でない女が懐胎した時は子が出生すべき時期から三個月以前に受胎の時期及び子の父の氏名住所を登記所に申立てる。

（二）登記吏は右の申立で父と指名せられた者に其旨を通知し、其者は通知を受けてから二週間以内に申立に對し取消の訴を起さねばならない。そうでないと其者は其子を自分の子と認知したものと見られる。

（三）取消の訴は通常の手續で裁判される。各當事者が若し僞を述べると僞證罪に問はれる。

（四）父と指名された者と子の母との關係が事物自然の状況の上から其者が其子の父であると認むべきときは裁判所は其者が父たる旨を宣言し且姙娠、産褥出生及び子の扶養の費用を分擔させる。

父と指名せられた者が子の受胎當時子の母と關係あつたと同時に、他の者にも關係あつた事を訴訟の進行中に裁判所が認めると、裁判所は右すべての關係者を訴訟當事者として召喚し姙娠産褥出生及扶養の諸費用を分擔させる。

是等の規定は著しく私生子の母に有利に働く。勿論女が眞實を語らないで飛んでもない人を父だと主張するとその男は迷惑を被る事甚だしからうが。

八、

ロシヤで行つたもう一つの大改革は養子制度の全廢である。卽ち「本法施行後ハ自己ノ子又ハ他人ノ子ヲ養子ト爲スコトヲ禁止ス。本條指定ノ日以後ニ爲サレタル如何ナル養子縁組モ養親又ハ養子ニ取リテ何等の權利義務ヲ生ズルコトナシ」とあるのはこれである。

養子制度は我國では家の存續の爲めに行はるゝのが大主眼であるが、轉じて身分の低い女が、身分の高い男と結婚する樣な場合に男と同一地位の人の養女となつて嫁入する樣な場合に利用せられ、又藝妓稼業をさせる方便として養女縁組を

すると云ふ樣な方面に轉用せられて居る。西洋では主として「人情」を基礎として老いて子なき者とか、子供が死んだ者とかが養子緣組をするのが通常である。

ロシヤ法では養子緣組の樣な自然の子でもないものを自然の子と同樣に見ると云ふのは不都合だと云ふ考からして養子制度を全廢したのである。養子制度には幾多の弊害が伴ふので我國でも廢止論がある。併し又人情を基礎とした西洋の意味での養子制度までも禁ずる事が妥當であるか、如何かは一の疑問であると云はねばならない。又この法律がロシヤで事實上の養子制度の發生を妨止する事を得るや否やも一の疑問であると云へよう。

九、

「ファミリー」と云ふ團體が社會の單位として認められる以上、その內部的統治が規定されねばならない。殊に親の子に對する關係に就て一つの權力關係が認められなければならない。それはファミリー・デイシプリンの爲めに是非共必要である。併し權力關係である丈にそれが合理的に行使せられる樣に規律せられねばならぬ　兎角濫用の弊が生ずるからである。ロシヤの法で「親權ハ子ノ利益ノ爲メニノミ行使セラルベシ、若シ之ガ不當ニ行使セラレタルトキハ裁判所ハ父母ヨリ其親權ヲ剝奪スルコトヲ得」と規定したのは、親權の合理的行使を保障する大原則を示したものである。その行使に就て更に下の樣な細則を置いて居る、

(一)父母は子の監護を爲し且有用なる職業のための訓練を與へねばならぬ。

(二)父母は子の身體上及び財產上の利益を圖らねばならぬ。又子を代表する

(三)父母は子を其家に養はねばならぬ。

(四)父母は子を教育訓練の施設に入れる事が出來る。併し、父母は十六乃至十八以下の子の爲めに其明白な承諾がなけ

れば勞務契約を締結する事が出來ぬ。

（五）父母は十四歳未滿の子が何宗教に屬すべきかを其合意で定めることが出來る。

親權は父に屬する事が從來の原則であつた。併し男女平等觀の有力な今日では、父母共同して行ふのが一層合理的だと云ふのが近年の考へで、スウイスやアメリカなどではこの主旨で法律が改正された。ロシヤでも「父及ビ母ハ其親權ヲ同時ニ行フベシ」とし「子ニ關スル總テノ處置ハ父母ノ間ニ其問題ニ付テノ合意アル場合ニ限リ父母之ヲ行フコトヲ得」とし且つ「父母ノ間ニ合意ガ成ラザル場合ニハ地方裁判所ハ父母ヲ出廷セシメテ合不合意ノ問題ヲ解決スベシ」として居るのは此近代的な傾向を採用したに過ぎない。

親權に服する子は十八歳未滿の男子と十六歳未滿の女子である。年齡を低下した點が著しい。

享樂階級的意識の崩壞

長谷川如是閑

『人間は何んのために生きるか』といふやうなことが、社會の或る一部の人々によつて常に議論されてゐる。無論多數の人々はさういふ問題を特に考へて生活してゐるのではない。何んのために生きるかと聞れた時に、明かにそれに對して答え得る人は極めて少數であらう。しかも多數の人々はさういふ問題をいかにも大切な問題であるが如く考へたがる傾向がある。

果して人々の信ずる如く、何んのために生きるかといふことを知ることが、それ程大切であるならば、それを解決することを得ずにいかにして多數の人々が生活を遂げてゐるのであらうか。實際、聖人とか賢人とかいふ少數の人々の間に於いてさへ殆んど議論負けの形になつてゐるさういふ問題が、吾々の生きるために、それほど大切なものであるかどうかは全く疑はしいのであるが、併し多數の人々の意識には確かにそれが生きるために最も大切なことであると考へられてゐる。そこに生活の現實と生活の意識との矛盾がある。人々は現實の生活をもつと無意識にもつと自然に築き上げてゐるのであるが、意識の上ではさうは考へない。聖人賢人でさへも眞に持つことの出來ないやうな意識が凡ての人の生活を築き上げてゐると考へる。

何故に人々が生活の現實を離れてそんな意識を持たないわけにゆかなくなつたのであるか、その事情を究めると、そこに、さういふ意識を生み出した特別の生活形式を持つた一團の人々があることを發見するのである。即ち自ら生活の意識

を生活そのものよりも尊重し、またその心持ちを一般人に宣傳してゐる特別の階級人がゐることを見出すのである。その人々は、自分の階級的の生活に於て、自分の生活を何う意識なければならないかといふことを、最大の問題としてゐるので、その同じ氣分を一般に宣傳するのである。この宣傳はかなり有力に一般に普及して、多數の人々も、成程何んのために生きるかといふことを知ることが人間にとつて大切であると思ふに至るのである。しかし、たゞさう思ふだけで、何時まで經つても何んのために生きるかを正しく意識することは出來ないのである。それが出來なくとも彼等は立派に自分の生活を築きあげて居るのであるから、少數人が最も大切であると考へたことが一向大切でないことに彼等自身氣付かなければならないわけであるが、元來彼等の意識の方法は、階級人から授けられてゐるので、右のやうな事に氣付くのを妨げられてゐるのである。だから彼等は意識の上では、授けられた通り、さういふことを大切と考へて居るが、實行の上では全くそんなものを無視して、何んのために生きるかを全く知らないで立派な生活を築きあげてゐるのである。

右の二つの態度即ち、生活の意識に生きる態度と、生活そのものに生きる態度との、いづれが人間的に最も正しい態度であるかといふことを決定することは全く困難である。何んとなればこの二つの態度はそれぞれ各人の生活環境が必然的に人々にとらしめた處の態度であつて、その各々は、各々の環境に於いて正しい態度であるといふ他はない。委しくいへば生活そのものを生み出すことに專心する態度をとる人々と、それを意識付けることに專心する態度をとる人々とは、生活の立場を異にするのである。また生活の時代を異にするのである。一つ時代に於いて二つの態度をとるものが共存する時には、兩者は或る意味の敵對關係に置かれてゐるのである。つまり敵、味方が各々その立場に於いて主張するやうに、そうしてその立場からいへば各々自分の方が正しいと考へる他はないやうに二つの態度もそれ〴〵正しいといふ他はない。若し兩者を判然と決する必要ある時には　それは力で決まる。それはどちらの態度をとるものがより力強く生存し得

るかといふことで決まるのである。

然らばどういふ人々が、そんな風に各々違つた生活態度をとるに至るのであるか。それは社會を全然二つの階級に分けて終つてゐる生活態度の差別なのである。その一つは生活を享樂する階級であり他の一つは前者に生活を享樂させるために働いてゐる階級である。譬へていふなら、美しい着物を着飾つてゐる人が前者であり、その人を美しく着飾らせるために着物を織つてゐる人が後者である。前者を假に享樂階級と呼び後者を生産階級と呼べば、一方は、人間がいか完全に生活を享樂すべきかといふことを生存の目標とする階級で、他方は前者をして完全に生活を享樂させるためにはどういふ生活をしてよいかといふことを生存の目標としてゐる階級である。世の中が全くこの二つの階級に岐れてゐることは、絶對に享樂しない個人といふもののないために稍判然を缺くのであるが、しかし、享樂者は絶對に生産をしないといふことがあるから、その點から見ると、世の中が全く二つの階級に分れてゐることがよく見える。ただ全く享樂だけをしてゐる人が澤山にある。それが標本的享樂階級であるが、その以外にも、享樂が本位であつて他の生活をそれに隷屬させてゐる人々が澤山ある。これに對して、その享樂者のために享樂の資料を造り出す生活活者が澤山ある。一人の女の指に嵌めるダイヤモンド一つを造りあげるには、生産階級の生活を非常の分量で犧牲に供さなければならい。つまりその犧牲生活を誓むのが生産階級である。現在の社會に於いても、この享樂者と犧牲者との對立が社會を組立ててゐるのである。享樂者はすべてが自分の生活を完成せしむるための手段であると考へる。農夫が耕したり着物を織たりすることから商人が物を賣り、哲學者が道理を考へ、技師が設計するやうなことがみな享樂階級の生活完成の手段であると考へるのである。其處で彼等はすべてさういふ手段を他人にさせるのであるが、さうなると彼等自身の生活が何んであるか結局分らなくなる。其處で「一體生活とは何んであるか」といふことが彼等の問題となる。昔のギリシヤ市民は一切のことを奴隷にさした。農工業から家庭内の仕事まで悉く奴隷にさせた。普通の市民の家には百人近くも奴隷がゐるといふことが珍らしくもなかつた。

從つて主人公は、全く自分のする仕事が無い、其處で所謂ギリシヤ式文化生活なるものが市民の間に生れたのである。それは哲學を考へ、藝術を享樂し、宗教を信ずるといふ生活で要するに遊樂、思索、信仰と云ふ三つの生活であつた。彼等は考へ得らるるあらゆることを考へ、享樂し得らるゝ有形無形のあらゆるものを享樂した。彼等にとつてはそれが生活の全部であつた。

ところが生活といふものは決してさういふものではない。例へさういふものであるにしても、全社會が悉くさういふ生活に沒頭したならば、社會は生存を維持することが出來なくなる。それ故に、生活とは生活を持續せしめる人間的、行動でなければならない。考へることも亦生活持續の條件として發達した能力である。等しく、家を建てることも米を作ることもそれ自體が生活である。それをおいては生活はない筈である。心の働きはこの意味の生活を盛たてるための人間的能力である。若し心の働きが人をして家を造ることを嫌はしめ米を造ることを嫌はしめるならば、それは心の濫用である。享樂階級が生活を全くさういふ生存持續の行動から引離して、單なる心の遊戯だけを生活と考ふるに至つたのは、彼等が全く生活持續のための生活態度を他の階級に委ねて終つて、自分は全く生活と沒交渉な心の滿足に終始する、生活をとるに至つたからである。彼等が『何が生きることであるか』といふやうなことを考へるに至つたのは、畢竟自分達の階級的生活が、生存の道を離れて單なる享樂的內容しか持たないことになつたからである。

しかも彼等は生活の組織に於いては指導者であり支配者である。從つて自分がどう考へるかといふことが、社會を管理する唯一の法則となり一般人をしてその法則に盲從させなければならない。卽ち『敎化』とはこの享樂階級の支配を成立たせるために一般人の心持ちを造り變へることである場合が多いのである。享樂階級でない人々は到底徹底的に享樂者のやうな心持ちになれる筈はないが『敎化』は兎も角も一般人をして迷信的に享樂者の心持ちに隷屬せしめるのである。

『生活』とは何ぞやといふやうなことが、とても生產階級の頭に這入るわけはないが、多數の人がさういふ問題を大切な

ものと心得る程度までは『教化』されるのである。從つてその『教化』は實質的には極めて貧弱で、一旦享樂階級の支配が破壞すると、忽ちその『教化も』一般人に撥のけられるのである。

それでいゝのである。歷史がしば〳〵さういふ事實を繰返してゐるのもそれでいゝのである。若しさうでなく、一般無産階級が、生活が何んであるかに就いて享樂階級の考ふる通りに考へそれに基いて行動したならば、それこそ大變である。何んとなれば、もと〳〵享樂階級の生活は生存の持續よりは寧ろ消費を本位としたそれであるから、彼等の生活に對する解釋は必ず生産を輕んじて消費を重んずるのである。若し一般生産者がそれと同じ心理に落入つたならば生産階級的勤勉の生活態度は忽ち安逸怠惰のそれと變じて、一般的頽廢が社會を犯し、其處に滅亡的な傾向を生ずる。生産階級が、どうしても享樂階級の意識を徹底的に受け入れることが出來ないのは、若しそれを受け入れたなら社會は滅亡するからである。で歷史を見ても解る通り、生産階級は時々享樂階級の廢頽的意識による社會的滅亡を防ぎ止めるために奮起するのである。フランス革命もその運動の一つであつた。享樂階級の造り上げた一つの文化が行詰ると、何時もそれを崩して新たな歷史的時期を創るものはもつと生産的な階級なのである。

何故に以上のやうな觀察を下さなければならないのであるか。享樂階級の生活は、何時のそれでも、幾分ギリシヤ式の立派さを備へ、世界の文化を各々の時代各々の場所に於いて築き上げてゐるのであつて、人間生活の完成といふ點に於いて、彼等の爲し遂げた仕事は誠に偉大である。その偉大さを認めながら右のやうな觀察を下すのは、畢竟私共の生活に於いて、現在、享樂階級の一つの文化形式が行詰つて居るからである。今も云つた通り享樂的生活組織が行詰つた時には生産階級の意識が頭を擡げて、社會的生存を持續する努力を試みるのであるが、今は現にその時期なのである。各國家の政治狀態を見ても解る通り、享樂階級の意識に立脚する政治は悉く難局に落入つてゐる。イギリスのやうな國では、勞働組合といふやうなものが、享樂階級の政府と同等以上の力を占めてイギリスの社會的生存持續のために努力してゐる。生

產階級の努力による外現代の不安を救ふ道が無いといふのが現代的事實である。斯樣な時に當つて、享樂階級的意識で私達の生活を方向づけて行くならば、それは難破船の中で舞踏してゐるやうなものである。それ故に私達は、今迄の享樂階級の支配の『敎化』に對し それが果して社會生存の堅實な意識であるかどうかを檢討しなければならないのである。で右のやうに、敎科書その他で授けられた思想を一先づ疑つてかからなければならないのである。

そこで、ただ享樂階級の手によつて築き上げられた宗敎、道德、藝術といふやうなものを憧れる心持ち――それはたゞ譯もなく尊い心持のやうに信じられてゐる――は同じ享樂的氣分であつて、生活を心の遊戲としてだけ營んでゐる人々の態度であると云はなければならない。その宗敎、道德、藝術そのものはギリシャのそれのやうに立派なものであるかも知れない。しかし、それを築き上げた生活態度そのものが現代に於いては成立たないのである。もつと生活的な、社會的生存持續に役立つ行動が現代の人間的態度として最も要求されてゐるのである。その生活的態度を堅實に摑むだならば、どうしても右のやうな享樂的な哲學や藝術に安住される譯のものではない。若しそれに安住することが出來るならば、その人は享樂階級の人間である。從つて享樂階級の破壞に應じて自分をも破壞する態度をとり得る人々である。現代は決してさういふ人々によつては生かされない。

若い人たちのために早わかりをするやうにいふならば、誰れでも、自分の生活よりはもつと空想的な何物かに憧れてゐる時にその人は享樂階級の人になつてゐると思つていゝ。よく私共は若い人たちがさういふのを聞く。『この事が生命よりも大切である』『自分といふものを深くみつめると、そこに何よりも眞なるものが見出される。それを覘つて進めば生きるとか、死ぬるとかいふことは問題でない』『何々――例へば愛――は生死を超越してゐる。生きることなんぞは何んだ、死ぬことなんぞは何んだ』とそんな風なことを容易に口走る人々がある。さうかと思ふとその同じ人がまた『それが生きることだ、死がそれを與へて吳れるなら死が生きることだ』といふやうなこともいふ。そしてさういふ心持だけが人間の

眞劍であると考へる。しかし現代の生活に立脚して觀察すれば、さういふ心理は全く享樂階級の頽廢的生活意識である。彼等が日頃決して社會的生存の道をとつて生活してゐないといふことが、彼等をしてそんな風に考へさせるのである。ギリシヤ市民が何んにもしない生活をしてゐたために、考へることだけが生きることだと考へてゐたのと變りはない。昔の享樂階級は眞理が造り上げられれば社會は亡びてもよいといふやうに考へた。『朝に道を聞けば夕べに死すとも可なり』とはその意味である。現代はこれに反して享樂階級の『道』を打破して『生存』を求めてゐるのである。享樂階級はすべてを自分の生活の手段に過ぎないとするが故に、自分をさへみつめれば人生の要求が見出されると思ふのである。しかし享樂人をみつめてゐれば社會的生存は、屹度亡びて終ふ。故に自分だけをみつめてゐる享樂人は、現代に於いては生存能力を全く持つてゐない人々であるといはねばならぬ。日々の新聞紙はさういふ人々が崩壞してゆく事件を澤山に報じてゐる。それは氣の毒な階級崩壞の過程である。

それ故に現に若い人々の生活態度は、私が說き勸めるまでもなく、享樂階級の人々が考へてゐるよりも遙かに生活的になつてゐる。自己本位の尊いもの、自我だけに美しいもの、それ等は皆享樂の階級の崩壞にあたつて發する火花であるといふことがやうやく氣付かれ出してゐる。其處に若い人々の堅實な進路がある。自己だけを享樂させる唯心的生活から、社會的生存を持續させる具體的生活行動へと進みつゝあるのが、男女に限らず現代の人々の態度であり、又あらねばならぬ。

女性改造談話會

現代女性間の友情
現代兩性間の友情

里見弴　三宅やす
平塚らいてふ　藤森成吉
山本有三　藤村千代
長谷川時雨　千葉龜雄

×（司會） 今度の會は友情といふ題目をとりました。唯今から現代の女性同志の間に行はれてゐる友情について話して頂き、それから女性と男性間の友情に話を進めて頂きたいと思ひます。友情などといふと生活に密接すぎて、空氣を論ずるやうなものだと言つた人もありますが、それだけに閑却されてゐるところも多いでせうから、一つ思ひきり御意見を聞かせて頂きたいと思ひます。

山本 それだつたら、はじめ御婦人の方に話して頂いて、それから吾々が話をしよう。

長谷川 友情を結婚した女同志が持つてゐます場合、夫はそれをどう見るでせうか。友情が邪魔になるやうなことはないでせうか。何だか女の人が家庭を持ちますと、友達が面倒になりがちです。それはつまり女があんまりおせつかいで、家庭の內部にまで立入りすぎるからだと思ひますの。おせつかいなことが女同志の友情をわづらはしくしてしまひます。

× さういふこともあるでせうね。

長谷川 私など、もとの友達が皆下町の町家だもんですから、結婚してからは先方から交際つてくれません。毛色がちがふからでせうか。

平塚 處女時代はさうでもありませんけれど、結婚すると友人が邪魔になるやうな傾きはありますね。

藤森　僕の家の女房が學校時代の友達と交つても、別に不快な感じはしない。寧ろ交つてくれればいいと思ひます。

山本　一體女の間に友情つてものがあるのかね。僕はちよつと疑ひを持つな

長谷川　私も持ちますんです。

千葉　友情がないとはどういふ意味です。

山本　つまり男同志よりは少いだらうと思ふんです。どうも男同志の友情のやうなものが、女にはないやうぢやありませんか。子供の面倒を見たり、おみをつけをこしらへたりしなくつちやならないせいか知りませんが。

千葉　さうでせうか。私はさうは思はない。婦人同志だつてやはり男同志と同じやうな友情がなかつたら隨分淋しいものだと思ふ。いや男同志よりも、女の方が一層友情が必要だと思ひます、社會がせまいだけに。

藤森　今のところ日本の一般の調子が家族制度になつてゐるから、その方へばかり氣持が注がれて、友達といふものを婦人の人が閑却するのでせう。

千葉　それは程度の問題でせう。私などは男の方が妻を持つた場合に、却つて友情が殺がれるやうに思ふのだが。

藤森　僕なぞは變りがない氣がします。

山本　實際問題としてどうも女子の間には友情がうすい。

三宅　女子の間に友情がうすいといふのは、男子の友情には女子が内から助けてをりますけれど、女子にはそんな風な後援がないといふ關係もあると思ひます

長谷川　私などは男の友達を見てゐて羨しいと思ふことが度々ございます。

三宅　男と女とが家庭の中で同じやうになつたら、友情にちがひはないでせうが、友情を邪魔するやうになると思ひますが、

藤村　今の女の生活はみなさうなのではないでせうか。すべてが男に附屬してゐるのですもの。

長谷川　男の人は怒つた時に一番友情が高潮するやうに思はれますのに、女には嫌な時に友情を持つ人がないやうですからつまりません。

山本　どうも女には爭友といつたやうな、眞實の友がないんだね。

平塚　かうは言へると思ひます。女は自分の親しい友達になると、何といふ事なしに干渉しすぎる嫌ひがあります。いくら親しい間柄でも別々の人間である以上、性格も、境遇も、思想も違つてゐるのに、親しさの餘り自分と同じやう

なものに思つてしまふのか、自分に求めてゐるものを、親しい友達に向つて同じやうに強要するのです。そして相手が自分の注文通りにならなかつた場合に、すぐ不滿足な顏附をしたりします。これが煩しくてたまらなくなることがあります。私が干渉することも嫌ひなかはり、干渉されることも酷く嫌ひなせいかも知れませんが、今の婦人がもつと他に對する寛大さと、理解があつたらと思ひます。

× その代り女性には、女性でなくてはできない友情もあるでせう。

千葉　私は男性が妻をもつて來ると、妻が夫の愛を獨占するために、男同志の友情がうすくなるといふ事實があると思ふ。これはモーパツサンの小說にもたしかそんなのがあつたが、また女性が妻として夫の愛を奪ふために、友情を彈ねつけるやうに、妻といふ女性の爲に、肉親關係に破綻をおこすことが可なりある。要するに女性の場合でも、男性の場合でも、結婚生活が友情の破壞を導くことはたしかにあると思ひますね。

藤森　どうも、僕などは女房を迎へても友情が變りませんがね。

里見　友情の本質をもつと話して貰つたらどうでせう。男の方では妻を持つても友情が殘ると言はれる。友情と他の方——戀愛とか、異性間の愛情とかの相異を話してゆけば、男に對するものとはまるで別なものがありはしないだらうか。友情の性質は、戀愛とか、夫婦間の愛とは大分ちがふのではないかと思ふ。

× 今日の社會制度では女性はまだ男の附屬物だといふ考へを無意識の中にも持つてゐるので自と限界が狹められるのではないでせうか。支那の女などは嫁入するとまるで友達と交際しないさうですが、社會狀態が變れば友情も自然變るのではないでせうか。

藤森　それが大きな影響を與へてゐる。一つは交際の經驗がないからではありませんか。

平塚　女にとつても、眞實の友情があるにはあるのですが、結婚をすると薄らぐことが多いと思ひます。

藤森　友情がないといふのではないが、女性はまだ平常の訓練が積まれてゐないからではなからうか。

里見　先づ獨身時代の友情から片附けていつたらどうでせう。

× さうです。今の中學生と女學生の友情などは大して差別がないやうですね。女學生などはなか〳〵細かな友情を持

つてゐるやうです。

里見　兄妹同志で打明けるのでは間にあはないし、父や母に對するのともちがふ。どうしても友達でなくてはならないものが殘るか殘らないかゞ問題になるんだと思ふ。

三宅　それが結婚生活の外から餘り殘らないと思ひますが。お互が結婚しあふと友達と友達との間がぴつたり結びあふといふことは、むづかしくなると思ひます。了解して貰へないことが出來易いので誰にも打明けられません。

×　結婚生活が友情を奪ふといふ話でしたが、友情の力がまだ極く強いものでしたら、反對に奪ふことになるだらうと思ふが如何ですか。今までの話では友情を別にして、夫婦といふ愛でゆく人と、友情と夫婦の愛とをごつちやにしたやうに考へる人とありましたね。

三宅　友情は別にあると思ひます。

里見　男の友情といふものはどうも特別のやうだ。

山本　どうもさうだ。

×　併し友を求める氣持は女の力が勝つてゐませんでせうか。少女雜誌などの通信欄なんかを見ると、殆ど讀者と讀者との友情の交換みたいですね。男の雜誌などではあゝいふことはありませんが。

三宅　友を求めたい氣持、それはありますけれど、やつぱりそれは異性を求める心の過程ではないでせうか。子供のする飯事や、雛樣遊びが、主婦や育兒の眞似ごとであるやうに。

藤森　どうもさうらしいですね。

三宅　女には頼るといふ氣持がたしかに幼い時分からあると思ひます。

×　三宅さんがおつしやるやうだと、女の人は友情と異性愛が密接なのですか。友情と戀愛とのけじめはどこにあるのですか。

平塚　女にとつても、友情と戀愛とは別にして考へられると思ひます。異性に對する友情の場合、又は特殊な同性に對する友情の場合、途中から戀愛が加つて、二つが一緒になつて働いてくることはありますけれど。

千葉　雜誌などで友達を求めてゐるのは自分の意識に、戀愛であるか、それとも單に、人の愛を戀しがる人間の本能としての簡單な友情を求めてゐるのか、はつきり求めてゐるものを知らないのではないですか。

平塚　若い娘さん、十六、七位な娘さんは、無論この二つについて、はつきりした意識を持つてしてゐるのではありま

すまい。

里見　一つ今までの材料で結論をつけてみたらどうでせう。つまり友情といふものにも訓練といふものが必要である。その意味で男の方が進んでゐるので、自分達が子供の時分には、男同志の間に稚兒さんとか何とか云つて、戀愛などが流行してゐて、その訓練を經てきてゐるからこゝまで來たんだが、女の方は今、歷史的に、男が通つてきたあとを踏んでゐるのではないかと思ふ。在來の日本には女の交際は餘りなかつた。それで男同志の友情は確立してきたが、女はまだそこまで屆いてゐないのではないかと云ふことになると思ふ。

藤森　つまり友情といふものは、社會生活へ一歩踏出したところにあるので、その點で男の方が訓練されてゐるのではないでせうか。

長谷川　それに今までの女は、夫に對して友情を求めてゐやしないでせうか。他の方面の人よりも。

千葉　婦人の愛情を促すものは今日までのところ、まあ大抵理解よりも、一時の小さな感情とか、感激性とかゞもとになつてゐるので、それだけその感情のもつれあひから、友情の破れることが多いのではないでせうか。理解でいけば許せるやうなことでも、またすぐわかることでも、とかく小感情が基礎になつてゐるから破れ易いのでは。

長谷川　それに女は正直ではありませんから……

×　それはどういふ意味で、

長谷川　どこか正直ではありませんの。

山本　はゝあ、本音を吐きましたね。

三宅　私など今でも卒業生が時々あふのですが、學校時代の友達に出あひますと、それは嬉しい氣持になりますけれど、隔てのない感情にはなれません。どうしても女の交際は、家事とか、育兒とかいふ負擔に阻害されるやうに思ひます。

里見　それは、ほんたうにさういふこともありませうが、男同志では仕事が友をつくることもありますよ。同級會などで久しぶりで友達にあつて、非常に親しい氣持になつて、「又逢はうね」と言つても、大抵再會するやうなことはないが、女には特別仕事といふ形で結びつくことがない。それも本當だが、また家事を一つの仕事として、却つて結びつくこともあるだらうと思ふ。

三宅　仕事の上で結びつけられた友情には餘り力がないやうに思はれます。

長谷川　女は家庭へ入りますと細いわづらはしさが澤山あるので、それだけで疲れてしまひます。

山本　女は結婚すると舊い友情をせいぜい洗濯してゐるだけで、新らしい友情なんか殆ど生めない狀態にゐるのだ。

藤村　露骨に言ひますと、私は女同志は嫌ひです。うるさくて大嫌ひですの。

山本　それはあなたが獨身だからではないんですか。

千葉　お獨身ではないですよ。

藤村　でも女はみんな馬鹿なんですもの——

三宅　私は女の友で、本當に好きな人は異性の友達よりもつとなつかしい。男の方に親しむのとはちがつて、本當の友情を感じられる女性があります。

×　それは同性愛に到達してゐるのではありませんか。

三宅　それとは違つて。

藤村　嘘ではございませんでせうか。

×　しかし今は獨逸などでも同性愛が全盛ださうです。女同志の心中などはよく傳へられるぢやないですか。

藤村　それはほんたうの心中でせうか。

平塚　多くは誇張されてゐるのでせう。

千葉　少しはあるがあつても割合に少くはないですか。尤とも田村俊子さんなどは、よく女性の同性愛を題材として小說を作つて居たから、所によつては相應にあるでせうね。

長谷川　異性の方の戀愛が何すれば、同性愛などは捨てゝ了ふでせう。

千葉　里見さん、女性の同性愛の起つて來るもとは友情からでせうか、それとも何か別の動機からでせうか。

里見　それはやつぱり友情だと思ひますね。男同志にあつたやうに、女にもあると思ひます。一時まあ男色の、非常に流行した時代があつたが、女も今其處まで來てゐるのではないでせうか、その方が辻褄があふんだが、はゝあ、

長谷川　そんなことがあるでせうか。

平塚　それは一般的ではなしに矢張り特殊な—變態な婦人に限られた事ではないでせうか。近頃女學生の間の同性愛の流行といふやうなことを誇張して聞かされたけれど、私は何だかその噂が信じられなくなつて仕方がありません。

里見　男の間に男色が流行したのも、何も十人が十人さうだとは言へませんが、

藤森　あゝいふものの流行は、いつも野蠻時代か、又は文明の爛熟時代の現象です。

千葉　それで、こゝで提出された婦人間の友情の問題は、結

局友情が婦人の間に成立しないといふことになつたのですか。

藤森　いや、これからは成立つ。

三宅　それは成立たねばならない筈だと思ひます。

山本　そしてまたそれはあなた方の責任だ。家事の事情とか、色々の困難があるでせうが、それを打破つて成立たせなければ噓です。友情は男だけのものではありません。

平塚　唯しかし、友情が出來たとしましても、そして原理としては男と女と同じでなければならないが、今日のやうな制度では――大部分の女は確に家庭の雜事のために、友達との間の友情を育ててゆく丈の心の餘裕も殆どない位なのは事實でせう。

藤村　たゞ並べてみせるだけでね。

山本　實際問題として、家事なんかで遮られることはある

千葉　それなら、これから後に、婦人の友情を成立たすやうになる動因はどうでせう。

長谷川　それは女がもつと解放的になることだと思ひます。

藤森　獨立の生活が出來るやうになることでせう。

山本　しかし女が獨立しても男と同じやうにゆくだらうか、どうだらう。

藤森　頭と生活と、兩面からの獨立が出來れば成立つ。

藤村　みんなが仕事を持つて、だん／＼訓練されてゆけば、長いうちにはよくなるでせうね。

平塚　私は仕事を一緒にしてゐる人に、ほんたうの友情が起らないやうに思ひます。却つて生活のちがつた友の中に、ほんたうの友情があるのではないでせうか。私共、一年に一回たよりをするかしないかの友達で、十年、廿年と繼續してゐますが、そんなのがほんたうの友情のやうな氣がいたします。

長谷川　友情を持つ友は、却つて永い間音信なしですむやうです。三年目位でひよつこり逢つても、不自然にならないで打とけた話の出來る人があります。お互の缺點を發見しないからかも知れませんが、長い間逢はずにゐてそれで何十年も破れないで、逢へば言ひ知れぬ親しみを持つことが出來ます。

山本　併しそれで本當の話が出來ますかね。例へば心中でもしようと言ふ時に、それを打あけるやうな。

長谷川　却つてさうです。

藤森　打ちあけよいでせうね。

千葉「忘れねばこそ思ひ出さず候」といふわけで、私は十

年手紙をやりとりしなくとも、友情にかわりの無いやうなのこそ、本當の友情だと思ふ。

(こゝで平塚さんが子供を他に預けて來たのだからと仰言つてお歸りになりました。)

里見　友情が仕事に邪魔されることはないと思ふが——

山本　友情は相互扶助の一種だと思ふね。

長谷川　女は他人を容れるよりも、我を通さうとしますから。

藤村　ほんたうですのね。

山本　我よりも嫉妬が強いのだらう。

長谷川　嫉妬といふよりも私などは、我が非常に強くて、人を容れるよりも、我を通さうとしますので、密接にしてゐますと、却つていけませんのです。

里見　さうだ

長谷川　小さなことでも容れられると、女は嬉しがるところがあります。

千葉　それは確かにある。しかし女性はたしかに反省の無い我を通さうとする慾望が多いですね。それがどうも友情をも、また夫婦仲をも不和にして居るのは事實ですね。

三宅　私は女の間にも友情は立派にあると思ひます。

藤村　私には女の友達なんて一人もない。

里見　仕事に關係しないでゐて、なつかしい友もあるが、長い間逢はない友達は、ぼろも見えず、古いサ　がついて、色がついてゐるから、實際以上によく見えるのではないかと思ふのです。一つ實際の友情を科學者がするやうにしてみたらどうだらう。科學的にどんな藥品をかけても、解剖しても壞れないやうな友情があるんではないだらうか。そんなのは始終あつて、喧嘩したつて壞れたりはしないだらう。

藤森　それは大分里見君一家の趣味らしいなあ。

里見　さうかなあ。

山本　しかしかういふことは言へると思ふ。永く逢はない友達は、對等にならうとか、擢んでようとかいふやうな感情が起らないから親しくなり、密接だと競爭心が起るから駄目なんぢやないか。

藤森　それは主に仕事の上でね。

里見　しかし友情も火花を散らし、實際喧嘩しあつて、ぐんぐんやりあつていつて、ほんたうのところへゆけるんだと思ふ。

山本　それは理想の友だ、勿論僕はさういふ友人が欲しいが、

併し仕事が同じなために却つて親しい友達が別れ〳〵になることが隨分あるやうに思ふ。六七年前の早稻田の學校騷動などもその例ではないでせうか。高田といふ人も天野といふ人も、一緒に早稻田を創めた人なのに、あゝなつてしまうんだからね。大久保と西鄕の場合だつてさうでせう。

里見　併し壞れた例も多いが、結ばれた例も隨分多い。

山本　とにかく爭友がほしいですなあ。

三宅　私などもほんたうにその爭ふ友がほしいと思ひます。

長谷川　女の友達はどういふものか家のことまで立入るので困ります。私は仕合せなことに八千代さんといふ友達があります。同じ道を步くせいか、お互に言はなくても了解があります。それで世間の人があの人を惡く言ひでもすると、非常に腹がたつて、一層愛が濃くなつてゆくやうに思はれます。十數年來つゞいてゐますが、私達は餘り立ちいらないやうにしあつてゐます。

山本　ふん、それあ珍らしい。

長谷川　あの人も私もどちらかと言へば男らしい性分ですから、家庭のことなどはあまりふれないで、わざと細いことから遠のいてゐることがあります。

×　しかし女同志がさうして姉妹のやうになりますと、やつぱり何でも打明けて、經濟上の――金のあるなしまでお話になるのですか。

長谷川　ないといふことも言ひます。それは女ですから、この着物を上に着ようか、下に着ようかと言ふことまで言ひますが、併しそれにも程度があります。個人的な好惡のことまで立入るやうなことはお互に避けます。男の方でもさうでせう。姉妹のやうな仲でも、適當の遠慮はある筈ですから。

里見　それは遠慮ではない。叡智だらう。

×　一體にどちらかと言へば、上流の婦人よりも裏長屋の女の方が友情があつくはないでせうか。男と男は一日中働きに出てゐて、女と女とがつきあふからでせうか。井戸端會議などは却々親しさうに見えますね。女が舊來の家族制度を破つて生活すれば、卽ちもつと社會的になれば隨分變つてゆくでせう。

千葉　日本の特別の家族制度のせいか、さういふ無理をやらしてゐることはたしかにありますね。

山本　今の平塚さんの場合なんかもその例だらう。

千葉　男は一體に遠心的で、抱合的ですが、女は分析的で、求心的だと思ふ。だから女は、他人なり他性なりの好い方

面を搜し、或はその缺點を暖かくかばひ、許すといふことよりも、寧ろ惡い方面を搜して、それを搜し出したのに興味を感じたがる。そこに根本的に、婦人に友情を持てないところがあると思ふのです。たとへば、よく女と女とが道であつて、後を振返つてみる時、その眼は蛇のやうな感じがする。どこかに缺點がないか、氣の毒なところがないかと搜してゐるやうな殘忍性がある。それが女性の本質的なものであるかどうかはわからぬが、どうもこの性質が面倒だと思ふのです。で、もしこの排他的の根本性がなくなれば、婦人の友情はどうにか育つて行くでせう。

山本　僕も男と異る點は認めるが、少くとも今よりはもつとよくならなくつちやいけない――併しどつちみちよくなつたところで、男子の現在のやうな友情は持てないだらう。

藤村　女が他の女の帶とか着物、その容姿に異常な眼を注ぐのは、女の世界が狹いからだと思ひます。すべてが男から與へられたものばかりだからでせう。だからこれをもつと廣く與へて下さると、廣いやうな氣持になつて、長い間には女の缺點も消えてゆくやうになるでせう。女が保守的に持つてゐると言ふよりも、外部から保守的にならされて來たのです。まあ今の女は片輪のやうなものです。

藤森　僕もそれを思ふ。

三宅　それから女の友情がつゞかないことの理由に、女が男に愛されようとか、愛される男によく思はれたいとかいふ氣持が根本にあつて、男を目當に生活してゐるから却々むづかしいと思ひます。假令經濟的に獨立しましても、同性同志の嫉妬で、美しい人なんかゞもてはやされるのに反感を持つ間は駄目だと思ひます。

藤村　男を目當にしなければ今の女は一日も生きてはをられないのです。

×　今後の社會生活には、どうしても女の友情を向上させねばならないと思ひますが、それにはどういふ方法をとつたらいゝか、或は自然に育つのを待つてゐたらいゝか、お考へがありませんか。

長谷川　女全體が一つになつて男にぶつかつてゆかねば駄目でせう。

山本　しかし今のやうだとこたへませんね。

長谷川　今の男の人は少し物の分る女を嫌つて、寧ろ分らない女を可愛がる傾向があるやうに思ひます。つまり後戻りをしつゝあるやうに思ひます。

里見　さうだ……

藤村　後戻りをするやうに見えながら、進歩してゐるのではないでせうか。

千葉　もうしかし大抵のわかつた男性は、さういふ氣持は持たないのではないですか。

里見　中途半端が嫌なんだ。オールーオアーナッスィングなんだ。つまりもつとぐつと高くなつて呉ればそんなとはないだ。

藤村　理智的方面にもつと高くなつたら、どんなにでも尊敬します。

×　しかし兩方の高さが一緒になつたらどうでせうか。男が淋しくならないでせうか。

藤森　淋しくなるかも知れないが、もつと嬉しいこともある。

長谷川　女は一體に純潔を與へるが、男は純潔よりも物質を與へるやうに思ひます。

里見　そんな譯でもないでせうが。

藤村　私は友情なんてものは、はじめから否定します。女性が男性に對する友情なんてあるでせうか。交際をしてゐるやうな男には少し位惚れてゐるのだと思ひます。惚れられないやうな男とは交際が出來ませんから、それは友情ではありません。

藤森　友情と戀愛とはちがふ。

千葉　しかし異性同志がもう少し純な友情で交際へないものでせうか。

三宅　私は友達はどこまでも友達といふ氣でつきあへます。割合に親しく出來る男性は、友情以上に好きになる氣づかひのない人です。好きになれさうな男性はわざと避ける癖が以前はありました。

千葉　同性の友情と、他性の友情と同じやうに交際へないものでせうか、里見さん如何です。

里見　藤村さんの言はれる惚れるといふのは、つまり男だといふ意識なしにはつきあはれないといふ意味なんでせう。

藤村　ええさう、さうなんですわ。何ですか言葉が見つかりませんので、

×　では男だ、女だといふ意識があるだけで、男女の場合は友情だと言へないでせうか。

千葉　男だ、女だといふ意識があるから、女性の友達を持つことは、男性の友達を持つのとはちがつた、男性の一つの慰めになるのだが、だがその慰めを、必ず戀愛まで持つてゆかねばならぬものではないと思ふ。それでは男性はとても女性と應接しきれない。私は兩性の友情は、根本に男性のそれと違つた色々な感情とも違つた、しかも戀愛でもな

い、純粋な何とも云へない美しい友愛の感情が成立ちうると思ひますが。

藤森　日本の男女は——殊に女は訓練が足りない。クロポトキンの自叙傳をよむと、眞中あたりにロシアの一八六〇年代頃のニヒリスト運動が記されてゐるが、そこには若い青年男女の友愛が實に綺麗に書かれてゐる。主義が友愛と結びついてはゐるが、あれは實に立派な、ほんたうの男女間の友情の一例だと思ふ。

千葉　アルツイバーセフのものなどには、友情と戀愛の區別なしに、もつと徹底してゐるものがあるやうに思ふ。

藤森　アルツバーセフの物は、それからずつとあとの青年男女の一面を取り扱つたものだと思ひます、クロポトキンでは、女としてよりも、むしろ人間として立派な友情が記録されてゐます。

×　長谷川さんは、三宅さんと藤村さんの意見をどうお考へになりますか。

長谷川　私は藤村さんのお氣持も、三宅さんのおつしやることもどちらもよく分りますの。唯言葉の問題になつてゐると思ひます。

里見　さうだ。今は言葉の問題になつてきてゐる。男といふ意識があつても友情と言へるか言へないかですね。

千葉　肉體的に結びつくといふ考へを離れて、男と女の間には特別な友情があると思ひます。

藤森　男女の關係が、必ず戀愛的色彩をおびるものときめたら、始末がおへないだらう。

×　藤村さんは絶對な友情といふものを全然認めないとおつしやるんですね。さうなんですか。

山本　藤村さんは、女として異性に對する氣持を、かなりはつきり大膽に言つてゐると思ふね。その點はみてやらなくつちやいけない。とにかく女は、友情といふものについては訓練が足りないから、異性に對するとさういふ氣持になるんだらうね。

藤村　夫婦とか何とかいふ關係がついて、十年なり、十數年なり暮してきて、何でも安心して話あへるやうになり、肉親的な關係が出來あがつてから、はじめて打ちとけた落着いた友情が湧いてくると思ふのです。

千葉　戀愛を離して男女の友愛が話せなくなると一寸寂しいものですね。

藤村　でもその間には色々ありますから。

山本　つまり藤村さんの云ふのは菩薩に五十二の階段がある

やうに、戀愛にもその段階があるといふのだよ。例へばラヴ一、ラヴ二、ラヴ三といつたやうに。…………そしてそのラヴ一をある人は友情だといひ、ある人はラヴだといふまでだ。言葉尻の詮索はしない方がいゝだらう。

藤森　男女間のラブでも、最高のところまで行つたらもう戀愛とは言へないかも知れない。

×　夫婦の間に戀愛的な氣持が消えて、友情になる時がないでせうか。

長谷川　夫婦がだん／＼年を經て、茶呑み友達になつたら一番打あけ易い友達ではないでせうか。

山本　はゝあ、それあ自分達には分らぬ。まだ若いから。

千葉　女は女の友達の方が交際ひ易いでせうか。それとも男の友達の方がつきあひいいでせうか。

藤村　どうも男の方がよいやうに思はれます。

三宅　男の人でも、女の人でも、強く好きになれるといふ人はきまつてゐます。苦しい場合に、その苦しみを察してくれる友がほしいと思ひます。理解のある人がほしいと思ひます。

長谷川　此人は解つてくれるだらうといふ友人が一等ほしい

里見　それが友情の根本でせう。

長谷川　それにほんたうに解つてくれる人だと、ちいつとみつめてゐるだけで、何にも言はなくても、すつかり分つていたはつてゐてくれるやうな氣持がします。分つてゐてくれると思ふと安らかです。

×　シベリアへ行つてゐる婬賣の女の友情などには又特別に親しいものがあるやうですね。藝妓などの間にも素人などには分らない友情があるもんでせう。

藤森　友情は、娼妓などの間にも實に深いものがある樣です。

千葉　境遇に同情しあふ友情ですね。

×　併しさうでなくて、境遇が同じで憎みあふ例も隨分多いでせう。

里見　つまり友情は境遇の問題ではない。人間としての問題になるのだ。人間が偉くなればいゝのだ。

×　それではもう一言づゝ結論的にお考へをのべて頂いておしまひにしませうか。

山本　僕はもう言ふことがない。言ひたいことはさつきからしやべつてしまつた。

三宅　誤解のないやうに私申しませう。

今までの女は見聞が狹かつたから、貧弱でいけないのですから、もつと見聞が廣くなつて、經濟的の獨立も出來、家

の建方なども改善されたら友情の發現も今よりは高められるだらうと思ひます。經濟と家の建方、さういふところからも今迄の女はいい成長の機會を失つてゐたと思ひます。

里見　これは友情の問題ばかりでなくどの問題にも共通することだが兎に角女が偉くなつて下されば、凡ての問題が解決つくことは分りきつてゐます。それには男に決して手を出させないで、女だけで築きあげねば駄目です。假令見つけたものが男の中にあり、男の中に立つやうになつてもいい、見出すまでは絶對に男に口出しをさせず、男の手を煩はさないで。

藤村　でも男から今、突きはなされるといふことは、女にとつてすべてを縛つておいて歩めと云はれるやうな彼です。私はやつぱり男の協力と助力とによつて女を向上させて頂かねば駄目だと思ひます。男の人が臺所から解放して下さるやうでなくては。

長谷川　女自身もつと考へなくては寂しいでせう。

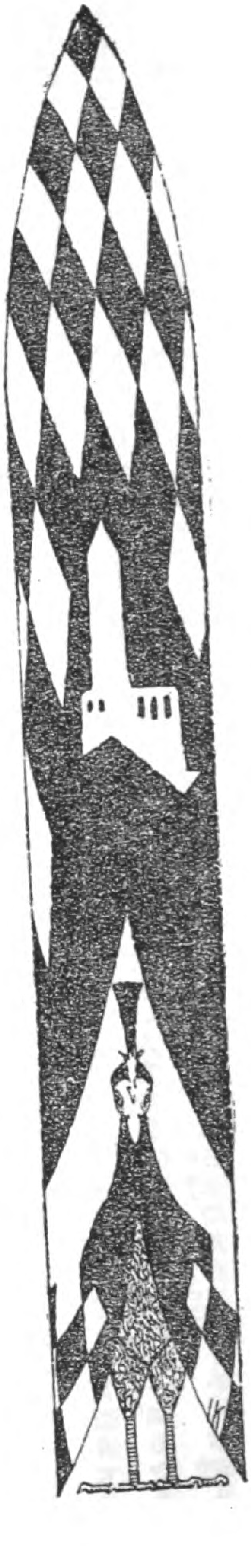
藤森　僕は女の同性間の友情も、異性間の友情も成立ちうると思ふ。男の立場から言へば、女房でも半分位はただ一個の人間の氣持でつきあはせて貰ひたい。まして外の婦人の場合には、女だといふ意識を全然忘れるやうな交際が欲しい、婦人の解放問題については、勿論女から豫め男にたよるのは誤りだが、男の方から協力することは大變必要だと考へます。丁度知識階級がプロレタリアートの興隆に際して、それに參加し、助力することが必要なやうに、女の成長にも男性の協力が是非必要でせう。

千葉　私の思ふのでは、要するに友情をつくる元は愛か理解かの二つである。併し愛は美しいが、愛するといふ以上は、平等無差別の愛でなくてはならない。然るに凡人の愛は、與へるよりも奪ふ方が多いものであるが、凡夫らにはとても理想するやうな厚い純愛が持てない。いやそれは佛陀やキリストでもむづかしかつた。かくして凡夫には、宇宙大の感情といふものはなくて、人間の持つてゐるのはそれをづつと狹めた小感情であるから、それにはどうしても差別の危險がある。愛よりも理解の方が先に立たねば駄目だと思ふ。で男性でも女性でも、自分をおしひろげて他人を抱擁し、理解するやうに努力したら、友情は立派に成立ちうべきものだと思ふのです。男性が女性に、女性が男性にお互に理解さへあつたら、兩性の友情も亦立派に成立ちうる。かくして一人から他人へ、同性から異性へ、さういふ友情を一體に押し及ぼした社會をば、私は將來に成立たすべきだと考へてゐます。

（七月二十七日午後六時より帝國ホテルにて）

文藝上のリアリズム

厨川白村



吾々が、人間であることは誰でも疑問の起らない點なのです。そこで吾々が一番知らなければならぬものは何かといふと、昔の詩人が言つたやうに、人間の本當に學ぶべきことは、人間であるのです。吾々人間の生活が本當に解つて、本當に人間の上に尻を据ゑて居れば、吾々は完全な解放された自由な生活が出來る。人間が機械の上に坐つて居たり、妙な動物の世界に這入つて居たりするのでは、生き苦しくて仕方がない。文藝は人間性の本當の所を捉まへて其眞實に徹したいといふ努力であります。さういふ意味から言へば文藝といふものは廣義のリアリズムであると云ひ得るのです。

一體今日のやうな時代に於ては、吾々は人間といふ者が一體何處に居るかといふ疑問をば抱くでせう。人間生活とは果してこんなものだらうかといふ疑惑を持ちます。電車の鈴生り、荷物か何かのやうに電車の箱で運送される時には、あまり人間らしい心地はしない。私はよく動物園に往つて柵の中に居る獅子を見ますが、あれを獅子と見るのこそ間違つて居

るので、恰も今の人間が人間性を失ひ、間違つた人間の生活をして居るのと同じく、あれは猛獸の本性を失つた或る獅子以外の動物に過ぎないのです。東京の動物園の獅子はさうでもありませぬが、京都の動物園には三代、四代ぐらゐ、檻といふ一種の家族制を作つてあの中で繁殖して出來たライオンです。中々よく子供が育つさうです。産兒制限どころでなく非常に巧く育つといふことを園長が自慢して居ります。檻の中の彼等は、昔山野に咆哮して居た時分の本當の獅子性を有つて居りませぬが、あれでも自分では矢張り獅子だと思つてるかも知れません。そこは獅子に聽いて見なければ解りませんが……。

今日の人間は大抵は獅子よりも貧しいのです。獅子の檻には防寒設備もあつて部屋を暖めてあります。普通の人間の生活より獅子の檻の設備の方が遙かによい。吾々人間は火鉢もなくて慄へて居る有様です。かくの如く、今日は人間をして至く檻の中に入れて、さうして本當の吾々の人間の人間らしい靈を忘れたのであります。詰り人間性の美しさと自由を奪はれて居るのです。近頃は經濟上、或は社會學上の方面から、弱者、無産者が奴隷の狀態に居るといふことを世間で皆がやかましく申されますから此方面のことは私から申上げませぬが……私はさういふ方面の學問をして居る人間でありませぬから、それは私が言ふよりも、皆さんがよく御存知かと思ひます。

そこで、一體人間らしい人間とは、どんなものか、それを一口に云ふ事は出來ませぬが、機械でもない、動物でもない神樣のやうな者でもないと云ふことだけは考へられさうに思はれます。元來人間が人間を忘れてしまふと云ふ事は一寸不思議な樣ですが實はいつでもやつて居ることなのです。世界で女や子供が人間であることを知つてから、未だ百年になりませぬ。ルツソーですらも女は一人前の人間だと思つて居らなかつた。子供といふものを本當に貴い人間だと知るやうになつたのは、やつと百年以來の事であります。高慢痴氣な利巧な西洋人でもさうなのです。日本では今日漸くそれが解るか解らないか位の所です。私は先刻、人間が皆動物のやうになつてしまふ事を申しましたが、食慾と性慾との二つの本能

に限られて居ては、單に生存といふことであつて、本當の人間らしい生活ではないといふことになります。また吾々が機械になつてしまふことも情けない。機械は人間が使ふために作つたものである。人間は機械や道具を造る所の唯一の動物で、此點が人間の一大特色である。ところが近世ではサイエンスの力を借つて益々盛に色々の機械を作ります。そこで遂に經濟上産業革命の問題が起ると同じく、今度は人間の方が逆に機械に使はれてしまふことになる。人間が全く機械になり切れる者ならば機械でも可いのですが、機械の癖に色氣があつたり、慾が深かつたりするから仕末がわるい。そこから吾々の生活に無理が出來る。一定の目的のみに働かせる事、即ち能率といふことのみ言ふならば、到底人間は機械に叶ひませぬ。工場主が人間よりも機械を大事にするのは、機械の方がよく仕事をするからでありませう。そこで今度は、苦しまぎれに考へて神樣の方に出向いて行つた　鎭魂歸神だとか、何だとかいろ〳〵な名前をつけて神樣に成れるやうなことを言ふて聽かせる。また懺悔奉仕なぞとも云ひますが、吾々は何も懺悔なぞしなくてもいゝのです。人間は永久の人間である。之も京都のことを云ふやうでありますが、何とか園といふ處の人逹が木屋町と稱する一種の賣淫窟のやうな町の便所の掃除をして歩く。それが奉仕であるとか言つて變態性慾か何かのやうな事許りして居る。そんな餘計なことばつかりして居る。本當の人間の人間らしい所へは却々入り込めない。機械になり神樣に求め、動物に下落し、色々と、あつちへ往つたり、こつちを叩いて見たり、出拔けやうとして頭を打つける。此處に永久の人間の苦みがある。

そこで人間性の眞實を摑みたい。本當に人間の人間らしい生活を把握したいといふ時に、吾々は文藝の世界に行くのです。一體人間位都合の悪く出來て居るものはない。神樣が斯ういふものを造つたとすれば、神樣も隨分まづい造り方をした者ですが、私は寧ろ人間が神樣を造つたと考へる方が可いと思ひます。其證據には人間がなかつたら、神樣は無い。例へば人間と云ふものは一方には飽迄も秩序を求める性質を有つて居りますし、又一方に於ては秩序を破る性質を有つて居ります。總ての法則は破る爲に存在するのですが、破つては新しい法則に直ほして進んで行くのであります。斯くのごと

く、つまり人間は神といふ者と、一方畜生や悪魔といふものとの中間に居るのです。吾々の腹の中には神性と悪魔性とが兩方宿つて居ります。一方に愛があれば、一方に憎しみが在る。兩方のものが種々樣々の衝突や矛盾をして、苦しむ所に人間の永久の姿があります。永久の疑問があります。片方が往かうとすれば片方が喰止める。仕方がないから機械に行つて見るが、機械では矢張り具合が悪い。動物に行つて見たり、神樣にならうとしても皆駄目であります。

是は日本の歴史でも封建時代から、明治、大正に移る歴史を見ても同じであるが、一體西洋の歴史を回顧して見ると、要するに是は人間が人間であることを思出したり、忘れたりした歴史に他ならないのです。折角人間性を回復すると、やがて又失つてしまうと云ふ風にして人間は進んで來て居ります。一體希臘の時代は何もかも人間中心に考へた時代で神樣が矢張り燒餅を燒いたり、仕返へしをしたり、希臘の神話位、人間臭い神話はない。次に羅馬人が此文明の後を繼いで、更に羅馬の文明が亡びると、今度は中世の隨分長い間の時代は、皆人間が神樣になつて獨斷的宗教たる羅馬教の權威の前に皆が平伏してすつかり人間らしい自由も何もかも皆取上げられ、智慧も學問も皆捨てゝしまつた。人は唯だ神と天國とだけを考へてゐた。是ぢや何うもならぬと氣が付いたのが御承知の十四、五、六世紀のルネツサンスであります。此時代をコロンブスの亞米利加發見と同じ樣に『人間發見の時代』とも言ひます。即ち主として藝術方面から、人間生活を本當の人間生活らしい者に戻す回復運動をしたのです。處が之で宜かつたのですが、更に其後、十七、八、九世紀あたりに來ると、いろ〳〵な所に片寄つて行つて、また人間その者を閑却する傾向が起ることになつた。即ち十七、八世紀には人間を何でも型に箝めて了つて、文藝といふものも一種のクラシツク風の型にはまつて、法則萬能の時代を作り、人間性の動きの取れない時代を作つた。そこで、また是ではならないといふのでカントといふ男は、自分が飽まで批評的の立場に立つて物を考へることを唱へますし、此カントを喜ばしたルツソーの說も、人間は元の儘の自然に返へれと云つたのです。彼の言葉『自然に歸れ』とは、一方から言へば、人間に返れといふことなのです。斯ういふ事が言ひ出されてから段々

世の中がでんぐり返つて、十九世紀の始めからゴタ〳〵して、嘗て失はれたる人間性を回復する爲に、種々の方面から一生懸命になつて努力して居ります。それが經濟上や、社會上の問題として現はれて居ることは諸君がよく御承知の通りであります。

しかし此人間生活回復の運動も中々最初はうまく行かない。最近百年來努力して居るわけです。十九世紀の初めのロマンチシズムは人間の感情性を解放し、神秘に對する人間の憧れと言つたやうなものを復活し一生懸命にやつて居りましたがその間に何時か、また足が地べたを離れて了つて人は現實を離れて夢幻空想の世界にのみ生き、我々の現在の生活の姿といふものを忘れて了ふ樣な事になつた。それでは困ると言つて、今度はまた急に地上に下ろして、自然科學の影響から人間の有つて居る獸性と動物性といふものを無闇に誇張して是が人間と思ふに至つた。それが自然主義でありました。併しもつと面白いことは私は、此近世の人間性の回復に「惡魔の發見」といふ名前を附けたいと思ふのであります。新大陸の發見と同樣に、人間性の發見を文藝復興期がやつた。其人間の腹の中に惡魔性を發見して之を禮讃することを知つたのは最近百年前の事であります。此惡魔詩人の始祖と見るべき英國のバイロンが死んでから昨年で百年になります。人間の腹の中にある惡魔を發見して種々な所に人間の本當の姿を發見しやうと思つてそこらを搜し廻る狀態で、はては原始生活を非常になつかしむといふやうな傾向も現れて來た。即ち吾々が今まで文明として見て居つたものは間違つて居る。原始生活に返へるのが本當だ。總てのものが原始生活を懷かしんで、人間の魂の本當の故鄕は原始生活に在ると感ずるといふやうな傾向が著るしくなりました。餘り人工的な生活をのみしては機械になつて了ふから、吾々の生活を、もつと土の香に親しむ者にして見たい。紐育や、倫敦の如き大都市の生活は、町の中に居ると、土を踏むことさへ全く出來ない。そこで色々な工夫をして、田園に懷しんで見たり、少しでも安易の生活を得たいと切に求めるのであります。要するに斯うやつて人間性の自由解放、或は人間性の眞實に徹して見たいといふ努力が、煎じつめた所つまりリアリズムでありま

す。此リアリズムといふ考方は何も新しい事ではなく、開闢以來ある考方であります。近世の文藝は斯ういふ意味に於て、人間性の眞實に徹し見失なつた眞の人間生活の姿を見ようとする點に於て、最近百年以來の文藝をリアリズムの文藝と云つても宜いでせう。

リアリズムといふ言葉はいろ〳〵に解釋されて居ります。是は解釋次第でありますが哲學の方で言ふリアリズムはもつと異つた意味を有つて居る。リアリズムはプラトニストの學者に言はせますと、吾々の感覺の世界に人間の本當の姿は在るのではない。魂に於て、目に見えざる世界に人間の本體を捉へるのがリアリズムであると云ふのです。また英文學で使ふリアリズムといふ語の意味は、事實を書くものである。何でも事實らしく書くと云ふ事なので、先程芥川さんから御話もありました英國十八世紀のデフオーといふ人が此意味のリアリズムの元祖になつて居ります。そんな風にいろ〳〵な意味もありますが、本當に一番廣い意味で言へば、文藝上のリアリズムとは失はれた人間の眞實性を把握し恢復し度いといふ努力だと云つて宜いと思ひます。十九世紀以來いろ〳〵の事を皆が案じたけれども、結局唯物史觀等の考へ方も、あれで結局は人間へ還らうといふ一つの努力に他ならないのであります。

つまり人間性はいろ〳〵なものがゴチヤ〳〵に混つて居る。其中から何とも言はれない味が出る。その無限に深い味ひを味はうとする努力が文藝なのであります。經濟とか、道徳とか、さう云ふ部分的でなしに全體として人間生活の眞をつかまへやうといふ事であります。此永久なる人間性といふもの、一體人間の根本は今でも昔でもちつとも違つて居りませぬ。よく歐羅巴の文明は進んだといふけれども、希臘の文明より今日の歐羅巴人は人間としては一歩も進んで居らないと斷言する人もあります。或はさういふことも言へませう。人間性といふもの〻根本はちつとも動いて居ないに拘らず夫れがなか〳〵捉まへられないのです。詰り吾々は厚化粧をしたやうな者で、生地の肌の美しい良い所は化粧品で塗りつぶして了つたのです。是は今日の御話に關係はないが此厚化粧は人間の生活としては間違つて居ります。だから厚化粧の法則

や因襲を皆削つて素肌になることですが、それは實際には出來ない。文明の生活をしてからは、もはや野蠻な原始生活には戻れない。大學まで行つた者に今さら幼稚園の頭に還れと云つても、それは出來ない事です。細く申すと面倒であるが、化粧といふものは人間性の生地の美しさを發揮する爲めの化粧でなければならぬ。文明も化粧も厚化粧のやうに人間性の眞と美とを滅却したものでなく、寧ろ此眞と美とを十分に發揮する爲のものであらねばならないのです。

さて人間性の眞と美とは研究したつて、解剖したつて解るものではない。人間の頭や理窟では解りつこない。人間性全體として文藝の鑑賞の前に之をば持つて來るより仕方がないのです。

私は一つの譬としておでんの話を想出すのです。おでんの鍋といふものは熟々考へて見ると汚ないものです。或る處におでん屋がありまして……おでんの講釋をするのは可笑しいやうですが、鍋が餘り不潔なのを見て警官が來てお前の鍋は何時洗つたのかと尋ねましたところ、實は親父の後を繼ぎましたが此の鍋は四十年來まだ一度も洗つた事がありません。と答へました。しかし鍋の底からねこそぎ洗つて了つては、味の素を入れたつて却々、あの好い味は出ないものであります。醬油や、蛸の足や、芋のへたや色んな物が溜つてそこに味の素や、ビタミンだけでは追付けない味ひが出來る。其中から法則を出して見る人も、經濟上の問題を出す人もありませう。蛸の足を引張り出すのも、醬油のカスを引張り出すのもあらうが是は全體として味はゝなければならぬ。是は科學的の分析をしても解りませぬ。芋や蛸があつて甘さうですな、けれども汚ないものに違ひない。道學者先生といふものは恰度鍋を洗へといふ警官のやうなものです。鍋の中には人間の獸性とか其惡魔性とかいふ汚いものが澤山溜つて夫れから其甘味が出るのです。驚くべき複雜なものです。或る時おでん屋の親父が、晩に腹を減らして歸つて來ました。女房に向つて腹が減つてたまらないから何か食ひ物を出せと申しますと、女房が言ふには、お前さんが賣つてるおでんを食べれば宜いぢやないかと言つたところが、何であんな汚ないものが食へるかいと言つたさうです。成程汚ないに相違ないが、それを人には食はしてゐるのです。この頃私の顔を皆さんが

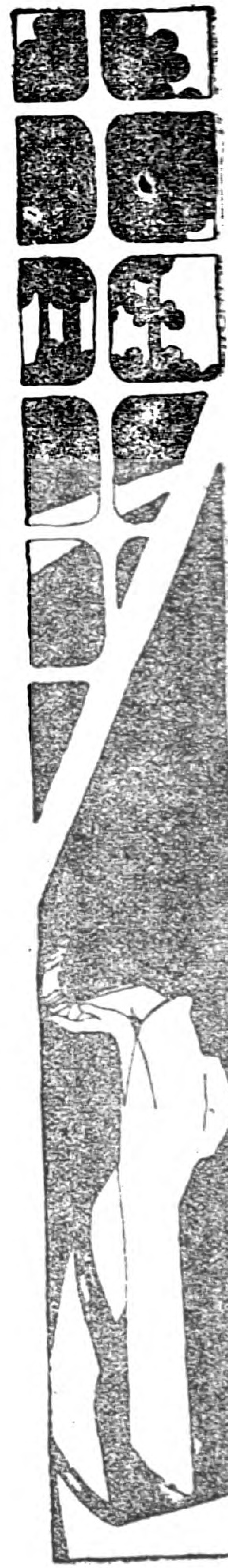
御覧になると、すぐに戀愛問題のことを論ぜよと申されますが、私は戀愛のことを一寸申して置きます。戀愛だつて矢張り人間性の至高の發現ですから、おでんの様なもので、吾々の人間性が全的に活躍して居るのだから其中をほじくつて見れば性慾だの何だの種々な者が出て來ます。要するに、おでんは甘いものです。それを幾ら論じたつて始まらないから私は論ずる事は止め度い。つまり人間性といふものが、一番正直にありの儘に出て居る現象として、私はおでんを例に取つてもさう無理はなからうと思ひます。詰り全的に人間性の眞實に徹しやうとするのがリアリズムであります。

『近頃問題になつて居る事を玆に一言申添へて置きたいと思ひます。この頃ブルジョア文學といふ事がよく論ぜられる。一體ブルジョアといふ外國語の意味は、日本では金持といふ意味に使はれてゐる様だが、それは誤だと思ひます。たとひ經濟學上や、社會學上の意味から申しても、ブルジョア階級といふ事は所得の種類に依つて定るので、貧富とはおのづから別問題です。佛蘭西語にépater le bourgeois 即ち「ブルジョアをやつつける」といふ慣用の句があつて、是なぞは決して有産階級だの資本階級だのといふ意味に用ゐて居るのではありません。ブルジョアとは、英語で申せばミツドルクラスに當る。一體ブルジョアは語源から云つて「町人」のことであります。現にロダンの作品『カレイのブルジョア』の題は市民といふ程の意味に他ならぬのです。英國で申すとミツドルクラスは上品な紳士といふやうな御上品振つて居るものを呼んでブルジョアといふのであります、勿論資本家階級のやうな所にはどつさりそんなのが居るには相違ありません。しかし無産階級にも此ブルジョア先生は居ります。だからさういふ意味でブルジョアといふ言葉は昔から使はれて居るのです。つまり人間性の眞實といふものを逸して、いやに取澄まし取繕つた虚偽因襲で固まつたやうな連中を名付けてブルジョアと申すのです。無産者有産階級といふやうな事とは話が違ふのです。經濟學上のみの用語例から言へば、いざ知らず、普通の用例、ことに又私達文藝の方から言へば、人間性の眞實を逸して平氣な奴、それを名付けてブルジョアと申すので、人間性の眞實をつかみたいと努力して居るものが、是れに對立される譯であります。勿論此分類も、經濟學上の

分け方と交錯し、絡み合つては居りますが、言葉の眞義は此點にあるのです。たとへばセイクスピヤの藝術は人間性をば本當につかまへやうとした者であります。近頃は時々惡評を受けて居ますが、此大天才が描き出したものは、人間性――即ち永久的な、根本的な、本質的な、そして經濟上の階級などに關係のない人間性であります。セイクスピヤの文學はブルジヨア文學か、プロレタリア文學かなどといふ分類をすべき物でなく、唯だ眞に人間的なものであります。見方に依てはプロレタリアトでもあり、又見方に依つてはブルジョアとでも見えませう。處が此間或る書物を見ますと、勞農露國政府の文部大臣が、態々ハムレットを演らして、勞農氣分に直してやつて居る。ポロニアスにロイド・ジョオジ一流の俗物性を當嵌めて演出したやうであります。つまり沙翁劇には根本に人間性の活躍があるのでありますから何うにでも演出できるのです。人間といふものは階級意識を離れて存在しないといふ樣な議論も、一應は尤もの樣でありますが、是は少しく別の方面で考へれば誤りは直に知られます。即ち今日我々の一番厄介な區別は階級の外に民族の差別であります。即ち民族意識――之を離れては文學は成立しないかの樣に昔は云つた時代があつたのです。即ち今から百年以前には國民文學を旺んに論じたのであるが、今ではそんな馬鹿なことは誰も申しませぬ。無暗に民族意識の旺んな時には人々が斯ういふ考へ方をしたのです。どこの國人でも民族意識を有つて居ることは いかなる人でも階級を持つて居ると同樣ですが、夫れは全的人間性の一部分に過ぎない者です。私は時々さう思ひますが、階級意識等といふ問題はいろ〳〵に姿を變へて居りますが、人間性の一部分として存在する事は、今も昔も同じなのであります。貧者と富者の差別があれば、弱者が强者に對する反抗心もあるので、それはいつの時代にも階級といふ形に現はれて居ります。たとへば尤もブルジョア臭い文學で、いま市村座で羽左衛門が演つて居ます五所の五郎藏のやうな俠客物は、徳川時代の人間も喜ぶし、今の人間もやはり喜んで見て居ります。詰り横暴を極める殿樣や、武士といふ特權階級に對する民衆的の反抗心があの劇を見て痛快を覺えるからなのであります。抑壓されて居る苦悶が、形を變へて文藝の世界に出るのです。詰り階級鬪爭の問題に性的問題が絡みつき、

を云に時代々々の社會的背景が七重、八重にごんがらがつて、言ふに言はれぬ、おでんが出來上がつてゐる譯なのです。近頃性的生活の描寫を無暗に力を入れてやる事が流行する、佛蘭西では段々忘れやうとして居るのに今頃一生懸命に之をやつて居るのは英吉利文壇の小說であります。それが皆大抵は性的生活と階級鬪爭とを搦み合せてゐる。日本でも丼ういふのが近頃は却々多いやうです。之なども今まで閑却して置いた所のお上品に誤魔化して見たり、自然主義が動物的に描いて見たりして居つた誤を正して、人間性の眞實に肉迫しようとする者です。文學には大昔から性的生活の描寫はありますが、それらは皆巫山戯氣分のものであつた。さりとてヴヰクトオリア朝の美文學のやうに、紳士的のお上品振りで之を誤魔化して居る譯には行かない。人生の本當の姿を描く爲には性的生活は度外して居られないと云ふので、急に此方面に力を入れ出したのであります。其時々々に依て其引掛かる所はいろ〳〵あります。人間性は詰り圓い球のやうなものです。どこか捉まへ所がなければ、つかまへられない、柄の所を持つやうなものです。或る場合には性的生活をつかまへたり、神樣の問題をつかまへたり、道德問題をつかまへたり色々するが、結局は人間性の眞實に徹しようとして永久に努力して居るのが文藝であります。その文藝作品に接し、之を味ふ事によつて其時に人間は最も人間らしい生活をして居るのです。其他の時は動物園の檻の中に入れられて居るやうな者であります。然らば文藝作品によつて何うしたらば此自由解放の境地に往けるかに就ては、私は旣に改造社の雜誌に一、二度書きましたが、それはつまり夢の境地に入ることなのであります。つまり長谷川さんの御話の錯覺ですな。今日の御話は是だけで御免を蒙ります。

——女性改造文藝講演會にて——



有島氏を戀して狂つた女

秦せつを

和子といふ佐賀のある人妻が、十四五年間同棲をした良人に滿たされない苦悶から、憧憬の的を有島氏に見出して、一種の變態的戀愛から氣が狂つたといふこの話は、三月も四月も前に聞かされたものだつたが、生前の氏の惑を考へて憚つてゐた。併し又考へて見れば、この話は氏自身には何のかゝはりもない事件であつて、全然和子といふ一人の女の性格から生れたものであるから、今の世にかゝる一こくな女もあるといふことを書くだけの話である。

何でもそれは今年の二月の初め頃で、汽車の窓々に映る武藏野の山には、まだむら消えの雪が、白い斑點を殘してゐる頃であつた。

午後の薄陽が斜にさしこんでゐる東京驛のプラットフォームから、一人の何となく異狀な面ざしの女があたりの人ごみを押しのけるやうにして開札口へ急いできたのであつたが、人々は別に眼をとめて彼女を眺めるでもなかつた。忙しい自分達の所作を忘れはててまで目をみはる程、彼女は決して異狀でもなかつたし、さほど美しい容貌も持合せてゐなかつた。それでも若し、よつぽど敏感な、或は退屈がつてゐる人があつて、彼女に注意を呼ばれた者があつたとしたら、それはそのバスケットを一つ提げて、空を飛ぶやうに歩く妙に烈しい足つきと、強情で非常識な感じを投げてゐるかと思ふと、全く空虛な光に變る、それこそ異狀な二つの大きな眼と、

三十を五つも六つも越えたかと思はれるのに、大分派手すぎる絹大島の羽織と、着物とが、少し妙だと思はれる位のものであつたらう。彼女の姿は間もなく一挺の車と共に東京驛前から姿を消してしまつたのであるが、これが有島氏に戀して氣狂ひになつた和子が、はじめて氏を訪ねて上京した時の姿であつた。話はこゝからさかのぼらねばならない。

明治四十二三年頃の明治學院出身には、秀才が輩出したさうで、加藤一夫氏や、沖野岩三郎氏なども、その頃の出ださうだが、これらの人々と親交があつて、將來を嘱望されてゐた青年に野原伊勢雄といふ人があつた。伊勢雄はクリスチヤンであつたから、主に宗教方面に熱心な研究を續けて、將來は牧師になる考へであつたが、その半面に文藝に對する愛好熱が次第に高まつて、彼はどうかすると、聖書の代りに、トルストイの小説を耽讀するやうになつた。そして彼の文藝研究の度が深まつてゆくにつれて、伊勢雄の心の底に次第に培はれてきたのは自由思想の肯定であつた「信仰とは、社會生活に對する自己の立場を餘儀なくされることの意識なり。」と言つたトルストイの言葉などは、新らしいものを築く意味にも、舊いものを破る意味にも、彼の心に烈しい動揺をもたらしたが、その一方に、社會主義的思想の影響も受けて、眞面目な青年の誰もが一度は通らねばならない思想上の動揺や、混亂の中を、伊勢雄は眞劍に泳ぎ廻つたのであつたが、彼が最後に到達したのは、絶對無抵抗主義の境地であつた。そして今でも彼はさうであることを、最初に斷つておかねばならない――。

明治の四十何年頃であつたらうか。伊勢雄は卒業前の一夏を、夏季傳導のために肥前の島原へ出かけていつた。噂に聞く島原は、昔から波の青い、鷗の白いところだが、その島原にやはり昔からある有名な××といふ船問屋があつた。幾代となく引續いてきた老舗であつたが、先代の主人が亡くなつてからは漸く家運も傾きかけてゐた。ところが運命か偶然か野原伊勢雄が宿づけられたのは、この××といふ船問屋であつて、問題の和子といふ女はこの船問屋の三番娘で、その頃東京へ出て、某女學院へ入學してゐたのであつたが、夏休みがくると共に、飛ぶ鳥の思ひで父親の膝下（彼女達の母はなくなつてゐた）へ歸つてゐたのである。その頃和子は二十になるかならぬ娘盛りであつたし、汐つぽい海風の吹く町では、何處か都なれのした彼女の派手好みは一寸人目をひいて、際

立つて見えた。美しいとは云へぬ面だちではあつたが勝氣と意地と虚榮の象徴のやうな大きな眼は、たつぷりした黒髪と共に、世の常の若い男の胸にしのびやかに喰ひいるだけの印象的なものを持つてゐた。

　佐用姬が石になつたといふ領巾振山で、ギラギラと瞼に痛い眞夏の日光をさけながら、彼女と伊勢雄がはじめて戀の抱擁をするやうになつたのは、伊勢雄が島原へきてから廿日も經たぬうちであらう。かうして島原の夏は、彼と彼女を結びつけてしまつた。休みが終ると、二人は相携へて上京し、夢のやうな同棲生活を始めたのであるが、そのうち伊勢雄の卒業期日も漸く迫つてきた。卒業後の方針を確定しなければならぬ時がきた。彼は將來牧師として身をたてるつもりだつたのである。ところが、卒業間際になつてから、彼のやうな無抵抗主義は、當時の教會では到底容れられないものだと分つて、破門を命ぜられることになつた。併しどちらかといへば、將來文壇に立ちたい希望を内心に持つてゐた伊勢雄は、寧ろそれを喜ぶ風で、志を決して、佐賀毎日の新聞記者となり、生活の第一歩を踏み出すことになつた。因襲に捕はれた當時の教會については、彼自身既に見限りをつけてゐたのである。一方和子は、良人の伊勢雄はゆたかな藝術的天分を持つてゐて、將來は必ず文壇に高名を馳せるものだと獨斷してゐたのであるから、將來の日のために熱心に伊勢雄を激勵しながら經濟上のあらゆる屈辱に堪へても、良人の讀む書籍だけはあつめてみせるといふ風であつた。

　伊勢雄はよく讀み、よく研究をしたが、彼の根本思想は無抵抗主義であつたから、志を文藝に持つてゐると云つても、功名心などは、露ほどもなくて、たゞ主義の實現に努めてゐる温良な人格者であつた。一方和子は、白熱的な愛を良人に注いではゐたが、彼女の心臟に光つてゐる磁針は、領巾振山ではじめて愛の抱擁をした頃から、決して一つの方向を變へようとはしなかつた。彼女は伊勢雄といふ人間よりも、伊勢雄が將來に必ずさうなるであらうと信じてゐた社會的地位に對して焔のやうな憧憬を懷いてゐたので、その憧憬が、やがて戀の焦點に變つたのであつたから、良人を激勵する和子の聲は、止み難い彼女の對世間的な欲望からほとばしり出る唯一の念願であつた。要するに、自己滿足を得るための愛であつたが、その念願は良人の主義や、性格に容易に反撥することの出來るものではなかつた。伊勢雄の絶對無抵抗主義は、最早外部からは針をいれる隙もない程、彼自身のものになりきつてゐたのである。動かさうとしても動かすことの出來な

い一つの塔の前に立つて、白い腕を高くのばしながら、その塔を撫でたり、すかしたり、怒つたり、喚いたりしてゐた一人の女は、とう〳〵ヒステリックに肩を振はせながら泣きじやくつてしまつた。和子がまるでいたづらな小娘のやうに、一圖に奔放に、無抵抗主義の良人にぶつかつてゆく姿は、或時は始末におへない駄々つ子のやうでもあり、或時は淺魔しい鬼女のやうにその額が執念深い光りを放つた。彼女の心に巣喰つてゐる恐ろしい性格の獸に憐憫の情を持つだけの大きさを知らない周圍の人々は、和子のがむしやらをしきりに奮激してやまなかつた。さうするうちに彼女の焦躁は次第に常軌を逸してきた。そして誰彼と心の中に、今の文壇にときめく人々を物色しだしたのであつたが、彼女の理想にその時ぴつたり符合した人を有島氏に發見したのである。その頃から和子は良人の野原を、有島氏に近づけるやうに有島氏のやうになるための努力を強いるやうになつたのである。

大正二年頃のこと、伊勢雄は肺病をわづらつて、長い間病床に臥つたことがあつたが、その間、寢食を忘れたやうな和子の看病ぶりは、傍の人々の涙を誘ふものがあつた。海氷の張る寒い冬の晩にも、彼女は着のみ着のまゝでぢいつと良人の看護に堪へてゐた。併しそれも、伊勢雄の病氣を回復させて一日も早く自分の理想に近づけたいといふ一念から出たので、病が快復しても、一向變らない良人の心が分ると、彼女は一層狂暴になつて、時には良人の體に腕力をふるふやうなこともあつた。それと共に理想の有島氏が愈々なつかしくなつて、有島氏と一緒にさへなれば、苦勞をしなくても理想は實現されるのだと考へるやうになつた。今年の二月廿日頃のことであつたが、彼女はヒステリーが高じて、手のつけやうもない狂暴を振つてゐるかと思ふと、いつかしく〳〵と泣き出すといふ風であつたが、ふつとある時ヒステリーを起しながら伊勢雄の机の上を見ると、そこには偶然有島氏の本が一冊載つてゐた。和子はいきなりそれを手にとりあげて、頁を繰つてゆくうちに、今まで血走つてゐた眼が急に陶然として、歪んでゐた唇に、處女のやうな微笑が浮んできた。そして頸をかしげてゐる彼女の眼の前を不思議な色をした妄像がしきりにちらつく。二分……三分……和子はとうとう正氣を失つてしまつた。同時に彼女の頭には急に輝くやうな神の幻像が浮びあがつてきて「有島氏と一緒におなり。」と、しきりに呼く聲がどこからともなく聞えてきた。「神のお託宣！」彼女はいきなりさう思つていそ〳〵と良人の傍へ近づいていつた。そしてさすがに言ひにくさうに、口ごもつてゐ

たが、とう〳〵言葉をきつて言ひ出した。

「伊勢さん。あなたと私とは十幾年も御一緒にきましたわねその間、私出來るだけのことをしてあなたに盡しましたけど、やつぱりあなたは私の良人ではなかつたのですわ。一層お別れしてしまひませう。そして私は東京へゆきます。その方があなたの御幸福ですし、私のためにもなりますから。」

伊勢雄は驚いて彼女の異常な表情をみつめたまゝじいつとして動かなかつた。彼は十幾年の夫婦生活の間に、自分の思想や性格とは、到底相容れることの出來ない和子に對していつとはなしに愛情を失つてゐたが、たゞ分別のない可哀さうな女、我とわが激しい性格に自己を滅す氣の毒な女として同棲生活をつゞけてゐたのであつたから、彼女に對して妻としての未練は持たないまでも、憐憫の情は心の底からつき上つて來た。

「お前が別れたいといふのなら、別れてもいいが、ここを去つてゆくお前が幸福になれようとは僕には思へぬ。何處へ行つてもきつと行きづまるのだらうから。東京なぞへ出かけるのは暫く見合せたがいいだらう。しかし、お前が無理にも出かけてゆくといふのなら行つてもいいが、行きづまつたらいつでも歸つておいで。妻として一生かばつてあげるからね。」

青白い頰に血の氣をはいで、せか〳〵と、急に元氣づいて來た和子がどうしても出かけようとするのを、彼は無理にもおしとめようとはしなかつた。そしてある三日月の晩に、ありつたけの金を彼女の手に握らせて、伊勢雄は片手に荷物を片手に貰ひ子（和子の姪であつた）のお藤の小さな手をとりながら、妻の和子を佐賀のステーションへ見送りに出た。お藤は血緣の和子とはまるで情愛がなかつたが、伊勢雄に對しては肉親の父にも見られない程、非常に親しんでゐた。その夜は月が青白く光つてゐて、何處からか梅の香などが早春の風に送られて來たが、何とはなしに話のしたくない物寂い晩であつたと見えて、寂然したプラットホームでも、汽車を待つ薄暗い人影は、ジイツとして多くを語らなかつた。

「それでは行きづまつたら何時でも歸つておいで。」

伊勢雄は窓から荷物を運んで、汽車が動き出してしまつてからも、暫くお藤をだいたまゝ突立つてゐた。一方和子は、一日半の汽車の旅の中で、狂亂に近い、自由な幸福感に浸りながら、一つ一つの物思ひは、虹のやうな空想の翼をはやしながら、乘客の頭の上を越えて、窓の外へと無盡に飛んでゆくのであつた。その中に有島氏の大きな像が、ひとり神のやうに厳かに、慈み深く彼女の眼の前に立つてゐたであらう

ことを私達は想像できる。

麹町の有島邸の應接室に通された和子は、薄暗い草色地の壁をぼんやりみつめて立つてゐるかと思ふと、玄關の方をそつと覗いてみたり、又椅子に腰をかけたりして、キヨトキヨトして落着かなかつた。そこへ有島氏がはいつてこられると、和子は凝と氏の顔をみつめてから慇懃に一つ頭をさげて一面識の挨拶をしたのであつたが、そのあとからいきなり氏に向つて、

「あなたは靈通をお信じになりますか。」と言つた。有島氏は變な女だと思はれながら、

「いや信じません」と答へられた。それから氏と和子の間には次のやうな會談が交された。

「でも何か、神のしらせがありませんでしたでせうか。」

「何もありません。しかしそれは一體どういふことですか。」

「實は私に神の啓示がありまして、あなたと結婚すれば幸福だとの神樣のお告げでございました。そしてこの啓示はたしかにあなたのところへも神樣からあつた筈でございます。ですから私と結婚して下さい。」

有島氏は驚いて、自分には神の告げも何もない。若しあつた假にあつたとしても、自分はまだ先妻に對する愛着から離れることが出來ないから、あなたばかりではなく、結婚について考へたことがないから、その誠意は感謝しますが諦めて歸つて下さい。と悟されて歸されたのであつたが、和子は、非常に失望して有島家を辭してから、昔の友や、舊師の許を訪ねて、寄寓を求めたのであつたが、彼女の强情と獨斷は、方々であまりよい印象を蒔いてゐなかつたと見えて、到る處で斷られ、おしまひに赤坂の加藤一夫氏の親戚に寄寓をするやうになつたのは三月のはじめ頃であつた「何の用事にいらしたのですか。」と尋ねる者があると、彼女は「たゞ遊びに。」と答へるのであつたが、逢ふ人毎が彼女の態度の異常を認めて、「ほんとに、どうなすつたんですか。」と重ねて聞けば、「目的があつて來たのよ。」と言つてゐたさうであるが、その間も有島氏の許へは、始終訪ねてゐたやうである。併し氏の言葉はいつでも「先妻に對する愛着があるから。」の一點張であつたので、和子の失望は一日〳〵と加はり、一日〳〵と狂つていつた。狂つてゐるかと思ふと一時は明るい天氣のやうにがらりとしてゐるのをあきらめたのではなからうかと思はれることもあつたが、それは氣狂ひになる一つの過程にすぎなかつた。烈しい失望落膽と共に、救ひ難い深みへ彼女は次第に

狂ひきつてしまつた。そして有島氏に對する淺墓な怨言を口走つてゐることもあつたが、さうかと思ふと神樣一人を味方にして頼らうとするしをらしい氣持が彼女の心を靜かにする時もあつたらしい。實際神樣はいつも彼女の前に現れてくるやうであつた。神の幻と彼女は、よく話を交してゐた。流れるやうな午後の春陽をあびながら、櫻の花がちら／＼と淡紅色に散りかゝる淸水谷のあたりを、高下駄をはいて狂ひ歩く彼女はよく神樣と話しあつてゐた。年には派手な絹大島の羽織（彼女は何でも中途半端が嫌ひであつた。だから着物でもまがい物は絶對に嫌ひだつた。）をひら／＼させて春の街を歩いてゆく彼女のあとにはいつか巡査が尾行をするやうになつた。平河町の電車通りに立つてみると、何でも赤坂見附のあたりが下界に見えて彼女は天國で神樣と語つてゐる氣持になるのださうである。或日のこと和子に尾行してゐた巡査が面白半分に彼女をからかつてみたことがあつた。

「あなたは今、どこにどうしてゐるのですか。」

「私はいまね、神樣と一緒にゐるんだけれどまだ／＼下界の一人ですの。向ふを歩いてゐる人々とはちがはない下界の人間ですのに、そして下界を歩き廻つてゐるだけですのにあなた方は失禮な、何をおつしやるんですか。」

彼女のさう言ふ言葉は割合に筋道が立つてゐたので、にせ氣狂ひだらうと云ふ人もあつたほどである。眉の濃い眼附の險しい、色の淺黑い中肉中背の和子が、日まはり色に輝く春の夕陽を眞正面に浴びて、狂ひながら神と語つてゐるうちに、いつかまたその神樣の姿が有島氏の姿に變つてゆくやうであつた。そして有島氏の幻と彼女は空の方を眺めて嬉しさうに話を始めてゐるらしかつた。

「私をお好きでせうか。お嫌ひでせうか。」さう言つて聞くと、幻は何でも好きだと言ふらしく、和子は空の方へしきりとキッスをおくりながら、小娘のやうな恥らひを含んだ口元に、嫣然と一種異樣な微笑を浮べるのださうである。そして朝から晩まで、同じことを繰返してゐたが、その姿になつてからも、和子は幾度となく有島家を訪れて、或時などはすつかりもてあましてしまはれた氏が、附近の宿に泊めて、翌朝歸されたこともあつたさうである。

そのうち和子を圍む人達はとう／＼もてあまして、良人の伊勢雄を電報で佐賀から呼ぶことにした。一ケ月餘りで夫婦は一室に顏を見合せたのであるが、その時、彼女の眼には伊勢雄は何のかかはりもない第三者としか映らなかつたのであつた。

「一緒に佐賀へ歸らう。」と誘へば「私の歸れる家ではありませんから。」と言つてゐたさうである。伊勢雄も、手を束ねてゐるより仕方がなかつたが、彼女は氣が狂ひながらも、良人の人格にだけは伏してゐたやうで、「あれ程人格の立派な人は私まだ見たことがない。」とよく言つてゐた。また、

「伊勢さん、あなたは今、滿足な日を送つていらつしやるでせう。私のやうな我儘者と別れたのはあなたの御幸福でした。でも伊勢さん、あなたはまだ私の我儘に反對なすつたことはございませんでしたね。林檎を一つ買つてきてくれと言へば、いいのを二つも三つも買つてきて下さいましたもの…寢床までものべて下さいましたもの……」

伊勢雄は「あたりまへさ」と答へてゐた。

四月の初めに警察の手を經て、彼女はころ／＼青山の腦病院へ入れられることになつた。そして警察官が迎ひにきたのであるが、彼女はどうしても動かうとはしなかつた。仕方がないから周りの人が靜かに敎へるやうにして、言つてきかせた。

「あなたは今、精神上から言つても、健康上から言つても、人の奧さんにはなれないのですから、有島さんの奧さんにならうと思つたら、一番先に健康を恢復してかからねばいけません。あなたを丈夫にしたいといふのは有島さんの御希望でもあるのですから。」

「それぢやあ、それだつたら行きませう。」

和子は莞爾して肯首いた。その夜、警察からの自動車が迎ひにきたのを、有島氏がよこされた自動車だと思つたものか、彼女は黒髮を美しく束ねて、はれがましい顔附をしながら、青山の腦病院へ移されていつたのである。赤坂見附の落花をふみ蹂つて走る一臺の黒い自動車の幌にしと／＼と春雨の音がしてゐた。

波多野と實子の結婚まで

山崎辰吉

波多野春房氏は、秋子夫人より一足お先きへ自殺すると稱されたが、自殺するどころか、秋子夫人の自殺早々新橋藝妓として、そして名持藝妓として知られた實子と再婚説が立つた、それは事實らしい。その告白的の徑路を一先づ紹介する。筆者は波多野の近狀を尤もよく知悉せる人である。それで此一文と「泉」の終刊號足助氏の論文と對照して讀んで貰ひたい。（編輯者）

總ての事に對して純眞であり嚴肅だつた人格は、既成の法律道德宗教などと言つた、内的に、又は外的に、人類の行爲を羈束する敎條の外にあつて、其の作品を通し、强い〱力をもつて、私共青年子女の精神生活に或る一つの何ものかを與へてゐた有島武郞氏が波多野秋子さんと輕井澤の山莊で一緒に其の生命を絶つた事件は、それだけ社會各種の階級に各種の或何ものかを與へた。そして武郞氏と秋子さんの死因は歡喜の極致だと讃美する人もあれば、不義の當然の歸結だと冷笑しないまでも醜事實だと一概に定め込んで了つた人もあるに違ひない。兩人の心情は兩人より外に知る事は出來ないから、果して兩人が何故ア、まで早く死んだか？については誰も本當に判らない、從つて兩人の死に對して、世間では未だ何等纏つた觀察、輿論と言ふ樣なものがない。從つて最近此の事件に關する世間の傾向を見ると、兩人の關係するに至つた理由の一部を外部に求め、差當り秋子さんの夫波多野春房氏が批判の矢面に立つて色々な批難攻擊を受けてゐる。處女が情夫を拵らへた罪の一部が家庭にあると同樣人妻が他の男と通じた責任の一端が本夫にある事は事件其の物の性質上已むを得ない筋合である。

私の知つてゐる秋子さんは、簡單に言へば『美人』であつた。凄い程鋭い光のあるパッチリした眼鼻筋のよく通つた、そして引締つた口元、スラリとした身作りは二十五六才位としか思はれない。愛嬌と言ふより威嚴があると言ひたい方だつた。若い男の仲にあつても別に羞む風もなく、颯々と大抵の事はやつてのけた。自分の持つてゐる絹半巾で鼻をカンで

夫春房氏の机上に放り出し、『秋子コレはどうしたんだ』と言はれて『一寸其處に置いたのです、貴方お湯に入つた時でもいゝから洗つて置いて頂戴』なんかと平氣で、しかも無邪氣に言つのを聞いたが之から見て、春房氏との間は兎に角情緒最も濃かなものがあつたに違いない。でなければこれだけの我儘めいた事は言はれない譯である。秋子さんは春房氏の許で何一つの屈托なく、大抵の氣儘は叶へられ伸々と成長した、此の美しい性質が社交上對手の者に何となく人なつこく柔く感ぜられた有島氏も秋子さんの力があり且つ柔い伸々した此の性質に引付けられたのではあるまいかと思はれる。秋子さんと結婚するまでの春房氏は、金髪美人と關係したとか、男爵の娘日置安子と同棲して捨てたとか、女優K子と深い仲で、今度も秋子さんの後釜にはK子が据るんぢあないか、などとまで隨分艶聞があるが結婚後の春房氏は『滿腹の熱愛を秋子さんに濺いで來た。』と春房氏自ら話してゐる。又『秋子は私と離れて一人では決して生きてゐられる女ではない。』と、悪くとれば自惚としか思はれぬ様な事でも眞面目に語つたこれなどから考へると餘り秋子さんを愛しすぎて、夫として妻に盡すべき道を誤り、其處に秋子さんの不滿が萌し、『波多野は夫としてより父か兄に對する様な氣がする。』と言つた言葉が出たのかも知れぬ。早く言へば嬶天下で秋子さんは春房氏に過ぎた妻であつたか、さもなくば春房氏がそれ程までに愛してゐた秋子さんが、今更有島氏に走つたのは彼女が節操觀念に乏しかつたに因るのである。

六月四日の夜夫の留守中の秋子さんが外泊した事は、翌五日大阪方面から歸つて來た春房氏が周圍の者から聞いて知つた。

『扨何處で泊つたらう?』春房氏は一縷の不安と不快に惱まされ、ソレを衝止めるべく諸方面へ聞合すなど大分努めたらしい。しかし一向判らないので五日の夜、勤め先から秋子さんの歸るを待つて『貴女は昨晩何處で泊りました。』『誰と一緒です?』『肉體の關係がありましたか?』秋子さんは『濟まない。』と思つてゐる矢先に夫春房氏からコウ尋ねられる儘、涙ながらに一切の事情を打開けて、『どうか私を離婚して下さい。』と泣き伏した。當時の新聞は『春房氏は其の晩催眠術をかけて秋子さんから秘密を知つたとか、秋子さんが夫の以前の非行が識つてゐる其雜誌記事をつきつけて、反抗的に離婚を迫つた。』と報じてゐるがそれは明瞭でない。

有島氏と秋子さんの秘密の一切を知つた春房氏は、『他の男と一緒に外泊した事は敢て私は構はない。しかし肉體的關係

までであっては此儘默つてゐる譯には行かぬ。』と秋子さんに對して夫として執るべき道について考へたのである。

越えて六月六日午前春房氏は例の通り丸の內海上ビルデキング內三階にある、日本聯合火災保險協會事務所へ出勤し、電話で有島氏に『是非來て頂きたい』と來訪を申込んだ。十一時頃有島武郎氏は約束に依つて保險協會にやつて來た。(有島波多野兩氏の對談)

『私が有島です』と武郎氏は一葉の名刺を出した。

『ドウモ御呼立してすみません、私が波多野です。』初對面の挨拶が濟んで波多野氏から口を切つた。

『今日は貴方に大變イヤな事でお話致したいと思ひます。』

『私も是非共一度お目にかゝりたいと思つて居りました。』

『茲では具合が惡いでせうから。』と兩人は立つて別室へ入つた。再び波多野氏から語り出した。

『私は一切の事は昨晩秋子から聞きましたからよく知つてゐます。今日は秋子と貴方との關係については何事も聞きません。只一昨晩貴方は私の家內と一緒に船橋でお泊りになりましたですか。』有島氏は兩眼に淚を湛へつゝ『泊りました。』と答へた。『私は秋子を今日限り離婚しますから、是非貴方は秋子を引取つて入籍して頂きたいと思ひます。』

感慨無量の有島氏は、只低頭して淚ぐんでゐるのみ。其の返答に逡巡してゐると有情か無情か春房氏は一段と聲に力を入れかなりキツイ追窮をした。

『有島さん、貴方は人の妻を玩具にしたのですか。』

『妻を奪はれた男が、潔く其の女を進呈するから入籍して引取つて貰ひたいと言ふのに對し、何故默つてゐるのですか』

『入籍出來ないのですか。』約三十分に亘り一言半句の返答もせずに瞑目してゐた有島氏は、淚の聲を締つて『承知致しました。』

春房氏は言葉を柔げて更に『しかし今直ぐ秋子と同棲されてはお互に迷惑です、姑く月日が閱つてからにして下さい。秋子は今日直ぐ離婚します。ドコか適當な處へ間借りでもして時節の來るのを待つ事にしたらいゝでせう。』と、有島氏も此の旨承知した處へ秋子さんがやつて來た。春房氏は秋子さんに對し、今迄の有島氏との對談の模樣を語つて、『貴女は今日限り離婚します。今晚はモウ私の宅へ歸らなくてもよろしい。そして今後貞淑な有島夫人となつて有島氏のために盡して下さい。』と最後の宣告を下した。恰度晝食頃になつたので一通り話に諒解の成立した三人は笑つて食堂に入つた。食堂から出て來て雜談中突然有島氏は、『秋子さんの離婚と入籍とは二

三日待つて頂きたい。そして今晩もどうか秋子さんを一緒にお宅へ連れて歸つて下さい。』と言出した。春房氏も『今直ぐと言つても有島氏の方の都合もあらうし、自分も離婚手續を調べなければならぬので話しさへ解決つけばそれでよいからと言ふ譯で承知し『今週中に離婚の手續が出來る樣にして下さい。』と附加へた。恰度此の六日は金曜日で、あと土曜、日曜と二日しか其の週がない、兩人が縊死した六月八日は、與へられた『今週中』が終り春房氏の方で離婚の正式手續を履む日なのであつた。六日の夜春房氏と秋子さんは別々に夕飯を食べた後、秋子さんは自分の道具や書物を整理した。春房氏は秋子さんに『人は死ぬ其の時まで職務には忠實でなくてはいけない。コンな事があつても雜誌の方を休んではいけない。』などと言ひ聞かした。七日は氣拙いながらも事なく濟んだ。八日は日曜日だが秋子さんは雜誌の方が忙しいからとて出社した限り十二年間連れ添つた夫春房氏の許へ戻つて來なかつた。かねて豫期した事とは言へ春房氏は『愈秋子も死んだ！』『自分も愛人秋子を失つては！　不安と失望と寂寞とが一時に胸にコミ上つて苦しい一晩を明かした。九日早朝各方面の心當りへ秋子の行衛を問合したが更に手掛りがない。只有島武郎氏も同時に行衛不明だと言ふ事だけ判つたので有島家の人々と協力して『確に死んでゐる』と豫期しながら一ケ月に亘つて極秘裡に捜索したのである。不安と失望と孤獨の寂莫に一ケ月の間惱まされ、忘れんとして忘れられず、亂ささらんとして亂された春房氏の情緒は强いて忘れしむべく春房氏は自分を鞭撻して面倒な保險率改正の數字作製と其の訂正に着手した。春房氏はそれから毎日の樣に算盤を片手にペンと帳簿を前して七面倒臭い統計から率の割出しに沒頭した。出來上つたのは事件が發覺した少し前で、百頁餘りの計算書に二箇所程の誤りがあつたのみで春房氏は『自分はア、したドサクサ紛れの時でも、割合に理性は紊さなかつた。冷静だつたので誤りが少なかつたんだ。私は私の理性のよい試驗をした。』と語つた。それも見方によれば、皆が一生懸命捜索に飛廻つてゐるのにそれは餘りに冷静すぎると言へば言へない事もない。

春房氏は、『秋子が有島氏の家に行き三人の遺兒の母としてやつて行く事は、今迄家を外にして自由に出歩いてゐた秋子には到底出來るものでない。又有島氏も人格者として、親兄弟の手前もあり、三人の子の手前もある事とて、人妻だつた秋子を入籍して同棲出來たものでない。入籍を迫るのは有島氏が最も苦痛である事は判つてゐた。今になつて思へば武郎

氏と秋子が八日の夕方、恰度離婚手續の前日家出し死をあんなに急いだ有力な原因は、有島氏が入籍問題に衝突して思案に暮れた結果ではあるまいかと想像される。』と語り、更に『有島氏の私に對する遺書を見て始めて、同氏があれ程まで綺麗な心持の人であつたとは當時思はなかつた。有島氏の遺書にある樣な心持が最初から私に判つてゐたら、私は秋子の入籍をあんなに强硬に主張するのでなかつた。他にモツト好い解決方法を執つたかも知れない。ソウすれば有島氏も秋子も死なずに濟んのだかも知れない。』と今更後悔したらしく八月三日私が春房氏を訪問した時も愚痴つてゐた。

『では六月六日事務所で有島氏とお出會になつた時、何故あれまで强く秋子さんの入籍を主張し、多少禮を缺くと思はれるやうな詰問をしたんですか』と質問すると春房氏は次の樣に語つた。秋子は十二年間私の妻として互に愛し合つて來たが、他の男と關係しても構はぬ譯には行かない。當然離婚すべきである。しかし秋子は私の家を出たら此の廣い世界に行くべき家は無い可憐な女である。たとへ妻でありながら外の男と關係したにせよ、永い年月の間、よく貞淑な私の妻としてこまやかな愛を捧げてくれた女である。私も又愛して愛して愛し拔いた女である。此の可憐な秋子をソレだけの罪で苦後の策もなく一人ポツチで放り出すには忍びなかつた。秋子が若し不貞のために有島氏に走つたとすれば、何時か又秋子が有島氏を捨てゝ他の男へ趨るかも知れない。結局、流轉の未婚婦か賣笑婦にでもなりはしまいかと案じられたので、有島氏の苦しい立場を顧慮する遑なく、專心秋子の身の上のみ心配したからである。と

秋子さんが、行衞不明になつて一ケ月、之れは春房氏にとつてはクライマツクスの時であつた。七月七日有島氏が秋子さんと一緒に輕井澤の山莊で縊死した報を受けた春房氏は、『ヤハリ豫期した通りだ。想像が現實に現はれたに過ぎない。』と追憶の念に胸を一杯にして麹町六番町の有島氏邸へ赴いた。そして女中の八重子さんを遺骨受取りのため輕井澤へやつた。かくして一度家出した秋子さんは、八日白骨となりて戀しい春房氏の出迎も受けず、女中の手によつて寂しく杉並村の元の我家に歸つた。コウした裡にも春房氏は平日の通り保險協會の事務所へ出勤してゐた。九日秋子さんの遺骨は生前アレ程まで愛し合つた夫春房氏邸にタツタ一泊したのみで、又しても女中の八重子さんと秋子さんの幼友達萩原辯護士の二人に守られ、菩提寺である赤坂覺永寺に送られた。寺では波多野家から何の通知もないので知らなかつたらしく、

住職は鎌倉へ行つて不在のためお葬が出來ぬので遺骨は其の儘同寺に預けられた。其の後一向秋子さんの葬儀があつた事を聞かないが、果してドウなつてゐる事やら。秋子さんの遺骨の受取りは愚か、お葬さへやらぬ春房氏は之れに就て辯明してゐる。『秋子のア、した死に面接した私の現在に對し、私の多くの友達でさへ、何と言つて私を慰めてよいか判らないと言つてゐる程で、秋子と私と十二年間の愛の生活の純眞だつた事や、秋子が死んだ後までも私に捧げてくれる愛は、あの遺書の通りである。秋子は亡き今でも靈となつて私を愛してゐて呉れるに違いない。私も毎夜床に付ても、若しや秋子の靈が私の枕元へでも訪ねて來はしまいかと考へては眞暗の室内を見廻して見る。』と『ではそれ程まで愛し合つてゐた秋子さんの事だから一層貴方がお葬もせぬのは變ぢやないですか。』と重ねて尋ねると、春房氏は思ひ詰つてか涙を流し聲を顫はせて泣いた。そして『それ程まで愛し合つた秋子の事だから尚更ソウした事は出來ない。妻を奪はれた私が、社會の大[illegible]問題を惹起してゐる死んだ妻の骨を拾つたり、お葬をしたりして、其の都度私まで問題の渦中に捲き込み、春房がドウしたコウしたと世間に噂を立てられるのは、定めし死んだ秋子の本意でないと思ふ。何もしないのが私を愛する秋子の希望に添ひ私が亡き秋子に對し其の期待に添ふ譯である。しかし一周忌にでもなれば、せめて二人の二歳の時に撮つた寫眞があるからそれでも飾つて追悼會でもしたいと思つてゐる。』と涙を拭いた。噂も漸く下火になりかけた七月の中旬頃、又しても再燃した。即有島氏の個人雜誌『泉』の終刊號に、『春房氏が有島氏に金一萬圓を賠償として要求した』と言ふ意味の事柄を有島氏が六月七日足助氏に話したと當の足助氏が記載したのに始まつた。春房氏は之れを全然知らぬと否認してゐる。其の理由として、私が現在の地位にゐて一萬や五萬の金を妻を奪はれた代償にヨコせと言ひ出せるものか否かは常識上判斷して貰いたい。又かりに一萬圓貰つてそれで得心したら世人は何と言つて私を笑ふか、其の時私は今の地位をどうするか。噂によると最初は七萬圓とか五萬圓要求したと報ぜられたが二度目には一萬圓にそれが減つて報ぜられてゐる噂の出所はどうせ一つだらうが、七萬圓が五萬圓に、又一萬圓に減つて行くのを見ても根據のない事が判る。と三つを擧げてゐる。又有島生馬氏が、足助氏から一萬圓問題を聞かされ、春房氏を訪問した時之れを詰つてゐるに對し、春房氏はやはり『常識上から、そうした要求が出來るか否かど考へて貰いたい』と否認してゐる。しかし足助氏の言つてゐる處に

より、一萬圓を調達するため神戸の原粂太郎氏に急電を發し同氏はわざ／＼上京してゐる點から考へて見ると、春房氏の否認してゐる一萬圓問題は全然何の跡形もない事ではないらしくも思はれる。卽、何等關係のない他の要件で原氏が上京したのに、足助氏がそれを殊更有島氏と春房氏間に起つた一萬圓調達のため上京したのだとは、何がなんでもそんな大袈裟な見へすいた大噓を宣傳したとも思はれないから。其の眞否は別として、事件以來春房氏の處へ數十通署名、無名投書が舞込むそうだ。『貴樣は前半生に於て散々女を弄んだ罪業が今日の當りに報ひられたのだ。之れで思ひ知つたか―』『貴殿は勝手な事ばかり言つて、都合の惡い事は片ッ端から否認してゐる。實に怪しから奴だ。玆十日の間に暗殺するからそう覺悟をしろ―。但し足助を告訴すれば殺すだけは許してやる。』と言つた酷い見幕の脅迫狀が五六通あれば某女からクド／＼と春房氏の前半生を呪い、今日の結果を呪つたのが一通ある。そうかと思へば水莖の跡もやさしく自分の生立ちから素情を述べお叮嚀にも、寫眞までつけた求婚申込狀があつたそうだ。其の他は春房氏に同情を表した女の手紙で取立てる程の事もないが、七月中旬の新聞紙は、秋子さんが死んで間のない昨今、京橋日吉町玉中村の抱へ藝妓僊子事、本名大隅れい子さんが痛く春房氏に同情し、『是非共春房氏を助けてやりたい。』と横田千之助氏に洩らしたのが緣で、横田氏が結ぶの神となり、春房氏はれい子さんと結婚する事になつた。』と報じた。春房氏に聞いて見ると、『其の女は一度も會つた事がないので知らなかつた。處が横田氏から電話があつて宅へ來て貰いたいと言ふので行つて見たら緣談の事だつた。家庭を破壞された私は、もう妻帶する氣もなければ、又其の資格もないので、萬事三越の倉知誠夫氏に一任するから其の方に交渉して下さい。』と返答して別れた。其の後倉知氏に合つたらあの女は充分世の中の裏面を知り切つてゐるし、酸いも甘いも舐めつくしてゐるから、却つてお前の今後のためよいかも知れぬ、適當だと思ふから貰つたらドウだ。との事だつたので、私は貴方の宜いと仰言る方に定めます。しかるべく賴むと言つて置いたので、未だ貰ふとも貰はぬとも自分では判らない。女にはそれから二度ばかり會つたが、ナカ／＼私共ピイ／＼連中の對手になる樣な安ッポイ藝者ではない。多分實現するだらうと思ふ。』

大分お得意然たるものがあつたので、『餘り早く結婚されると又問題を起しますよ』と輕く敬意を表すると、『未だ私には貰ふのか貰はぬのか其の後一向判らない。』と語尾を濁した。

仰んでも續いて新聞紙の報によれば、玉中村の實子さんは、四十萬圓からの大成金で、既にお座敷の方もそれ切り引いてゐるとの事である。

春房氏の方でも『まだ私には貰ふのか貰はぬのか判らない。』とは表面の口實ではあるまいか、それとなく『秋子さんの遺して行かれた品物の處分は』と探りを入れて見た、處が秋子さんの室は装飾を全部取替へ別な道具を配置して應接室に變更し秋子さんの鏡から化粧道具、衣類、寢具、装飾品、書籍等其他總て物の品は、遠方から古着商や古物商を呼び寄せて賣拂ひ、今では何一つ殘つてない。捨て賣り同様で何んでも全部で五六百圓程あつたさうだが、此の金は來年秋子さんの一周忌の費用に充當する心算だと、春房氏は語つてゐたが、コンナ事を書けば口の惡い者は、春房氏は流石商人だけあつて物事に拔目がない。秋子さんの所有物を賣つた金を一周忌の費用の一部に繰り込むなど、全く感心だと言ひ出すかも知れないが事實はそうでもないらしい。尚私は春房氏に對し『貴方も言はれる通りだし又、秋子さんの遺書にもある通りだが、二人がそれ程まで夫婦として濃かな愛に生き、純な愛に暮して來たのなら、秋子さんが今になつて有島氏と愛し合つたのはチト不屑ではないだらうか。』と質すと、氏は『私は哲學者でもなければ倫理學者でもない。普通の人である。從つて愛の理論については、いろ〳〵むつかしいことがあらうが、私はそんな事は知らない。只普通に考へて、夫婦の愛がドレ程濃かで純眞であつても子供に對する愛もあり、親に對する愛もある。又友人に對する愛もあれば、動物に對する愛もある。つまり秋子と有島氏との愛は夫婦愛以外の人類愛と見るべきものである』と述べ、更に秋子さんと有島氏の遺書について其の感想を語つた。

春房氏は語を續けて、秋子はたとへ有島氏に引取られ、私の籍を離れて有島氏の方へ入籍しても、私を離れて一日も生きてゐられない女である。私は此の秋子の性質が充分解つてゐた。

從つて秋子は當然早晩死ぬものと思ひ、私も秋子が落付くのを見て一身を處決したいと心竊に決心して、有島氏を事務所へ來て貰つた時、只管秋子の入籍問題を追窮したのである處が、私を最もよく識つてゐる秋子は、早くもそれを感付き、離婚されて有島氏と一緒になり、却つて最も愛し合つてゐた私を殺すに忍びず、武郎氏も又何も知らなかつた私を、自分達の事から殺すに堪へず、結極私を自殺させる前に二人が自殺したのであらう。そして二人共死ぬ時は、必ず後を追

つて私も自殺するものと確信してゐたに違いない。即ち秋子の遺書中に――十二年の永い間愛しぬいて下さつた貴方を殺す事になりました。――又有島氏の遺書中にも――貴方の受けられた傷の一日も早く癒へる樣祈ります――と言つてゐる通り『貴方を殺す』とは私が追つて自殺する事を豫期した文字通り、私を殺す意味の言葉で、又『貴方の傷の癒へる日』は有島氏から言へば其の通りかも知らぬが、私が受けた深傷が癒へる日は即ち私の自殺した日である。有島氏が生前私と親友であれば、又少くとも事件の發生以前に眞心を吐露して語り合つて居れば、恐らく今度は三人心中と言ふ事になつたので、只二人のみ先に逝つたのは、思つても思つても返らぬ事である。しかし私は決して自殺なんかしない、友達も大分心配して私を監視してゐて呉れるそうだ。

少し記事が前後するが最近の事だから事件の經過に從つて茲に書く事にした。春房氏が『一萬圓の要求は嘘だ。』と否認してから足助氏は更に反駁した。六月六日春房氏は有島氏に對し秋子はお前に（有島氏）にやる。併し俺は商人だ。商人と言ふ者は物品を只で提供しはしない。代金をヨコせ、俺には若干の借金もあるし、又外遊したくもあるからそれに相當した秋子の賠償金を出せ、お前は吝だからお前を苦しめるには金を取るのが一番だ、但し一度だけ支拂へばいゝと思ふな、俺は終生お前を苦しめてやるのだ。』と迫り、又、春房氏は六月九日の晩有島氏の末弟行郎氏を中野の自宅に呼びつけ、『俺は借金もあり餘生を外國に送りたいから所持の家屋を賣る。』と言ひ、

『辭表は目下提出中だが、社に永くゐて事情通だから社の都合で未だ退社せずにゐる。』と言つた事があり、行郎氏もまだピン〳〵してゐるから、死人に口無しで誤魔化す譯にも行きますまいよ。』と、それに對する春房氏の辯明は前記の如く、『全くそんな事はない。』と云つておる。今度の事件で、私は何等疚しい事は一點もない。只遺書を見てから有島氏に對しアンナに迄秋子の入籍を強く迫つたのは、本當に有島氏を知らなかつたからだ。アレが死を急いだ理由だと思ふと、殘念で堪らない。又有島氏が『春房氏が秋子は俺になくてはならぬ女だと言はず、お前に進呈すると言つたので、自分の責任が輕くなつた樣な氣がした。』と言つた如く傳ふるのに對し春房氏は『有島氏が私の前で瞑目しつゝ泣いてゐる姿を見て、私は言いたい事は澤山あつたが、茲は自分が男らしく出る時である。私が英雄になる場合である。と考へ、秋子を貴方に差上げます。今までの兩人の關係は一切聞きますまい。と私

はその瞬間に英雄になつたのである。』と全く似てもつかぬ反駁を繰返しておる。

茲に有島氏と秋子さんの行衛捜索中、春房氏と足助氏が裏の掻き合ひをやつた喜劇がある。六月十二日足助氏が大學病院物療第二號室にゐると、原田氏から電話だと看護婦が取次いだ。足助氏は不思議に思ひながら、原田氏は歐洲留學中で、まだ歸朝したとも一向聞かない、妙な事だと考へつゝ電話口に立つと『私は原田ですが凡ての問題は無事解決がついたから、此の事を有島氏の方に通じて貰ひたい。』と言ふのであつた。足助氏は相手の男が春房氏である事を直ぐ感付き『波多野の奴俺が有島氏と秋子さんをかくまつてでもゐるものとでも思つてゐるなア、妙な小刀細工を始めた。諾、それならウンと罵倒してやらう』と言ふ氣持でグン〱突込んで行くと對手の方では直ぐ電話を切つて了つた。對手の男は足助氏の想像通り春房氏だつた。何んでも其の日春房氏は、有島行郎氏と相談して原田氏の名を僞り電話で一芝居やつたのだつたとか。それにしても足助氏が直ぐ僞名と感付いた譯は、それより前の六月九日、有島氏と秋子さんの歸りを前の晩から待ちあぐんだ足助氏と神戸から急電により上京した原枲太郎氏が、之れから一緒に松並村の春房氏方へすわり込んで談判をやらうと言ふ事になつた。しかし足助氏は非常に氣の早い人で、行けば必ず春房氏と一騎打ちが始まるに違ひないと。止める人があつたので、結極原氏が原田氏の名を僞つて松並村の春房氏宅へ出掛け掛合をやつた。其の結果春房氏の方では早速行郎氏と打合せ、先の原田氏の名を僞つて電話をかければ足助氏は必ず有島氏と秋子さんの隱れ場所を白狀するだらうと、前の樣な狂言をやり、裏を掻いて裏を掻かれ其の又裏を掻いた珍談が生れたのであると。(八、五)



世界の獨り旅（一）

在ローマ
本社特派員　大橋房子

あけぼの

熟れきつた線香花火の火の玉を、そのまゝ大きくしたやうな太陽が、天體のひとつとも思へぬほど、無心に、力なく、今水平線を離れやうとしてゐる。水は、湖水のそれよりも靜かに、淡い錦紗のしぼにも似た、かすかな漣を浮べてゐるばかり、船腹に身を寄せる水の背も、なにかにはゞかりでもするやうに、そと、愼みげな身震ひを見せて、あとはそ知らぬ顔を裝うてゐる。たゞその漣を縫うて末ひろがりにうねつて行く鮮かな船の足跡が、そのうねりのはての滑かな水平線を狂はせはしまいかと、私は氣づかはずに居られなかつた。風といふほどの風もないので、頭の上から吐き出された煙霧さへ、流れて行く先を忘れて、オレンヂ色の低空に、頼りなげにとまどうてゐる。映す雲もない水をめぐつて、長い弧形にひかれた霞よりも淡い一線は、もう水平線の向うに沒した何處かの船の殘して行つたものであらう。

いつの間にかその煙りの尾を突いて昇つた――昇りながら無心な童貞の紅を失つた朝日の光りは、さすがに熱帶のものらしく、惱しげな力を加へて來たけれど、船の步みにつれておくれ毛にもつれかゝる柔かな海風は、朝露に潤んだ晩春

の野を思はせるほど、爽かで、冷い。不眠の一夜、……見張りの船員を驚かした夢遊……今も船室のやかましさにゐたゝまれなくなつて飛び出して來たのだつたに、かうして平穩な朝の海に面と向つてゐると、まだ墨の色の乾かぬ筈のそれらの出來事も、現在の自分とは全然係はりのない、遠い過去の追憶の場面のやうに思へて來るのであつた。

「オヤ、お早いんですね。」

　四角い穴のやうな梯子から甲板へ首を出すなり聲をかけたのは、見るからに物怖ぢさせるやうな醜面の事務長であつた。酒と日とに、白人とも思へぬほど焼け爛れたしみだらけの肌の奥で、殊更に白く見える白眼に、見下すやうな愛想笑ひを湛へてゐるのが、私にはよけい薄氣味惡く思はれた。キャビンが喧しくて眠られないといふ訴へが、昨夜既に此の人の耳に入つてゐる筈、と思ふと、なほさら、さうした問題には觸れることなしに、一時も早くその凄い白眼から放たれたい氣持になつた。

「七時前の甲板は、レデイーの來る所ぢやありませんよ。だいいち、靴がたまらないぢやありませんか。」

　愛想笑ひを消したあとの、縮み上りさうに恐ろしい白眼の行く方を、それとなく追うて見ると、なるほど其處には、薄汚れのした更紗や、安繪具を濁したやうな墨色の布で僅かに身を掩うた黒人が、幾人となく、匍ひ廻るやうにして甲板を洗つてゐる。太いホスの先から迸り出る濁水が、もう、私の足先からなにほども離れぬところまで忍び寄つてゐるのであつた。私は、わざと仰山に飛び退く眞似を見せて、快活に、

「でも、日の出が綺麗でしたわ。」の一語を返すと、白い袍服の衿を開いて、傲然反身に歩み去る事務長と、事務長の白眼を避けるやうに、周章て道を開く獸のやうな、奴隷のやうな黒人の群とを見比べながら、深い溜息を洩らさずには居られなかつた。彼等の間には目禮さへも交されなかつたけれど、私は其處に明かに、征服者の被征服者に對する、故知れぬ憤りにも似た、苛々しい虐待慾と、被征服者の征服者に對する不可抗な怖れと反感とが、交互に齒をむき出して敵對し合つてゐるのを見た。何故同じ人間と人間との間に、かうした差別が――かうした暗鬪が行はれなければならないのか。何故ふだんは片影さへ見せぬ黒人達が、船客男女の惰眠酣な早朝に限つて、こそこそと甲板を匍ひ廻らなければならないのか――私にはどうしても解らなかつた。そして私は、やはり、足下に迫つて來る汚水の潮先と、さつき事務長に向けたのゝやうに敵意は含んでゐないながら、何故そんな所に

立ち塞つてゐるのだ？　と、咎めでもするやうな黒人達の深い眸に追はれて、我々淑女の棲家である蒸暑い船室に逃げ込まなければならなかつた。

　開けかけたまゝ止めてある戸を外さうと背伸びしてゐる頭の上に、大きな毛むくじやらな手が、によつきり現れた。首をすくめて見上げると、猫背の船醫が直ぐ背後に立つてゐた。

「アラ！」

「私が開けてあげませう。」

「恐れ入ります。」

「此處があなたのキャビンですか？」

「え、初めは階下だつたのですが、シャンハイからこつち、此のキャビンに移りましたの。」

「他には何誰もいらつしやらないの………」

「えゝ、私一人………」

「一人で一つキャビンを占領するなんて、非常なことです。」

「でも………」と苦情を云ひかけたが、私は、耳の遠い、氣の長い、痴鈍な船醫と此の上話し續けるもどかしさを思ふて、「ありがたう」で語尾を濁しながら、狹い船室の内部に隱れてしまつた。

青年紳士

「僕、此處に掛けてもよろしい？」

　サルーンの一卓で書きものをしてゐるところへ、上海から乘り込んだ新嘉坡行の青年が歩み寄つて來た。廿歳恰好の、瘦せて脊の高い、饒舌な男だつた。

「お掛けなさいとも。」と言ひながら、私はわざといやな顏をして見せた。が、青年は、そんなことには頓着しやうとせず、機敏に卓の一隅を占領して、かさこそと、氣忙しげに手紙立をひつくりかへし始めた。

「ホラ、ひとつ、これは英國のママへ。此の封筒は紙のわりに大きすぎて、ブカブカぢやありませんか。」

　青年は、たゞさへまとまりかねて悩みぬいてゐる私の頭を、滅茶滅茶に掻き亂さずには置かなかつた。

「今度はワイフへ………」

「オヤ、あなた、奥さんがあるの？」

「どうして？　あつてはいけないんですか？」

「なにも、いけないつていふ譯ぢやないけど、まだろくに髭も生えそろはないくせに………」

「ぢや、お話ししませうか。僕達は三年前ホンコンで結婚し

て、さア、三月も開業しましたらうか。それから僕がシャンハイに轉任すると同時に、妻は歸英してしまつた。そして、僕が今度スインガポーアに務めてゐる間に、ワイフはまたホンコンに來ることになるでせう。ことによると、途で逢へるかもしれない……………僕の年？僕は今年二十三です。」

　青年は、鳥のやうに小さな、狡猾さうな眼をむき出して、いたづらに唇を尖らせた。半ばは五月蠅のと、半ばは言ふことが意味を成さないのとで、私は口を噤んで、たゞ呆れたやうに、その小さな茶眼の動きを見守つてゐた。

「ジン、ジイン！　ちよつと此處にお出で！」

　杜絶えかゝつた會話の隙を突いて、折よく通りかゝつた二三才の少女を、青年は大きな聲で呼び止めた。

「こないだね、ジンが何處かに指を挾んだつて恐ろしく泣いてゐたので、僕がこの日除眼鏡をかけて、お醫者さんになりすましてね、たうとう癒してしまつたのですよ。どうです。偉いもんでせう？」

　青年は私を顧みて小聲に囁くと、今度はまた、ジンの大きな灰色の瞳を見下して、

「ジン、さ、も一度をぢさんに指を見せてごらん。」と威嚴をつくつて命令した。

「ジンや、憶えてゐるでせう？　お前を癒して下すつたお醫者様ですよ。ホラ、その痛い痛いのとこを、も一度見ておいたゞき！」

　あとからついてきた母親も、いとしげにジンの肩に兩手をおきながら聲だけは眞面目に叉首をすくめて、私達の方にいたづらな瞬きを送つた。不器量で、世話女房タイプの、しかし夫には氣に入られさうな、三十恰好の婦人だつた。

「どうれ、もう痛くはないね？　ジン！」

　青年はわざとらしく容態ぶつて日除眼鏡を鼻の先にかけながら、半信半疑の眸を一杯に見開いたまゝ、もじもじと尻ごみしてゐるジンの、柔かにふくらんだ、小さい水密桃のやうな手を取つた。

「ほんとにお醫者様だと思つてゐるらしいんですね。」

　私も小聲になつて、半分以上は眼でジンの頭越しに母親に話しかけた。

「えゝえ、ジンは此の先生に癒していたゞいたつもりでゐるんですよ。ほんたうは昨日塗つてやつたメンソランタムがきいたのでせうけれど……メンソランタムといへば、うちの主人は、私を獨りで歸すのを心配して、それは重寶な藥箱をつくつてくれましたのよ。此の前此方に來る時、大變醉ひま

したもので。これは、何から何まで、かはいゝ壜に入つて並んで居るんですの。お目にかけませうか。」

ジンの母親は、申譯ばかりに、大きな上眼で私の意向を窺ふとまぶしげな私達の笑顔には頓着せず、

「ちよいとジンを見てゐて下さいね。」と言ひ殘して、いそいそ階段を降りて行つた。

「ジン、ジン！いゝ子ねえ、手手はもうなほつたの？」

あやし疲れて、其處に擴げてあつた原稿用紙を鶴や蛙に折り變へてゐるうち、私の向う側に小さく腰かけてゐたジンの上半身が、少し右にかしいだと思ふと次の瞬間は、バタリ、ワアッ——堅い床の上に轉つて、裂けるやうな泣聲をはねかしてゐた。

「どうれ、よしよし、先生がついてゐるから大丈夫だよ。」と青年が抱き上げていくら宥めても、ジンはなかなか泣き止まなかつた。其處へ駈けつけて來た母親は、泣き喚くジンをもてあましたやうに抱へながらも、やはり一通りは、繪具箱のやうな黒い藥箱を開いて、如何に夫が細心の注意を以てその箱を用意してくれたかといふことを、とろけかけたドロップのやうにねばりつこい能辯で、說明しなければ氣がすまないやうだつた。

「いつたい、此の船の人達は、兩親共そろつて子煩惱なやうですね。」

ジンの泣聲が階下に消えてから、私は何故か深い溜息をつきながら、青年に同意を求めてゐた。

「えゝ、船の上の人達に限りません。英國人はみんな子煩惱なのですよ。私の目にした支那人だつて、みんな子供には目がないやうでした。日本ではそんなに子供を可愛がらないんですか？」

私はまだ廿歳を出たばかりの、茶氣滿々たる此の青年から、眞面目にこんなことを問ひかけられやうとは思つてゐなかつた。

「え、勿論、日本だつて同じことですわ。たゞ日本では、人の前で、あんまり自分の子供の自慢や、御亭主ののろけは言はないのが禮になつてゐるだけのことです。」

私は少し暗い氣持に襲れて、それきり口を噤んでしまつた。

「あゝ、ゐた、ゐた！あんた方を探し廻つてゐたのですよ。」

白髪半禿のひようきんな老米人が、おでこの眉の奥にいたづらな大眼玉を光らせながら、上甲板から歩み入つて來た。日本なら樂隱居の身を、再度ののんきな世界漫遊に任ねてゐ

るのである。

「奥さんは？」

「うちの奥さん？」老米人は、英國人の極端に忌み退ける鼻聲で、その聲が鼻にかゝつてゐることも、それが英人に蔑視されてゐるといふことも知らぬ顔に、子供らしく說き聞かすのだつた。「うちの奥さんは相變らず本を讀んでゐますよ。あの人は讀みくたぶれるつてことを知らないんですね。初めて私達が日本を訪れた時なんて、妻は日本の歴史とか風物とかに關する書物を五六冊も買ひこんで、何から何までよく調べたものですよ、そして記憶のいゝつたら、……時には案内人を吃驚させる位、何處に何があるつてことをちやんと知つてゐるんですからね。實に驚嘆の到りです。」老人は老人なりに、又、眞顔で老夫人の自慢をしつゞけた。「が、幸せなことには私はうちの奥さんのやうに頭もよくないし、又そんな方面にはあまり興味を持つてもゐない。たゞ眼に映つて來るまゝのものを見てゐるだけでも、旅行中には自然いゝ勉強が出來ますよ。だから私は讀書は妻君にまかせておいて、一日甲板を歩き廻つてゐるのです。それに、船には、あなたのやうに若いレディーが澤山ゐるから……」老人は　たださへ鼻にかゝつた聲を餘計鼻にかけて、白い櫛形の髭の奥で、「ヒヒヒヒ？」と笑つた。その笑ひを突いて　今まで口を噤んでゐた青年が、

「おあいにくさま。だアれもあなたの相手にはなつてくれないでせうよ。」と冷い嘴を入れた。

「ところが、大ちがひ……」

「えゝえ、私にしたつて、お爺さん！あなたには、一番安心してお話しが出來ますわ。こんな不良少年はね……」

「シツ！僕がどんな不良行爲をしました？これでも僕は立派な英國紳士のつもりなのに……」

「とにかく、冗談ばかり言つては　私の邪魔をして……」

「お邪魔になつたのなら御免なさい。しかし、僕だつて年が年中冗談ばかり言つてゐるわけではない。英國人が一度眞面目にかゝらうと言つたら、決してそれを裏切るやうなことはないと斷言して差し支へありません。」

青年は初めて、眞面目な、謹嚴な態度を見せた。

「まア、さう四角張らずに……」老米人がそれとなく笑ひかけた。「明日はスインガポーア！　スインガポーアには御知人が澤山お有りですか？」

「いゝえ、一人も……」

「私はまた、あの、横濱を立つた時のやうに、多勢のお友達が旗でも立てゝ迎へに來るのかと思つてゐた。」老人は銀色の

瞳の奥にいたづらな眼を光らせながら、頑丈な赭肌の片手を、親愛のしるしのやうに、やさしく青年の肩に置いた。「まア、お聞きなさい。私達の船が横濱を出る時、此のお孃さんを、見送りに來たわ、來たわ。みんながなかなか放さないもので、お孃さん、たうとう御飯を食べる暇もなかつたといふ始末でした。ことによると、まだ去りきらぬ人達が、其處らあたりにうようよしてゐるのかもしれない……」

「別に不思議なことでもないぢやありませんか。」

青年は投げるやうに言つて、少し暗い顔をした。

群盲

「ホラ、また、盲目が海を見てゐますよ。」

下甲板の靜けさを選んで、長い膝を机に、獨りペンを走らせてゐる眼の前に、はでなネイヴィー・ブルーの上衣を無造作に片腕にひつかけた例の青年が、あへぎ氣味の暑い息を吐きながら、無遠慮に、大きく立ち遮つた。見るからに精氣汪溢した青年の若さそのもののやうな立像を一撫で見上げると、何か眩しいものを避けでもするやうにすぐ眼を轉じて、同じ甲板の一隅に黒い眼鏡を海の彼方に向けながら、太い杖に縋つて悄然佇立してゐる骨格のいゝ男を見守つた。眼が見えないといふことに氣を許して、人の數に入れないでゐたけれど、なるほど人氣のない筈の下甲板にも、常住の盲人が、私の出てくる前から佇んでゐたのであつた。話好きの老米人の探知したところによると、彼は過去十五年間、異邦の闇に棲息してゐたのであつた。そして、今彼は、十五年ぶりで故都ロンドンを見に歸るのだといふことである。猫背の彼は、よく片手を杖に、片腕を支那人の忠僕に任ねて、遲い歩みを運んでゐる。が、のんきな私は、盲目な彼にも耳があり、口があることを、一度も考へたことがなかつた。だから私は、初め老米人から此の話しを聞いた時、不可解な異國語の飜譯を耳にしてゐるやうな驚異を感ぜしめられたのであつた。

「盲人なら盲人らしくしてゐればいゝのに、海が見えでもするやうな顔をしてゐるから可愛げがない。」

快い運動後のはずんだ青年の頭には、やはり、盲者に耳のあることなど、考へられないらしかつた

「シッ！　聞えたらどうするの？」

「いゝ敎訓になるばかりですさ！」

青年はあくまで厚顔に構へてゐた。

――が、盲者にはほんたうに海が見えないのかしら？

と、私は疑はずに居られなかつた。見えるとすれば、どんな

水平線が？と、想像の翼を走らせずにも居られなかつた。「私の想像の眼には、紅色の湖も存在し得る。」私は「最後の一線」の中のドクトル、アルノリチイの言葉を思ひ浮べた。そして、私達の見てゐる海とは――私達の見てゐると思つてゐる水平線とは、いつたいどんなものなのだらう？見てゐると思つてゐる私達の對象と、想ひのうちに見てゐる盲の心像と、果して何方が眞實に近いものなのであらうか？――私は妙な方面へ、懐疑の針先を向けて行かねばならなかつた。

旋動

「今晩は！ いつたい、いちんち何處に隱れてゐらしつたのです？」

夜食の爲の着更へもそこそこ、息づまるやうな船客から甲板に飛び出して行くなり、例の青年から、待ちぶせでもしてゐたかのやうに、聲をかけられた。「髯も出そらはないくせに！」と、も一度頭ごなしに嗤つてやりたいほど、氣取つたタクスイードルに身をかためて立つてゐた。

「キヤビンで少し書きものを……」

「勉强はいゝかげんになさらないと、からだに障りますよ。」

青年はみなりにふさわしく、兄貴ぶつた口のきき方をした。

「えゝ、そりや解つてますけど……オヤ、燈臺が見えますね？」

私は白い夜會服の襞をかばひながら、强い風を突いて欄干に駈寄つた。

「燈臺？ 燈臺ならついたり消えたりしますよ。」青年は靜かに私の背後に歩み寄りながら、落ち付いて、大人ぶつた說明を加へるのだつた。「ありや、船ですよ……午頃までは見えなかつたのですけど、僕達の方が船脚が早いもので……」

「さういへば、私も今朝、煙りの尾だけは見えましてよ。」

「今は、六時と……僕、七時にはきつとぬくと思ひますよ。」

「七時？ 何だか危しいものですね。」

「とにかく、一時間後に、も一度此處に出て來ること。」

「賭けをなさるおつもり？」

二人は思はずも、薄暗い甲板に、明るい、子供らしい笑聲を高めてゐた。

「お約束の寫眞！」

その笑ひ聲に吸はれてか、肥つて脊の低い老米夫人が、よちよちと私達に近づきながら、抱へて來た書物の間から數葉の

犬養健作

一つの時代

價2圓50錢

送料19錢

四版

文壇の後門にはヒシ〳〵と新鋭が推し寄せて來た、約十年間我文壇は全く此等特定階級のために道が塞げていたが、この鐵壁を打破した第一人は何といつても犬養君だ。彼の洗練せられた藝術―獨特の鋭い感覺―純眞にして曇りなき自然描寫―は全く幾百の新進者に傑出し、そして大きく光つてゐる、氏の藝術が新しき青年士女たちに著しく歡迎されてゐるのは、ただ單に若々しい新人を憧憬するといふ意味ばかりでなく、それは實に既成大家と太刀討して立派に凱歌を擧げ得た勝利者としての祝福だ、名人の血を最も多量に承け得たと思はれる此天才作家の處女作を特に世の青年士女たちに贈る。

東京市芝區
愛宕下町

改造社

振替東京
八四〇二

中西伊之助作

長編小說

農夫喜兵衛の死

四六判 上製

定價壹圓七拾錢 書留送料拾五錢

農民小說の魁をなせる本書を一讀して下さい。

◇小作農喜兵衛の伜は兵に徴されて滿洲で戰死し、その娘は賣られて朝鮮に赴きました、そして朴訥の聞え高かつた彼は地主からいぢめられて水に溺れました。◇本書を讀めば小作人がいかに地主にいぢめられ、そして小作人の娘や、伜が悲しい人生觀を抱いて離散するか農民生活のみじめさがしみじみと身にしみて來ます◇農村は年と共に荒廢して行きます、そして地主と小作人との階級意識も年と共に熾烈になる、經世家が第一に注目すべきは此點です◇彼等はしかくいぢめられて死より强き反抗心を子々孫々に傳へます◇そして一面蹴られ。擲ぐられても戀愛は娘自身の好きな方面に芽生え、生長して行きます、彼の戀愛の前には資本家の猛烈な壓迫も及びもつきません◇プロ文壇の第一人者たる中西君のメスがいかに鋭く彼等の叫ばんとする處を突き刺したか精讀して下さい◇時代に魁せんとする人々はこの虐げらるる人々の眞相を了解して下さい。

中西伊之助著

長編小說

緒土に芽ぐむもの

十版

定價三圓 送料十九錢

中西伊之助著

長編小說

汝等の背後より

十版

定價二圓卅錢 送料十七錢

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

矢崎美盛著（四版）

現代哲學思潮

定價壹圓五拾錢
送料十五錢

哲學入門の新刊

哲學に入らんとする人の多くして、「哲學入門書」のないのを遺憾とした著者は、幾多の苦心を經て本書を公刊しました、本書は現代佛、獨、英その他に鳴りひびく哲學者及その「哲學」について懇切なる解說を與へたものです、矢崎氏は東京大學の生める新進氣銳の哲學者で、特に近代哲學思潮の權威者です。本書は出版されてから各方面よりの好評ありて、或は學校の參考書となり、或は家庭の間にありても解り易い哲學入門として歡迎されています。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

寫眞を取り出して見せた。

「これが此の秋結婚した私の一人娘。これが長男、これが次男……」

誇示せられるままに私は、お世辭の二言三言を放たねばならなかつた。

「長男はもう結婚しましたけど、次男はまだ……廿三でね。」

夫人はとろけさうな瞳を次男の七分身に投げながら、誇らしげにいふのだつた。「長男はそんなでもないのですが、此の子はどういふものか、レディー達の間に、大變もてるのですよ。」

「そんなら、何故早く其中のどれかを妻君にしないのです？」

英青年が傍ら口を挾んだ。

「まだ結婚するには早過ぎて可哀想ですよ。若いうちは獨り身に限りますからね。」

母親は、何の不安も感じないらしく、またいとしげなほゝ笑みを浮べるのだつた。

「僕は早く妻君が欲しい！」

「冗談をお言ひでない。あなたはまだ、廿才かそこらでせう？」

「いゝえ、坊ちやんとおないどしなのですつて。」私は老夫人に説明した口を直ぐ青年に向けなほして詰問した。「でも、あなた、今朝、何と仰しやつて？　自分は三年前に結婚したつて……」

「僕が？　どう致しまして。あれは冗談といふものですよ。」

「だつて、英國の奥さんにだつて手紙を書いてゐらつしたぢやないの？」

「あれは故國の母と妹への手紙ですよ。」

「まア、ひどい方！　だからあなたがたの紳士はあてにならないつていふんですよ。もう、男のひとの言ふことは、何にも信じないからいゝ……」

今度は青年も强ひて、眞面目に、英國紳士の功能を述べたてようとはしなかつた。

「お話しの具合だと、君は此のマドモアゼールに、大變間違つた男性觀を與へたことになる」

老米人が寫眞をしまひに去つたあとへ、髪も眸も黑い、小柄なムスイウーが、おもはゆげにもじ／＼とにじり寄つて來た。眉目秀麗とはいかないまでも、骨ばつた英人を見なれた眼には、何處か垢拔けがしてゐて、エマブルで、その堅いアクセントを耳にしないでも、一見ラテイン系の人と見定められるやうな風貌を具へた中年の坊ちやんだつた。

「モアゼールは何れの男をも信じないと仰しやる。が、その

男の中に私も含まれてゐるのだとすると、それは甚だ迷惑です。ぜんたい、マドモアゼールはどんな男を理想としていらつしやるのですか？」

「理想の男？　さうですね、まア、あの食堂の黒ん坊のやうな人……いつたい、黒人は非常に深い、瞑想的な眼を持つてゐますね。」

私は轉調しながらも、皮肉な實感を吐かずには居られなかつた。

「何んだ、黒ん坊なんて！　猿の智慧もありやしないのに。」

青年は腹立たしげに聲をはずませた。それにある不快は覺えながらも、私は傍らに立ち盡してゐる佛人への手前、その不快を包んでも一度何處かに轉調しなければならなかつた。

「此の坊ちやんはね。」私は殊更に佛人の方に向き直つて、きこえよがしに私語した。「早く奥さんが欲しいんですつて。」

「へえ、欲しいなら御遠慮なく貰つたらよささうなもんですにね。」

「しかし、ワイフを貰ふとなると、」青年はもうカラリと機嫌をなほしてゐた。「ヤレ帽子の、靴のつて買つてやらなければならない。僕みたいにしまりのないものには、とても婚費なんて貯へられやしませんよ。」

「そんな心配なさらないだつて、帽子や靴を自分で買ふことの出來るやうな奥さんを見付けたらいいぢやありませんか。私なら、よしんば結婚したところで、ハズに物をねだらうなんて考へもしませんね。」

私は少し姉さんぶつた口調で青年を揶揄つた。

「ところが、おあひにくさま、そんなレディーは、こちとらのやうなものゝ言ふことを聞いてはくれないときてゐますからね。ね？さうでせう？」

青年は鳥のやうな眼をずるく光らせながら、薄あかりを透して私の顔を覗き見た。

「手筋によると、僕は肥つたワイフを貰ふことになるのださうですがね。」

「すると、さしあたりジンなんてあなたのワイフになる資格があることになる。手を癒してやつた序でに、ひとつ、そのつもりで爲込んだらどうです？」

私達は又一しきり、明るい笑聲を高めてゐた。

「御飯前に少し歩いた方がいゝ。さ、腕をお貸しなさい。」

いつの間にかもどつて來た老米人が、肉そのものゝやうに柔かな、温かいその肥つた腕を、容赦なく私の脇の下に突つ

込んだ。私は曳きずられるやうにして、でも爲方なく歩調を合せながら、談笑の渦をあとに、薄暗い甲板を歩き始めた。

「面白い人達ですね。年中冗談を言つて。」

「ほんたうに、男つてをかしなものですよ。私なんて三十年間も結婚生活を續けてゐるけれど、いまだに夫の言ふことが何處まで眞實なのか、何處まで冗談なのか判らないくらゐですよ。」

「此の頃はどんな御本をお讀みですか？」

「どうせ船の上ではむつかしいものは讀めませんけど、さつき持つてたのは『サンネー、サン』——日本の娘を題材にした面白いものです。是非讀んでごらんなさい。此の船には割にいゝ本がありますよ。しかしどうです、此の窮屈さは！」

そして夫人は、英國人の萬事に保守的なこと、規則づくめなこと、せつかくな漫遊が苦業になりさうなことなど、私を安全な苦情のはけ口に見立てゝ、たてつゞけにしやべりたてるのであつた。

「さう言へば、昨夜船醫先生は、誰かゞ帽子をかぶつて晩餐に出たつて、大變昂奮してゐましたね。」

「さう、あのお醫者さんときたら、朝から晩まで正裝して歩いてるんですからね。」

老夫人は嘲るやうに聲高く笑つた。

「どれ、私もひとつ、着物を着更へて來ますかね。ダクターの御意を迎へる爲……」

「御主人の、ぢやないんですか？」

「どう致しまして。うちの主人は私が何を着てゐやうと、おかまひなしです。」

が、私の機智は思ひのほか肉付きの若々しい老夫人の御意にかなつたらしく、夫人は上機嫌な笑聲を殘して船室に入つて行つた。夫人の後姿の見えなくなるのを待つて、私は、欄干に脊をもたせた。

「あゝ、くたぶれた！」と吐き出すやうに溜息をついて、

「たまには歩くのもいゝでせう。」いつの間にか其處には、小柄なムスイウーの代りに、ディツケンスでも描きさうな骨と皮ばかりの、脊の高い老紳士が、大きなパイプをくゆらしてゐた。「たゞね、アメリカ人のあのアクセントに感染しないやう、お氣を付けなさるがいゝ！」

老紳士は、氣になるほど長く眼の上に落ちかゝつた眉の毛をはねかへすやうに片眼で瞬きながら、鼻柱に平たく喰ひ入つた小鼻を動かし、白い義歯をむき出して、生きながらの鬼の面のやうに、恐ろしくほゝゑむのであつた。

「英國の婦人はみんな運動して脂肪をなくすから、瘦せてゐて、而かも健康で、血色がいゝ。が、あのフランスの女ときたらどうです。動かずに食べてばかりゐるから、顏色は惡いし、肉はブク〳〵して……」

「僕なんて、片時もぢつとして居られない性分だから、いくら食べたつてちつともみになりはしない。ねえ、僕が肥れるなんて想像も出來ないぢやありませんか。」

それまで紳士に遠慮してもじもじと足踏みしてゐた青年は、急に唇をまくり上げて、しやべりながらも、休みなしに手足を動かすのだつた。

「が、まア、あんまりおしやべりばかりしてゐて瘦せるのも考へものですね。」

「あれだ！」

青年は、さすがにちよつと口を噤んだ。

「君も少し自重するがいゝ………レデイーは最後の釘を打つつていふけれど、かう手きびしくやられては、返す言葉もないでせうね。」

老紳士は青年を顧みて、その體軀にふさはしく乾ききつた笑ひ聲をはづませた。

老船醫

蒼白い電光に照された夜の食卓は、さすがに晴れがましい氣持を與へる。色とりどりの夜會服から、ゆたかな肩や腕をむき出した女達の間に、黑と白とのタクスイードの混つてゐるのが、目立つて端正に、女達の大膽な半裸體の上半身と、異樣な對象を見せてゐる。純白の制服をまとうた黑ん坊の給仕が、銀の食器を機敏に持ち運んでゐるのが、眩しく映る。

「ホラ、ダクターが勳章を下げてやつて來た。」

をかしさをやつと飲み下したところへ、猫脊の船醫は、靜かに、重々しく、私の直ぐ隣りに着席した。

「今晩は………今度のキャビンは如何ですか？」

船醫は猫背の肩を徐ろに廻して、ねばりつこい鼻聲を注ぎかけた。

「やかましくて、やかましくて！」

私は力を入れて言つたのが、耳の遠い船醫は、noisy を noise と聞きちがへたらしかつた。

「ほんたうに、こんな滿員の船で、スヰングル、キャビンを持ち得るなんて、非常なことです。」

「いゝえ、夜通し妙な物音がして、まんじりとも出來ないの

です。」

「それはいけませんね。事務長にどうかしておもらひにならなければ……もう少しそのお魚をお取りになつたら？これはあなたの爲にはるばるロンドンから來たお魚……」

「嘘ばつかり…………とにかく眠れないせいか、ちつとも食慾がなくて困ります」

「が、いつたいあなたは英語を何處で御勉強なすつたのです？」

「東京で……これが處女航海だつて、さつきも申し上げたぢやございませんか。」

「私はもう一度ならず日本の土を踏んでゐるのに、初めてお國を出て來られたあなたと、かうして英語でお話ししなければならないなんて、お羞しいことです」

保守の象徴のやうな船醫は、次の料理の廻つて來る間のあいた手を、膝の上で、大佛樣のそれのやうに組ませながら、叱られた小犬のやうな白眼をぎよろつかせて、隣席の私を見下した。

「先生のお宅は何方におありですの？」

私もおとなしく膝の上に手を置いて、念入りにブラツシしたドクトルの薄い銀髪から、狹い額を鼻先へとのべらに辷つた不思議な線を見つめながら、つゝましやかに話しかけた。

「うち？」船醫はふと、縮めて著けてゐた雙手の指先を投げ出すやうに左右に開いて、懶げな眼をパチリとむき出しながら、無意味にその厚い唇を尖らせた。さうするのが此の人の癖だつた。「家なんて……たゞ、八十才の父が一人田舍に生き殘つてゐるつきり、身寄りといつては他に誰もない獨り身です。」

「ほんたうに？でも先生は、よいお父さんのやうに、又やさしいハスバンドのやうにお見えになる……」

「私が？」船醫は又手を開いて唇を尖らせた。「私には妻もないし、子もありません。たゞ、年を老つて、他に何にもすることがないから、かうして船に乘つてゐるだけのことです。」

「年を老つて、なんて、御冗談……………」

言ひながら私は、又してもドクトル、アルノリチイの鈍重な姿を思ひ浮べずに居られなかつた。「他にどうしやうもないから」といふ一語が私の胸にはぐんと來た。私は涙ぐましい眼で、まぶしげに、ドクトルの稚拙な埃及の彫刻のやうなのべらなプロフイルを竊み見てゐた。

「ダクター！」

正席の老米人が、いたづらな上眼で、大きな鼈甲眼鏡の上からドクトルを覗き見た。「スインガポーアには、勿論上陸なさるんでせうね？」

「わたくし？　えゝ、まだしつかり定めてはゐませんけど…………」

ドクトルは、米人の上眼に含まれたいたづらな意圖には氣のつかぬものゝやうに、生眞面目に猫背の肩を廻すのだつた。

「何誰か、逢ふ人がおありなんでせう？」

米人の調子は眼に見えて高まつて來た。

「えゝ、知人がないでもありません。」

ドクトルは相變らず鈍重におさまつて、兩手の親指と親指どを着けては反らしてゐた。

「なんでも、獨身者は港港に妻君を持つてゐるつてことですからね。」

次の瞬間ドクトルは、嘲りを帶びた哄笑の渦に捲き埋められてしまつた。

「あの人達のいふことに耳を藉さないで下さい。」ドクトルはやがて、周章て取りなすやうに私を顧みた。「あの人達は英國人の――いゝえ、英國人に限らず歐米人の、習慣をあばいて悦んでゐるのですから。」

「御安心遊ばせ。」私は落ち付いてドクトルを宥めた。「食卓は會話の戰場だと思つて、細大洩さず耳を澄してゐますから。」

「いけません。いけません。それに、あの人達の言葉は純粋の英語ぢやないのですから。」

それきり私達は氣まづく默つてしまつた。

食事が終りに近づいた時、私はドクトルを救ふつもりで靜かに話しかけた、

「先生、なにか眠り藥のお持ち合せはございませんか？　もう二晩も殆んど眠らないので、氣持が惡くて爲方ありません。」

「眠り藥！　えゝ、ないこともありませんが、他に何處か苦しいとこはないのですか？」

ドクトルは初めて眼が覺めたやうに、輾轉椅子の向きを變へて、正面から私を見下した。

「別に…………たたねられさへすればいゝのです。」

「ぢや、とにかく私の部屋まで入らつしやい。藥を調合してあげますから。」

ドクトルは元氣よく立上つて、いそいそと私を自分のキャビンに案内した。

マミーの男性觀

「マミー、マミー、ドクトルに眠り藥をいたゞいて來たの。」
藥の壜を誇らしげに振りかざしながら、私は、上船以來母子と呼び合つてゐる上品な、若い未亡人のスチユウオデスに縋りついた。梯子の上を一曲りして甲板へ出やうとする戸口の所で。

「なに？ 眠り藥を？ どうして？」

マミーは明かにドキンとしたらしかつた。

「だつて、ゆふべもその前の晩もねられなかつたんですもの。」

「まア、その藥はちよつと私にあづけてお置きなさい。とにかくも一度事務長に話してみますから。事務長は決して怖い人ぢやないのですから、きつとどうかしてくれるにちがひありません。」

話しながら薄暗い甲板への高い敷居をまたぐと、折よく、行きずりに、夜目にも白い事務長の白服にぶつかつた。

「こんばんは！ 何でもキヤビンがお氣に入らないつてことですが、何處がいけないのですか？」

「何處つて、別に惡いところはないのですけど、たゞ何分にも喧しくて……夜番の方のお話しでは、ちやうど私の頭の上を蒸汽管が通つてゐるので、夜通しコトコトいふのだといふことですが、……晝間休まうにも、子供達が騷ぎ廻つてゐて……」

「そんなことをいへば、私のキヤビンの隣りには子供が三人ゐる。而かも私はいろいろの事務を執らなければならないのです。」

「御同情申し上げます。でも不眠のせいでせう。大變神經質になつてゐるもので。」言ひながら私は知らず識らず涙ぐんでゐた。「今、爲方なしにドクトルに相談して、眠り藥をいたゞいて來たところですの。」

「眠り藥！」

事務長の白眼が意外に強く動いた。

「よろしい、どうかしませう。」

言ひ殘した事務長は、少し前に私達のまたいだ敷居を、重々しくまたいで、それでも問題の中心に直入するやうな緊張を見せながら、ホールを階段の方へ曲つて行つた。

「よかつたねえ。もう心配することはありませんわ。ね？ 事務長はいゝ人でせう？」

事務長の姿の見えなくなるのを待つて、マミーは溫く私

の雙手を取り上げ、見通すやうな眼で、ちかに、私の瞳に見入つた。

「しかし………あ、此の藥はもう海に抛り込んでしまつてもいゝでせう？………いつたい、あなたはあの船醫をどう思つていらつしやるの？」

「どうツて………たゞ、善良な、可哀想なお爺さんでせう？」

「ほんたうにあなたはあの人をいゝ人だと思つていらつしやるの？　私はなにも他人の中傷をしやうつて譯ぢやありませんけど、あなたはまだ世間を知らない。又人を信じ得られるのは幸せなことにはちがひありませんけど、世の中はあなたの思つてゐるほど美しいものでもなければ、善良な人間でものは、さうざらにあるものでもない。だから、あなたのやうな人は、氣を付けすぎるほど氣を付けなければいけませんよあの船醫にしたつて、ちよつと見ると虫も殺さないやうな顏をしてゐますけれど、なかなか、どうして………私は萬物平等を信じ、又主張したい。しかし、あなたは女と生れて來たことを、惨めとはお思ひになりませんか？」マミーは薄暗がりを透して、近づく人影を見張りながら、昂奮して、演説口調に述べたてるのだつた。「單に男女の位置ばかりではない、世の中に生れて來たものは、假令黒人であらうと、白人であらうと、支那人であらうと、アラビヤ人であらうと、みんな同じ人間であるからには、同等に取扱はれねばならない筈である。が、悲しいことには實際はさうでない——こんなことがあつたのですよ。ちやうどホンコン碇泊中のことでした、私が夜おそく下の廊下を自分のキヤビンの方に歩いて行くと、あのドクトルの船室の前に血まみれの黒ん坊が立つてゐるぢやありませんか馳け寄つてみると、どうでせう、顏中傷だらけ、片眼が飛び出してゐるほどの重傷です。あなたなんて一目見たら氣絶するにちがひない。なんでも、白人の船員の一人が上陸して醉つぱらつて歸つて來て、何かに腹をたてゝゐたとみえ、いきなり其處に居合した、その肉切りの黒人を、靴で蹴飛ばして、顏を踏みにぢつたのださうです何しろ、大變な出血で、今にも死にはしないかと思はれるほど苦しんでゐるのに、ドクトルは、例の調子でお客さんと話しながら、給仕にジン、コクテールを命じてゐるのです。私が若し男なら、キヤビンに闖入して、とりあえず拳固の一ツでも見舞はしてやつたのですけど………」

「で、その肉切りは助かつたのですか？」

「え、いくらかいゝやうだといつて、もう働いてゐます。」

「そして、その亂暴な船員は何の罰も受けないのですか？」
「事務長はどうにかするといッたさうですが、ロンドンに着くと、その不具にされた肉切りの方が、路頭に拋り出されることになるのでせう。」
「すると、今しがた事務長が私に言つたことも、あてに出來ませんね？」
私は少しいたづらな眼をして、無理にも此の重苦しい話題から逃れようとした。
「オホホ、あなたは肉切りとはちがひますよ………さういへば、あなたのお國でもやはり支那でのやうに、男は、幾妻でも持つことが出來るのですか？」
「いゝえ！」私は少しむつとした。「日本は歐米と同じく一夫一婦です。」さう云つてしまつてから、私は又母國の社會の半面の醜さを思ふと恥しく ― 同時に又別の意味で、腹立たしくもなつた。「勿論、陰では、支那人の第二妻、第三妻にあたるものをかくまつてゐる人もありますが。」
「それは英國だつて同じことです。男は何處に行つたつて男なのですから。その上男はどんなことをしたつて、立派に無垢なお孃さんと結婚することが出來る。おもてむきは立派に奧さんを奧さんとして立てゝおいて、陰では勝手なことを：……」
「男ばかりが勝手なことをしてゐるとは言へないでせうけど……」
「勿論さうです。しかし、その爲に男の負ふ重荷は女のそれとは比較になりません。若し男の移り氣が本然的なものだとするならば、私は支那のやうに、公然多妻を許した方が、棄けられた女の爲にも、子供達の爲にも、却つてよくはないかと思ふこともあります。」
私はマミーの此の着想に胸を突かれずに居られなかつた。そこには、愛を絶たれても物慾の故に、子供の故に ── 或ひは子供を楯に、是が非でも男に縋つて行かうとするすべての女の弱音が泣いてゐるやうな氣がした。それは明かに、男性から受けた屈辱よりもより大きな女性の屈辱のやうに、私には聞えるのだつた。
「現實がどんなに醜いものであつても、私はやはり純一な愛の美しさを見失ひたくありません。」
私は深い溜息につれて、ひとりごとのやうに囁いた。
「幻を抱き續けて行かれる人は幸せです。しかし、美しい想像のみに生きてゐた人は、えて幻滅の苦さに耐へられなくなる。あなたの尊いいのちを傷げぬやう、いやが上にも氣を

付けて下さい。」

マミーは、無智な子をさとすやうに、私をその温い胸に抱き締めるのだつた。

わかれ

なにかの豫感に、私がふとマミーの抱擁から拔け出た瞬間、明るみそのもの丶やうな例の青年が、鳥のやうな眼を光らせながら、二間と隔てぬ甲板の隅に姿を現した。

「私達は今男の惡口を言つてるところだから、來てはいけませんよ。」

「が、僕は純良なる青年だから、その限りにあらず……まつたく、東洋に來てゐる英國人にはろくな奴はないんですからね。金と暇があつて、その上怖いものがないときてゐるから、いきほひ、酒場に入りびたることにもなるのでせうよ。」

「おたぶんに洩れない方ぢやないんですか？」

「僕？ 失敬な！ 僕は酒も煙草も殆んど飲みはしないぢやありませんか。」

「とにかく、スインガポーアに行つてからも、あんまり飲みすぎないやう、お氣を付けなさいね。」

「なんだ、姉さんぶつたことを言つてらア…………」

青年はマミーの方に忙しい瞬きを送りながら、私達をも捲きこむやうな哄笑の聲を擧げた。

「スインガポーアといへば、もう、スインガポーアの見える時分ですよ。船首の方に行つてみませんか？ 明日はあなたなんかの眠てゐるうちに上陸して、僕のオフィスに行かなければならないけれど、お晝までにはからだがあくから、お迎へに來ますよ。スインガポーアは道路がいゝから、遠乘が素敵です。そして、夕方までにはきつと安全に此處に送り屆けてあげます」。

青年は半ばマミーにいひわけするやうに言つた。

「えゝえ、あなたは、信賴すべき英國紳士ですからね！」

私も半分以上はマミーの方に、暗號を送りながら、かるはずみのした寂しい笑ひ聲をあとに、何の爲ともなく、欄干に歩み寄つて、黑い蛇の背のやうな波の尾を、夜陰の中に透し見た。夜更けの汐風も、何處かねばりつこい熱を帶びた、息づまるやうな暗い晩だつた。

——一九二三、五、一七

ローマ、サ、ヴオイア、ホテルにて——

近代文藝思潮解説

村松正俊

文學や藝術はもとより人間のつくつたもので、人爲的なものですが、しかし一般の生物と同じやうに生れたり死んだりしてゐます。「自然は飛躍をしない」といふ羅甸の諺もある通り、自然界のものはみんな種があつて、親から子が生れて來ます。文學や藝術もそれと同じです。どんな新しい主義や派といへども、何らかのより所がなくて出て來たものは一つもありません。しかし全然自然物でなく、人間の造へたものですから、時には不意に突飛な妙なものが出來ることがあります。

先づ現在の新しい文藝上の主義といへば未來派、表現主義、ダダイズムなどでせう。かういふ新しい派はどうして出て來たのでせうか。大體からいひますと、現代のかういふ新派の出て來たのは、例の歐洲戰爭といふ特別な刺戟があつたのは申すまでもないことですが、それがなくとも、あゝいふ新しい主義や派の出て來るべきであつたのです。未來派などといふのはすでに戰爭前五六年前から起つてゐました。で、その理由といふのは、いつでもある一つの主義がしつかりと天下をとつた後には、その主義は必らず崩壞して來ます。その崩壞の時にはいろいろな主義が百出して騷ぎます。丁度大きな一つの波が崩れると無數の泡が出來るやうに、文學や藝術でもさうです。その小さな主義の中から次の時代の主潮となる主義がだんだん發達して來て、外の多くの主義を征服してつひに天下をその主義で占めるやうになります。その現象はいつでも認められることなのです。それでは一つの主潮と次の主潮との間に何か心理的な關係があるのでせうか。あります。それは二つの二元的要素が交互に主潮となるのです。その二つといふのはニイチエが名づけたのを假りに用ゐますと、ディオニソス的とアポロン的です。前者は動の藝術で後者は靜の藝術です。大體この二つの特徴をもつた主義が代り代りに主潮となるやうです。大雜把な例でいひますと、十七

世紀の藝術の主潮は靜を主とする擬古主義でした。その次は動の性質をもつてゐる浪漫派でした。その次は靜に傾いてゐる自然主義であり、また象徴主義でした。かういふ例で分るとほり大體の主張はいつも交互に出てゐます。

ところで現代の藝術の前は誰でも知つてゐる通り象徴主義です。この運動は主に詩の上でしたが、後には音樂にも彫刻にもあらはれるやうになりました。象徴主義の特徴は靜的な、暗示的な、神秘的なところにあります。マラルメやヴエルーやメエテルリンクなどはこの派の人で、また現代の大家たちは大概その若い時はこの派に屬してゐました。ところがこの象徴主義も二十世紀の初めに至つてつひに衰へはじめました。で、次の文學運動が起りかけたのです。それはいふまでもなく動的なものにちがひありません。象徴主義が起るときもさうでしたが、この派の衰へる時には現代の新派がいろいろな名で出て來ました。未來派や表現派やダダなどはその二三に過ぎません。一例を擧げますと、ナンクロミスムだとか、ナテユリスムだとか、サンテチスムだとか、ユナミスムだとか、いろいろな主義が出て、それぞれ雜誌や新聞に宣言を發表したのです。それらの人たちはいづれも　もと象徴主義に屬してゐたのですが、それに飽きたりなくなつて、いろいろと主義や主張を述べたのでせう。

その中に未來主義といふのがあつたのです、それはマリネツチといふ若いイタリヤの詩人がフイガロといふ新聞ではじめて宣言を發表したのです。マリネツチはやはり象徴主義の詩人でした。マリネツチは一切の過去の美を葬るべきだといひます、美といふのは博物館の古い繪や古典の詩ではない。動いてゐる力そのものだといひます。それで自働車のひびきや、ガソリンのにほひなどはこの新しい美をつくるものなのです。

マリネツチのこの宣言にはいふまでもなく動の美が強調されてゐます。ベルクソンの哲學をとり入れたといふ說さへあります。この主張に加はつたのは、詩人や彫刻家や音樂家など大勢ゐます、また婦人運動といふ部もあつて、サン・ポマンといふ美しい夫人がその部を受けもつてゐました。

未來派の運動は以上のやうに文學のみでなく、繪畫や彫刻や音樂やいろいろな部門にまでわたつてゐますが、一番人を刺戟したのは彫刻と繪畫でせう。ボツチヨーニとかルツソロとかセヴエリーニなどがそのすぐれたものです。音樂の方では特に雜音藝術といふのがあります。水がポコポコいふ音や、口笛や、ガタガタいふ音や、蜂のブンブンいふ音などで

オーケストラをこしらへたのです。初めての演奏の時は聽衆が怒つて、メチャメチャにしてしまつたさうです。

マリネッチの第一の宣言は一九〇九年に出ましたがその後いろいろな名目でいろいろな宣言を度々出してゐます。一昨年かには觸感主義宣言といふのを出しました。何でも觸感の藝術をこしらへようといふのです。マリネッチも少し窮して來たといふ感じを抱かせます。しかしこの未來派の影響は大きなもので、外の同時に起つたいろいろな運動を自分の方へまき込んだやうにも見えます。立體派などはいつの間にか未來派と混同されたりしたことがありました。

表現派といふのは主にドイツの新派をいひます。新しい藝術にもそれぞれ國によるちがひがあるのは面白いと思ひます。未來派は主にイタリヤで、立體派は主にフランスで、表現派は主にドイツに勢力があります。

この表現派といふのは、字義からいふと印象派といふののあべこべともいへます。しかし單純にさうともいへません。表現主義は主に理想主義的な立場をとつてゐまして、內部の生命を外に迸出させやうとするのです。內部から外へ表現しようといふのです。對象である自然よりも、主觀である自分に重きを置いてゐるのです。表現主義の批評家ヘルマンバールといふ人の說によると、內部的要求の外的表現がその藝術であるといふことになります。

表現派は歐洲戰爭の結果、彼にその理想主義の傾向を强めて來ました。殆ど今日では新派の代表ともなつてゐます。小說よりも寧ろ繪畫や戲曲や繪畫にその特長を發揮してゐます。日本に來た「カリカリ博士」とか「朝から晚まで」の如きはその適例でせう。戲曲では日本で演ぜられたゲオルク・カイザーの「カレーの市民」や同じく「瓦斯」やトラーの「轉變」などはその傑作のうちに入れるべきでせう。繪畫の方ではココシユカとかベヒシタインとかマルクとかカンデンスキーなどがその代表者と目されてゐます。

最後にダダイズムのことですが、何が出たら目といつてこれほど出鱈目なものはないでせう。しかしそれは俗人から見ると出鱈目なので、ダダイストにとつては何でもないでせう。やはりそれぞれの主張と主義がある筈です。

ダダイズムは千九百十六年の春、チユーリヒでフーゴー・バル、トリスタン・ツアラ、ハンス・アルフ、マルセル・ヤンコ、ヒユルゼンベツクといふ五人があるカフエで作つたものださうです。丁度戰爭中でかういふ連中はみんな愛國の思想などはどこかへ棄てゝしまつて、この中立國のスイスに來

たのです。さういふ成り立ちから考へても妙なものであることが分るでせう。ダダといふことは何のことでせうか。それは何の意味もないのです。ダダはダダです。日本では辻潤氏がダダイストで、同氏によれば、タダダダださうです。

ダダイズムは絶對的に主觀的です。ですからダダイスト當人の心持になつて見なければ分らないのです。といふよりは或は當人にも分らないのでせう。ダダイズムの特徴は「騷音樂」「同時性」「繪畫の新材料」にあるさうですが、これだけでは分りますまい。しかしそれにマリネッチの影響のあることは疑ひを容れません。

さてかやうないろいろな新主義がありますが、そのどれが將來の藝術の主潮となり得るかは一寸見當がつきません。大體からいつて、かういふ派はいづれもブルジョア文化の末期の相貌を呈してゐるやうに思はれます。それですから健全な無產階級には分るわけがありませんし、またその藝術となることは出來ないでせう。ことによるとみんなこのまゝ滅亡するかも知れません。やや有望なのは先づ表現派位のものだらうと思はれます。

短詩募集

詩、歌、童謠の原稿應募數は當初に較べますと二倍以上增加して居ります。それにつれて質に於てもすぐれた作が增加してくることを期待してゐます。

十月號は短詩が載る順序ですから、奮つて澤山御投稿下さい。

（一）十二行以下。
（一）〆切八月廿七日迄。
（一）封筒に「短詩原稿」と朱書のこと。
（一）住所氏名を明記のこと。
（一）入選のものには薄謝拾圓進呈。

女性改造文藝部



運動講座

軟球より硬球に入るに就ての注意

熊谷一彌

現今我國には、硬軟兩樣の庭球が行はれて、殊に軟球は三十年以來流行に連れて普及し、遠くは臺灣、朝鮮及び滿洲に至る日本の殖民地に迄傳播して、其勢力は侮る可らざるものがある。反之、硬球は庭球技が我國に輸入せられた當初より間もなく中絶の形で或る一少部分を除いては最近に到る迄殆ど忘れられ、庭球と云へば直に軟球を意味するかの如き有樣であつた。然るに最近に於て國際競技の勃興や、在外邦人選手の活躍に刺戟せられた結果、世界の標準球たる硬球採用の聲頻に喧傳せられ、各地に硬球隆盛の氣運に到達したのである。實に世の進展に隨つて各種の運動競技も皆國際的に向つて驀進し、之が爲めに一入の進歩と興味とを咬つて居る間に於て、不具的の我軟球の如きものが漸時に硬球に改めらる可き

は必然的の運命である。唯現今の我國民の生活狀態に鑑みて、比較的に費用を要する硬球を全部が全部一時に改變する事は事情の許さぬ處であるが、此點も追々に除去されるに從つて硬球の普及が次第に擴張さる可きは明白である。即ち過渡期に在る我庭球界は、一時の便法として依然軟球を採用しつゝあり、又軟球採用が已むを得ざる狀態にあるが故に、硬球の奬勵も決して忽にす可きものではない。只軟球の採用は、將來硬球に移るを前程とし、硬球採用に對する準備的練習を目的としてのものであり度いのである。

前述の如く世の趨勢に伴つて、軟球より硬球に移るとすれば、其改變の際に於て採る可き心得は重大視しなければならぬ。其際に於ける最初の一歩は其人の硬球の將來に影響する事多大であるからである。

我國現今の實狀から推せば、硬球採用に向ふ人々の大多數は皆多少軟球に親しんだ人々であつて、硬球を手初めにスタートしようとする人は極めて稀である。故に此處に軟球より硬球に移る場合に對する一般の注意を述べる事も、我庭球同好者に取つて無駄ではないと思ふ。

抑も庭球に於て硬軟兩樣の差異は、一に使用球の相違より由來するものであつて、コートの形狀ネットの高さ其他に就ては殆ど大同小異あるに過ぎない。然も球それ自身の差異とても　重量や硬軟の度合に相違あり、一方が雜紗の外皮に覆はれるのみで兩者同じくゴムを以て造られた圓形の球である事は明かである。斯く形狀の大小重量の輕重より來る部分的の相違を除けば、原理は全く同一のものに違ひないから、硬軟兩方共の打球動作其他に關する理論は原則に於て軌を一にす可きものたるは疑を容れない。

而して其部分的の相違とは何かと云へば、球の速力並に壓力反撥力に著しい差別を生じ、更に中空を飛ぶ間に於けるカーブの具合も共に各々其特色を帶びる。即ち硬球は軟球に較べて形態が小さい反對に、重量は遙に軟球に勝るものであるから、球の速力は頗る迅速であると共に、球自身に與へられる壓力（換言すれば前方に進むと同時に球自身に持つ力）は軟球のそれと比較して頗る增大される。

是等の直接の差異を基として、硬球採用の當初には最もラケットに關して注意を要してそのラケットの可否は庭球家に取つて最大重要事である。

軟球の場合には、普通に十二オンス乃至十二オンス半を普通とするが、硬球の場合には約一オンス以上の十三オンス乃至十四オンス位の重いラケットを使用する事を要する。即ち

硬球は重く且つ速力に富むが故に、此種の飛球に對應して之を自由に受け返すには、相當の重いラケットでないと動もすれば飛球の壓力に押されて受け耐へるのに困難である。次にラケットに張つたガットは極度まで固いのを良とする。軟球では球の重量が少い爲めに、之を遠方に打つには寧ろガットの張りを或る程度迄弛くして、輕い球が當つてもガットの彈力を利用して飛球に勢を與へるのが利益であるけれども、硬球では球自身に已に重く迅速に飛ぶ爲めに、張の強いラケットに當れば一層の反撥力を生じ聊かの不便もない。却つて張の弱いラケットでは、コントロールを失ひ易い不利を伴ふものである。尚ラケットのハンドル（握り）は、軟球に比して大なるものを撰ばねばならぬ。是は矢張り硬球に原因するもので、ハンドルの大なるものは尠少の力で強い飛球を受け得られる。且つ重い硬球が若し受けたラケットの中央部に當らなかつた場合に、ハンドルが小さいと球勢に壓倒されて自己の欲する處に打ち返せない事が多い。

濠洲の有名なプレヤー、ノルマン・ブルックス氏は此原則に反し、輕いラケットに弱い張りで小さいハンドルのラケットを常用して、尚且世界的の名聲を馳せたが是は常に氏の獨特な技倆に依つてのみ許されるもので、一般には以上の法則に從ふ可きものである。

以上述べた處を綜合すれば、硬球に要するラケットで我國の婦人の使用するに適當なものは、重量十三オンス半前後で強く張り、ハンドルの大さは五吋四分一前後のものが適當であらう。此他にラケットとしての一般的條件を具備するの必要は勿論である。（拙著テニス參照）

ラケットの撰擇が濟んだら各種の打球の一般に注意して欲しい。硬球は速力迅く殊に反撥力は軟球に較べて著しく強く、且つ速いから軟球の場合の通りに、大きく構へて打球に對する姿勢を爲すの餘裕はないのが常である。故に必然的に準備的姿勢（備へ方）は小さくなる急場の間に合せなければならない。

前述の如く、硬球はそれ自身の性質上より反撥力に富むが故に、常に之を利用する事を忘れてはならぬ。且つ相手が強球を送れば送る程、其力を利用して相手を混亂せしむるは硬球に於て初めて見る妙味であつて硬球は軟球と異り、常に全力を打球に傾倒しなくとも相當速力ある球を打てる。之を遂行するには打球に際してラケットを強く握り、且つ振り方は小さくとも瞬間的に迅く振るを要する。

尚ラケットを堅く握ると共に手首の働きにより、球勢を助

長し、鋭角度の打球を可能ならしむる事も出來る。

軟球にはゲームの種類が單にダブルに限られて居る爲めに、前衛後衛の區別を生ずると共に其各々の職分も分業的になつて居るが硬球ではシングル、ダブルの二種有り、而もダブルに於ても前後衛の明かな區別はないが爲めに、一人で前後衛の職分を行はねばならぬ。故に皆サービス、グラウンドストローク、ヴオーレー等の打球法を等しく會得するを要するのである。

要之、硬球採用に當つては先づ球それ自身の部分的差異を盡く了解し、之に對應する方策を建てゝ熱心に練習すれば元々軟球に親んで球に素養ある人々には案外速に呼吸を呑み込める事は是迄の實驗により保證される。一旦會得したら何人も面白味を感じて決して忘れられない事は、恰も撞球に於て三ツ玉の妙味を知つた人が四ツ玉が馬鹿らしくて出來ないのと變りはない。

運動通信

明年巴里で開かれる萬國オリンピック大會に派遣する、我が選手の費用として、大日本體育協會では、總額十二萬圓（一人當り四千圓、三十人分）を、國庫から補助を受ける爲めに、首相及び文部、內務、大藏の各大臣宛に、請願書を提出しました。

これまで、無理解な當局は、いつでも此の請願を有耶無耶の間に葬り去つて居たのですが、輿論と趨勢に動かされて、今度の請願は、多分認めないでは居りますまい。否、未だそれと公表はしないが、省議では既にこの費用支出を可決して居るらしいのです。勿論六十萬圓の國庫補助を可決して居る米國などとは、比較にはなりませんが、從來、冷淡な態度をとつて居た當局としては、一段の目醒め方だといはなければなりません。

常に虐げられ苛まれて、漸く有志の寄附で曲りなりにも我が運動界の面目を維持して來た體育協會の勞を多とするとともに、國際競技の晴れの舞臺に、同胞の目覺しい活躍を祈念します。

婦人の間に流行する 海のスポーツ

吉田興山

海岸線の長いことは今更申すまでもありませんが、我國の海岸のように女性的で、到る處逶迤となり、又は砂地が續いて、殆んど巖礁や荒磯がないと云つて差支へのないほどなだらかな海を持つて居る國は世界でも他に類例のない事なのです。この天然の海、飽までスポーツとして利用すべく出來上つて居る海を持つて居ながら、日本ほど海のスポーツに缺けて居る國は世界でも他に類例のない事なのです。

よく日本人は海國だと自慢しますが、さてその海國の實際を味つて居るものは、ほんの算へる程しかありません。船の操縱は愚か、泳ぎの出來ない人の數は隨分多いと思ひます。海へ出て金鎚や、石地頭のような海國民では誠に心細い次第です。

比較的海の恩惠に浴して居ない外國でもいづれも海のスポーツが運動競技界の中心になつて居ない國は少ないのです。殊に總ての方面のスポーツに最近長足の進歩をして參りました米國などは實に海の研究、船の研究が盛んです。女學生のボートレースなどは平凡な話題で、ヨット、カヌー、スカールの操縱に男子も及ばぬ手腕を示して居ます。殊に昨年度の米國全土のモーターボート競漕に第一着の最高名譽を擔つたのは實にエセルヘンリー夫人と言ふ女性であつたのです。

一口にモーターボートと申しましても、今日本に浮んで居るような鈍い速力のものではありません。一時間に三四十哩、五十哩と言ふ高速度のもので、その發動機には飛行機の發動機を据へ付けたのがあります。こんな高速度のモーターボートがレースをしますと船體の前半は高速力の爲め水上に浮び出て了いまして、その後半は船の切る波の爲めに隱れて了ふと言ふ壯快なものなのです。

モーターボートは將來我國でも恐らく海のスポーツの王樣となる運命を持つて居ます。我國ではこの夏始めて隅田川で、日本最初のモーターボートのレースが行はれ、秩父宮殿

下の御所有船なども出場しましたが、あれはレースと言ふ程のものでなく、只モーターボートを集めたと言ふに過ぎません。ほんとうのレースをするまでにはまだ大分年月がある事だと思ひます。モーターボートは海のスポーツとしては最上のものでしようが、然しこれは一つは經濟上の問題ですし、一般婦人の海上スポーツとしては少し荷が重過ぎます。それで將來日本にモーターボート熱が旺盛となりましても、同時に婦人間にも流行するとは考へられませんが、然し婦人の方方にその操縦とまで行かないまでも、モーターボートに搭乘する機會、そうしてその快味を掬する程度の理解は是非もつて貰ひたいものだと希望します。

次にヨットです。ヨットと申しましても十尺内外のものから、殆んど汽船と同樣で世界一周をなし日本にも參りましたスピージヤックなど言ふのもありますが、これは風と戰ふのが本來の目的です。從つて非常に豪快と言ふ部に屬するものですから、婦人には少し手強いように思はれます。然しヨットは世界的のスポーツで、就中、盛んなのが獨逸、英國、米國等です。獨逸には前皇帝カイザー號と名附けて自ら船長となつて乘船し、大に國民にヨット熱を植付けたものです。それで今でも却々盛んです。獨逸は一體海岸が日本に似て居ますので小型のヨットで自由に海へ出る事が出來ます。富の程度も似て居る關係でしようが、一般に實用向きの小型ヨットが盛んです。英國は海岸線は長いのですが、海岸が多く懸崖の箇所が多いのと、上流社會に用ひられて居る爲めに大型の華麗な、殿堂を忍ばすようなものが流行して居ます。米國は重にレースを目的として居ますのは飽まで米國々民性を現して居ます。每年一回英米兩國代表選手の國際ヨットレースなどは隨分盛んなものです。これは船の造り方から既に競爭となるのですから、隨分猛烈な研究心が兩國間に打つ衝り合つて居ます。最近はズット米國が勝ち續けて居ます。

日本ではヨットを組織的に研究して居るのは、横濱と神戸の外人倶樂部の外ありません。日本人では各地に一二艘個人でもつて居る人はありますが團體となつて居るものはありません。日本に在留する外人は日本の天惠的海を非常に喜んで遺憾なくスポーツに利用して居ます。つい先頃もシーメンス會社の支配人フユーゲル夫妻は獨逸人ですが、ヨットに乘りたい爲めに態々東京から横濱へ通つて居ましたが、終にたまり兼ねて自家用のヨットを註文して、出來上ると每日乘り廻して居ます。夫妻とも獨逸人だけに實に簡單なもので朝船に乘る時にサンドウキッチを持つて乘る切りで、それで夕方ま

で品川沖を自由に乘り廻して居ます。その夫人が「私達は海が病ひです」と言つて居たのは面白いことばだと思ひます。

これはヨットではなく普通ボートですが基督教女子青年會の方々は毎夏箱根へ避暑に出掛けますが、その避暑地先の蘆の湖には專屬のボートがあり、夕方は皆んなで夕食を手にしてボートに乘り、湖上に漕ぎ出して、月明りを浴びながら夕食を探るのを日課にして居ます。この時位ひ御飯をおゐしく戴ける時はないと皆んな口を揃へて告白して居ます。

話は少し飛びますが彼の劍橋、牛津兩大學のボートレースで有名なテームス河畔は女子のボート遊びの樂園と言はれて居ますが、日曜などは緑濃き樹の生ひ繁る岸を傳つて、金髪の子女が靜かにオールを動かして居る所を見ますと實に油畫そのままです。早く日本にも恁んな時代が來ればよいと冀ふものは必ずしも筆者丈けではないと信じます。

さてその次は普通に申しますボートです。ボートと申しましても、そこらに在ります借ボートから今日本でも大學のレースに使つて居ますエイトと言ふ九人乘りのものの間に色々な形のものがあります。一寸遊びに來るにはどんなものでも好いでしようが、矢張り正式なものとなると五人乘りのフォーアとか前に申しましたエイトです。外國の女學生がレースに用ひて居るのは皆んなこの種のものです。これは船體が非常に輕く、細長く出來て居まして、乘り人でその船を持つて歩く事の出來るものです。又普通のボートでオールを入れて漕ぐクラッチは船の外側につき出て居ますし、腰を下す所は小さい車の上にのつて居て前後に動くようになつて居ます。ですから婦人にも非常に漕ぎ好いのですが、兎に角團體的のものですから動ともすると練習が女子には過激な勞務に服さねばならぬ事もありますし、事實男子にしても、合宿などして男子としてすら隨分無理な練習をさせねばなりません。それに女子が團體として一々河や海まで行つて毎日練習を續ける事の可能性が一寸疑はれます。好い事には違ひありませんが、實際上の問題として諸外國の女學生のように參り兼ねると思ひます。

そこで筆者が我國の婦人達に最も奬勵したいのは最後に殘されたスカルなのです。一體このスカルは前に申しましたレース用のフォーアとかエイトとかに乘る人々が基本練習のためにスカルに乘つて、其姿勢を一人々々に直し、各自に型が極まつてからレース用のボートに乘る事になる其階段です。言はば撰手を拵へる養成所なのです。

スカルと申しますと、まだ名も耳にした事のない方も澤山

ありますが、去年邊りから京濱間の女學生の間には可成りの熱度で流行して居ます。月曜日などスカルの研究所として有名な横濱市外の横濱ヨット工作所などにお茶の水や、三輪田、英學塾などの若い女學生達が輕く海面をすい〳〵と辷つて行く群で賑つて居ます。

一艘スカルは二人乘りもありますが、大抵は一人乘りで舵はありません。二本のオールで漕ぎながら舵をとるのです。スカルは一名を海のスキーと言はれます。その輕快な動作と、恰好が實によくスキーに似て居るのです。船の長さは二十六呎内外ですが、その幅は狹いもので十八吋から八吋半など言ふ狹いものがあります。九吋十吋のものになりますと、身體が船の幅の外へ喰み出すのです。それで居て船は全體の重さが四貫目内外、幅の狹いものはずつとまだ輕くなりますから、重いものでも婦人二人の手で自由に持ち運びが出來るのです。中央に身體の這入る丈けの所が開いて居ますが、アトの部分は皆な防水劑を塗つた布で張りつめてあります。オールはアウトリツガーと申しましてクラッチの所が船外に長くつき出て居ますし。坐席はスライチングシートで小さい車が二本の軌道の上を前後に辷るようになつて居ます。打ち見た所が恰好が如何にもスッキリして輕快の二字に盡きるのです。遠くで見ますと棒の上に人が乘つて居るように見へます。こんな恰好ですから非常に速力が出ます。なまじつかのモーターボートなどはとても敵はない位ひなのです。それに力を加へる必要がありません。極く輕くオールを動し要領さへよければ充分なのです。又座席が自由に動きますから身體を屈伸させる必要が少くて疲勞が出ません。總て身體の動き方が自然で、過激でなく、その動作が優美な點は何んと言つても女子運動界の女王と推稱するに憚りません。スカルの選手として有名なお茶の水女學校生徒で新橋の江木寫眞館の令孃江木たゑ子さんは學校ではテニスや、陸上競技の方の選手をやつて居ますが、スカルをやり始めて以來「こんな愉快な運動はありません、とても氣持の好いものです」と言つて居ます。家に居る時間の多い婦人が、戸外殊に海に出ることの愉快それ自身既に及ぶ可らざる愉快なのです。まして輕快な船で自由に海を征服する事が女性として愉快でなくて何んでしよう。

海などは危ないと言ふ引込思案の人々も隨分まだ多い世の中ですが、決して危險はありません。お茶の水順天堂病院の佐藤院長なども令孃のスカル熱を心配した一人で實地見學に行つて、これなら安心だと折紙をつけられた一人です。

スカルは正しく言ひますと、漕ぐオールの名なのです。船はスカリングボート又はスカリングシエールと言ふのがほんとうなのです。オールのスカルでこのボートを漕ぐ事をスカル或はスカリングと言ふのです。

オールは長さが二呎です。オールは船外に突出た金の柱の先にある四角形の鉄の金具の中にチャント入れて捻ぢで止めて了ひます。その金具はシエール・ロー ロックと言ひます。座席はストレッチャーと呼ぶのです。

船體は指先で押すとへこむ位ひ薄い板を用ひて居ます。ベニヤ板を張り合せたものなどは特に薄い點で勝れて居ますがその船體の板の厚みは五厘内外です。こんな輕いものですから水中には僅か六吋しか這入つて居ません、まるで水上を辷るようなものなのです。

スカルは兎に角ボートと言ふよりも玩具と言つたものです。細長い、薄い華奢な點は風に揺れる谷間の姫百合に見立てると其外廓の感じが出ます。從つて初心者には一寸其船の安定をつける呼吸が困難です。それにオールを両側に張つて水につけて始めて船が安定するのです。恰度カヌーの船側に腕木が出て居るのがあるでしよう。あれの代りにオールを水につけて始めて安定するのですから、初めの内に浮つかりしてオールを水から離すと忽ち轉覆するのですが少し慣れゝば心配はありません。今までの經驗で見ますと男子の初心者で初めての練習者で二度も三度も海中に墜落する者がありますが、婦人は非常に周到で、用心深く漕ぐ爲めにまだ顚覆した人は見受けません。

總てスカルに限りませんがボートを漕ぐ人は次の公式によつて練習すれば好いと思ひます。

一、オールを水中に入れる時は先づ輕くそうして機敏に入れるのです。

二、そうしてオールを水中で引く中頃に全力を用ひるのです。

三、オールを漕ぎ切る時は強く引くのです。

四、オールを漕ぎ終れば急速に姿勢を立て直すのです。

五、しつかりと前方に手を突き出すのです。

殊にスカルはサイドが低いので水が直ぐ座席の所まで來て居ます。波が少しあつても船首や、船尾は波で洗はれますし、座席へも波が打込みますから慣れない間は一寸氣持が惡いのです。それと船がどうしても動搖しますのでヒヤ／＼します。それで初心者は先づ第一に水に慣れる事、水に親しむ事が必要です。暇と機會さへあればスカルに乘ると言ふ事が

一番好い練習なのです。玄人の云ふ事ですが「スカルは船を漕ぎ進めるより、船を止めないやうにせよ」と言ひます。この言葉はスカルを漕いだ人にはよく其意味が通ずるのです。理論より何より、先づ自身で漕ぐ事がスカル練習の第一義です。そうして漕ぐ機會の多い程、それに比例して上達する筈です。

スカルは價格から申しまして、極く安いものです。九十五圓位ひから百七八十圓位ひですから、二三人で組んで一艘持つ事は大して困難ではないと思います。矢張りほんとの親しみは自分のものであると言ふ事が必要な事なのです。

スカルは隅田川にも大分近頃浮んで居ますが大低は學校とか個人のもので、同好者が借りられる組織のものはまだありませんし、又その團體もありません。大變遺憾な事であり、スカルが折角流行しだしたのを壓へ付けて了ふようなものですから、何とかしたいと言ふので今度筆者などで組織して居ります、京濱ローイング倶樂部では横濱市外小安町に練習所を設けて、婦人の同好者には無料で指導する計畫を建てた次第です。學校とか父兄の確かな證明のある方はどなたも喜んで歡迎します。

女子用としてのベース、ボール

白井規矩郎

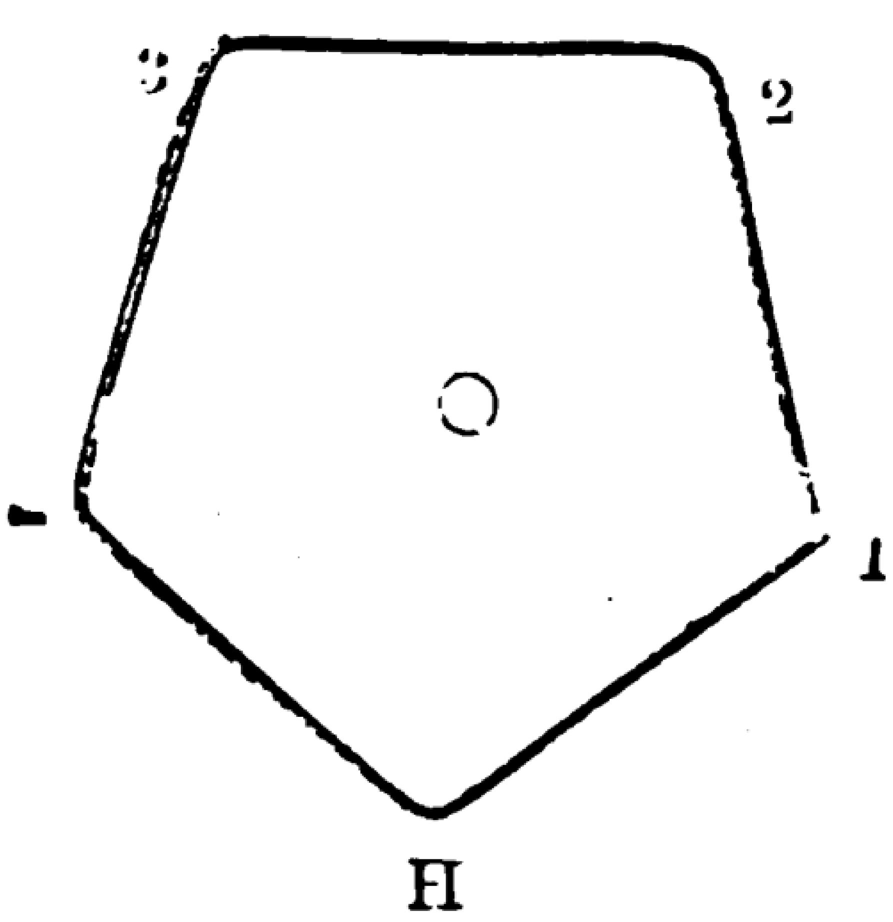
テニスは男子にも女子にも共適の遊戯でありますが、ベース、ボールとなりますと男子の特有で、女子には其興味を享得せられない様な事になつて居ります、處が最近此競技を女子に適する樣に更訂されたものが出來まして、是を行ふものが段々殖えてきたといふ記事が近着の米國體育雜誌に見えました。今に我邦でも男子のそれと同樣に行はれる事であらうと思はれますが、玆にボーン氏の女子遊戯書に基て其仕方を御話いたしませう。一ツ先鞭をつけられては如何です。

大體は男子のベースボールと同樣ですから從て其規則の如きも共通の處が多いのです、夫れ故之れを一通り心得て置きますと假令自身で運動を試みないまでも、ベースボールの競技を見る際などは一層興味が多からうと思ひます。

此遊戯は原名を Rounders と申して運動にはベースとボールを用ひますから、之れもベースボールと云つても差支ないのですが、普通のベースボールとは毬も異ひますし、バットを用ひませんでラケットを用ひます。夫故女子には極めて適當の競技ですが、男子にはチト柔か過ぎます。

大體ベースボールに似てゐますから方法もベースボール其儘でも出來ない事はありませんが、ベースの取り法、人數の組立などが少し異ひますから一ト通り申しませう。

一 競技場



正確に此競技をするには少くとも半町四方以上の面積ある凸凹のない場處が必要です。

此廣い地處へ上に掲げた圖の樣に五角形に石灰で線を引きますへ各數字間の距離は別に明示されて居りませんが、普通のベース、ボールの各壘間の距離よりも狹くした方が宜いと思ひま

す、）尤も一々引くのが手數なら、繩で地形に地へ張つて置いても宜いのです。普通のベース、ボールでは內野と外野とに分けますが、女子用のには夫れには及びません。

二　壘とベースの付け法

前の圖でHと書いてある處は Home で本壘と譯します。此本壘及び１２３４とある角々へはベースと申す袋を置きます。

ベースは四角な薄い袋でして中には鋸屑なり籾殻なり大豆なりを入れて、其四隅へ小さい乳を附けて置き、之れで針金を通して地へ固く挿込んで、袋が動かぬ様に致して置きます。普通のベース、ボールでは四個ですが、之れは一個多いのです。

ベースは本壘に附けますものは、一尺四方の大きさで、其他の１２３４の處へは何れも一尺二寸五分四方のものを置きます、其處で此のH、とある處へ附けますのを Home base 略してＨＢと申します。

１　の處にあるベースを 1.B と申します。
２　の處にあるベースを 2.B と申します。
３　の處にあるベースを 3.B と申します。
４　の處にあるベースは 4.B と申します。

何れも壘の標目にするのですから、正しく角々へ置て動かぬ様に附けねばなりません。

三　投者の投げ場所

此競技は十人づゝ二組（普通のは九人づゝ二組ですが）で致すもので、一方の投手が投げる毬を、一方の打手が打つので（後に詳しく申しますと打手が頗る骨が折れますし、又、何處で打つてもよいとなると如何に廣い場所でも、壘を取るに困難な計りでなく、凡ての見當が附きませんので、打者と投者との位置を確と定めて置きます。

これも普通のベースボールですと隨分面倒な規則があるのですが、此方は簡單です。則ち投手は五角の中心からして、少し打手に近い位の處に立ちます。打手はＨＢ則ち本壘から約く一尺斗り右なり左なりへ寄つた處に立ちます。之れは右利と左利との人がありますので、其人に依て何れでもよいのです。成るべくなら此投手と打手との場處へは縱四尺橫三尺斗りの板を置くか、或は石灰で形を付けて置くことにしたい。

四　網の位置

本壘から八間乃至十間計り後の處へテニス用の網を張つて置きます、是れは投手の毬が打手を越えて餘り遠くえ逃げると、夫れを拾ふのに時間が掛り、從つて勝敗に益もない時間が費されるからです。

五　用具

この競技に入用な道具を揭げて見ますと

ベース　五個
ボール　一個（或は二個）普通のゴム毬
ラケツト　一本
網　一張

あればよいのです

六　仕合と選手

仕合の事をMatchと言つて、此仕合をする人達をPlayersと申します。夫れで學校や、倶樂部などから選出したものを選手と申し、選手の少し下手な人を第二選手と申します。此選手は一組が十人で、二組で仕合をするのですから丁度二十人で、競技が成立つのです。此二組の事をRival則ち對手と申します。

此一方の組十人が、技場を守る、其時一方の組が攻めて攻者の方に三人まで撃死するものが出來ますと、今度は今まで攻めて居た人が代つて、守者となり、守つて居た組が攻者となるのです。そこで此守り方と攻め方に就て一つ次に申しませう。

（イ）攻め法

攻めます方では、攻者十人の選手が順を定めて置いて、一人づゝ打ち場所（H.B の脇）に出て、其處でラケツトを持つてゐて、敵の投手の投げる毬を撃つのです、此の打て居る選手の事を打者と申します、此打手が巧く投手の投げた毬を打ちますと第一壘が取れます。すると又後から次の順番に當ります味方がラケツトを持つて打ち場所に出て打ちますから隙を見て第二壘を奪ひ、次に第三壘、夫れから第四壘、次に本壘に歸るのです、無難に本壘に歸ることが出來ましたら、始めて一人前の功を奏した事になります。併し打ち場所で撃死いたすもの、第一壘で死ぬもの、第二、第三、第四壘までも來てから死ぬもの、本壘近くまで來てから殺されるものも

あります。どういふ時には壘が取れるか、如何なつた場合が撃死だか、又蘇生する方法などの事は、今茲で申すと反て煩雑しますから後で申します。兎に角三人撃死があるまでは、いくらでも順に出て打つのです。併し三人の撃死が出來ると假令其時に第一壘、第二壘や第三又は第四までも奪つて居たものがあつても、皆無駄骨折となつて、今度は守者と交代して自分の組が守者となります。則ち

一人撃死すると　one out
二人撃死すると　Two out
三人撃死が出來ると　Side out
無駄骨折になつた人を　Standing

になつたと申します。

圍　双方で一度づゝ攻めた事を第一圍が終つたとか、又た第一戰が濟んだとか申します。斯樣に交番に攻めては守りながら第十圍まで戰つて、効を奏した人數の多かつた方が勝利になります。

前にも申した通りで、兩組で一度づゝ攻めまして始めて一圍(イニング)を終りますから、甲の攻める時と、乙が攻める時との二期に分れて居ります。

仕合の完結　試合の模樣で、第十圍の終りの半分位で勝敗が分る時と、第十圍までしないでも確定する時と、又第十圍まで終つても、勝敗が分らない時などがありますし、又た差支の爲めに中途で停止する事もあります。始めに守者になつた組は第十圍の終りには攻者となります。丁度

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
(始)	守	守	守	守	守	守	守	守	守	守
(終)	攻	攻	攻	攻	攻	攻	攻	攻	攻	攻

の樣な工合で、この始めに守つた組が第十圍の始めを終るまでに勝つてゐますと、第十圍の終りは、攻めて見なくても勝は無論ですから攻めなくて一仕合終ります。則ち勝つた組は、何點(此點數は本壘まで取つた人の員數)と、αの勝になります(α　とは今一度攻るめ事が出來るとか、或は未だ幾何か本壘を取れる人があるかも知れぬといふ意味です)

又始めに守つた組が、第十圍の終りに、攻者となつて、一點の壘を取つても一仕合は終ります。必ず三人撃死がなければ成らぬと云ふ譯ではありません、そして此時も一點に　α　の勝と申します。

仕合の種類　第十圍を完結しても兩組が同點で、勝敗の決しない時は、第十一圍、第十二圍と更に同數だけ攻め合つて勝敗の決するまでします。之れを Tie Game と云つて、此時

も始めに守る組が、一點勝ちますとサイドアウトとならなくても勝負を止めます。又競技中種々の事情で中止したときは更らに仕直すのですが、審判者の命を用ひない組がありますときは、直ちに中止して、其組を敗にする法則です。斯様な場合を沒收仕合Fortified Gameと云ふのですが、攻め法に付て先づ此位にして守り法の事に移りませう。

攻める方は一人づゝ順に出ますが、守る方は十人とも總出です。此守る事をFieldingと云つて、十人各々異つた職務がありますが、大別すると、境界線以内を重に守る内野手が六人、其線外に立つて、守る外野手が四人となります。

内野手 を又細かに分けますと、擊ち場所を守るものが二人、壘を守るものが四人です。本壘は擊ち場所を守る選手の中で、一人が兼務するのです。役目の變つた方から言へば斯様な譯ですが、守者は誰でも一様に敵の擊つた毬を取る役があるので、ただ受持の領區が異ふだけなのです、夫故攻者の方は守者の受持領區の界あたりを狙つて擊つと、樂々と壘が取れるので、斯様に上手に擊つた毬をSafe Hitと申します。

擊ち場所の選手 先づ第一に御話するのは擊ち場所を守る選手たちで之れをBattaryと申します。則ち投手と取者との二人です。

投手 は守者總軍の主將で Pitcher 略してピッチと呼びPの略符で示します。このPが競場内中央の投げ場所の鐵の中に立つて毬を打手に投げます。敵の打手が夫れを打つと守者の十人の中誰なりと其毬を受け止めるので、若し敵が打たなかつたり或は打つても當らぬといふ場合には取者が取るのです。

此 になる人は主將だけあつて、頗る大切な役で、毬を或は速かに或は強く、或は斜に或は横に自由自在に投げられなくてはならないのです。敵にポカ／＼甘く擊たれて走りゐては直ちに敗軍となります。

Pは又た打者斗りに毬を投げるのではなく、既に壘を奪つた敵が大膽にも隙を窺つて壘を離れる、夫れを殺すため又は次の壘を奪はれない様に壘を守つて居る選手（味方の）へ投げる事も必要です。又敵の打つた毬で、自分の居場所近くて來たものは止めなければなりませんから、受取ることも上手でなくてはならぬので、又た場の選手が毬を追駆て居る時は、空いた壘へ行つて守ることもあるのです。

取者 はPに亞で大切な選手です。Catcher 略してキャツチと呼び、Cの略符で示します。これは確かな人物で取ることも投げることも巧みな人でなくてはならないのです、P

が投げました逸い毬でも、外に來たものでも又打手が打ち損ねじて後へ來たものでも、取らねばならないのです。それで敵が壘に居るとき、又は打者が三度打ち損じますと、打者の三四尺も後方に居て投手の投げるのを取らなくてはなりません。(是は壘へ毬を投げる必要もありますから)則ち壘に居る敵が、次の壘へ行かふとしたりしたのを殺すために、壘へ投げる事があります。併しCの處から、第二壘第三壘などは頗る遠い距離ですから、Cは受る斗りでなく、投げるのも巧でないと勝敗に少からぬ影響をします。又た取者則ちCは敵が本壘へ飛込まうとするときは、本壘の守將となつて備へを立てる務があります。

遊撃 とは Short Stop の略して ショート と呼び壘の略符で示します。則ち各壘と壘との間に立つて居る三人を申すので、中々忙しい役で又た頗る困難な務めです。敵の打つた毬が壘と壘との間へ來た時は、凡て此三人の中で外へ出さぬ樣に取り止めて、投手に投げ渡すなり、又た見計つて壘の撰手へなり投げ渡すのです。

壘の選手 各壘に一人づゝの守將がありますから丁度四人居る譯です、此撰手たちの務めは名の通り各受持の壘を敵に奪はれぬ樣にするので。敵の近づかぬ間は壘を中心として一二間周圍(壘を中心として)に居つてもよいが、敵が壘を奪はうとして馳走して來たとき投手なり、他の味方のものなりが、其壘の守將へ毬を投げる、投げられた毬は必ず壘の一片に足を置いて受取り、將に來らんとする敵を待つのです。敵に壘を奪はれてから毬を持つても既に遲い、又來る敵は決して手で防いではならない。必ず毬を敵の體へ觸れる樣にする。毬さへ一寸でも敵に付ければ其敵はもう撃死となるのです。

七 撰手、監督者及び補助撰手

撰手 一組十人の中から誰なりと一番巧者なものを互に撰して、代表撰手として審判者と協議をしたり、又は仕合の時に種々の指圖をさせる。則ち代表撰手は兩組から一名づゝ出る事になります。

監督者 之れは各撰手の後見となつて、仕合の前後に起る種々の事件を世話したり、時には注意もする。

補助撰手 撰手の他に豫め數名の補助撰手を設けて置く必要があります。畢竟他の競技と違つて、一定の人員を要するのですから、其中一人でも差支があつて缺けた場合に、之れを補ふ事が出來ないと競技の全體に影響するからです。

八　審判者

審判者は學校でしたら教師にお頼みした方がよい。其他の場合では兩組以外の人で仕合の規則に明るい人を頼む。要は公平で眼の敏捷な人に限る。常に壘の一間斗り後、Pの後に居て、一切の事件を一々大聲で裁判して双方の撰手に通告する、兩組のものは總て、審判者の命令を奉じて決して陰口などを云つてはなりません。

九　規則

此規則は少々長くて讀むにも面倒でせうが、これは此競技を行ふのに一番必要な事柄です、また他人の競技を見るにも此規則だけ覺えてゐますと一層興味があります。

投手について、投手が打者に毬を投る時は中央投場所の畫の中に居て眞直に立ち、審判者にも見よい樣にして投るのです。投げるときには決して此畫を離れて投げてはなりません。

打者について　打者はD・Bの左なり右なりにある打ち場所に居て打つのです。其場以外へ少しも足を出したら、また敵の取者の邪魔をすると審判者はStrike outと宣告します。是れは打つべき場所でない處で打つた、法にないことをしたから三度打ち損じたのも同様で撃死にすると云ふ規則に依るのです。また故意に變な打ち法をすると則ち人が見て卑怯だと思ふ打ち方をすると審判者はBunt hit outと云つて撃死の侶伴へ入れます。

生還と撃死　第一壘から第二、第三、第四壘と順に乘取を滯りなく奪へば生還した則ち安全に敵の壘を取て一人前の効を奏したのでそれをSafe 即ち安全とか又はHome 則ち巳に還入つたと申します。又次の壘へ行けなかつたとか、壘を離れてから壘の外で毬を敵に着けられたとか、五つの壘を通り終らぬ中に敵に毬を着けられたとかいふ場合には則ち故者は撃死をしたので、これをoutと申ます。

フライ・アウト　投手の投げた毬を、打者が打つ、其打つた毬が地に着かぬ中に守者の中で誰なりとも受け留めれば其打者は撃死となります。審判者はフライ、アウトと云つて打者の死んだ事を知らせます。(フライ、アウト)とは揚つた毬が地に着かない中に敵に取られたから死んだといふ意味です。)

守者の中で誰でもとは申しましたが、打者の後に居る取者(則ちC)が打者の三尺或は四五尺位も後で取つて居るとき、一寸ラケットでかすつた毬を打者の頭より高く揚らぬものを取つたのはフライ、アウトにはなりません、是は打ち損じになつたので、此時は審判者は打ち損じと宣告します。又守者が毬を取るにも衣服や帽子で取つては無效なので、矢張り手で受止めなければなりません。

此打者がフライ、アウトになつた時に既に壘を離つて居る攻者たちは壘を離れて走りかけて居たら急いでもと居た壘へ歸らなければなりません。其歸らぬ内に元居た壘へ敵が毬を持つて還入たら、又は毬を

壘に着けると走者も打者も共に撃死となります。此二人一度に死ぬ事をDoubleplay と申します。

ファイア・ヒット　打手が滿足に毬を打つた時は審判者はファイアヒットと知らせます。スルト打者は行ける處まで走つて行くことが出來ます。併し如何様な毬を打つたにしろ打手はラケットを置いて走り出すので、周章てラケットを持つたまゝ驅け出してはなりません。又壘に居た攻者は打者の撃つた毬の効能がある限りは、ドシ〳〵行ける處まで往つて差支ないのです。打者は撃つた時から直ぐにRunner則ち走者となります。

壘は走者にとつて丁度鬼遊びの時の巣の様なものです。夫故毬を打つたら其毬を壘の中へ投げ込まれぬ中に、壘へはいつて仕舞はなくてはなりません。折角打つても守組の誰かゞ夫れを受取つて第一壘へ投げ、第一壘の守者が足又は身體の何れの處でも、第一壘に着けて居て夫れを受取ると（直ぐに落したら受け損じです。攻者には好都合ですが）巣の内へ鬼が來て居る様なものです、第一壘は初めての壘でありますので、之れに鬼が這入ると最早行處がなくなります。審判者はファースト、ベース、アウトと呼びます。則ち第一壘に撃死との意味です、又第一壘へまで達しない中に毬を體に着けられたのもアウトです。

打者はファイア、ヒットを打つた毬が第一壘に入らない前に第一壘に飛び込まなければならぬのは前に申した通りで、丁度守者の手に毬が這入る時と飛び込む人の足がベースに着くときと同時ですと審判者は Home time Safe 即同時に安全に着いたと呼びます、是れで第一壘を無事に占有したのです。

また打者が甘い處へ打つたり守者が狼狽して打つた毬を取り止められなかつたら、また取つたにしても壘へ投げ損じたり壘の守者が受け損じたりして居て、第二壘にまで行つても毬は後から駈追て來ないと思つたらドン〳〵第二壘まで走てもよい、第三壘も大丈夫と思つたら續けて走るのも結構です。第四壘も慥かだと見極めが付いたら猶ほ進んで取る、H.B へ突貫されると思つたら其序に進撃して仕舞、斯様に自分の打つた毬の効力がある間に H.B まで無事に一巡して生還したのをHome in と申します、則ち滿足に一人前の効を奏したのです。併し實際は中々斯う容易に行くものではありません。

猶ほ二人撃死のある時、走者が第四壘に居る時．打者の打撃の効力が薄くて打者が第一壘で斃れた時などは第四壘の走者は H.B へ飛込んでもホームインにはなりません、無駄骨折のスタンデングです。尤も打者が一旦第一壘を得た以上は、假令第二壘又た第三壘あたりまで來て死んでも第四壘からH.B へ這入つた走者はスタンデングではないのです。打つた毬の効力で第一壘を得た時には同時に這入れば、セーム、タイム、セイフでしたが、第三壘や第四壘や H.B を取るときには其處の守者が足か又は身體の何れかを壘に着けて居て、毬を受取れば走者を逃せると云ふ譯にはなりません。走者が壘へ足でも手でも、又は身體の何處でも着ける前に守者は受取つた毬を走者の身體に着けるか、毬を持つたまゝ其手を着けるかしなくては走者を殺した事にはなりません。

則ち走者が壘に着かぬ中に走者の身體に毬を着けなくてはならないのです。之れも毬を着ける時に落しては無効です。併し之れには又少し例外の事もあります。例へて申せば第一壘に味方のものが詰つて這入つて居る時打者がフイア、ヒットを打つたとしますと、第一壘に居つた（則ち同組のもので前に打者となつた者）ものは是非とも、第二壘へ行かなくてはなりません、其理由は打者が走者となつてラケットを置いて第一壘に駈け込みます。處で一の壘へは同組のもの一人だけには安全なる隱れ場所ですが、二人同時には居られないと云ふ規則にしてありますので、夫故前から第一壘に居る人は、其處に止まつて居られない、是非とも次の壘へと進まねばなりません。

此時は第二壘の守者が足なり、また身體の一部分、何處でも壘に着けて居て、毬を受取らぬ内に走者は第二壘に這入らぬと撃死になります、審判者はセコンドベースアウトと呼びます、第二壘で斃れたと云ふのです、此時も毬が守者の手に入るのを走者が飛込むのと同時ですとセーム、タイム、セーフで助かります。落せば勿論無効です。

第一壘にも、第二壘にも味方の居るときには第一壘の走者は第二壘に行かなくてはならない、同時に第二壘の走者は第三壘へ移らなければならない、其處で其等各壘の守者が走者の來る前に、前と同樣な手順で毬を取れば其等の走者は撃死です。尤も同時に這入る時はセイム、タイム、セーフで助かることも同樣です

又四壘とも走者で詰つて居る時にも前と同樣で、徃く先々の壘の守者が體を壘に着けて毬を受取らぬ中に、飛込まぬと走者は撃死になります。四壘とも皆走者で詰めた所を Full Base 則ち壘に這入り切つたと申します。

フオール・ヒット　打者の打た毬は何時も甘く打てるとは限りません、夫れが地に着かぬ中に守者が受止めれば前に申たフライ、アウトですが時には意外な方向へ飛ぶことがあります、此際審判者は大聲でフオールと宣告します、フオールの時はPが打ち場所に立つて毬を持つまでは休戰情態となります、此間に行つた事は總て無効です、隙があつても走者は次の壘へ行くことを許さない、又た壘を離れて居つたものも一旦元壘へ歸し一寸體を入れなければならないのです。（足の先きでも一寸觸れたらよいのです）

スリー・ストライク　三度振りといふ事で、投者の投げた毬を打者が必ず打てると云ふ譯には參りません、投げたのが隨分意外の方へ行きラケットの屆かぬ事もあり、又た力が弱過ぎて地を這ふ樣にして來る毬もあります、此等は打つにも打たれない畢竟投者が無理なのであります、如何な毬でも打てといふのは誠に不都合で夫れには次の樣な規則を設けてあります。

先づ打者がラケットで受けても毬に中らぬと打ち損じたのですから審判者はストライク（則ち受け損じ）と宣告します。是は打者がラケットを下ろしてH.Bの眞上まで持つて來れば受け切れなくてもストライクにされます。

又投者の投げた毬がH.Bの上を通り、また打者の肩から下膝より上

の間を通る毬はストライク、ボール或はファイア、ボールと名づけて打者が打つべき毬としてあります。此打つべき毬を撃たなかつた時も打ち損じと同様にされますので、審判者は此時もストライクと宣告します。投者の投げた毬が打者の膝より上、肩より下を通つての端へ一寸でも觸つて居れば矢張ストライクボールになります。

ストライクが二度になりますと審判者はツー、ストライクス、三度になればスリー、ストライクスと呼びます。

三度打ち損した毬を取者（○）に毬が地に着かぬ中に受取られても撃死です。審判者はアウトを宣告します。此時はフライを取られたと同様に見做して走者があれば其、走者は是非一旦元の塁へ歸へらなくてはなりません。若し此三度振のときに、取者が受取り損じたり、又は一旦地に着いてからのを取れば、三度振の先生もよくないですが、取者も失策ですから打者の撃死にはなりません。

フオーア.ボール　投手が投げる毬でH.Bの上を通らずまた打者の膝から下、肩から上を通る毬は打者が打たなくもよい毬です、それは投者のわるいためで打者はよく毬の善惡を見分けて惡い毬は打たない様にせぬと損です。

惡い毬は打つても甘く行くものではないので斯様な善くない毬を投者が出し、打者が受けないときは審判者はボール（則ち投げ損じ）と知らせます。

此投げ損じを四回續けますと、審判者はテーキベース（則投者が四回投げ損じたから打者は第一塁へ往つてもよいと宣告します。此時第一塁に走者が居れば、之れも無理に第二塁へ移ることが出來、二塁にも三塁にも居るときは二塁は三塁へ三塁のは四塁へ移ります、又四塁ともにフオールのときは、順送りにして一人だけはH.Bに生還します。

また投者の投げた毬を打者が打たぬのに打者の衣服に觸れたり、又審判者に中つた時なども矢張投者の投げ損じとして前の通りボールと致します。

ブント.ヒツト　投者の投げる毬が打ち惡くて、迚も打てぬと思ふとき、又は取者の誰にも取れぬ様に毬を打たふと思つて、打者がそろそろとラケツトを出して毬を受け止める様な打ち方をする則ち毬をラケツトで打つ考へでなく毬が來てラケツトの方へポンと中る様に、故意とラケツトを出して居る、之れをブント、ヒツトと云ひます、畢竟卑怯な致し方ですから撃死です。

デツドボール　投者の毬が打者の身體に觸れたときは、デツド、ボールと呼んで、別段打者が受けなくても毬を取ることが出來ます、併し打者が始めから毬を身體で受ける積りで用意をしては撃死になります。

ロスト.ボール　競技中毬が見えなくなつた時は、審判者はロストボールの令で休戰します、此時は守者も走者も原の位置に留まつて、守者の一人が毬を探し出して見付かると同時に開戰します。

パツス.ボール　投者の投げた毬で打者の持つラケツトにもベースにも觸れないものを取者が取り損じた時は、走者は次の方へ行く餘裕があると見たならば次の塁を取るも差支ありません、然し如何に餘裕

があつても此場合には一つしか許しません、壘を二つを越えることはならん規則です。

又今云つた取者の受け損じた毬がＣの手に觸れないで地上を、轉々して審判者の身體又は椅や樹木などに中つて跳ね反して、取者の處へ戻ることがあります、夫れが爲め走者が次の壘を取らうと云ふ餘裕がなくなることがあつても、走者はずん／＼走り續けて次の壘へ無難に這入れます、取者は夫れを以て走者を殺すことは出來ないのです。

一〇　走り法　Running

走者は五角をなす線の上を走らねばならないのです、が之れには又た時に依り種々の例外の事もあります。

打ち場所から第一壘へ走る時は、始めの半途だけは線外を走つてもよいのですが、終の半途だけは必ず線から三尺以上外へ踏み出してはなりません。敵が狼狽して居るから今一つ先きの壘をも占めてやらうと思つたら（パツスボールの時は許しません）途中の壘へは一寸足を付けて（是は必ず足を付けなければならないのです）走る勢で飛越して次の壘へ行いつても差支はないのです。

また二つと限らずに三つでも四つでも壘が取れると思つたら、何れも斯樣に飛び越ても構ひません。次に敵が線上に壘を持つて待て居るときに、其敵に壘を着けられまいと思つても線の左右三尺以外に踏出してはなりません。それを犯すと審判者はライン、アウトといふて死者にします。敵が毬を持つて待つて居たら元へ戻るか、滑るかして敵に毬を付けられず、又た線も離れない樣にする工夫が必要です。

また毬を持て居ない守者が界線上に立つて居て、走者の進行に邪魔になると思ふ時には、輕く其人を脇へ突き出して通るか又は境界線を踏出して通つても差支ないです。守者は成るべく邪魔をせぬ樣に心掛なくては卑怯です。

次に打者の打つたフアイア、ヒツトに中つた走者は、何れもライン、アウトで撃死となる規定です。

次に投手の隙を窺つて壘を離れ、次の壘に成るだけ近くならんと出掛けた時、取者又は壘の主將の暗號で、投者が走者の壘を離れた事を知つて急に球を壘へ投げる事もあります。其時は壘の主將は其毬を受取つて走者の體に付ける用意をするので、走者は夫れ以前に體を壘に觸れなければ撃死となります。又次の壘へ將さに入らんとする時に體が壘へ着かぬ中に敵に毬を着けられた時も撃死になります。

是は總てベース、アウトと申します、然し毬が體に着くのと體が壘に着くのと同時になればセーム、セイフです。壘と壘との中間線上に死んだのはライン、アウトです。双方から

敵に挾まれた時によくある事で、此の挾む事は仕合に時々起りますが、中々愉快なものです。走者が大膽に壘を離れたり又は狼狽して居る中に守者が見出し、四人でも五人でも一人の走者を壘と壘との間に立往生をさせます。毬は唯一つですから、走者は毬のない方へ逃げ樣としますし、守者は走者の往く方の味方へ毬を投げ渡して走者を斃さうとする頗る愉快の活劇であります。

一一　休戰

競技者の中に差支が出來たり審判者に急用が生じたり、用具に破損不足を生じたり、其他演技場に故障が出來た時には審判者はタイムを呼んで休戰の命を下します。

一二　鬪戰

休戰して其事故が終りますと審判者は Play と呼んで開戰の命を下します。また守者と攻者と交代の場合には「用意と命じます。

一仕合終結して、勝敗の定まつた時には Game Set と申ます。

分り易く簡單に書く積りでつい長くなりましたが、先づ以上の規則で、競技をなせば大體間違はありません。併し始めに是だけの規則を呑込むのは一通りの困難ではありません。其代り少し忍耐して覺えて仕舞へば規則の複雜して居るだけに、興味も亦た一層であります。私も近い中に之れを實際に試みて見樣と思つて居りますから、實地練習の上でまた何か申述べませう。

愛と死の研究

戀に死するや餘裕綽々

生方敏郎

死に度いと思つたことも無し、又死を怕ろしいとか何とか深く考へたこともない。それでも知人の葬式の歸りには、一種淋しい瞑想に沈んだことは屢有る。死んで行く人を哀悼するよりも、後に取り殘された自分を淋しく思つたことも有る。

誰も彼も皆死んで行くのだ。爪の長い死の神は柄の長い鎌を持つて、何時我々の門口にたたずむかも知れないのだ。

今日我々は活きてゐる。明日我々は活きてゐないかも知れぬ。主は取り給ふなり。恁んな言葉をタマス、ア、ケムピスの聖書から示された時に、まだ若かつた私は膚に粟立つやうな神秘感に打たれて、創造者の前に慴れ伏した。それは若かつた頃のことである。

一年〳〵死の進行曲を奏しつつ人は墳墓に近づくに從ひ、却つて死のことを思はなく成る。若い時は將來のことを多く考へ、老ひるに從ひ過去のことを多く思ふやうになるのではないか？

私は毎日より良く生き度いとこそ思へ、死に度いなどと思ふことはない。

「死ぬほど貴女を愛してゐます」とか又は「貴女と一緒に成ることが出來なければ僕は死ぬ」

とも云ひ、又は「死んだ方がいい」とも云つた昔がないでもない。

そんな時、私は本當に死ぬつもりで言つたのでもなければ、先方を欺さうと思つて言つたのでは、尚更ない。ただこちらは戀の決死隊である、といふ意氣込みを示したかつたからで、その意氣を示す方法としては、「私は死にます」といふのが尤も自然らしく思はれたからだ。又、誰も男はこんな場合にさういふであらう、とも考へたからだ。

貴女の爲めには水火もいとひませぬ。貴女の爲めに死に度い。實際こんな事は戀する間柄では誰も言ひ交す言葉なのだ。戀に興奮してゐる時は、この位の言葉ではまだ物足りない位だ。

けれども、それかと云つて、

「では私の爲めに水の中へ飛び込んで下さい。火の中へ入つてやけどして下さい」

と云ふ者もないし、後になつてから

「何故、私のために死んで下さらなかつた？」

と言責を追求する女もなからう。

戀人たちの言葉には、そんなに言責はない。お互ひに好いことづくめ、結構づくめなのだ。それが夫婦に成ると、互ひに化の皮がはげて、戀心は醒める。故に曰く

結婚は戀愛の墳墓也――ナポレオン

けれども、普通に戀してゐる場合、お互ひに死なうといふより活きよう、そして互ひの愛を永續させようと願ふのが人情の常だ。

お前百まで、私や九十九まで、共に白髮の生えるまで。

戀愛を結婚に終らしめることは極めて愚な事であり、從つて戀愛結婚を理想とする如きは、まさにお坊ちやんお孃ちやんのお考へだけれども、それに相違ないけれども、併し戀人同志の間では

「何うしても一緒に成りませうね」

「屹度よ」

と約束するのが尤も自然である。その反對に

「お互の戀も二ケ月ぐらゐで一つ決算してみて、更に繼續するとも打切るとも、その場合次第で相互の協議の上で便宜に決定しませう」

なんて、都合のいい無事な戀愛が何處の世界に有り得るだらう。妾と旦那の雇傭契約でも、最う少し粘り氣があり、もう少し見榮と不合理とが有る。それが他日いざこざの基に成るが、男女關係としては何うしても此見榮と不合理なしには成立せぬ。故に曰く、

戀は盲目なり。

その旨目の度合の甚だしいものほど、詰り熱烈な戀愛とい
ふ事が出來る。無分別なる戀愛には秋毫の僞りも無い。戀は
噓で初まつて眞實に終る。いろは歌留多に「噓から出た誠」
とあるのは、この事だ。

無分別なればこそ、二人は結婚するのだ。無分別なればこ
そ、二人は添うに添はれぬ場合、情死するのだ。戀愛結婚と
情死とは、戀愛の後始末としては尤も拙劣なるもので、つま
り尤も無分別なるところより出發したからであるが、また尤
も僞りなき戀愛、純眞な戀愛、眞劒なる戀愛である。

戀を人生の遊びと心得、人生の冒險と心得て、之を享樂す
る一派の人々がある。彼は甲の花より乙の花へと、蜜蜂の如
くに甘い汁を漁り歩き、汁盡きれば他の花へと移る。よき頃
に切り上げるから、何れも永續きはしない。その代り何の花
にも夫れ〱心を惹かれるのだ。此世を肉の歡樂場とした德
川時代の町人の都會には、さういふデカダン派が殊に多かつ
た。大阪落語に各種の戀愛を魚類に見立てた狂句がある。よ
く人情を穿つてゐると思ふから左に引用して讀者のお目にか
けよう。

　　娘はんの戀愛は
鮓に漬てまだ氷くさきさよりかな
　　後家はんは
匂ひには誰もこがるる鰻かな
　　お妾はんやつたら
石鰻や毒のあるのを知りながら
　　下婢衆は
つまみ食ひ、後なま臭き鰯かな
　　乳母はん
食へば食ふ見れば無粹な鯰かな
　　尼はんは
蛸烏賊は何故か魚の樣でなし
　　他人の妻なら
鰒汁や鯛のあるのに無分別
　　自分の妻
これはまた無くてはならぬ鰹節

食ひ分けてみれば、何の魚にも手が出るではないか！
鱵とても二タ月も食べれば飽きようし、鰒汁いかに美味な
りとて、後に章魚の櫻煮あり鯰のすつぽん煮あり更に摘み易
きところにサルヂンの鑵詰あり、鰻の蒲燒ありと來たら、そ
れらを食べずに鰒と情死するのは、いかにも心殘りのことで
ある。さう思ふと、戀愛の享樂家には到底誰とも情死なんか

出來るものではない。恰度それは誰とも結婚出來ぬやうなものだ。

しかし、戀の火いぢりをする者は、いつかは火傷すると覺悟せねばならぬ。とは斯道の達人オスカア ワイルドの與へたる警告である。戀の享樂家もいつか其中には、米國大統領ハーディング閣下ではないが、蟹に中毒することもあらう。嫉妬に中てられて下痢することもあらう。その意味で人妻を鰒に譬へたのは、尤も面白い。恁くの如くして、戀愛享樂主義者は情死せざるまでも、情死よりもつとずつと惡い事——結婚することを避け難いであらう。

新聞に報道せられる多くの情死に就いて見るに、殆んど總てが戀仲になつてから二三ケ月目に死んでゐる。半年以上續いてからの情死は稀である。享樂派でなくとも、誰も二三ケ月目が戀の最高潮に在る時と見える。

遊蕩兒の情死は新聞にもある通り「お定りの金につまり」であり、素人娘の場合は「何うしても添はれぬを悲觀して」である。といふのは親持ち主人持ち（之は昔の事）良人あるとか妻子があるとか、三角だか四角だか何れいびつな關係に繋がれてゐるとか、またはそれ以上にも人の自由を束縛するところの「金の無い」が故からだからである。

金があつても死ぬ。何うかならぬこともないのに死ぬ。それは不思議のやうだが、之らは明かに死その物に誘惑されたのだ。

怕ろしいと思はれるものには、時々誘惑が伏在する。俗に怕い物見たさ、といふではないか？ 怕い物は見たい。近づきたい。知りたい。死の中にもそんな誘惑がある。

同じく死といふとも、意志に任せざる死、即ち他殺は怕ろしく同時に嫌なだけである。誰も人に殺されて悦ぶほど無神經な人間はあるまい。死刑ほど世に殘酷な刑罰は無い。之は人の意志に反して殺すのだからだ。他人に殺される事に方り從容として死に就く如きは、餘程の修養有る人でなくては不可能だ。人に斬られて電光影裡斬春風、といふ如き情景は悟りすました高僧に於いてのみ見られる事だらう。

けれども、之に反して自殺はそんなに苦しい事ではない。弱い者でも之を敢てする。私が此處にスティブンソンの小說「自殺俱樂部」の例を引くまでもなく、自殺といふ冒險には、云ふに云はれぬ魅力がある。でも自殺俱樂部の會員は、その鬮を引いたが最後、何うあつても自殺せねばならぬのだから、自殺といふものゝ半ば以上他殺みたいな他から遁られるところがあつて、從つて一倍怕ろしい。その鬮から運よく

脫れホツと一息つくところに此蠱惑があるのだが、普通の自殺は之と趣きを異にし、いやに成ればいつでも止せるのだ。だから決して苦しくはない。況んや、情死は一人で死ぬのでなく、道連れがあつて越える死出の山路だ。而かも、最も愛する戀人を道連れとして逝くのである。假うしてしまへば二人は永久に、意地の惡い岡燒連から邪魔を入れられる心配もなく、又分らずやの親類などから生木を裂かれる憂ひもない。既に現世に望を失つた者には、たゞ〳〵死出の道づれとしてのみ情死の對手をこしらへるもあり、又ト名ある地位ある男を對手にして死花を咲かせ、その芝居氣と虛榮心との滿足に對してニツコリ微笑して蓮の臺に乘らうと企む女さへあることほど左樣に、情死する者の心には綽々たる餘裕が有るらしく見える。（完）

愛と死とについての三つの見方

本間久雄

愛と死との關係を哲學的に考へるならば、例へばイギリス現代の思想家エドワアド・カアペンタア氏が、その『愛と死との劇』の中で論じてゐるやうに、この二つは密接不可離なものと考へられるでありませう。愛と死とは、その外形が變つても、その本質は、結局同じものであつて、寧ろ生命の一層高い階段を巧みに支持してゆくに、無くてならぬ必要な伴侶だとも考へられるでありませう。

かういふ哲學觀を把持する人は、大抵、生物學の根柢に立つてゐます。ごく卑近な例としては、卵を生んで數時間で死んで了ふ蜉蝣その他の昆虫類です。彼等の中には、羽毛が生えて、自由に飛ぶやうになり、互ひに異性を求めて、踊り廻り、生殖作用を濟ませ、卵を生むと、僅かに二三時間の間に死んで了ふものもある。これらは愛と死とがいかに密接不可離なものであるかといふ生物學的事實を說明するものであるといふのであります。そしてこれは高等動物においても同じことだと生物學者はつけ加へて居ります、

死は愛の極致だといふ思想も、結局は生物學的哲學觀から出たものであることは云ふまでもありません。これは愛と死との關係を考へる上の、たしかに一つの見方であります。

○

今一つの見方は死によつて愛を更に擴充するといふ見方であります。言葉を換へて云ふと、現實生活における愛の生活を、一層より豐富に味ひ、より永久に繼續し、より強く充實させることに、死を選ぶといふ見方であります。所謂情死又は戀死（love de fin）は、かういふ立場から解釋して甚だ意味の深くなる場合があります。

戀愛進化の研究家で、有名な『エロス』といふ書物を書いたエミル・ルカ氏の戀死觀はこれであります。即ち氏の說明によると、戀人同志が、戀によつて、又戀を通じて死ぬといふのは、より一層高い存在の國の神秘的な階段に至つたものであつて、この戀死の法悅境は、生きてゐては、到底味ふことが出來ない。といふのは、男女が二個であるといふ現實的事實は、必然的にこの法悅境を破るからである。戀死は實に、相愛する男女が、この二者であるといふこと、相互に分離してゐるといふ事實から逃れようとする一種絕望的な、而も又一種希望的な計企である、といふのであります。面白い解釋だと思ひます。

二人が別々の存在物であるといふ現實的事實を死の法悅の中で、二者一體の形而上的世界と化するといふことは、考へやうによつてはたしかに愛を一層擴充する所以であつて、面白い解釋だと思ひます。又、事實、これまでの文學に現れた、西洋の卓越した戀死物語などは、多くはルカ氏の說明した戀死の範疇に這入るものゝやうに思はれます。

尤も、日本の文學に現れた情死物語は、ルカ氏の上の解釋とは多少趣きを異にしてゐます。日本では、淺薄な小乘佛敎が、その死生觀にも非常に影響してゐるので、戀死なども、極めて淺薄なものとなつてゐます。即ち、現世と未來世とを截然と區別し、現世で得られない戀愛の幸福を、未來世で、享受しようとするのでありますから、ルカ氏の解釋のやうにどこに自我の擴充を見出すといふやうな法悅境は日本の情死には到底見出せません。日本のは、現世に於て得られない戀愛の幸福を、せめては、あの世で實現しようといふ、果敢ない、諦めから生じてゐます。それだけその法悅境も消極的なわけであります。

それはとにかく、ルカ氏のやうに、愛と死との關係を見る

ことは、情死又は戀死を考へる上に、見逃してはならない、興味のある解釋であることは疑ひを入れません。

○

上の二つは、愛と死との關係において、死を肯定した見方でありますが、更に他の一つは死を否定した見方であります。

これは、死をもつて、生に反對するものとして排斥し、飽くまでも生を讃美する生活肯定的見方であります。この立場に立つときは、死は、たとへ、そこにいかやうな條件があつても、結局生の回避です。責任の逃避です。愛は、その實現又は繼續においていかやうな迫害があらうとも、生きてこそ、その價値が愈々鮮かになるのであります。この立場から云へば、情死は――無論、悼ましい人生の事實として同感はしても――それは結局生活意志の薄弱の人の行ふことであります。生の壞滅者である死は、飽くまでも呪ふべきものとなつて來ます。

第一の見方は、生物哲學の見方ですから、暫く措いて問はないとしても、第二と第三とでは明かに反對の見方であります。一つは死によつて、更によりよくその愛の生活を生きようとし、一つはよりよくその愛の生活を生きるために、飽くまでも死を斥け、生を讃美し、肯定しようとします。

さて、吾々は、この三つの見方の中の何れを採るべきでせうか。それはその人々の人生觀の如何によります。第二の見方を採る人は、第三の見方を、恐らく樂天的で、淺薄だと云ふでせう。しかし、人類の向上を信じ、生活の進化を信ずる生活肯定者は、疑ひもなく第三の見方を採るだらうと思ひます。

私自身は、第三の見方を採りたいと思ひます。

頽廢的情死觀

千葉龜雄

圓滿具足な戀愛とは、自由そのものであり、解放そのもの自體でなければならない。たましいをも、肉體をも、すべて

を法悦のるつぼになげ入れて、狂はしいほどの享樂をむさぼりつくすところに、戀愛の極致がなければならない。しかるに個人は現實において、その手足をげんぢゆうに社會につながれて居る。種々ざつたな現實が、そうした戀愛の滿足を味はしてくれない。もつとも、せかれる戀に、なほ戀の味ひが深くなるともいふが、それも程度の問題である。しかし世間の迫害が、手も足も出ないやうに二人をとりかこんだとて、彼等はその、何ものにも換へられぬ戀愛の自由を決してそうやすやすと、世間に賣り渡したり、容易にへこんで了つたりせぬところに、戀愛が、どんなものにも見られないほど眞劍な本能の慾望であり、また何ものよりも熱烈で執着性にとんだ、兩性の感情の最高潮であることがわかる。かく、かれ等はたとへ他のどんなものをいけにへとしても、戀愛における自由と解放だけは決してゆづりわたさうとしない。が、その自由と解放とが、どうしても現世に求められぬとすると、彼等は今度は大事な自分達の肉體を破壊することによつてすらも、なほこの自由と解放を求めやうとすることになる。情死がそれである。といふ意味は、現實においては人間が社會からいましめられて居なければならぬのは、食ふ、飲む、生きるところの、肉體といふ物理的機構を持つて居るからである。だからこの肉體といふ物質さへ元素へ還元して了へば、もう何ものにも縛られずに、二つの自由なたましいは、永遠に無窮の空間と時間に悠遊することが出來るといふのである。これほど戀愛の希求する自由は大きく強い。

かゝる場合において、もう一つ、情死の歡喜を力づよくする屬性がある。お互がお互の爲に喜んで死んでくれるといふ犠牲心への感激であり、感謝でもある。生物は死ほどに恐れるものはないその怖れる死を、自分のために喜んでえらんでくれるといふお互ひの感激は、二人をしてもう死の恐怖などはいつしか忘れて了つて、喜んで死に急がしめるほどの強い引力がある。そしてその意識によつて、戀愛の最高潮に陶醉させることが出來る。赤熱した戀愛美がそこにある

またかういふ情死もある。感情のピッチは決して永續性のものではない。その熱烈さは、長い期間において、きつと急激なカアブをつくつて反比例に弛緩して行く。とりわけ戀愛の最高潮などといふものは、決して永い間同じ高度をもつて持ち續けられるものではない。今この情熱の最高頂に立つて居て、そうした衰退したときの空虚と淋しさを豫感すると、何ともいへない身ぶるひをおぼへる。だからこの最高潮の刹那において、二人の肉體を破壊してしまふことこそは、最も完全に、無缺に、二人の戀を永遠に持ち續ける企てではないだらうか。……といふので。有島氏が足助氏におくつた手紙の中にも、やはり秋子はすぐ飽きる性質の女だ「その時の倦怠と淋しさを想像するのはたまらない」といふやうな意味が

あつたやうに思ふ。これはまた、蛛蜘が生殖した直後の時間において、雄が雌の爲に噛まれて死んで了つたり、蠶が生殖した次の日に、すぐ死んで了ふと同じ意味のものにもなる。

次のは、「此の勝利」にあらはれたやうな心中である。自分は生きて居ても、どうしても、彼女の肉體と靈魂を完全につかみ、征服することが出來ぬ。それが出來るにしては、かの女の肉體と靈魂が惡魔性と精力があまり多く惠まれて居る。だからかの女を完全に征服するのは、たゞ二人の肉體の破壞といふ無窮への解放をもつてする外はないと考へるやうな、無理心中がそれである。これもまた戀する者が或る場合に當然に痛感されるべきはづで、最高占有性の最高潮の發現であらう。愛は所詮占有である。與へるものではなくて奪ふものである。惜みなく奪ひつくした後においてゞなければ最後の滿足は決してもとめ得られぬのである。

私はかくして主觀的に情死美が戀愛至上の美であることを認めるにちうちよするものではないが、それにかゝわらず、客觀的には、そういふものの妥當性を否認する。たとへば永遠の自由だとか、解放とかが得られるとか云つたところで、愛もそれは生きて居る間の主觀であるに過ぎない。或は主觀の遊戲であり、刹那の自慰でさへにも過ぎぬものではないか。なぜなら、自由とか、解放とかは、一つの相對價値である。生きた人間の意志があり、理知で批判すればこその自由であり、解放でもあらう。肉體が腐敗して元素に歸したものに、たとへば自由があつたにしても、誰が認め、誰がその價値を享樂し得やう。もしそれ戀愛の刹那のピッチを永遠に持ち續ける爲の情死といふものなどは、藝術的ではあるが、かゝる立場から見た人生は、あまりに頽廢し、倦怠した遊戲場ではあるまいか。人生にはもつと眞劍な努力がいる。その戀の高潮を、永續させるための努力さへもいる。要するに、戀愛はよくいわれるやうに人生の創造であると思ふ。戀愛は創造の喜びにこそ、人類をみちびくべきものであつても、まちがつても破滅の歡びへみちびくべきものではないと思ふ。

しかるに現代までの永い間のロマンチシズムの藝術は、とかく藝術を人生の中へ取り入れしめずに、かへつて、人生を藝術の中へ篏め込まうとするやうな、あぶない遊戲心を人間に吽んだ。かくして、生物が恐れる死を恐れずに死んで見せる。殊に二人で死ぬといふやうなヒロイックな氣分一つで人間は、もう一切の理知を無視し、二度と生きられない自滅の途を喜んで探るまでに盲目で勇敢となつた。一つは現代のやうに頽廢した、第二期文化の末路が、そうした遊戲氣分を社會に釀して居るためもあらう。しかしそうして死ぬ者は、始めから死ぬやうに、この頽廢的氣分に充分にひたりきつたものだ。もう今更どうしやうもない。たゞ新らしく生れて來るものは、そうした前時代の頽廢した文化にまきこまれぬやうな、明らかな理知と、正しい感情とがいる。

秩父宮殿下に侍して槍ヶ岳へ

木暮理太郎

（一）中房温泉

荒模様であつた空は、夜が明けると少し穏になつて、風は強いが雨脚は疎になつた。七月二十四日の朝である。松本驛前の旅館に泊つてゐた槇君と私とは、驛に向つて馳せ集る夥しい人の群に、それは秩父宮殿下が今朝此處へ御着になつて、やがて信濃鐵道へ御乗換になる、其折の奉迎奉送の人であると知りながら、又昨日中房温泉から殿下のお迎に下つて來た私等でありながら、忘れてはふと何事が起つたのかと怪しむのであつた。

汽車は定刻の午前七時二十分より可なり遅れて到着した。信濃鐵道では有明驛まで特に臨時列車を運轉することになつてゐるので、別に長いこと御待合せの必要もなく、殿下はプラツトホームに立たれた儘、伺候の人々に謁見を賜はり、お荷物の積入れが濟むと直ぐ御乗込みになつて、列車は有明驛に向つて出發した。

殿下は質素な登山服に登山靴といふお身輕な御扮装で、御附武官の竹本さんも御用掛の渡邊さんも、同じく登山の服装であつた。槇君は元より言ふ迄もない。唯だお伴の列に加はる縣廳の人達や、各新聞社の特派員の大部分は、私と同じ草鞋仲間なので、少しは心強くなる。

有明驛に着く頃から、山は雨に烟つてゐるが、里では雲が切れて幸に雨は歇んだ。槇君に人夫の指圖を任せ、私は御先導をつとめて、直に行進を始める。此邊の土質は花崗岩の霉爛した砂地である爲に、雨は降つても道は濘らない。途中有明小學校に御立寄になつて、記念の松を御手植になつた。殿下がお辨當や寫眞機や雨具などの御品を入れられた重さうなリユツクサツクを御自身お背負になり、アルペンストツク

を片手に、ゆつたりした御足取で、路傍に立つて禮拜する人達に帽子を取つて一々御會釋を賜はる御姿を拜して、その御無造作に驚くまでに感激しない者はなかつたであらう。殿下の御强健であらせられることは兼て拜承してゐたが、實際毎日二貫目から三貫目位をお背負になつて、御疲勞のさまが少しもなかつたのには、隨行の誰もが今更のやうに恐れ入つてしまつたのであつた。

宮城の有明神社に着いたのは九時半頃であつた。神明門や拜殿などの構造が精巧であるところから、俗に信濃日光の稱があるさうであるが、日光とは元より比較にはならない。時間はまだ早いけれども、此處で御中食をなさる御豫定であつたので、社務所では特に舞殿を裝飾して、御休息所に充る積りであつたらしい。されど殿下は神明門の傍にある老媼の茶店に御立寄になつて、御携帶のお辨當をお開きになつた。

此處から道は信濃富士の稱ある有明山の南側を廻つて、中房川に沿ひながら次第に山深く遡つて行くのである。約三里の行程も、時には晝も暗い程に繁つた森林を穿ち、或は脚下十丈の底に中房川の奔湍激流を瞰、又は徂來する雲の間から有明山の突兀たる姿を仰ぎなどして、鶯や時鳥の鳴く音に耳を傾けながら、三度目に中房川の釣橋を渡ると、間もなく中房温泉に達する。有明神社から四時間とは費さないであらう。婦人は勿論老人にもさして骨の折れる道ではない。温泉の在る所は海拔四千八百尺を越えてゐる。温泉は山裾の各所から湧き出して、盛に蒸氣を噴出してゐるのもあれは、沸々と熱い湯玉をたぎらしてゐるのもある。湯の種類も湯の量も極めて豐富で、幾棟にも分れた建物に浴場が設けられ、湯は滿々と湛へて而も溢れて止まない、實に氣持のよい湯だ。其外蒸風呂もあれば湯瀧もあり、泳げるやうな大きなプールさへも設けてある。そして餘つた湯は其儘小川をなして中房川に流れ入るのである。夫を見ると何だか惜いやうな氣がする。

殿下が温泉へ御着になつたのは午後二時半頃であつた。人夫を除いても四五十人の一行が押寄せたので、山中の別天地も都會の宿屋と同じやうな賑さである。温泉宿の主人は、漸く落成した許りの新館が殿下の御用に役立つたことを非常に喜んでゐた。二つの新浴室も一は御用、一は隨行者に充てられ、化粧煉瓦に裝飾された大きな浴槽は、此山中には珍らしいものであつた。

槇君と一緒に一風呂浴びて部屋に戻ると、殿下は御浴衣がけで、渡邊さんや竹木さんと明日入用の罐詰類をかれこれと

お選分の最中であつた。御手傳申上げてゐる中にも、明日の天候に就て「どうですか」とお尋がある。縣廳の人や記者團からは、明日の御出發時間を問合せて來る。兎に角天氣がよければ遅くも午前五時御出發のことに決め、お荷物を造り直して貫目を量り、人夫頭の畠山善作に米味噌其他の必要品と共に、一切の準備を整へさせた。

夕方になつてまた雨が激しく降り出した。そして容易に止みさうな氣色もない。しかのみならず翌二十五日の午前一時頃になると、東南の風が頗る強く、一陣の突風が谷から吹上げて來る毎に、戸障子が鳴りはためく許りでなく、家までも震動することがある。其中に闇を劈いで電光が閃き始めた。遠方で轟く雷鳴の音が何處からともなく幽に耳に傳はる。夜目にも萬象は漸く悽愴たる有樣を呈して來たことが窺はれる。二時――三時――四時となつても此狀態は變らなかつた。斯くては天候の恢復する迄御出發を見合せるより外に方法はない。竹本さんや渡邊さんと相談して殿下に渡邊さんが其事を申上げる。とうにお目覺であつた殿下は、私達が膝を崩して談合してゐる場所へお出ましになつて、「ひどい風ですね。硝子障子が頭の上に倒れるかと思つて、心配で寢られなかつた」とおつしやりながら、私達の申上げたことに對しては、「さうするより外に仕方ないでしやう」と御同意遊ばされた。

さしも險惡であつた天候も、しかし午前七時頃になると忽に雨も歇み、雲が途切れて西の山蔭から碧空が覗き出した。風も北に變つて、この模樣なら今日一日位は持ちこたへさうに思はれる。もう時間が遅いから最初の豫定通り槍の殺生小屋までは辿り着けないけれども、大天井迄は樂に行ける。それで午前十時御出發のことに取極めた。

（二）燕岳から大天井岳まで

中房温泉から燕岳への路は、もとは濁澤に沿ふて登るものと、カツセン澤に沿ふて登るものとの二があつて、兩方とも濁りの頭の三角點附近で一に合する。後者は碌に路形もなく、人も餘り通らない。大抵は前者を登つたものであるが、今は反對にカツセン澤の方が修理されて好い路となつた。始は木立のまばらな笹の深い山ひらを急に登つて、中房川と中川とを分つ尾根に出ると、其處は濁りの頭の三角點に近く、霧氷の垂れ下つた栂や唐檜などの立派な針葉樹林である。夫からは樂な登りを續けて、いつか木立を拔け出ると偃松の散生した草原に、黄金色の信濃金梅や純白な白山一華、夫等に交つて大櫻草小岩鏡などの紅花を點綴したお花畑を眺めなが

ら、燕の小屋場といはれてゐた山稜上の一地點に達するのである。以前は偃松で組んだ粗末な小屋が有つたり無かつたりしたものであるが、今は三四十人も泊れる立派な小屋が出來たので登山は非常に樂で便利になつた。其處から北に二十分も行くと大きな岩の突起に達する。それが燕岳であつて、二等三角點の標石があり、海拔高距は九千百餘尺と測られてゐる。

午前九時四十分に溫泉を御出發になつた殿下は、途中二回小休をなされたのみで、午後一時には小屋場に御着になつた。登るに從つて歩々に展開する高山特有の景象は時々「アいゝなあ」と獨言されるお言葉で、殿下のお氣に叶つたことが拜察されたのではあるけれども、夫よりも御自身のものは御自身お背負になつて、少しも苦勞をお厭ひにならぬ許りか、登山の御興味を登山其物に集中なされた、所謂登山の精神を既に御體得あらせられたと申上げて差支ない努力健闘の御勇姿を目のあたり拜して、登山者たる私は、恐れ多いことではあるが、全く嬉しさに堪へなかつたのである。濁りの頭の附近で休んだ時であつた、いざ出發となると誰か帽子を忘れた者がある　すると殿下は、成るたけ輕くしやうとして帽子を忘れた」とおつしやつたので、ドツと笑聲が起つた。これは勿論御戲談に相違なかつたであらうが、私には意味深く響いた。

小屋へは御立寄なく、外に立つて暫く御展望に時を費された。前面に高瀬の谷を隔てゝ屛風の如く聳立する立山後立山二大山脈の高峰喬岳は、雲の厚衾をすつぽりと被つて巓は見えないが、紫紺の膚に鏤められた無數の大雪溪は　銀の大鉈でも連ねたやうにキラリと光つてゐる。濛々とした霧が高瀬の谷から舞ひ上ると、雪溪の面は鏡のやうに曇つたりはれたりする。硫黃岳は間近く物凄い赭色の岸壁を峙て、其下を流れる湯俣の水は糸のやうに細い。峻嶮を以て聞えた槍ケ岳の北鎌尾根は、蓬勃として湧き上る雲が離れないので、終に、一度も姿を現さなかつた。

小屋から二十間許北に離れた草原で晝食にする。食後荷物を此處に置いて、雪のやうな花崗岩の白砂を踏みながら、燕嶽に往復した。此附近の山稜は幅も相應に廣く、偃松の綠と花崗岩の細沙と相映じて、白砂青松の景を作り、公園でも散歩してゐるやうな長閑さがあると共に、立派な花崗の巨岩も見られ、眼を上げれば四周の大山岳は長揖して吾を迎ふるが如く、かくて山を戀ふる若々しい心は、初めて鏑矢のやうに高鳴りするのを禁じ得ないであらう。お花畑の美は卽ち美であるが、この大自然の壯觀と孰れが印象深いものであらうか。

荷を置いた所へ戻つて、休みもせずに直に大天井岳に向つて南進する。これからは尾根通りを行くのであるから、餘り激しい登降はないが、目ま苦しい程多くの岩の隆起を一上一下しなければならない。先發した荷持の連中が三々又五々、陸續として辿つて行くのが遠くに見える。蛙岩といふ奇岸を過ぎた頃、高瀬の谷の空を掠めて、冷い風と共に雨が降つて來た。風の當らぬ尾根の窪で皆雨具を着けたが、殿下お一人はシャツの儘でお氣にも留められなかつた。

尾根に出ると風がワアッと摑みつく、そして油斷した人の體から帽子手拭其他何でも引手繰るやうにさらつて行く。白い霧の群れが老女の亂れ髪のやうに縺れ合つて、目の前をすうと流れる。偃松が荒れた手で繻子を撫で廻すやうな音を立てる。風がぱつ〱と息を切る度には吹飛ばされまいとして寄り懸り氣味に歩いてゐる體は、はづみを食つてヨロ〱とのめり出す、おのづと息がはづんで體が汗ばんで來る。大天井岳の近くで立ちながら一息入れた。

大天井岳は北から眺めると全くガラ〱した破片岩の堆積たる觀がある。切通岩を過ぎてから、この破片岩の堆積を三百米突もひた登りに登つて、頂上の一角を東から南に廻り込むと、偃松に圍まれた割合に石の少ない平な窪地に出る。此處が豫定された今夜の野營地である。見渡したところ餘り良好な地點とは稱し難いし、風當りも強い方であるが、之に優る場所は附近に見當らない。位置が定まると人夫に手傳つて早速天幕を張つた。最早暮れるに間もない頃で、霧に伴ふ風は漸く寒さを増して來た。水が無いので雪を溶して用ゐねばならぬ不便はあつても、燃料は乏しくない。天幕が形よくピンと張られると、偃松の小枝を厚く下敷にして、地面の凸凹を均し、其上に羚羊の毛皮を重ね、更に二三枚の毛布を一杯に擴げたから、狹いがフク〱と暖いお座敷が出來上つた。殿下は其間御愉快氣にあたりを御覽になりながら、焚火を圍んで餘念なく雪を溶してゐる人夫に、何かとお尋ねの御様子であつた。

お荷物を天幕の中に入れて、一通り整理が濟むと、殿下はすぐさま晩餐の御料理にお取懸りになり、渡邊さんや槇君もお手傳をした。何分下が平でないから、置物の据りがよろしくない。アルコールの火で毛布が黒焦になつたり、行李の蓋が蛇目形に焦げたりして、これは〱とお笑になる。一同殿下の御料理を頂戴して、賑やかな食事を終つた。暫くして新聞社の寫眞班の一人が野營の御有樣を拜寫したいと願ひ出た。殿下は「山賊の住家のやうだね」とおつしやりながら撮

影をお許しになつた。

槇君と僕とは別に天幕を張る積りであつたが、殿下の仰せに同じ天幕に泊めて戴くことになつた。お荷物にかける携帯天幕を人夫用に廻して、お荷物は皆天幕の中に入れた爲に、嘸かしお窮屈でゐらせられた御事と恐縮に堪えない。

夜半に幾度か露雨が天幕を叩いた。

（三）槍ケ岳の絶巓へ

廿六日の朝はまたしても灰色の霧が空を一面に閉じ込めてゐた。昨夜は天幕の大さに比して人の多かつた所爲か、思の外暖く感じたが、外へ出て見ると可なり寒い。昨日の暮方そこともなく霧の中へ姿を隠したお伴の人達は今朝何處からともなくまた霧の中から現れて、午前六時半に殺生小屋を指して御出發なさる頃には、昨日の通りに人數は揃つてゐた。

大天井岳から槍ケ嶽に連る尾根は東鎌尾根と呼ばれるもので、もとは之を縦走することは容易でなかつた。尾根が其名の如く痩せてゐて、險惡な岩壁を露出してゐる許りでなく、岩の無い所は藪が深いので、縦走されるにしても二日は要するであらうといはれてゐた。夫で燕方面から槍ケ嶽へ登る人は、大天井岳の南の東天井岳から二の俣へ下りて、更に槍澤を逆らなければならなかつた。然るに二三年前小林喜作といふ人が東鎌尾根の路を拓いて、大天井岳から殺生小屋へ通ずるやうにした。所謂喜作新道なるもので、登山者は其恩惠に浴することは甚だ大なるものがある。此道も今は縣道に編入されたから、以後荒廢するやうなことはないであらうと思はれる。

昨日の道を大天井岳の中腹まで戻つて、左に岐れて岸崖の横をうね〳〵と搦みながら、下るともなく下つて行く。牛首嶽を通り過ぎると路は尾根の南側に移つて、滑り易い草地を行くやうになる。此あたりから高瀬の谷がよく見渡された。霧が霽れたのではない、低い所へ來た爲である。赤岩嶽は北の半面をそぎ取つたやうにボロ〳〵の赤い岩壁を露出してゐる。殿下は夫を御覧になると槇君に「こんな岩でも登れますか」とお尋ねになる。「こんな岩は駄目であります」とお答へするのをお聞になつて「さうでせうね」とお肯首になつた。

やがて此尾根の最低所である八千二百尺の鞍部に達した。これからまた足場は悪いが骨の折れない登りを四百米突近く續けて、大槍の小屋を左下に眺め、最後に一の隆起を踰えると、行手に殺生小屋が現れる。小屋の前には大勢の人が立つて此方を見て居る。オーホーホーと聲をかけると向ふからも

返事をする。近づいて見ると夫は職員に引率された川越中學生十餘名が、他の五六の人々と共に殿下を奉迎してゐるのであつた。

小屋は三間に五間程の大さで、頑丈に造つてある。無理をすれば六七十人は泊れるであらう。其中三分の一程の所から仕切つた奥の間を殿下のお部屋にあて、板敷の上に羚羊の毛皮を敷詰めてあつた。小屋に着いたのは十一時半頃であつたらう。殿下は居合せた慶應の早川君や青木君をもお呼寄せになり、スープ、ライスカレイ、紅茶等をお作りになつて、一同殿下のお相伴をして晝餐を濟した。今日は廣いから昨夜のやうに物を焦すやうなことはあるまいとお笑になつたが、早川君の作つたライスカレイが煮えこぼれて、毛皮をしたたかに汚したので、どうもうまくゆかぬものだとまたお笑ひになつた。

午後二時頃になつて風が幾分か穏かになつた樣子であるから、槍の絶頂へお伴申上げた。槇君が綱の使用法を實地にお目に懸る爲に、アルプで氷雪の山稜を攀ぢる際や岩登りの折に行ふ登山の方法に從つて、綱を用ゐた。勿論こゝで其必要があつた譯ではない。絶頂は不思議に風が當らなかつたが、四方を雲に埋められて眺望は少しも得られなかつた。歸りには槍の肩から途を右に取つて、雪溪の滑降をお試みになること、これは殿下が兼てお樂みにしてゐさせられたものであつたやうに拜察した。

小屋は夕方になつて到着した登山者と、殿下のお伴をした人達や人夫等で、全く足の蹈入れやうもない程ぎつしりと詰つてゐた。殿下のお部屋は八疊敷程であつたから、今夜は樂々と御寢遊ばされた。思の外寒いので夜中幾度か目がさめる。岩角に嘯く風の音は夜終聞えてゐた。

(四) 上高地へ下る

明る二十七日は天候さへ良好ならば、午前三時頃に小屋を立つて、一日に槍穂高間を縱走する手筈に昨夜決めたのであつたが、朝は風も強く雲も低く垂れて、萬安を期し難い天候であつたから、午前七時まで待つて、殿下に對しては誠に申譯のない始末であるが、お附の方とも相談して、斷然上高地へ下ることになつた。小屋の人達は一齊に殿下の萬歲を三唱

して御見送申上げた。暫く下ると雪渓が始まる。今年は非常に雪が少いとの評判であつたが、夫でも十町餘りは續いてゐたらう。殿下は渡邊さんや槙君と先頭にお立ちになつて、一氣に之を滑降された。雪が盡ると左岸に道が通じてゐる。この道のない頃は、渓流を徒渉したり兩岸の藪を押分けたりして、非常に困難したものであるが、今は道があるので絶對に徒渉の必要がなくなつた。小屋も赤澤の岩小屋附近に槍澤の小屋といふのがあり、坊主の岩屋附近に大槍の小屋があり、其上に殺生小屋がある。最早野營の用意などせずとも、槍ケ岳から上高地又は中房へ自由に行かれるやうになつてしまつた。

黒澤の合流點附近で晝食を濟し、追々と開けて來る梓川の河原に林をなして生へ茂つたドロ柳や河楊のしなやかな枝葉が河風に飜るのを美しと眺めて、足觸りの柔い原始林の道を一直線に辿り、徳本峠の道と合してから、右に仰いだ明神岳の巍々たる姿を後にして、前面に燒岳の噴烟が現れるともう河童橋である。このあたりは楊も白樺も大方伐り盡されて、殆ど元の面影は認められない。河童橋から南すること更に十町で温泉に着いたのは午後三時半であつた。

翌二十八日の午前は、附近の大正池の跡や田代池を御見物になつたり、燒岳の噴烟を御覽になつたりして、この名高い上高地に半日をすごされ、正午此處を御出發になつて、徳本峠をお踰えになり、島々から電車に召して、松本で中央線に御乘換、廿九日の午前四時新宿驛に御着、私は心から殿下の御健康をお祝ひして、お暇申上げたのであつた。

秩父宮隨行登山日記

槇有恒

七月廿四日

脊に御自身の御辨當、罐詰、御飲料、御食料、約三貫目程の重量のリュクサックを御背負ひになつた御丈飽く迄高く、强壯そのもの〻やうな典型的のスポーツマンとも仰ぎ奉る殿下の凛々しい御姿を松本驛頭に木暮氏と共にお迎へする。東京からの隨行竹本氏と渡邊氏、恐れ多い事ながら殿下をお交えして總勢五名、信濃鐵道に投じた。

有明驛で下車。

有明は有名な天蠶の産地なので、一般民業に常に御注意を拂はせられる殿下は、有明小學校に御立寄になり、審さに天蠶及其製品を御覽になつてから直ちに有明神社にと御徒行になつた。

有明神社の前に小さな茶屋がある。此處に御入りになつて本當に無雑作に御晝飯を御召しになつた。

愈々之から、今宵の御泊りと定められた中房溫泉にと向はせられた。蜿蜿磊磊として續く三里の險路を、平然として御强行遊ばされる畏こさ。もう本當に夏だ。ジリ〱と照りつける烈しい炎陽の下を只管お伴申上げる吾々でさへ、幾度か汗を拭はなければならぬ。

やがて、榮ある日を迎へ奉る悦びに輝いた中房溫泉に着(註―中房溫泉は地名にして宿の名)

前を渺漫として響き流れる溪流の涼しさ、さては山々の夏に生くるおほいやかな姿、木々の粧い、閑雅な、美しい此處の眺めには殿下もお悅びになつた事であらう。

廿五日

昨夜から今朝にかけて、激しい雷雨と山風が猛り狂つた。突然のこの光榮を辱なうする山々の、あまりの驚喜であらうか。豪壯な狂熱的な自然の大シンフォニーの調べは明けても中々に止まぬ。午前五時御出發の豫定はこの爲に中止にな

つたが、八時頃になつて漸く狂嵐の交響樂は靜まつた。前夜來、既に御出發の用意は出來て居るので、十時に中房溫泉を御立ちになつた。

愈々、六千尺の高地の山道に掛ると、暫らくにして密集した森林帶に入つた。この邊には唐松林が多い。水々しい深綠の下には、スヰートな匂ひの高い高山植物の花は、一面に咲き亂れて、神秘と幽雅なハーモニーを漂はせて居る。爽々しさの限りの高山地帶の氣分に滿たされる。

ゆく〳〵、灌木地帶に入れば、見よ、西南の方、碧うみおほいやかにひろごり晴れた、悠遠壯美を奏づる天の世界に、高く、男々しく、白雪のうすく纒ふて聳立した槍ヶ嶽のすがた。殿下は、非常に御悅びの樣に拜した。吾らの胸にも、冴えた激しい血が、一瞬にして醱酵する如くむらがり湧きつ、流るゝを覺えた。

午後一時燕嶽の鞍部の小屋に到着。

殿下は小屋の傍の丘上、野天の石に御坐しになり、御手づから御湯を湧かされ、鑵詰をおあけになつて皆にすゝめられ乍ら御晝食を召された。小憩。

海拔九千尺の峻峰、燕嶽の頂上を極める。

山は純白の花崗岩より成り、宛然、白砂の盛られたやうな中に美しい駒草が咲き亂れ、このわたり一面、淸淨きわまりない氣分だ。

遠く白蛇の霧のうちに靜かにうねりゆく如き高瀨川の溪流を隔てゝ、烏帽子嶽、双六山の連山が一望の中に迫つてくる。夢のやうなこの景色を心ゆくばかり御賞美なさる殿下のお欣びを拜することを得た私たちにも異常な感激が絕えない。

ふたゝび鞍部に下り、さらに大天井に向ふ。

大天井の東南の鞍部に天幕を張り、露天夜營の用意をする頃から、雨が頻りに降り出して來た。人夫等が天幕を忘れて持つて來なかつたので、殿下は御携帶のテントを人夫に御與へになつた。人夫等始め私達の恐懼は云ふ迄もない。

殿下は極めて御元氣で、天幕の中で御自身、ライスカレーを御作りになり、紅茶を汲まれて、鑵詰を同行者に御勸めになつたが、殿下の御料理に御堪能なことには、實際吾々は驚かざるを得なかつた。

夜に入つて風は益々激しくなり霖雨降しきつて寒さが甚しかつたが、殿下は安らかにお眠りになつた。

私達は殿下の御召により、私達四人だけ殿下の直ぐの御傍に眠るの光惠を得た。

廿六日

霧の深い朝である。剰え風が強い。が、敢て冒して、山稜傳ひに赤岩嶽に向ふ。

今年の二月、なだれの爲に死んだ名物の山男喜作が發見した喜作新道を通り、上り下りの極めて激しい山稜を傳つて、正午頃槍の下の殺生小屋に着く。

槍ケ嶽から吹き下ろす風は彌が上に激しく、天候は益々險惡になつて來た。

殺生小屋の一隅をし切つて、殿下の御小憩所にあてたが、小屋内には一般登山者が一杯に溢れて居る。

槍ケ嶽より穂高に縦走する時にロツプを使ふ御豫定になつて居られたので、この御手傳ひの爲に慶大生の早川君が此處で殿下をお迎へして、同行する事になつた。

愈々槍ケ嶽に登る。風は益々激しく吹き下ろす。

殿下はロツプを御使ひになり、ロツプライビングを爲すつて御登山になる。かくすること暫らく、やがて槍ケ嶽の頂上に達した。

頂上は霧が深く立ちこめて、雲は幾重にも山を巻き、甚だ展望を妨げてゐる。槍の頂上に立つと同時に、私達は雲の中に立つてゐるのだつた。私達は太だ落膽した。が、そのうち雲の或部分が次第に薄れてゆき、やがてはつきりと切れ目が出來た。それを透して、私達は見得る丈のものを凝視した。諸連山を覆ふた白銀の輝き、誇り、または渓谷の殘雪が、隱見して吾らの双眸に迫つてくる。矢張何と云つても此處は槍の山頂だ。肅然として磅礴する神氣は、期せずして吾らの心琴を搖るがす。下山。

殺生小屋まで下る途中に、殘雪の渓谷がある。非常な急傾斜の上に、岩崩れが多く、轉べばデブリーにつまさゝれるやうな處で、「雪すべりをしませう」と殿下は仰言つてから、ドン〳〵御下りになつた。殿下は非常にスキーが御達者で、然かも極めて頑健な御體格なので、御足の頑張りの強いことは實に驚く程である。一度壯快に白雪を蹴たてゝ、御下りになつた殿下は、又御上りになり、又續けて雪すべりを遊ばされた。私達はその豪壯な御氣性に只々氣を呑まれるやうな感じがした。

小屋に歸ると、例の通り一般登山者で一杯である。學生等を御座所近くおとめになつた殿下は、いろ〳〵登山の話などを御聞きになつたが、其御態度等は、全く何の御氣障りもこだわりもなく、御親しさの限りを極めて居た。

廿七日、

天候はさまで險惡と云ふのではないが、荒模樣ではあるし、それに此處はよく岩の落ちる處なので、殿下の御身體に萬々一のことがあつてはならないと、今日の御豫定である槍ヶ嶽より穂高への御縱走の御中止を御願ひした。

殿下は「是非行つて見たいが、又來るから、此のつぎにしませう」と御仰せになつて、非常に御心殘りの御模樣であるにも係らず、御快ろよく御中止になられた。

それより殺生小屋を御立ちになり、下山の途におつきになる。

槍澤の雪溪をすべつて一瀉の意氣で下る程に、暫らくにして森林帶に入り、涓潺々として水清い「梓川」の溪流に沿つて上高地に着いた。

そこのさゝやかな一軒の温泉宿に今宵の御宿泊を遊ばされる。

夜に入つて天候ががらりと變り、すつかり晴れ渡つた。霞岳に走る雪流の間に、冷たい〳〵月光が澄み照つて居る。無限界の奥深く、うみ空に息づく無數の繁星。溪流のほとりにでもあらうか、河鹿が、ちら〳〵と囁き流れる水に和して澄んだ聲で鳴いて居る。冴え〳〵とした眺めだ。靜かな山村の夜——。

廿八日、

午前中は上高地に御滯在になり、大正池、田代池等を御見物になつた。

上高地に堀立小屋を作り、此處から登山して居る、學習院、慶應の學生等の一團があつたが、殿下は此處で、學生の作つた紅茶を御召しになり、學生達を相手にスキーの御話をなさる。學生達から、御殘りの鑵詰など拜領したい旨を申上げた處が、殿下は微笑を御泛べになり、鑵詰等を御下賜になつた。

上高地で御晝飯をとられ、徳本峠の險を越えて、島々に向ひ御出發になる。

徳本峠は、上り二里、下り三里の大險所だ。然かも燒きつくやうな炎熱を冒して、殿下は非常に强行を御續けになり、峠の鮨止めの茶屋で御少憩になつたが、此茶屋に幾百年の風霜を經た古い柱が鬱蒼として繁つて居るのを殿下には非常に御興味深く御覽ぜられたやうであつた。丁度此時は午後三時半、島々より約半里の處には六時半に殿下の御乘りを待つ電車が用意されてあるのだが、——

御出發までには三時間より時間はない。
鯱止から島々までは約三里半の里程がある。それは亦非常に險峻な路だ。三里半の此谷道を三時間で走ることは非常な困難でなければならぬ。然かも殿下は、時間に間に合ふ樣にと、吾々を促して大强行をおはじめになつた。さうして豫定よりも三十分早く島々へ御着きになつた。

殿下の御健脚と御元氣には、實際驚嘆の外はない。三里半の山路を僅かに二時間半で强行せられた事は、他に類のない位である。同行者には落伍者さへ出來た程だ。私達も滿身濕汗に浸つたやうになり、息苦しささへ覺へた。に比して、島々を經て電車の停車場まで一氣に强行された殿下が、眞に平然とした御容子で居られたのには、只驚くより外なかつた。

殿下は御自身の水筒を御開けになり、先づ隨行者に水を下された。

此處から電車で松本に御出でになると、又御見送りの學生等を御召しになつてスキーの話等御聽取りになり、一同御見送りの禮に、松本を御發車、御機嫌よく御歸京になつた。

私は松本で殿下を御見送りして、御分れした。

殿下の御伴をした今度の登山は、嘗つてない程異常な感激と悦びに終始して居た。永久の光榮、さうして御なつかしさ。私の胸には、光のうちにたゝずまふての追憶が、深く深く刻み込まれて居るのだ。

非常に愉快な、そして感激の多かつた登山をさせて頂いたことを、はるかに深く殿下に感謝申上げる。

感想、

登山は決して樂なスポーツではない。
時候は炎熱酷暑の時であるし、山地の天候は急變がちだ。
支度は夏冬の用意をしなければならない、重い荷物は背負はねばならぬ。加ふるに險はしい道を登渉し、非常な困難不自由と闘ふのだから、一通りや二通りの苦痛ではない。

しかし、この困難と不自由とをよく超克して、峨々として白雪を頂く險峰の絶頂を極める時、そこには、全く塵界を絶した、美しい世界を見、大自然の磅礴する靈氣を感ずることが出來る。これこそは、實際に經驗したものでなければ、夢想だも及ばぬ美の世界である。

太だ畏れ多い言葉ではあるが、忌憚なく云へば、殿下は實

に立派な登山家であつた。

殿下は背に二貫五百目乃至三貫目の御荷物を御背負ひになり、一貫して徒歩を以て、御通しになつた。例へば、有明から中房までは途中馬車の便もあり、島々から停車場までは自動車が通つて居たが、殿下は決してこれらを利用なさらなかつた。

御入用のものは全部御自身で御携帶になり、一般登山者に對しても、絶對に迷惑にならないやうにと御心掛になつて居たが、小屋では特にこの邊の御心遣ひを拜察した。決して特殊の設備を御許しにならず、全く一般登山者と少しも變らない御登山を爲さつたのだ。

殺生小屋では、百人以上も一般登山者で一杯だつたのに、殿下は小屋の一隅に小さいしきりをした丈で、何の御氣障りもなく、本當に普通一般の登山者と少しも變らさせられなかつた。

殿下はどんな困苦にも平然として御出でになる力である。そしていみじさ極りない　い御心使ひをして下さつた。例へば、御憩ひの時にでも、先ぢ水筒の水を御伴のものから下され、その後御自分が御召しになると云ふ風であつた。

あらゆる困難と艱苦に對して、飽迄も勇敢であらせられ、凛乎とした男性的な御態度で御終始遊ばされた事は、私としては御驚　申上ると云ふより外適切な言葉を見出し得ないものだ。

甚だ粗野で蕪雜な畏多い言葉ではあるが、若し敢て申上ることが許されるならば、殿下は、全く青年らしい青年、スピリットに滿ちた青年だと申上げたい御方である。

わが家の趣味生活

自然兒の生活

若山喜志子

目に觸れるもの、耳に聴くもの——すべて自分の感じに入る——あらゆるものが、大きな力をもつて何かしら前進してゐる、其の足音がきこえる、見える、自分ひとりがとりのこされて、後へ〳〵と退いてしまふ……。

こんな感じが私をとりまいて、しばらくもぢつとしてゐられない焦燥をおぼえる時がよくある、さうした時私は、目の前に擴げられてある日常の何でもない仕事——たとへば縫物とか、子供たちのめんどうをみてやるとか——が實に耐へられない重荷と思はれ出し何も手につかなくなる、そして用もないのに家の中をあちこち歩いてみたり、坐つてみたり、あゝ自分はもうすべてがおしまいだ！　と心の中で叫ぶ。

あゝいやだいやだ！　また始まつた！　それが自分でもいやで〳〵仕方がない、どうかしてこの心を靜めたい、なだめたい、といふ心持がいつかしら外に出て庭を歩くやうになりそれから考へ付いたのが庭の草をむしる一方法であつた。

程よく濕りをもつた冷たい土の上に直かにゐて繁多に生へてゐる小さい草を叮嚀にとつてゐると、次第次第に心が靜まつて來て、清々しくおだやかないゝ自分に歸つてゆく。

かうして取りなほされた穩かな心をそのまゝに把持してゐる間の幸福は、もはや自分一個のものではなく、一家の者を明るく温かくする二重三重の幸福になつてゐる。

この心持は、夫が常に我れとわが魂に眞向ふ事のできない

苦しい時々を散歩に出たり、旅行をするそれと相似てゐると思ふ。兎に角く自分たち各個々の生命を、よりよく生かせたいためにお互にわき眼もふらない生活をしてゐる、ある時は實際血みどろな自分たちとさへ思ふ。

「自分たちはわき眼をふる餘裕がない、ひたすらに自分を目がけて生活してゐる」といふ言葉は、甚だ孤立的にきこえるけれど私たちの場合はそれが、可成いゝ意味の善良な個人主義であるらしい。

そこに四人の子供たちが大きい恐ろしい魂の瞳をこらして活躍してゐる。しかも子供たちは子供たちで勝手に自分の世界を造り、曠寞なその中に躍り跳ねつつをやみなき成長をむさぼり營むでゐる、この子供たちに向つて私たちは強いて子供らしい扱ひをする必要もないと思ふしまた、成人した者のサークルに入ることを拒む必要もなからうと思つてゐる子供は實にデリケートな聰明なものであるから。

家の周圍が今のところまですべて田園なので不斷に新鮮な自然界のさまざまに接することができ、一歩戸外に出れば直ちに美くしい草花は子供の手に摘まれ、四季折々の鳥は自由にわづらひなく囀つてくれる、若し土地を耕やす勞を厭はなければ豐潤な野菜、果實は思ふまゝにとれる、現に自分たちの手で庭を耕作して植ゑ付けた茄子、トマトの類はそれ〴〵に成育して食膳をにぎはしてくれてゐる、私たちは心ゆたかに、もつとも自然に、はぐくまれつつそれらに對して感謝しなければならない。

それはさておき、これは恐らく私の生涯を貫いての權威であらうと思はれる夫の酒を嗜む一事、此れはもはや私は希ふといふことを知らないのだ、過去に於いても私の心を一點暗く晴やかなる時を——たとへ一時であつても——私から奪ひ去る妖魔！とさへ叫ばせた此の酒、今はもうなげきはすまい、生命に亞いでの愛しいものにみえる其の愛する酒を今更全然斷たせてしまつて、それで何にならうぞ、彼れの生活からこの一物を奪ひ去ることは既にあまりに忍びられないことに思はれるものを、しかし、この酒に對しての惱ましい不安な爭鬪は彼自身にも痼疾のやうに魂の底にこびり付いてゐるではないか、ああ何といふ矛盾であらう。

酒に向へば我を忘れ時を超越したゞ唯純眞無垢な酒中の仙となつてゐられる夫の、その底しれぬいのちのかゞやきを最初のころはたゞ、呆然として見つめてゐた。それから徐々にひそかに憂へた、今は全く物質といふものをはるかに遙かに遠く蹴落してしまつたところにある底暗い愁ひなげきである

だがそれが今更何とならう、行くものはゆかしめよ―あるがまに任らしめよ！と叫ぶ。
私たち家　の趣味生活といふことを書くに當つて、さて何としたものであらうと大いに迷つた。これと取り立てゝ記すべき特殊な――たとへば絵画とか音楽とか――いふものに就いての趣味は全然無いではないが、今のところさうした事に心を傾ける餘裕がないので何一つこれと云つて擧げる何ものもないのを甚だ殘念に思ふ。私たちはあまりに自然兒だからではないだらうか。あまりにプリミチブな生活をしてゐるからではないだらうか。「これよし…」と心にひゞく物のすべてはみな自分たちの生命をたのしませ成長さしてくれる賜物に外ならないのであ　から……。
たゞお互に、こぞつてたるみなくそれ〴〵の生命に對立して生きてゆきたい。ゆかせたいの希ひが私の家庭生活の全部であるから。
今はひたすらに合掌禮拜しつゝこの筆を擱く。

暢び行くまゝ

三宅やす子

× 日

「ウーマンカーレント」の原稿を印刷屋へまはす日が迫つて居るので東京からTさんが取りに來て、今朝の汽車で歸京、これですつかり九月號が出來ると思ふとやうやう少し氣が落ちついて、初めて、暢びりとした氣持で、海も眺められる。
此頃靜かな日が續いて、毎日二つや三つ地曳網のかゝらぬ日はない。今日も地曳の旗が立つて、遠くに人寄せの笛を吹いて居るのが聞える。
沖の方が晴れて、アメリカ通ひの汽船がかなり早い速力で走つてゆくのが見える。ぢつと其海を見て居ると、刻々に色が變つてゆく。
空と海との一碧を區切る砂丘のこなたの草原には牛が三匹許り、終日尾を振つて草を食べて居る。
仕事に疲れて、海を眺め、又眼を轉じて、此草原の牛の動

作をみまもり、砂丘の下の川の端に、チョコレート色のまる裸で遊ぶ里の子らの動くのを見て居ると、私の心には、何もわづらはしい刺戟がなくて、只ゴーッと云ふ波の音をボンヤリと聞いて居る許りである。

日でりが續いて、庭の南瓜はもう葉がしをれた樣になつて居る。其中に三つ四つ、小さなのがころがつて居る。玉蜀黍は風が烈しいので木が育たずやつと針金塀の高さまでになつて、でも時々のおやつになる。瓜も茄子も砂地でよくも出來ないけれど、人蔘だけは少し元氣がよいので折々拔いてはサラダになる。

折角種を撰んで送つたトマトが植えなれないためか木だけ僅に生えた許りで今年はトマトをいくらでも食べられると樂しんで居たのはむだになつた。そして、市――毎朝早く少し先の四辻で開かれる野菜や反物の賣場――でみつけてみんな買ひ占めて、また出來たら皆持つて來て呉れと野菜賣の婆さんに豫約して來た。

隣り――と云つても一丁あまり畠をあるいてゆきつく茅屋根の家――の子が晝過大きな皿を抱えて來る。

「大工さんが入つてるで、オコヂヤをこしらへたからお上りなさい」

避暑客が來るので大工が家を手入して居るのだと云ふ。

土地では大工のために毎日おやつをこしらへて澤山出すのださうで、毎日其子は赤飯、お萩、ごもく、と米を澤山つかつた手のかゝつたものを家にも持つて來る。

田舍風の味がおいしいと子供らはじめ皆でそれを樂しみに待つ樣になつた。

「今日は何？」

長女があけて見て

「何、これ」

「ホウチョ」秀ちやんといふ子が云ふ。

「庖丁？　庖丁で切つたの？　變なもの」

毎日ごもくの方がいゝなあ、などゝ勝手なことを云つたりして、それでもおなかが空いてると手にとる。

「大工さんいつまで居るの。いつまでも居た方が可いに」

來た頃は毎日午前と午後ときまつて海へ出かけた子供らも少し倦きたと見えて、此頃は、時には、パステルを出したり下の子も眞似をして山や海を眺め乍らクレオンを動かせて居る――それから蓄音機が一しきり。

「あの舟、あんなに舟が歸つて來る」

私は沖からかへる白帆の數に驚いて云つた。

「おさかなが取れたのよ。あんなに澤山歸つて來たんですもの」

「買ひに行きませうか」

長女より少し年上のHさんが云ひ出す。

「行くわ」下の子が取りつく。

やがて三人の姿が丸木橋を渡つて砂丘の後にかくれる。

そんな時が私の本當の時間、讀むにしても書くにしても、氣の落ちついた、尊い時なのである。

女中が風呂を焚きつけて居る。

それがあつくなつた頃、少し疲れたような三人の影に土地の子の秀ちやん、政ちやんも一所に、風呂敷を提げて來る。

庖丁をといで待つて居る私に、

「ハネてこまつたのよ」

中から出たのは鱸が一尾。

やがて、あらひと、鹽燒と、うしをが出來上る。

「遠くを歩いておなかゞすいたでせう」

廣くとつた椽側の、テーブルの上で、少し強すぎる夕風に吹かれながら、暮れてゆく海と島をながめ乍ら間に合ふといふ許りの食器を並べて夕飯を食べて居ると、向ふの島に黑い人影がして、

「こんちは」

經木の海水帽をかぶつた郵便屋さんが符箋のついた郵便物をドサリと椽側に置いてゆく。

此靜寂な生活に、待つて居るものは此トボケた様な郵便屋の訪れ許りである。

急いで手紙の封を切る。新聞をひろげる。郵便の來た時だけ、私の心は一寸忙いきもちに返される。

私たちの趣味は旅行

大村嘉代子

趣味は各自の持つべきもので、他からみだりに口を入れるべきものではありません。

さう云ふ點から、私は家庭内の趣味は一致しないでも可いと思ひます。各自の趣味をお互ひに、助長させて行く事が出來れば、それで充分だと思ひます。私はさう思つて居ますから、しひて家庭内に趣味の一致を、望んで居りません。

一人が建築に趣味を持つ事もあれば、一人が解剖に趣味を持つ事もあります。一人が靜座に趣味を持つ事もあれば、一人が運動に趣味を持つ事もあります。たゞ人の趣味をいやしめずに尊敬を持つて見ると云ふ心を、各自の心にそだてゝ行くのが主婦の務と云へば云ふのでせう。くどくも云ふ樣ですが、必ずしも一家の趣味を一致させることはありません。各自に好きな方に向かせて、お互ひに助長して行かせるその梶のとりようは、やはり主婦の手にあるのでせう。

そんなふうに、簡單に考へて居る私のことですから『我家の趣味生活』はと聞かれると、一寸當惑します。各自の趣味の道は各自があるいて行くだけです。然しそのうちで一致した趣味を拾ひ出すとしたら、それは旅行です。

冬のお休みは短いので、伊豆の田舍へ行くだけですが、毎年の夏をまちかまへて、伊豆の田舍へまゐりますと、そこを中心に、身輕になつて方々を旅行します。箱根の山ごし、天城ごえ、身延詣で、ごく近い所では玉澤行き、附近の温泉まはりなど興味深く感じます。

一體、旅行と云ふものは、色々の趣味のあるもので、食べる方面にも、見る方面にも、聞く方面にも、目新しいものが多く、いろ〳〵な趣味の持主がよりあつまつても、不足は出ないものです。東京に居ります間は各自に別々な趣味をもつて居ても、夏になると、一家の趣味は旅行に一致します。白い雲につきあたる樣に、スピードを出して自動車を、畑道に走らせる時の快感、耳のいたくなるやうな高山の山かげを、清水にのどをうるほしながら行く興味は私一家をあげての趣味で御座います。（病氣のため妹代筆）

良い團欒のために

鷹野つぎ

私たちの趣味生活と云つても、大體が家族一同忙しい毎日を送つて居るので、その日の餘暇をもつて、何か面白い企て

をするとか、特別な團欒をするとか云ふ事はない。なるならば花壇でも作つて、子供たちのために眼を悦ばせてやりたいとか、一週日の幾日には近まはりの外出をしてやるとか、然う云ふことも考へるけれども、それすらなか／＼實行するまでにはなつて居ない。

私は誰であつたか、或日を定めて夕食後一家が團欒し、そして其の時には家族一同が純然たる一個の獨立したる人格者と認めて、相互人格論の無記名投票をやる、とか云ふことを耳にした。例へば息子は父を、母を、弟妹たちを批評し、父は母は、子供たちを批評し、母はまた父を、子供たちを、妹は兄や、父母やを批評し、それ／＼斯う云ふ工合に相互批評をやる。なか／＼面白いと思つた。浩笑をもつて皆が自分々々の缺點を指摘され、そして日常のどこかで、少しづつ反省して行くと云ふやうになれば、隨分面白いと思ふ。しかし私の家などでは子供たちも幼ないし、また親としので私たちでも、然う云ふ事になればずゐぶん缺點も多いことだらうし、まあ早く云つてみれば、ずつと家族揃つて中途半端な人間同志であるから、まだ／＼そこまでの樂しみは、味へないと思つてゐる。

今のところ私たちの家では、主人は勤めに出るし、惡戯盛りの子供たちは學校へ行くし、私はあとに殘つて家事や子守の任に當るし、それ／＼其れで日いつぱいに消えて了つて居る。強ひて云へば、夕飯後子供たちに判りさうな話題をとらへて、一家つどひながら話に花を咲かせるぐらゐが、忙しい日常の僅かな趣きと云つてもよい。寧ろ斯うしてめい／＼が忙しい時には、忙しい中に手のすいた者にちよいとした用事など渉どらせて、それがお互ひに一家のために、助けになつたといふやうな事でもあれば、愉快な氣分が湧いて來る。例へば子供たちが勉強してゐるときに、私があり合せの冷たい食物でも、持つて行つてやるとか、父のために子供たちが、遊ぶ暇を割いて、使ひに走つてやるとか——そんな事で、何か言葉に表はせない、家族的な柔かみが湧いてくる。こんなことで思ひ出すが、よく貧しい一家に、人生の良い團欒がある。といふ話があるが、或ひは矢張りこんな處から、もつともつと深く潜入して、結ばれて居るものではないかと思ふ。

これは子供と云ふよりは、私たち親の——大人の趣味であらうが、一家揃つて何かやり始める——たとへば掃除を始めるとかする時には、不思議に活氣が起きてくる。面白いことだと思ふ。

今日の日曜日は庭掃除をする——然う云ふ時には、私たち

に跟いて、兄弟の子供は腰からげて、眞黑くなつて雜草を運んだり、箒を持つたりする。小さな末の子供まで、よち／＼と手傳ふ眞似ごとをする。斯うして皆がこぞつて働らき出す時には、草臥れるときも同じように草臥れるので、殊更ら疲れを訴へるものもない。ただ何んとなく愉快に、お互ひの心持ちで仕事を果して了ふ。

それがたま／＼遊山に出かけたりする場合には、どこかでお互の望むところに食ひ違ひができたり、不滿足だつたりして、どうかすると歸りにはばら／＼の氣持ちで、がつかりしたりして戻つてくることもあるが、斯う云ふ時にはそんな事もない。私は斯う云ふ私たちの暮らし方について、矢張りそこに何んの目的も理想もあるのでなく、一種のこれが趣味であると思ふ。

此のごろはそれでも、子供たちだけには、夏休みといふものが來て、彼等は暢氣に暮らして居る。それだけ私は私の仕事を早くきり上げて、彼等の仲間入りをするように待たれがちである。それで此の節の夜などは涼風を浴びながら、彼等と一緒に明け放つた雨戸の外の月を眺めたりする。丁度冬の夜、外にしと／＼と降る雪の音を聽きながら、子供たちと炬燵を圍む、あの時の興味の一方を、此のごろ味つてゐるような氣がする。こんな時には子供たちも靜かにして、よく話などにも耳を傾けてくるもので、しんみりして來る。

ところが、此の子供たちが、二三日もすると、父に連れられて郷里の山の方へ旅することになつて居るので、それが近頃の私のところでは一つの感興になつてゐる。

『山の湖はいゝなあ、ボートに乘れていゝなあ』などと、子供たちは口癖にそれを云つて居る。

『でもあちらは大變に忙しいのよ、あばれて世話をかけたりしては駄目ですよ、宿屋とは違ひますからね。』私は斯う云つてきかせる。それは彼等から見ると大人である私の趣味であるが、彼等に其處が宿屋などよりも、ずつと氣を注けねばならないほど、安全であると思はせたい氣で云ふのである。

子供たちは其處に近親の者が、澤山待つて居てくれることを知つて、非常によろこんで居る。

『蓄音機を持つて行つて、お祖母さんたちにきかせてやるかな』などと、子供の一人は眞顏になつて云つたりして居る。

時々こんな事で私たちは、何んだか苦勞性な話に落ちて行つたりして、思はず皆で聲を立てゝ笑つて了ふこともあるのである。

趣味ある一日でも

岡田八千代

「趣味生活」と言ふのは如何言ふ事を意味してるのか能く分りませんが、どう言ふ趣味で暮してるかと言ふ位のお聞き合せだと思つてお答へいたします、私共のは「趣味生活」などと言ふのは通り越して終つて反つて不趣味なるものになつてるのかと思ひます。あんまりあらゆるものに趣味を持ち過ぎるのかも知れません。私共は花も愛してをります。ですから、私どもの庭は花の咲く草で一つぱいになつてをります――中には花の咲かぬ草もあります、けれ共そんな者をも抜いてもしまひません、そのまゝ打捨つてあります――又おもちやや、器物をも愛してをります。ですから、それ等のもので部屋の中は亂雜に散らかつてをります、私共ではお客様があつても、特別にお菓子を買つたりして大騒ぎは致しません、然しお客様が無くても御菓子のある時は構はず開いて食べます。夜も女中は早く寝かしますが其他は眠くないものはいつ迄も寝ませぬが、眠いものは早く寝ると言ふ工合です。食事なども趣味が違ふのですからお互に好きなものを食べます、嫌ひなのに我慢して體裁をつくらう事はいたしません、言はゞ殺風景なのかも知れませんが、これが私の宅の趣味なのです。其外に私は手先までやる手藝のやうなものが好きで小ひさいものなら刺繍でも染物でもします。そんな事も此頃手軽るに出來るやう方々の雜誌に紹介されるものは好いと思ひます。そんなものも私共の暮しの一部です。料理なども二三人のお客なら家でこしらへます。料理屋から取つては興がないやうな氣がします。然し私のやうに外へ出る事の方の多い人間には何もかもし度い丈でなか／＼出來ません、兎に角、私共のやうにかう忙しなく暮してゐるものは「趣味」ある生活などはめつたに望めません、どうにかして趣味ある一日でも過されたら嬉しいと年中思つてをります。（八月六日）

古調を愛する好尚

岡本かの子

○

久しぶりで主婦の部屋に積り積つて居る塵埃を、ぱつぱとはたいて居ました。その最中、つかつかと二階から降りて來た主人、しかも裸で手には仕事の墨や繪の具を一ぱい付けて居る主人が、床の間の書籍や玩具箱のあひだにうづまつて居る蓄音機を矢庭に無言のまま探り出しました。小形なビクターです。

「ごみがかかります。掃除の最中じやありませんか」。

「ずん／＼やりたまへ。失敬するよ」。

主人は頭から塵をあびるのも構はずにいつもの通り、ベートベンのシンホニーをかけはじめました。腕を組み、眼を閉ぢて聞き惚れて居る主人。私にはこの主人の發作的行爲の心持がよく分るのです。心が鬱屈した時、沈痛に堪えられない時、仕事の渉が行かない時等、自分の力でどふにも自分でとけない心のなかのしこりを主人は蓄音機がまろばし出だす玲瓏荘重、愉快、緩急さまざまな音調に撃たせて洗滌流露させるのです。殊に主人を摘出しましたがこれは私の家の誰もが常に行ふ慣用手段であります。わざわざ音樂會に出かけて聽くといふ様な音樂そのものを味趣ではなくて、もつと直接なタッチを隨時唐突にほしがるのです。客を招いて聞かせるとか、家族團欒に資する爲とかに豫め備えられたものでない、もつと緊密な、もつと變態な愛物として、いつの間にか暗默のうちに、誰かが何處からともなく求めて來たと云つて宜い。レコードも衆議で買ふといふことはなくて、思ひ思ひいろいろな場合に自分／＼の好きなのを買つて來たものが自然と一つのサックに集まつたのです。ベートーベンの外にショパンもあり、エルマンもシユーマンハインクもあり、呂昇の義太夫がある、小三郎の長唄、白秋の童謡、お京さんの安來節もあります。

この可憐なるわがビクータ蓄音機は、彼れのイゴイスチックな持主達の爲に、一晝夜數度の用命を被むるかと思へば、一ケ月間も誰人の一顧にも遇はずして、その上塵埃を呼ぶことを惜しまぬ主婦室の小さな床の間の書籍とがらくた玩具箱に壓せられて、無明の日を送るのです。

○

夜になると、時々わが家の主婦の許へ、三味線の師匠が來ます。主婦は長唄を習つて居ります。文筆を持つ主婦は、一日に一度發聲せぬと、殊に、一日の勞苦の終りの夜に於いてそれをせずしては鬱屈のやり處なしとして居ります。しかし、主婦は無意識の間に、我がいくばくかの自負を持つ音聲を愛惜する爲にいつか長唄を探つたらしくもあります、それゆゑ、覺えがたい尤も不得意とする樂器の手をも、堪へて習つて居るらしいのです。一つには、主人が、長唄の莊重、豐麗、流逹な古調を愛する好尚が主婦と非常に一致して居るのにはげまされてかも知れません。また主婦は、家事に拙く、二人の身邊を平生器用に調べ得ません。その辨償や謝罪の意志が自然と主婦に働いて、主婦が主人に好感を與へるため少しはおのれの取得とする音樂によろふとして居るのはたしかです。主人は、主婦の室からもれる音樂の稚拙にあまりなやまされない程度の間隔を置く二階の居室で夜の勞作をとつて居ます。

「大分うまくなつたね。」

「今夜は、いつもよりなかなか聲が立つじやないか。」

などと便所へ降りて來る主人が、主婦の部屋の前の廊下を通り乍ら云ひます。主婦は、力めて知らん顏して自分一人の好みだといふ風に唄ひ續けます。が、主人が自分に近い便所に長居するときなどは、ことさら節まわしや音聲に氣をつかひます。そしてひそかに苦笑します。

上述の意味で主婦はピアノも習つて居ます。しかし、これはなかなかむづかしい、ピアノはなまなかな主婦の要求は聞いて呉れない。主婦はものを書く机に向ひ乍ら、時々己れの背後にいかめしく控えて居る大形のピアノをかへりみて、强情な、親の云ふことをなかなかきかぬ、しかし親乍ら、その美貌と豐才に尊崇し恍惚する底の一人の娘を持ち扱ふ樣な苦笑をもらします。しかし、これを貯へた機緣によつてか、わが家の一人の息子が學校の寄宿舍に備へてあるピアノに親しみ出し、休日毎にかへつて、平生の練習を主婦の部屋のピアノによつて誇示します。その時、主人や主婦は、この不器用

な親を小馬鹿にした樣な顏をしながら、いいかげんな譜を、しかし一寸器用に彈く小息子の技に、他愛もなく聞き惚れます。休日毎にピアノのキイは、この小息子の指について居たお菓子の粉や繪の具のかすで汚されます。

○

「俺の部屋を決して掃除するなよ――――。」わが家の主人の口ぐせはこれです。これは不精な主婦女中難になやんで居る家庭にとつて仕合せな慣例であります。しかし、あまりと云へば、亂雜混沌たる有樣です。紙は紙を渡し、筆は筆を毀ち、塵は塵を寄せ埃は埃を呼んで居ます。硯の側に花瓶が倒れ筆洗の底に文鎭が沈み煙草盆は座蒲團に敷かれ、香爐に尺度がまたがつて居ます。

「斯ふいふなかに座つてなくつちや、俺の思想は湧いて來ないんだよ」

斯ふ云つて微笑する主人。(一一、八。)

*口繪解說

ウイリアム・ブレーク筆

本圖は、幼き耶蘇が綿羊にのつてゐる圖である。

レオナルドを思はせる靜寂の中に、ブレーク獨特のミスチシズムがある。

夕方の空をかくの如く非通俗的に、深い氣持に描いた西洋の畫は、他に一寸類例がない。

しづかに垂れる木の葉の靜かさ、遠山の平和さ、水の美しさは、圖中の人物を、しづかに生かしてゐる。

(岸田劉生)



讀者欄

藝術的批判と常識的批判

角田まさえ

有島武郎氏の情死事件は、私達に取つては隨分大きなショッキングでした。それは、島村抱月對松井須磨子の場合、石原純氏對原阿佐緒氏の場合も可成り大きなショックを受けた事は否めません。けれどそれは今度のそれ程大きいものではなかつたと思はれます。まして石原氏の場合は死を撰ばなかつたし、須磨子の場合はあれが當然であつた樣に思へてゐましたから。

有島武郎氏の情死——私達の前へ現はれたそれは嘘のやうな事實です。ほんとうに嘘のやうな事實です。それだけ大きなショックも受けたし、又、考へさせられる所も大きい。が今私の云はうとする所はそんな事ではありません。もうそれらは多くの人々に依つて言ひ盡されてゐますから。で、此處には氏の死に關する批判に就て一寸述べ度いのです。

勿論死は讃美すべき事ではありません。けれど有島氏の場合に之れを罪惡であるといふ事も出來ません。運命に負けたのですからあの場合死は最大の幸福境だつたのでせう。斯う解するはどちらかと云へば藝術に理解のあるもゝ藝術的批判とも云ふべきものでせう。所が、世間一般の常識的批判を聞くと、頭から否定してかゝつてゐるのです。そんな批判に耳を傾けない方がいゝと云へば云へぬ事もありませんが、と云つて非常な惡人かのやうに思惟してゐる人々の方がずつと多い事を考へると矢つ張り默つて居られなくなるのです。「あき子を識る樣になつてから人生がだん〳〵明るくなつて來た」それを以て獸欲的な滿足を得たゝめだと批判してゐるではありませんか。

何といふ皮相的な見解でせう。何といふ淺薄なものゝ謂ひ方でせう。それでは餘り無茶すぎます。私達は、もつと內的生活を考へて見る必要があります。あの眞面目な有島氏が死をまで擇ばなければならなかつた、それは苦しみといふ苦しみを經ぬいて到達し得たユートピアなのでせう。何も獸欲的な滿足を得るために人妻と戀愛に陷る程低劣な考慮しか持たない人間とすれば、死なれる筈はありません。生き長らへます。

試みに遊びをする連中を御覽なさい。一日千人の枕といふモットーを振りかざす女を相手に、女から女へと流れ行く人々が死にませうか。彼等こそ單なる獸欲的滿足を得るための遊びでせうが、有島氏の戀愛はもつと〳〵異つたものです。さうした低劣な常識批判に依つて片づけるべく餘りにもつたいない氣がします。

何故人妻と戀したか——これも世の常識批判の難點らしいですけれど、私達女から見ればそれは春房氏に罪があるのです。春房氏に良人としての完璧さが缺かつたためなのです。良人に滿足出來ない女程不幸なものはありません。女に取つては良人は絕對ですもの。その良人が良人としての滿足を與へて吳れないとすれば、よし女が他の

男を懲さうとそれは良人の罪です。良人が惡いのです。その意味からも有島氏の戀を罪惡呼ばはりする事はいけない事です。

私は世に餘りに無智な常識的批判の多いのに驚きました。けれど、それが日本の現在から見れば寧ろ普通なのである事を思つてもどかしく感じました。未だ未だ日本はめざめねばなりません。まだく開拓せねばなりません。内的生活をより向上させて行く爲めに。

（七月二十七日）

女性改造八月號を讀んで

山田なみ子

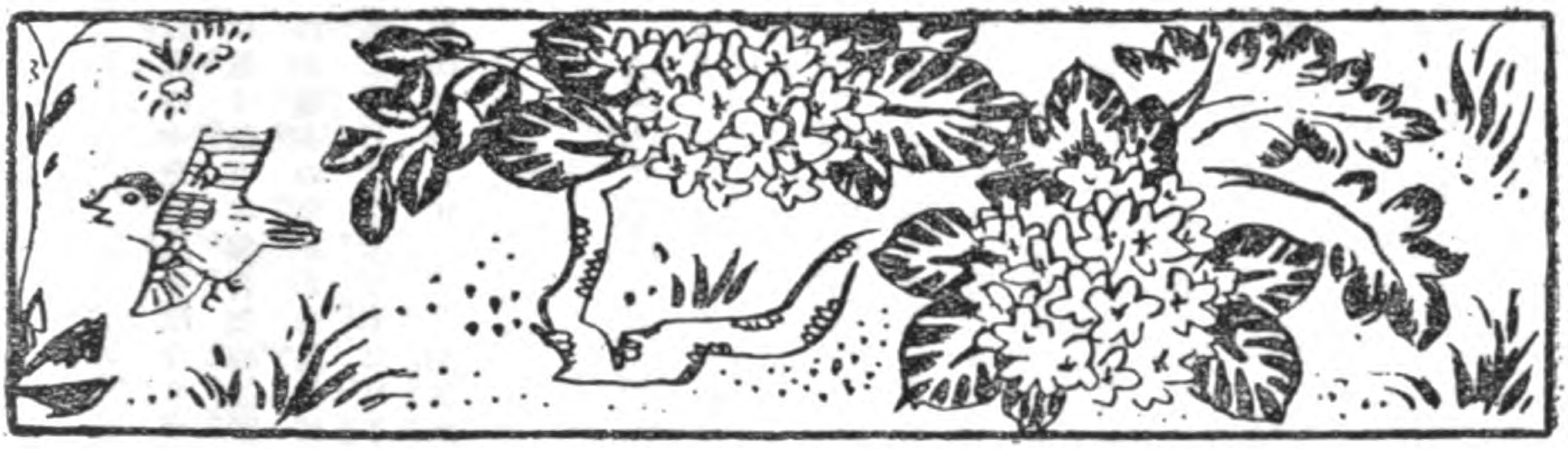
女性改造の有島氏追想號は、近頃の婦人雜誌には珍らしく、充實した讀み味のある雜誌だと思ひました。低級で凡庸で、わかりきつた通俗記事を列ねてゐる「なくもがな」の婦人雜誌の多い中から、あれだけの内容を盛つたものを見出したのはたしかに一つの喜びでした。有島氏の記事にしても、八月號の雜誌界では一頭地を拔いてゐたことを認めます。殊に島崎藤村氏のものには、有島氏の死について直接な言葉をつかつておられないが、深い理解のあるあたたかい友情に滿ちた、涙のこもつた書き方であつたのに感動しました。突嗟の間に若き人々からの感想を集められたのも心あるなさり方だと思ひました。

それから新しく試みられた談話會の「現代婦人と信仰」は、現代の私共にとつて好個の題目だと思ひました。あゝして今の世にときめく人々の會合から、それらの方々の思想や、お心持の消息を知つてゆけることは――言葉は一番よく人をあらはします――それだけでも嬉しいのですが、慾を申上げればあの信仰についての問題は、もつと論點を狹めても、深くつきつめて話されたら一層よかつたと思ひました。信仰を求めようとする私達の惱みは、もつと直接で、地の底を流れる泥水のやうな現實生活の苦惱から滲み出ずにはをられないものでございますから。求める心の苦痛だけでも立派な問題になるのです。とにかく私は御誌が、これから日本の女を先導する雜誌として一層進取的に、高雅に、親切に私共の知識や趣味の一番いゝ友達になつて下さることを期待してゐます。時代が動いてゐるのに婦人雜誌ばかりがいつまでも低所に止つて徘徊してゐるといふ譏がありません。深い見識を持ち、高雅でつゝましく、その半面に極めて進取的な、心强い女性の姿を、女性改造に見ることが出來るものとして、編輯をなさる方々の努力を期待してやみません。女性改造はもう一二歩のところで、私共が要求してゐる唯一の雜誌になれるのだと信じますから、本月號の步調でずつと洗錬して下さるやうに心から願つてゐる者です。（八月一日大阪にて）

讀者諸姉に

この讀者欄を有益に利用しませう。諸姉の感想、批評、隨筆、日記など種類を選びませんから、少くともあなた方の内的生活に觸れたものであつたら、何でも自由に御投稿なすつて下さい。

（イ）讀者欄と朱書して下さい。
（ロ）住所氏名を明記して下さい。
（ハ）すぐれたものには薄謝を呈します。



溪のいで湯

（當選短歌 賞金拾圓）

喜谷千

湯あみすと裸形つどへり溪ふかきいで湯をてらす眞日の光に

瀬にちかきあらはの湯つぼあらはなる裸形の群をひたしたるかな

男をみな何の奇もなくはだかとなり浴みぞすなり溪のいで湯に

乳まろき乙女もまじる深溪のいで湯にひるの光さすなり

湍つ瀬は泡だちはしれかたはらのいで湯ぞしづにたゝへたるかな

岩かげのいで湯に赤き灯のともり夜をしも飽かず浸るをなご等

佳作

○　　角田　まさえ

朝早みくりやに吾れの居るひまを父とい褒つゝ吾子の愛しさ

立ちあよむ足さだまらずかすり傷額に持ちて愛しさ吾子かも

いでい行く父送りつゝおぼつかなみやげをせがむ吾子となりにけり

吾に眞似て小さき双手をつく吾子の愛しくて泣かゆ夫送りつゝ

青葉風ふきてすがしきこの市路輕装の吾子の手をひきにけり

○　　安田　良子

梁のきしみにおびえはらからは暗きランプの下に集へり（暴雨風の夜）

默深くつどひ寄りたるはらからを照して寂しきランプの光

暴風雨後の朝風に鳴る竹の葉の葉ずれおのづと秋めきにけり

○　　片岡　亮一

まながひの丘の畑の日ざかりを土打つ人の鍬の音きこゆ

まつすぐに舞ひくだりきて別れたり夕陽が丘の二羽の雀は

○　　西村　孝子

あかときの風ほのかなる山峡に咲く白百合の清々しさや

○　　□□□

言もなくすれちがふ人の足音の靜かなるかも朝のなぎさ路（住所姓名乞一報）

○　　岸田　美枝

朝ぐもり雪多けれど暫くの後はてりなむたゞずまひかな

○　　井上　直枝

子にたより生くてふことの尊さに日にけに力身ぬちに溢る

○　　小山　一

合歡の花いまだ咲きゐて朝ぐもり晴れむとしつゝうぐひすの啼く

○　　さゆり

もろこしの葉ずれの音をきゝながら足を洗へば螢とびたつ

○　　佐藤　繁子

夏近みくるゝに遅き夕空の雲一つゞつ流れをる見ゆ

○　　大内　艶子

さりげなくあしらふまでになりにけり身にいとつらききさけずみの瞳も

○　　都々美みち子

萠えいづるダリアの苗に手入れする父の全身に和き陽のてる

○　　時田　千草

春あさき野べにきつれば陽にすきて青々しかもこゝだ草の芽は

雨はれてなほしめりもつ野べの徑ほのかに梨の花ちりゐたり

陽のてりのおだやかなれや白き鶏あよみつぎつぎ鶏舎ゆ出でくる



有島氏の迷惑

千葉龜雄

有島武郎氏が自殺してから、情死者や自殺者が殊に多くなつた。殊に有島氏の情死を慕つて死ぬといふ遺書などを殘す不所存者があるといふので、舊道學者達が、それ見たことかと、眞赤になつていきみ出して來た。それ等は果して、有島氏が一緒に負ふて行かねばならぬ責任のものであらうか。いな。

生物は生に執着する。人間はなかなか死ねる者ではない。その人間が自分の手で自己の生命を寐いたからといふて、有島氏を眞劍であると讃美した人々が、これ等の情死者や自殺者に對しては、かへつて刄をかへして罵倒して居るのは何故であるか。私は有島氏が、死ぬまで自己を眞劍に見つめた嚴肅な人格に頭が下る。けれどもそれ等を尊敬するのは、眞劍な嚴肅な凝視そのものだけであつて、凝視の末に、氏が採つた態度そのものまでも讃美するものではない。なぜならその凝視が、最後に至つて、凝視の態度を離れた隙間が見え出して來たからである。で、自殺や情死する人々は、どうしても、そこに何等かのイイジイな誘惑が、その嚴肅な凝視をそらした刹那に起るものだと信ずる故に、私はどうしても、自殺や情死を讃美する譯にいかない。

然らばその誘惑とは何であるか。それはブルジョア文化末期の頽廢した雰圍氣が、多數の人間に移入するところの、神經衰弱、もしくは世紀末の氣分である。それに日本人は先天的に死といふ連想に敏感である。そしてこの神經衰弱が、

直ぐすべてのものに倦怠させ、絶望させ、自己破壊の手段を擇ばせることになる。自殺や情死の多いのは、だから有島氏のせいぢや少ともない。たゞ、そういふものがあると、世間が有島氏を連想して、すぐ有島氏をまねたものだと云ふ。それが有島氏の藝術でも愛讀して居た人間であつたとすると、待つて居ましたとばかり、直ぐ有島氏を犧牲にする。それに新聞といふものが、そうした時代的意味を、付けることをはかに喜ぶ。かうして現代の自殺者は、みな有島氏の命令一下の下に、猫いらずを飲み、短劍をとり上げ、軌道に横はつたやうに考へられる。有島氏は迷惑この上ない話であらう。けれども群衆心理といふ側から見れば、これもまた一片の意義がないのではないのである。

尤も中には多少、有島氏の誘因もあるかも知れぬ。けれども自殺者をして、情死者をして、死に急がした大きな動機は、有島氏では斷じて無い。それは現代の社會組織である。なぜなら、女性を家庭の奴隷とし、無産階級を無限地獄に呻吟させる現代で、虐げられた者を、神經衰弱と絶望と自殺に陷らせないことは非常にむづかしい。かういふ社會制度にあつては、有島氏が死なうが死ぬまいが、自殺や情死は依然として多く出るのである。その社會の弱點を、有島氏に塗り付けられては有島氏はなほ堪るまい。だからもし自殺や情死者を少くしやうとするなら、×××の上に改造の眼を向けるが一番の良策である。

岡山娼妓の斷食同盟

奴隷にも劣るやうな、婦人私有を勝手にゆるして居る我國では、どんな角度からも、ラシアの婦人國有說をわらふ資格がない――尤もそれは、あまり馬鹿げた、爲にする噓の宣傳ではあつたけれども……、娘時代、妻の時代、または職業婦人として、日本の女性の自由は、一切、家長であり、夫であり、雇主であるものの手ににぎられて居る。それでも、妻であることは、母性の喜びだけは約束される。けれども職業婦人、殊に娼婦にあつては、一切の生活がそこではすべてが暗黑の壁である。生ける屍の典型である。

わが國の傳統道德は、女性の貞操が死よりもとうとい事をおしへる。死をもつて貞操をまもれと敎へる。それなのに、その死よりも尊い貞操を奪つて、生きねばならぬ婦人の社會制度を、當り前だとして許し、その成り立ちを助けるものは誰であるか。七月末に岡山西中島遊廓の娼妓百八十名が、岡

山縣廳へ行つて陳情書を差出し、取締り規則と待遇の改善を要求した。その中に「我々の殆んど全部は、日本の國の美くしい傳統である家族制度の犠牲となり、親のため、家のため乃至は可憐なる兄弟の爲に身を殺して、人肉市場に賣られて來たのでムいます」とある。我等は夫の爲に身賣りしたおかるを、今日では、單に舞臺の上のものとばかり考へて居たら、どうして、どうして、現代でも五萬人の氣の毒なおかるが、現實の人肉の市場に貞操をさらされて居るのである。もし散娼まで數へたならばどの位ゐであらう。しかるに彼女等の兩親であり、兄弟であるものは、それを至極當然な父兄の權利であると考へて居る。當然な權利と考へられて、孝行の美名の下に、運命に忍從する女性達の自覺のないのも、隨分と情ない話ではあるが、何にしても、呪ふべきはかの家族主義の幽靈でなければならない。さらば家族主義の固執を十年一日のごとく、命がけにすすめて止まない內務省や文部省は、かゝる氣の毒な女性達に對して、一體どれほどの責任を引受けやうといふ積りか。

要求の「婦人病を縣費をもつて施療せよ」とか「婦人病による休業を、年期延長の理由とせぬやう、樓主に指定せよ」とか、その他凡て六項は、要求といふよりも、むしろ當然な權利の中の最少限な註文である。しかるにこんな事すらも、斷食同盟の武器でもつて脅かさねばならぬほど、おづおづと云ひ出さねばならぬといふは何たる悲慘か。が、それはまあそれとして、それは譬へて言はば、田螺が殼の中に居てぶつぶつ言つて居るやうなものだ。我等の望むものは、殼の中での最大限の改良ではない。それがいくら好くたつて、殼の中に居たまゝではどうしやうがない。我等の望むのは、住んでゐる殼そのものを打破して了はねばならぬといふそのことである。つまり我等を苛酷に取しまる制度の一部分に、改良を加へることではなく、その賣娼制度自體を悉く打破して了ふのが一番だといふのである。だから今度のやうな事實が起るにつけても、すべての社會が、その方面に針路を向けて行く聰明と熱意が一番である。わづかなその中の規則のなまなかな緩和などにごまかされて、大根を忘れて了ふやうな氣の好さであつては何にもならない。

と云つて、基督女子青年會の廢娼運動のやうな、生ぬるい半端なやり方にも我等はどうしても同意しかねるのだ。なぜなら、元來賣娼制度は賣娼者自身がつくつたものではない。男性の理不盡な占有精神がつくり上げたものだ。私有財產が自由にゆるされ、財物の價値によつて、一切のものが

取引され、女性の最も尊とい貞操さへも、財物によつて自由に占有される社會にあつては、女性がいよいよ、せつぱつまつた一刹那に、その生きる途を、最後の一つの物たる節操に女性が求めることも、どうしたつて止むを得ない論理なのである。また金で婦人の貞操をふみにじつてかまわぬといふ人權の無視も、所有觀念が一切を支配するから起る。また現代では男性が、いつまでも妻をめとり得ないやうな貧乏な生活をおくるものが多數であるために、娼婦の必要があるといふ存娼論も、問題にはならない。さうした獨身の青年を多數につくるのは、やはり所有と非所有の均衡がどこか歪んで居る所から起るのだから、肝心なのは、いかに存娼するかよりも、先づそんな社會の歪みをどう建て矯すかの考案の方でなければならない。そして將來の世界の兩性結合は、ただどこまでも、戀愛のみによつて支配されねばならない。

だから、いたづらに男子專權や、同胞職業女性の恥さらしばかりを怒號するよりも、かうした傳統社會の組織の作り直しに還つて行く方が、やはり現代婦人の差あたつて探つて行くべき目標のやうに思へる。

「藤十郎の戀」其他

警視廳が、澤田一座がやらうとした藤井眞澄氏の戯曲「車の跡」上場を差止めた。勞働問題を取扱つて居るからといふのだ。この前、外人劇團が、ハウプトマンの「職工」を有樂座で上場しやうとしたら、やはり禁止されたやうに記憶する。富山縣では、菊池寛氏の「藤十郎の戀」が、鴈治郎一座で興行中に、風俗をみだす心配があるとて中止された。鎌倉では、文部省推薦の活動寫眞「ロビン・フッド」が、何とかいふ名目で差止められた。歐米のどこの國だつて、とかく保守的な本質をもつ政府といふものは、藝術の差止めを隨分やるのではあるが、我國ほどめちやなやり方はまああまり無いやうに思ふ。一體わが國の政治心理の傳統は、支那の實證哲學と儒教の實際主義から來たものである爲に、藝術のやうに、感情や想像力を高揚するものとはほとんど相いれない。むしろ藝術は、實社會の把握性と平和をかきみだす怪しからぬ制作物であると考へて居たために、作家自身も、大てい自分から賤しんで匿名にしたり、制作は勸善懲惡のためだなどとこじつけたりして居る。日本や支那で、歐米に比べて、ほんとうの藝術の發達が、半世紀も後れて居るのはその爲であるが、一方政治の當局者は、そんなことは一向御構ひ無しに、依然藝術の無視を傳統として持ちつゞけて居る。新たに局に當

る執政者に、藝術に對する方針はと尋ねると、大てい、私は藝術は一切わからないと答へる。その藝術のわからない執政者が、平氣で藝術を取りしまつて居るのだから始末に行かないのである。どれほど當局が、藝術を傍若無人に無視して居るかはこれでもわかるが、彼等が治安を妨害するとして差止める内容は、××××××××××の治安を妨害するための非治安ではなからうか。風俗を紊亂するといふ風俗は、微妙な藝術觀念を持たない彼等が、常識的に考へた非風俗では無からうか、彼等の採る途は、ただこんなものでは困るといふだけの事である。さういふ藝術であつて欲しいといふ積極的な理想や希求は嘘にも見えない。かうなると、彼等の藝術觀は、むしろ藝術が、一歩たりとも民衆の間に開展することを好まぬのみか、出來るなら藝術などは鬼でも喰へ、どみ溜へ捨てて了へといふ藝術を呪ふもののやうにも見える。或は廻り氣かも知れぬがどうもそう見える。少くとも積極的に藝術をひろめやうとするやうな意志や親切はどこにも見えない。

すべてのもののやうに、いや、すべてのものよりも、藝術には自由の糧がいる。然るにわが國の現狀ではそれが沮まれて居る。けれども、藝術にあえぐ民衆の熱意と、鋭いその觀照力とは、決してそれによつて沮まれるものではない。また自由は決して沮まるべきものでもない。恐るべきは沮まれたその自由が、××××時の、二重の反動力の力強さである。そしてその場合、一時なりとも、時代相を無視して、民衆の藝術觀賞の力の進みを沮んだことによつて、また自由を遮つ××××うけとることにおいて、いつも二重の損害をうけとるもの×××××ある。

華族廢止の論

中川良長男によつて新たに呼び起された貴族院改革意見は、時節柄一般の注意をひくに足るものであらう。中川男の人格については、いろいろと批難する噂もあるが、人によつて言を棄てることは出來ない。ましてや今日華族界の新人などといひながら、舊人と何一つ變らないいくぢのない新人達が頭をならべて居る華族界に、たれが中川氏ひとりに石を擲つことが出來やうか。尤も貴族院改革や、華族制度の修正は、貴院無用、華族廢止論まで起つて居る現代にあつては、なほ時勢におくれて居ることが拒まれず、またその改革案といふものも、今日まで行はれた諸種の議案を、萬遍なく參照したに過ぎぬ妥協味が相應にある。全體において、もつと

もつと遠慮なく斧正せねばならぬものがある。たとへば華族制度などは、累代遞下法などはもう時代が過ぎて居る。むしろ華族廢止の方針から、その組織を吟味して行く方が時代的であるやうでもあるし、殊に新華族の設立などに對しては、絕對的な監視をする必要がある。近い御盛典に、新華族が出るといふ噂に對してもこの注意は必要である。人爵が何だなどと口ではいつても、勳爵は中々人間の欲望をさそうに有力な餌で、現に華族を辭退したいなどと公言する所謂新人達もそれが本音かと宮内省から尋ねられると、嘘だと答申する。人々が悉くなさうだ。淺ましいといつても之も人情であらう。けれどもかうした人爵も、もう民衆の羨やみとならずに怨みの目標となる時代がそう遠くはないであらう。中川氏の貴院華族改良案も、例によつて結局うやむやに終るだらうが、この危機にあつて、何ほどかの反省を促す役には立つであらう。

秋風のたつ窓

今年も亦秋風が立たうとしてしてゐます。空も地も淸らかに澄み渡る秋ほど、地の上に立つ自己の姿が赤裸々に劃られるやうで、ひとりでに各自の心を深く省みられる時がありません。秋は内省の時です。思索の時です。從つて讀書の時です。秋の一夜、私共の尊敬する藝術家や哲學者の美しい表現や、尊い内的生活にふれることはどんなに意義あることでせう。今年の秋の讀みものとしてお勸めしたいものには、先づ第一にリッケルト氏の「生の哲學」があります。それから阿部次郎氏の「北歐雜記」吉田絃二郎氏の小說「ダビテと子たち」や「芭蕉」谷崎潤一郎氏の「愛すればこそ」「愛なき人々」芥川龍之助氏の「沙羅の花」佐藤春夫氏の「佗しすぎる」などは是非とも味はつていたゞきたい藝術品です。それから室伏氏の「靈の王國」やラッセル氏の「愛國心の功過」松本博士の「心理學講話」なども初秋の讀物としてお勸めしたいもので、傑れた讀物を熟讀玩味しながら、しみぐと各自の生活を磨いて頂きたいと思ひます。



月七情

眞菰の中で

白鳥省吾

佐原の町なかを利根川の方に注ぐ川とも堀割ともつかぬ薄濁つた水の上を小舟で下つた。まだ六月末といふのに日は暑く照つてるので蝙蝠傘を二本ひろげてその下に福田、百田、佐藤、福士、僕といふ五人がうづくまつてゐた。兩岸は石を見事にたゝんで田舍町とも思へぬ相當の店並が小舟から見える。鮒を釣り上げた少年。店先に腰かけて舟の方を眺めてゐる美しい乙女、物洗ふ人、小舟を操り遊んで母に叱られてる少女の群れ　いづれもはや水郷らしい趣である。

小さい水門を出ると利根川である。豐かな清い水の汪洋として流れてゐるさまは胸が透くほど氣持がいい。岸には眞菰が隙間もなく茂つて風でさやさやと爽やかに鳴つてゐる。それまでの狹い暑苦しさから俄かに解き放たれて小舟も活氣づいて漕いでゆく。行々子が鳴いてる、この聲も久しぶりで聞く。水上の遠くに筑波山が薄つすらと見える。見渡す限り何

といふ豐かな水であらう。晴れた日の午後の光線の具合で水面の波が深い藍色に見える。廣重の繪の藍は、「繪そらごと」ではなく、川の水にも見ることが出來る。

三角洲であるところの十六島の一つに舟を繋いで、その陸を一丁ほど徒歩して、更に別な舟に乘り込み、細い水路を小舟が辷つてゆく。民家が點在してるのが見える、こんどの船頭は老人で耳が少し遠い。綺麗に澄んだ水、やはり岸には眞菰が生へてゐる。どこまでもどこまでも眞菰が續いてゐる。水田に稻の葉がそよいでゐる。水路よりも田が低いやうに思はれるほど水が豐富なのだ。民家のめぐりはきまつていくらか小高いやうに見え、生垣がめぐりポプラなどが二三本空にそよいでゐる。水路のほとりには眞菰の外に葦が茂つてゐる。蓴菜に似て非なる水草を「何か」とこの耳の遠い船頭にきくとぢやらんぼ草だといふ、田舍の葬式の鉦のぢやらんぼに似てゐる故にその名があるのか。もう一種類の三角形の草は三角槍だといふ。また、きんぽうげは靑金米糖だといふ。ぢやらんぼ草、三角槍、靑金米糖など草を名づけるところに田舍らしい素朴な童謡めいた面白味があるのでみんなが笑ふ。

こんどはまた幅ひろい利根の流れに出るといふので船頭は帆を張りはじめる。ぼろ〳〵につぎはぎした大きい灰色の帆だ。これでも遠くから見たら天衣無縫の白帆に見えることだらう。帆を張る間、小舟はぼんやりと水路の上に止つてゐる。眞菰の上に雲雀が啼いてゐる。蒼鷺が啼いてゐて、飛ぶ姿が茶色に見える。ぼんやりとして五人の靑年詩人は浮世はなれたとんでもないところに來たやうな顏をしながら女性に關した無駄話などをしてゐる。

「あゝ月が出てゐる！」

と誰かゞ言ふ。靑空にこれもぼんやりと十日あまりの月が出てゐる。日はかん〳〵と照らしてなか〳〵に暑い眞晝の空に、涼しさうに薄つぺらに……。

水路の傍に小學校などが見え出す。古風な昔を思はせる朽ちかゝつた木橋の十二橋の下を小舟がいち〳〵數へるやうに過ぎる。民家の軒下に犢が蹲つてこちらを見てゐる。眞菰の中にあやめの花が咲いてる。無花果の枝が見事に影を映してゐる。もう潮來氣分だ。

ここは加藤洲十二の橋よ、行かうか歸ろか思案ばし

いたこ出島のざんざりまこも誰が刈るやらうすくなる

その夜、名物あやめ踊といふものを見に出かけた。忘れてゐた月が明るくひつそりと水郷に照つてゐた。晝の水路で見た月が魂を入れられたやうである。名もあやめ樓と言ふので遊女が十三人、みんな揃ひの原始的な赤い着物に袂に白線の二筋はいつたものを着て踊つた。太鼓と三味の音につれて踊る彼等は、何とグロテスクな不縹緻な女達だらう。これは露つぽい野原で月の下で踊る盆踊であるだらうが、いま心をも肉體をも荒さませられた野の乙女は奴隷的な悲哀な踊りを踊るのであつた。そんな野暮なことを思ふまいとしても、心はたゞ暗く寂しくなつて行つた。

赤城の宿

荻原井泉水

長くさし出した板庇が、斜に射す月光の爲めに、三角の黒い影をくつきりと、入口の雨戸に落として、其影から外れた戸袋の月影の上には「赤城大洞、猪谷旅館」といふ木札と共に、小さな箱のポストが懸つてゐた。私はホッとした氣持で、其の雨戸の一枚明いてゐる所から内へはいつた。内はランプの光が暗く、大きな爐に炭火ばかりが赤くおこつてゐた。紺の猿袴のやうなものを穿いた若い者が出て來て、二階へ案内した。廣い梯子段が踏む毎にギシ〳〵と鳴つた。十疊ばかりのガランとした室には、障子に月が明るかつた。そこへ大きな吊ランプを持つて來た。古い重さうな襖で仕切つてある兩隣の室には、學生の客があるらしく、翌の朝早く黒檜へ上る計畫などを話す聲が聞こえた。

椎茸、山芋、ゆばなどを煮たり汁にしたりしてある山の宿らしい馳走で遲い夕飯を仕舞ふと、私は疊の上にごろりとなつた。初め障子を明けて見たが、そこには宿に近く、とげとげした葉の樹が二三本、鋭く月光に反射してゐるだけで、風

が餘り冷たいため、すぐ縮めてしまつた。湖水は私の室とは反對の側にあるらしい。それでも斯うして横になつてゐると、外は如何にも佳い月夜らしい、其情趣がまざ〳〵と感じられる。――青白い大沼がとんろりと靜かに湛へてゐる、水の上には薄い霧が夢のやうに漂うてゐる、灯といふのは唯一つ神社の灯がポツチリ瞬きもしない、白樺や楢などの木が、そこらに淋しい姿をして立つてゐる、風はない、いや微かにある、その微かな風につれて、木がチリホロと其葉を落してゐる、其葉が神社の屋根に落ちる、此の宿の屋根にも落ちる音もなくしん〳〵と、月の光が落ちてたまるやうに落ちて厚くたまつて行く。其屋根の下に私は斯うして寢轉んでゐるのだ、と そんな風に感じられた。

それから、此宿へ來るまでの途中の事が思ひ出された。――利平茶屋の靜かな冷たい流に近く置いてある縁臺から腰をあげた時は、夕暮の色がもう足許に迫つてゐた。峠まで十町、峠から宿までなほ十町もあるといふが、路は月夜になるだらうと、それが唯一つの頼りであつた。その月は、水沼の驛に降りて、如何にも快く晴れた秋の空を仰いだ時、早くも東の方にほつちりと仄かに匂うてゐた九月九日の月だつた。行く手に目ざす赤城山を見据ゑながら、だらだらに上つて來た路は、大きな平らな路であつたが、それが利平茶屋を出てからは、森林の中に包まれたつゞら折の坂になつた。紅葉が美しかつた。梢にはまだ夕日が微かに殘つてゐて、紅葉の色が其儘夕燒の色のやうな明るさを見せてゐた。私は急な勾配に息をつきながら、初めて山中の情景を味ひ得たやうな滿足を大きく吸つた。是まで緩かに沿うて來た流が、こゝでは路と離れて遠くゾツ〳〵と鳴つてゐたが、再び其流と逢つて、それを踏んで渡らねばならなかつた時には、水中に出てゐるワタリの石が、はつきりと見定められぬ位に暗くなつてゐた。森林を出て、笹の生へつめてゐる山肌を行く路もあつた。そこには、まだ仄青い光が暮れきらずにゐると見たのは、夕明りではなくて、既に月の薄い光だつたのだ。大方は葉を落とした細い木が疎らに立つてゐた。魚の腹の光澤を思はせるやうに、其幹が青白く光り出したのを見ると、それは白樺の白い肌だつた。路は紛れ易かつた。多分こちらと思つた路が笹の中に行き詰つてしまふ事も度々あつた。其内に山頂の方から流れて來る薄い霧の爲めに月は隱されてしまつた

私は真暗な山の中の笹原に立つて、どうしたらよいか解らなかつた。……幸に再び月が出て、峠の上（そこには旅人の安全を護るやうに大きな石の地藏が坐つてゐた）からは、なだらな草原になつた。夏のうちは放牧をするので、旅人はこゝで不意に放れた牛と行きずつたりするといふ話も聞いてゐたが、今は草も枯れたので、牛も麓へ追ひおろしたらしく、私は其の柔く枯れた草の上を、綿のやうな月夜の霧に包まれながら、湖水のある方へと、水の光に引きつけられるやうに足を運ぶのであつた。その月の眺は好かつた、自分として迷つて迷つた末に、自然の大きな力で、自分の行き着くべき所へ導かれるやうな安らかな氣持さへもした。而して、此の宿の灯を見つけた時は嬉しかつた。私が寢轉びながらそんな景色を頭の中に再現せしめてゐるのは、そこに手帖を出して、句を思つてゐるからであつた。

ローマの月

碧梧桐

始めてローマに着いた夜、手荷物を持つてくれたポーターについて停車場を出ると、テルメの噴水の水が、白く木の間に描き出されてゐた。

月夜だなと思つて上を仰ぐと、十四日頃の月が中空に澄みきつてゐた。

ポーターは脚が疾い。見失はないやうに追はねばならなかつた。サイプラスの木々の廣場の中の通りは、人影もなく、もうしんとして夜更けを思はしめた。

汽車の中で、すつかり眠込んでゐた眼が次第に冴えて來た。

停車場の出口で會つたグランドホテルのユニホームを着た客引が言つた通り、グランドホテルの帳場では、ノールームを食つた。グランドホテルの名さしてくれた近くのホテルメトロポリタンでも同樣お生憎であつた。

ここまで手荷物を提げて來たポーターは、そこに客待をしてゐた馬車を呼んだ。荷物を置いた側へ、私に乘れと手眞似をした。自分は馭者と並んで腰をかけて、ガタ〳〵曳き出した。

眠りからすつかり醒めた私は、ローマ着早々の出來事がどう開展して行くかの好奇の興味に煽られた。親切でするものか、惡意を包藏してゐるものか、それを私が見極めたところで、私には外に單獨の行動の取りやうはなかつた。ポーターはジユー系の鼻梁の高い、イタリー人らしく眼の鋭い男だつた。ヘキ〳〵した痩せ方の男だつた。私をかうやつて、何處かの地下室へでも連れ込まうと、郊外の野原へおびき出さうと、たゞ彼の意のままだつた。

ローマの石疊の町を、鐵輪のガタ馬車でガタゴロ〳〵走らせてゐるのは、今頃私一人位のものだつた。

馬車をとめたのはホテルの灯りのさす門口だつた。ポーターはいきなり馬車から飛び下りた。私もつゞいて下りた。二人で帳場に立つたが、そこもノールームだ。

ガタゴロ〳〵。

二三軒のホテルは、私も一處に下りたが、何處もノールームなのに懲りて、私はもう馬車を下りて行く元氣がなかつた。ポーターは根氣よく、ドアを押しては帳場まで侵入してゐた。私は四五層の高壯な建築で區切れた狹い空の月を仰いで、明暗のくつきりした夜景に浸つてゐる妙な運命を考へたりした。

彼に惡意のない、一人のジヤポーネの爲めに一夜の宿を探してくれる親切づくである事が、追ひ〳〵明らかになつた。

それにしても、こんなに夜通しかかるかも知れない宿さがしの案内をしてくれるポーターが何處の國にあるのだらう

彼はポーターでなくて、私の從者でなければならない。

其後ホテルではダメでペンシヨンあるきを四五軒した。どこをどう行くのか知らないが、やがて一時間餘も經過した。

狹い暗い露次から、僅かばかりの廣場に出た。ホテル・ミネルヴアと書いた照明燈がすぐ眼についた。ポーターはドンドン其のドアを押してはいつた。

シト〳〵水の咽ぶ音がする。噴水でもそこにあるのだらう。靜かに耳もとで女のささやく聲のやうだ。何となく孤獨

が感ぜられる。外套もしつとり露をふくんでゐるやうだ。

丸屋根のドームの肩にすれ〲になつた月は、冷たい放射線を其の屋根の一角に刷いて、夜の靜止の中に安坐してゐるドームにお休みを言つてをるやうである。

ドームはお寺なのだ。ドームの巨大な地上の影像は、そこらのあらゆる建物の上に、安らかな眠りを守るものゝやうに覆ひかぶさつてゐる。やがては私の頭の上にも其の大きな手を伸してくれるであらう、

私は僧正ぬきのカトリックの洗禮をうける聖徒の一人であつた。

不圖ホテルのドアのガラス越しに、いつまで何をしてゐるかのポーターを透して見ると、彼は立ちながら胸の前に兩手を合せて、本尊でも拜むやうに、帳場に向つてお辭儀をしてゐた。

いきせき出て來たと思ふと、こゝに始めて一室を得たやうな顏をして、私を手招くのであつた。

私はホテルに入る時、も一度ドームの月を仰いだ。

——大正一二、七、二一——

晝の月

室生犀星

まだ私は夢のなかで月を見たことがない。——星は見たことがあるが。——誰か見た人があるだらうか。もしあつたとしたら一體どんな色をしてゐるだらう。

思ひがけないときに町を歩いて、何か忘れものをしはしなかつたかと、不意に思ひついて、何氣なく晝の月を見ることがある。淡々として忘られてゐるやうで好ましい。そのくせ直ぐにその月のことを忘れてしまつて、用達しの道をいそぐ……そして雜誌社などの二階の窓の……きつと階段のとつつきの窓のところで、何氣なく人家の屋根を見るものだ。この

とき少時忘れてゐたさつきの晝の月を見るのだ。だが淡々しいものの特徴か知ら？　またすぐ忘れてしまふが、かへり道で自宅の近くで もう一度見上げる。――こんな寂しくて忘れやすくて、そのくせ時間にしたらかなり長い間見とれてゐる月といふものはすくない。――

晝の月、――これは詩になる。だが碌な詩にはならないだらう。よほどすつきりした心持ちのときでなければ、あんな淡々しい氣もちを書くことはできないだらう。非常に巧みな卵燒のやうなよい味ひをもつてゐるぢやないか。味があるのかないのか分らないやうな上等の食べもののやうな……。

淺草の小屋がけの、まんなかの忙しい道路を歩いてゐて、よく月を見た。が、上野廣小路で濶々と眺めた月とは變つて月が吊し上げられたやうに小さくちぢんで、埃ぽくなつて、ときにはあんな骨董もあるやうだと思ふほどだ。骨董といへばこんな月のことなどを書いた文章といふものは、やはり月についての骨董みたいなものではないか？

つき　あをみ
逢はれずかへりぬ

といふ私の古い詩があるが、これなど全く骨董くらゐの値だらう。私はよく考へるのだが、詩もよい詩になると、作つたときから十五年くらゐの間新しくて、そして作つたときから最うだいぶ古くなつてゐるやうな詩がどうもいい詩だと思はれてならないのだ。古いほど新しくて、新しくて古い詩ほど永い間もちこたへると思ふのだ。眼立たぬ美人といふものがあればそれは長もちすると思ふのだ。いきなり咲き誇つたやうな美人といふものはどうも散りやすく……そしてどうも好きにはなれない。それより長い間凝乎とこらへてゐるやうな美しさのある、つまり、晝の月でもよい、あんな味ひのある人からといふものは好ましいものだ。そんな人からは飽きない。

そのうち私も夢のなかで、ただの一度でもいいから月を見たいと思つてゐる。きつと夢のなかだからさぞ蒼茫として愉快ないい氣もちで眺められるだらう。そしてきつといい詩ができるだらうと思ふのだ。つまり何かに觸つてをかないと書けさうもないやうな氣がするからだ。――

笛の音

松原至大

靜かな海添ひの私の家に明い月の夜が來る度に思ひ出されるのは、玉屋の新ちやんのことである。もうひと昔の餘にもなるけれど、私の心には年毎に新ちやんの姿が新しく甦つてきて、人間の心の奧底に包まれてゐる純な力と云ふものを、どんなものにも優つて私の心に通はせてくれる。

新ちやんと云ふのは九十九里濱の端れにある一漁村に居た若者の名である。新ちやんと云ふよりは玉屋の馬鹿と云つた方がもつと通りがよかつた。中學を出た年に、心にもないある官立學校の入學試驗をいや應なしにうけさせられて、みごと失敗した私が、次ぎの、試驗期を待つためにあづけられたのが、その地方の網元をしてゐた新ちやんの家の隣りであつた。

ほんの一漁村にすぎなかつたけれど、私の育てられた海とはちがつて、奇巖に富んで、太平洋の最も雄大な眺めをもつたところとして知られてゐる。無理强ひの試驗期を待つ少年の誰れでもが一度はかゝらなければならない熱病患者のやうな惱しさに苛まれてゐた私は、その海の前に身をなげだすことが、唯ひとつの喜びであつた。代數や幾何や物理や歷史やを機械的に暗記する幾時間かを終ると、私は家から五町も離れた裏山の松林の中にかけて行つた。そして松の根もとに身をよりかけて、ひろいひろい光のひろがりを眺めた。海は私の心の蹈りを後かたもなく、どこかに運んで行つた。小い心が海の面の動搖に、涙ぐましくもいたはられるのであつた。

秋がきて間もない夕暮であつた。私はいつもよりおそくなつたので、家の人たちに心配されてはと思ひながら、丘を下りやうとした。するといくらも離れてゐない松の樹蔭から笛

の音が聞えてきた。ちつと耳をすますと、潮鳴りの響の中に、それはそれは美しい笛の音であつた。誰れが吹いてゐるのだらうと知りたかつたが、やめられてはと思ひかへして、私はそこにまたうづくまつて聞いてゐた。

　それは村のお祭の時に使ふ横笛ではあつたが、その柔さ、その靜けさ、そして力のこもつた美しさ、私は今までこれほど不思議な笛の音を聞いたことがなかつた。林から海へ、海から夕暮の空へ、とほるやうにせまるやうに、後から後からと續く不思議なたましひの笛の音、私はすべてのことを忘れてしまつた。しばらくすると、いつの間にか私は笛の主に近いてゐた。

　太い松の樹によりかゝつて、稍顏を仰ぎ加減にして、力いつぱいに吹いてゐるのは玉屋の馬鹿新ちやんであつた。新ちやんは私が行つても知らない顏で吹き續けた。すべてのものをその笛にうちこんで、一心になつた姿はいろ〱の話できく名人の姿のやうに緊張してゐた。半時間もたつと右の手で笛をきつく振つて、竹の中にたまつた唾をはらつた。そして突然に私を見て

「笛を吹くなら、から吹きせ――」

から節のある聲で云つたかと思ふと、また新ちやんは顏を仰ぎ加減にして、笛をふき始めた。不思議なたましひの笛の音、私はふと顏をあげると、いつの間に上つたのか、丁度新ちやんが見上げた松の梢のあたりに、十五夜に近いまんまるい月がかゝつてゐた。私はその夜から新ちやんが馬鹿だとは、どうしても思へなくなつた。

昔の京の月

瀧井孝作

八月十五夜空は曇りなく月は明るいので、京に住む文學好き同士が十餘人打つれ立つて外を歩いてゐた。彼等は文學上

の先輩だつた大江朝綱の邸の方に足は向いた。其邸は二條と京極との間で、東の方鴨川の廣い川原の月の眺めが面白いし、猶また先輩の文章博士の上を偲ぶ事も彼等の頭にあるのだつた。朝綱は死むで年月が經つてゐるが、故人の文學上の仕事は今に殘つてゐる。彼等は其邸へ出向くのだつた。

やがて來て見ると、其家は舊び荒れて人氣がないし、屋根は倒れ傾いて只僅かに妻出の窓が見える程で、そこへ來た彼等は各々壊れた縁に居並むだ。故朝綱は年頃學問の上で朝廷に仕へて、聊も心許なき事が無うて、官位は遂に參議にまで昇り、年は七十餘才に成つて死むだ。主は左樣な優れた人だつたが、其死後の邸宅はある年月の間に荒廢して見る影も無い。世上の移り變りは、今藤原の氏が獨り榮える時代である。朽ちた縁に腰を置いた殿原の中には、江相公朝綱の事蹟を偲ぶもの、今の世間を思ふもの各々心々だつた。

良夜で文學好きの彼等の頭は兎もあれ亢つた。見え渡る川原の流れる水、東の山もこなたにさしむかひ、京の殿原の心はそゞろだつた。朗詠の聲を風は送つて行つた。月を詠むだ詩歌、それにつけては故朝綱の文學に堪能だつた事が更に話題になつた。踏沙被練立清秋、月上長安百尺樓、と云ふ詩はむかし唐國の人が八月十五夜に月を翫むで作つた詩だが、殿原はそれを朗詠した。漸くすると茲の邸の丑寅の方より尼が一人出て來た。尼は殿原の方に進み出て、

「之は、來て遊ばれるのは何誰樣ですか」

から尋ねた。殿原は、月を見よう爲今宵茲にゐるのだが、して汝は？。と尋ね返すと、答へて曰ふには

「故宰相の殿に仕へてゐた者で今この尼一人殘つてゐるのですが、茲に宮仕へしてゐた人は曾ありましたが皆死果て私一人今明と定まらぬ命を繋いで居ます。」

文學好きの殿原は聞いて憐れがり、年老いた尼を彼等のまどゐに加へた。する間に尼の曰ふには

「そも〳〵殿原の、月は長安の百尺の樓に上れり、と詠じになつたが、古へ故宰相殿は、月に依つて百尺の樓に上る、と詠じられました、之は左うではありませんかしら、月は何しに樓には上りませう人こそ月を見むが爲に樓には上れ」

思ひがけぬ尼の言を聞いて人々は動かされた。邊りの風情も手傳つて亦才女を尊敬する慣はしから、中で感じ易い殿原

は涙を流した。尼は以前奈何云ふ身分だつたのか昔の有樣を殿原は知りたがつた。で尋ねると尼は曰うた。

「わたしは故宰相殿の物張（洗濯女）をしてゐました、其が常日頃聞えてゐました事で、今殿原の詠じなさるので仄に憶ひ出いたのです」

文學好きの彼等は、尼の云ひ甲斐の無い女だつた事を知つても興醒はなかつた。而して猶夜もすがら打興じて談じ、皆それぞれ尼に纏頭を與へて、曉頃まで遊んでゐた。彼等は在りし朝綱の家風の慕はしさと故人の詞草の優れてゐた事などを繰返して云うた。（七月一日、京都にて）

廿三夜

若山牧水

さほどに暑い夜でもなかつたであらうが、眠りそこねてまじ〳〵してゐる身にとつては、思へば思ふだけ暑苦しく思へて來た。

眠られぬ夜には私はウヰスキイを飲むのを常としてゐた。その夜も初めからそれを思はないではなかつたが、折惡しく腸をこわしてゐたゝめに、いつもの樣に躊躇なく起き上つてその壜を取出す氣になれなかつた。然し、數知れぬ寢返りの後には矢張り蚊帳をくゞつてそとへ出るほかはなかつた。そして盜みをする樣にして戸棚からそれを取出すと、手近の長火鉢の側に坐つて栓をとつた。眞上の柱時計は間もなく二時を打たうとしてゐた。

時ならぬ肌の匂ひと酒の匂ひとに驚いた樣に蚊が群がつて來た。蚊帳に持ち込むはむさくろしいし、不圖私は思ひついて壜とコップとを持ちながらひそかに庭に出て行つた。

櫻や松の四五本の木立の陰には涼み臺が置いてあつた。その上にあがつて坐りながら我れ知らず私は微笑した。忽ち程よい微風が感ぜられ、星とても見えぬ空には夏の夜らしいほの光りがあつて少しさしかざして酌ぐ分には別にウヰスキイ

をこぼすほどの事もなかつた。却つて眼や心の冴えて來るのを覺えながら、思ひがけぬ拾ひものをした氣持で二杯三杯と小さなコツプを重ねて行つた。

漸く眠りの覺めてゆく樣なぼんやりした心の裡にいつとなく來て宿つた一つの考へ事があつた。晝間に讀んだ雜誌に載せられてゐた有島武郎といふ人の情死記事に就てゞあつた。

私はこの人を個人としては少しも知らず、作者としても殆んど知る所がなかつた。この情死事件があつて後、種々なものに書かれた記事によつて初めてその人物の幻影を知り得たと云つてもよい位のものであつた。ことにその日に讀んだ「泉」といふ雜誌に故人の親友たちによつて書かれた同氏追悼の言葉を讀むとこの未知の人の面目がやゝはつきりと解つて來た樣な氣がしてゐたのであつた。

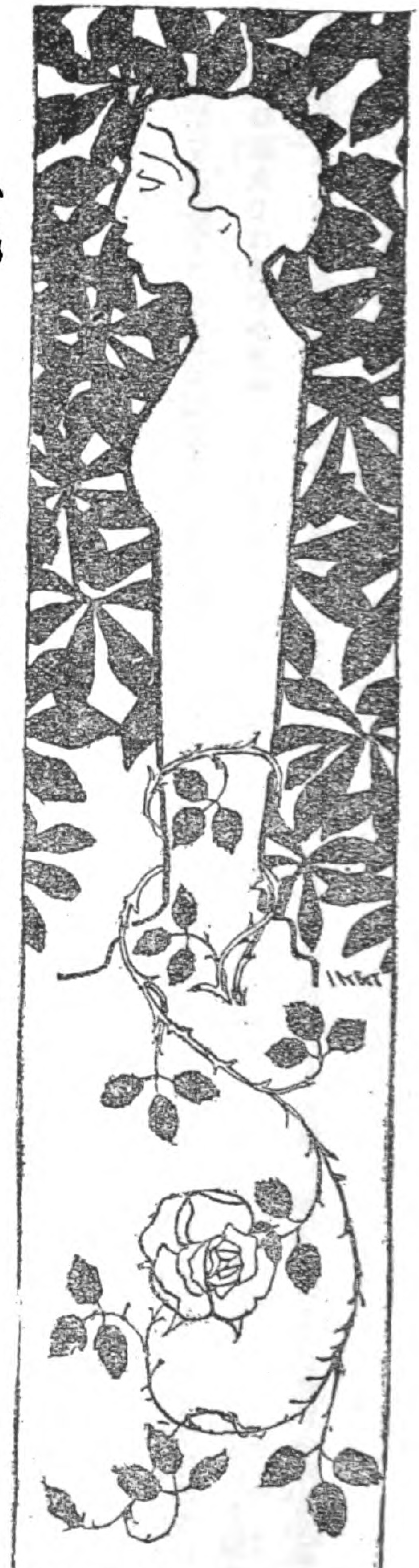
聰明で、富有平和の家に生れたにしては苦勞性で、人事社會に對しての充分の考察をも持つてゐたげに見ゆる人が、何故あゝした不合理不自然な出來事の中に突如として身を沈めて行つたか。思ひ殘す所なくその中に亡び得るとわざ〳〵揚言したその戀といふものも果して眞實であつたかどうか。蛇の好きなといふその女に、周圍の友人達から一生懸命に彼を奪ひ取つて行つたとも見ゆるその女に、いゝ芝居相手とされて死んで行つたのではなかつたか。また、その女の亭主といふ男の今度の事件に對する態度はどうだ。自分の女房を寢取られた恨みから一途になつて罵り下した言葉としては一萬圓賣買云々も或は無理ではないかも知れぬと一時同情もせられたのであつたが、その女の死後四十九日たつかたゝぬにまた新しい美人を貰ひ受けるとはどうしたことだ。事件に對するつらあてか、それともまた今度は此奴は幾らに賣れると先づその評價からきめて貰ひ受けたのではなかつたか。それともそれ等新聞雜誌の記事をどの邊まで信じていゝものか。

『オヽ！』

私は獨りでコツプをさしあげた。楕圓形とも見ゆる怪しげな月が、濕氣深い空にいま眞向ひの香貫山の峰を離れる所であつた。

『廿三夜か六夜かナ』

さう思ふと、山深い故郷で母と共にこの月を待つた幼い自分の影が心に浮んだ。



死と人間の對話

―死よ神の裳の襞よ―

賀川豐彦

人間『死よ語れ、おまへは、何者だ？』

死『二本足の動物よ、私は衣物の肩上げだ、身上げだ、袴の襞だ、ランプの自在だ。女の帯上げだ……』

人間『それにしてはおまへはあまりに力強くあまりに恐ろしい姿を持つて居るでは無いか？』

死『それは、人間が弱いからだ！』

人間『おまへは、實在では無いのか？』

死『私は實在と云ふ言葉の意味を知らぬ。それをおまへに訊ね返すことにする。一體おまへの實在とは何を意味する

のだ？』

人間『死よ、實在とは、おまへの反對の現象を意味する。即ち「有る」ことだ、おまへは「無」の本源では無いか！』

「死」は大きな聲で嘲笑した。彼はその言葉を聞いた時程、人間を嘲笑したことは無い。

死『何に？　おまへは、私に話を聞かんとして私に實在の問題を提議して置いて、その意味を問ひ返されて、おまへは私を無の本源だと云ひ、私を目して「實在」の反對だと云ふ。……然らば、再び、私はおまへに訊ねる——おまへの云ふ「無」とは何だ？』

人間『無は實在の反對だ、光に對する闇だ、生命に對する死だ——そしておまへはそれだ！』

死『それを、おまへは「無」と云ふのか？　おまへの無は安價な無だな！』

人間　建設に對する破壊だ！　無目的、無理想、無法則、無我、無政府、無秩序だ！』

それを聞いてはまた「死」は大聲に笑つた。

死『おまへは、死に秩序が無いと云ふのか？　ハア〱〱』

人間』おまへは暴虐と、虚無と、破壊の表象では無いか？　おまへは母の懐より愛兒を奪ひ、戀人の胸よりその想を掠めるものでは無いか！　おまへは飢饉であり、疾病であり、世界に於ける最も秩序を忌む魔物、おまへは惡魔では無いか？』

死『何たる誤解！　何たる侮辱！　私は嘗ておまへの云ふ一つだに考へたことが無い、私は最も大なる秩序の支持者、人類の友人では無いか？』

人間　友人？　あちらへ行つてくれ、おまへのやうな怖ろしい友人はいらない！　おゝ怖ろしい！　おまへに見込まれては、死ぬ可き次の籤は此次に私に當るのでは無いか？』

死『私は、そんな無法なものでは無い！　私は靜かなる人類の友、生命の守護者、疲れたる者の道づれだ』

人間『何と云ふ意外な言葉を、おまへから聞くことよ、おまへ自らが、生命の守護者、疲れたる者の道づれだ？……それは欺瞞だ！　おまへほど、今日迄人類を欺いて來たものは無い。おまへはバベルの塔を破壞しノアの洪水を送り、大戰爭を起し常に反逆者の指導者であつたでは無いか！』

死『何と云ふ誤解、何と云ふ誹謗！　俺はその凡てに就て知ら無い！　おまへの云ふ凡ては「死」そのものに就て云ふて居るのでは無い。おまへは生命の岐路に迷ふものの態度と、死そのものとを混同して居る。「死」は戰爭に就て預り知らざることだ。死は洪水にも關係は無い。死それ自身は破壞も暴虐も知ら無い。死は最も大なる秩序の支持者だ！』

人間『欺瞞者よ、行け！　死が秩序の支持者？　それは名君の云ふことでは無いか？　おまへは無によつて秩序を支持するとは、どう云ふわけだ？』

死『わしは嘗て破壞したことが無い！』

人間『何に？　破壞したのは、おまへで無い？　地殼に生れ出た千億萬人を呑み干したのはお前ではないか？　おまへは底知れぬ淵、地獄の創造者では無いか！』

死『何とでも云へ、わしは破壞に關係したとを知らぬ。わしは、生命の躍動の補佐として、身上げの役を務め、肩上げの役を務め、ランプの自在の役を務めてゐるのみだ！　わしの役は袴の襞だ！　わしは生命の裝飾、神殿の裝飾窓、わしは實在では無い、わしは經過だ！　進行曲の休止者だ！　わしはおまへの云ふ破壞の爲めに生れ出たものでは無い。肩上げを深くすれば、隱れる部分がある、自在を吊りあげると、直接役に立たぬ部分がぶら下る。然し、それが何故不用と云ふことが出來るか？　隱れた部分は、休憩して居るだけだ、遊んで居る部分は、役割の來る日を待つだけのことだ。わしは、千億萬人を人間の目より隱した！　それは確かだ！　然し何故それによつて、わしが暴虐な君

主だと云つて誹謗する理由になるか？ おまへは肩上げをすることが衣裳に取つては醜いと云ふのか？ 袴に襞のあることを破壊と呼ぶか？ 何と云ふ、おまへの論理は淺薄なことよ！ 再びわしは繰返しておまへに告げる、わしは破壊の創造者では無いと！」

人間『世の始めより人類を欺いて來たサタンよ、おまへはまた甘い言葉を以つて、我等を欺く積りか？ 昨日も、一昨日も、われ等の肉身はおまへの爪鋭き手によつて奪ひ去られたのに、おまへはそれを、たゞ神隱しだと云ふて逃辭を作らんとする。おまへの面袍を取り去れ！おまへは骸骨の巣、腐れる肉、おまへは疱瘡神では無いか！」

死『座れ、わしはおまへより、より長き歴史を持つて居るだけに、おまへに物語ることが多い。氣を落付けて、わが物語りに耳を借せ！」

人間『吁、おまへは、遂にわしを誘惑して、棺桶の中に坐はらせ、その次にわしを火葬場に送る積りか？ あゝ、われ生れざりしならば幸なりしならん！」

死『低能なる人間よ、狂へる頭腦の持主なる發狂者の親類、腦梅毒患者の曾孫よ、おまへは遂にわしの眞實なる心持ちを知ることが出來ないであらう。然し、わしは元來親切なものだから嬰兒に乳をふくます母の如く、おまへに、よくわかる言葉で、わしの歴史を語り聞かさう？」

人間『死の歴史？……おゝ、怖ろしい殘酷の歴史を？ 少し待つてくれ、砲彈の爆音が耳を害するを禦ぐ爲めに、砲兵が耳に綿を詰めるやうに、わたしは先づ、耳に栓をして、おまへの歴史を聞かう！」

死『卑怯者よ！ それがおまへ自らを害して居るのだ！ わしは人類の爲めに悲しむ！ わし程、それに就て、人類の爲めに悲しんで居るものは無い！

死は元來、愛の裝飾として生命の結婚式に上らせられた！

生物の凡ての躍動に通じて見てみるがよい。どこに、死が生物に對して不親切であつたことがあるか。かげろふは、死の前に舞踏する。介貝虫は子孫の爲めに自らの屍體を介貝に鑄換へる。單細胞動物は死を知ら無い。延び上り、跳ね上らんとする復細胞――陶汰と撰擇によつて、上進せんとする戀人の間に初めて死が招待せられた。動物の間にはそれに就て何の悲しみをも持たざるものが多い。否寧ろ、死を通じて勇躍することを悦ぶものが多い。即ち、死がその身上げを深くすると共に成長する力の多くを豫測せられる。結婚式の晩に死が生れた……』

人間『そうだ！　そうだ！　結婚式の晩に死が生れたと、おまへの云ふのは誤つて居らぬ。おまへは呪の征矢、蝮の毒だ』

死『もう少し氣を落ちつけてきけ、結婚式の晩に死が生れたと云ふのは、呪の爲めでも、蝮の毒を盛る爲めでも無い、それは、愛をして最後の勝利を得しめんが爲めである。』

人間『嘘をつけ！　サタン！　死が愛の勝利の爲めだ！　あゝ、おまへの論理は「死」の論理だ！　地球の上では、凡てが二十三度半傾いてゐるが、おまへの國では、凡てが曲つて居る。おまへは虚無であり、空の空では無いか？　無に論理があるか？』

死『そんなに慌てゝ、わしの知慧の言葉を聞き落すな。わしは無では無い。無とは人間の姿だ！』

人間『エ？も一度、おまへが最後に云ふた言葉を繰返してくれ！　おまへは今何にやら妙な言を云ふたな！』

死『無とは人間の姿だ！』

人間『無とは人間の姿!?　無とは何者だ？』

死『無は人間が勝手に製造した符號だ！

それは人間の考へに有ることの反對であり、それは、現在に對する過去であり、それは現在に對する未來である。それは、價値に於ける評價の符號である。人間の『無』は『無』の『有る』無だ！　無が有ると考へるおまへが先刻わし

に向つて、第一の質問が、「無は實在か？」と質問したから、をかしくてたまらなかつたのだ。腦梅毒の曾孫は、論理まで梅毒性を帶びてゐる。わしはおまへらの理屈を聞いてゐるといつも悲しくなる。おまへらは、水の上に繪をかくやうなことをいつでも論じ合つてゐる。だから、わしは云ふのだ、「無」は人間の姿だと！」

人間「死よ、おまへは聰明なる印度の哲人の如く語る。そして、わしをその次の言葉によつて捕へる積りでは無いのか！おまへは永遠に人類の穽だ！」

死「勝手に考へておれ、萎縮した魂よ、勇躍して、わしの受け持つ役割の理解の出來ない低能よ、おまへは二つの眼にのみよつて世界の凡てが解決出來るやうに思ふてゐる表面的な馬鹿者だ！「無」は永遠におまへの姿として謎のやうに殘るであらう。「無」は永遠に萎縮して行く卑怯な影だ！

わしはおまへの「無」とは關係は無い。わしの無は、神の無だ！ 神の無は一と無限の間に介在する連續性の無だ。一つの進行形だ！價値の進行だ！ 自在の世界の一つの表象だ！變轉に對する一つの極限だ！ 變轉の極限とは固定の始まりだ！ 自在の世界に於ては變轉と固定は接續してゐる。否價値の世界に於ては變轉と固定は二つでは無い一つである。實在とは自らを自らのなかに創造するものを云ふのだ。即ち無の中に有を、有を無に變轉せしめ得るものを云ふのだ。それで無と有とは實在に於て同一の價値を持つ、無と有も結局は同じことだ。凡てが實在に取つては符號である。有と無とが同一なるが故に、眞の實在に取つては變轉と固定とが同一性を持たねばならぬこととなる。それは實在の極致だ。そこには、實在することと極大の價値を持つことが同一質を指すことになる。價値とは自在であることであるからだ。自在であるところには實在と眞善美が同時に存在する。眞なることが即ち實在であり、美であることが即ち實在であるのだ。そこでは實在で無い。眞と善と美は存在しない。無は凡て有を裏書きし眞善美の保護者として數へられる。即ちそれは空の空では無く、空の不空である。それは涅槃であり、賢こき法則の體得である。

この測り知れざる生命の世界に、虚弱なる卑怯の靈の動く餘地は無い。そこには破壞としての破壞は無い、暴虐としての暴虐は無い。それは神の神が凡てを表現するだけのことだ！「無」はその一つの形である。それを私は進行形の無と云ふのだ。それを私は神隱しと云ふのだ。神の世界は三元の立體で出來て居らない。神は多くの平面を持つ。三つの平面を寄せ合した立體の世界より隱されたものは實在性を失つたのでは無い。それが第四の面に移ら無いと何人が云ひ得るか？ 神は多くの平面を持つ。それを私は神の裳の襞と云ふのだ！ そしてそれが私——即ち死なのだ！』

人間『雄辯なる死よ！ おまへは有力なる論理を持つて、人間を罵倒し、自己を辯護した。然し、それでも老衰と、疾病と、災厄と破壞が殘つてゐる。わしはどうしても おまへの云ふ、神の裳の襞と云ふことが理解が出來ない。死は忌む可き生命の決勝點だ！ わしは 老衰と、疾病と、災厄と、破壞とを與へた神を呪ひ、運命を忌避する。死はその唯一の逃れの邑では無いか！』

死『嘗つて私が初めておまへの國へ來た時、おまへは人間の面を睨み付けた！ それは實に世界開闢以來の嚴肅なる姿であつた。死は骸骨の巣でも無ければ、腐肉の塊でも無かつた。彼は嚴肅なる天使の一人としてそこに立つてゐた。そして彼は人間に明かに告げた！

『衰弱したる文明の子よ自ら求めたる梅毒と酒毒の爲めに膿み疲れた皮相な戰ける小さき魂よ、昔、おまへの先祖が强健であつた日には「死」の使命はよく理解せられた。それは永き睡眠、健闘者への善き報酬、神の胸に歸る近道であつた。然し、今はおまへが生命そのものをも醜きものに塗り換へたるが故に、死もまた最も醜きものに成り終つた。昔は死は神の裳の襞——完全なる一つの藝術であつた。然し今は死は世界に於ける最も醜きものとして、有毒者の絞首臺と考へらるゝに到つた。エリヤと、モーセとの爲めには、死は次の世界への踏み段であつたが、自らを生命の舞臺に縊るものの爲めに、絞首臺と化して了つた。

『罪の價は死なり』とはわしの考へ出した言葉では無い。わしは愛の爲めに世界に產れ出でた。最も尊嚴なる生命の守護者、神の藝術なのだ。それを腐つた魂が、わしの面を見ざる爲めに、わしの尊嚴を蔽ひ、自らの醜態を辯護するが爲めに、わしの上に布片を蒙らせ、わしを世界に於ける最も恐ろしいものとして　地上の一角に佇立せしめた。あゝ　わしはこの侮辱に堪へ無い。そしてわしの本質を知らざるものが、生命を忌避すると稱して、神の愛の裝を無耶味に深くせんとする。わしは悲しくなつた。神は自ら破壞するものを破壞し給ふ。それは神の恩愛だ。わしの知つたことでは無い。神は死を絞首臺の爲めに設け給はなかつた。愛をして最後の勝利を得させんが爲めに、神はわしを招き給ふたのみである。それは生物も喜んで受けたところであり、上進の爲めに、自在の境地に入る爲めに、彼等は進んでそれを迎へた。

然るに今は、人間の惰弱と廢頹の爲めに、わしは破壞の祖先の如く考へられる。影だ！　影だ！　それは永遠に人間の影だ！　人類は自己の姿の影に自ら恐怖して居るのだ！　死は進化を助ける爲めに產れ出たにかゝわらず、人類は退化の極限として、わしを恐れる。わしは進化であるに、人類はわしを退化と呼ぶ。退化してゐるのは人類そのものでは無いか！　わしはその退化したものを地殼における神の邪魔物として除き去るだけではないか、卑怯者よ、デカダンよ、象徵者よ！　退化としての死は、それは人類自らの姿では無いか！　わしに何の關係があるか！　考へてみよ！』

そうそはれて、人間は俯垂れて、自己の兩手を見詰めて泣き出した。

それで「死」云は更に付け足した。

死「死は人生そのものの目的では無い。それに避難せんとするものは、宇宙生命の心持を知らないものの爲ることだ。裝の裝は裝そのものでは無い。死は生命の表限そのものですら無いのだ。生命の表現の手助けをするのみなのだ。強く生くるものには、死は少しも邪魔にはならない。死は勝利でも無ければ凱旋でも無い。強く生くるものに取つての

オーケストラの一節だ。死は勝に呑まる可きものだ！ 生命の反對ではない。生命の一節なのだ！生命があつて、死があるのだ。生命の反對を死と云ふのではない。生理的生命は土に還元する。然し生命そのものの法則が、疫病と老衰によつて破壞出來ると思ふか！ 法そのものが生命なのだ！ 宇宙生命は破壞は出來ない！ 破壞が出來るものは、破壞の出來るものだけだ！ 人間の破壞出來る部分は、自己が作つた部分だけだ！ 死によつて、人間の創作した凡ての罪惡と、不淨が破壞せられる。「罪の價は死なり」とは此意味だ！ 人間が作つたものを、自ら破壞に導くと云ふことだ。—然し、神の作つた部分は、人間では破壞出來ない。

無用なる努力、果しなき徒勞をやめよ！ 自殺とその効果は自己の實在性に對して、何の破壞をも企て得ないものだ！神の意志によつて生れ出でたものが、神の意志なくして、どうして取り去られ得やうぞ！ それは平面を換へたゞけだ！ それは絶滅では無い。

人間に絶滅と見えるものは、神の絶滅では無い！ 法則と、勢力と、生命を何人が破壞し得やうぞ、その法則と勢力と、生命に裏書づけられた人間の魂の實在は、表面的物質の條件を破壞したからとて、消え去り得ない。消え去つたものは或現象である。その條件は永遠に殘る。

昨日の「汝」を「無」の「汝」と云ふことが出來るか？「汝」はそれを記憶の中に再現するでは無いか！ 昨日といふ一平面に立つた「汝」は消え去つても、今日と云ふ平面に「汝」は立たせられる。それは、汝自らの力でこうするのでは無い。「汝」を産み出したものがそう有らしめたのだ。

その同じ力が「汝」を前に突き出す。今日の「汝」が死んでも、明日の「汝」は、他の平面に、今日の「汝」を再現するやうに立たせられ無いと何人が云ひ得るか！ 元來が自己が求めた實在では無いのだ！ 靜かに、考へるが善い、死即ち人類の前に常に立ち塞がるものは決して實在では無いのだ。おまへ達の押しが強ければ、強い程後ろに退くものな

のだ。

死は生命に對して、何物をも附加しない。それは進化の補助者、疲れたるものへの慰安、不淨なるものの掃除役にしか過ぎない。死の此邊は生命だが、死の彼岸も生命だ。死は生命の襞にしか過ぎぬ。

安心せよ、人間よ、私は永遠におまへの友人だ!』

そう云ふて、死は靜かに、またその面袍で自己の顔を蔽ふた。そして何處にか消え失せて了つた。

創作



出世五人男

宇野浩二

赤木阿珂丸に一人の風變りな友人があつた。彼は本名を伊能猪之吉と呼んで、當時角力界で第一人者と稱せられてゐた、茨木山といふ横綱力士の弟子であつた。阿珂丸とは同年の二十二歳で、名前こそ大淀といふ一人前の力士らしい稱號を持つてゐたが、當時はまだほんの取的中の餘り頭角を抜きん出てない取的の一人に過ぎなかつた。彼はその名前からも判じられる通り、大阪の產で、即ち產地は違ふが、小學校時代から大阪で育つた阿珂丸と、偶然同じ町内に住み、同じ學校に通つた關係から、つまりこの二人は幼な友達なのであつた。

神樣はこの二人を不思議な縁で結びつけた。それは多分彼等が九歳か十歳の秋であつたが、それ迄同じ大阪のずつと離れた山の手町に住んでゐた阿珂丸が、彼自身の家がなくなると共に、新らしく出來た下町の伯父の家に引取られて行つた日のこと、それは堀割に沿うた色町の一部だつたので、少年の阿珂丸は所在のないまゝに、一人で家を出て堀割の岸の方へと歩いて行つた。諸君も知らるゝ如く、大阪は堀割

の多い町のことで、現に彼がその前までゐた山の手の家にしても、坂を下りて二三町行つたところに堀割があつて、彼はよく小さい錨の形をした玩具に長い糸をつけて、橋の上とか川の岸とかから、その玩具の錨を投げつけては、水に流れて來る藻を拾ふ遊びに出かけたことがあつた。それが今度の彼の伯父の家は、さういふ堀割がもつと近くにあつた譯だつたから、彼は取敢ず今その玩具の錨を手にして、いそ〳〵と表に出かけた次第である。

　その時から五六年前にこの堀割に沿うた町に百軒以上の家を燒いた大火があつた。即ち阿珂丸が養はれることになつた伯父の家は、その燒跡に建てられた比較的新らしい借家の一つに違ひなかつた。ところで、その阿珂丸の家等の並んでゐる側は、その時までに悉く新築の家で埋められてあつたが、その反對の、堀割の岸に向つて緩い傾斜をなしてゐるところの、川岸側の方にはところ〴〵未だ大きな燒跡のまゝの姿が殘つてゐて、そこにはさういふ町中としては珍しく草が生えてゐたり、柳が延びてゐたり、砂利が積んであつたり、或ひはその柳の下に車力が休んで居たり、砂利の山の上に子供が遊んでゐたりした。

　阿珂丸はそこの船着きの便利な爲にこしらへられてある石段を下りて行つて、水際へ立つて、どうだらう、こゝの川は、今迄行き馴れてゐた川と比べて、どれ程藻が流れて來るだらうか、と眺めてゐた。これ迄の川よりも幅が狹くて、兩側に家々がぎつしり建て詰まつてゐるので、流れて來るものは、木片だとか、俵の藁だとか、古下駄だとか、いろ〳〵多かつたが、肝腎の藻が少なくて、そして稀に見出されても、新鮮な青い色をしてゐるのは殆どなくて、大抵汚れかゝつた綠色や、或ひは茶渇色をしたのが多かつたので、彼は輕い落膽を感じて、暫くぼんやりと水の流れを見てゐた。が、いつ迄さうしてゐても矢張りつまらないので、藻でさへあればどんなに氣に入らないのでも取つて見ることにして、もつともさういふ風に寛大にしても、容易に見付からないのを見出しては、持つて來た玩具の錨を右手に取つて、それを結びつけてある糸の端を左手の指の先に巻きつけて、獲物に向つてはそれを引つ掛ける爲に投げつけ投げつけしてゐた。

その時、いつの間にやつて來たのか、

「何してなはんね？」

斯う突然聲をかけたものがあつた。振り向く迄もなく、その聲と共に阿珂丸の傍に現れたのを見ると、それは彼と同年位の酷く肥つた、大柄の、著しく顔の赤い、その體格の印象と十分釣合つてゐるところの、鈍い目をした少年であつた。多分、その少年はこの邊の者らしく、彼も亦遊び相手がないらしくて、一人でそこらを歩いてゐたものに違ひなかつた。そして彼は阿珂丸を見付けて、見馴れない子供に近づくといふ好奇心よりも、その子供の持つてゐる不思議な玩具に氣を引かれて、斯う聲をかけたものらしかつた。この邊には斯ういふ藻を取る遊びとか、ましてその爲の小さい錨などはなかつたらしいのである。

それから、「あんたの家どこ？」とか、「これ迄何處にゐたの？」とか、さういふ問答が交された。

「わたいにも一遍貸しておくなはれんか？」と太つた少年は言つて、阿珂丸に敎はりながら流れて來る藻を釣つて見たが、見るからに彼の不恰好に太つた身體はさういふ運動をするのにぎこちなささうで、藻の代りに傍にあつた草履を引つかけたり、ブリキの錨に打ち當てたりして、一向うまく行かないので、彼はつまらなさうにそれを直に阿珂丸に返した。阿珂丸はいつの間にかその場に蹲んで、持前のぼんやりと目の前の景色を無心に眺める方法で眺めてゐた。

彼の目の前の、狹い堀割を越した向うは、大阪第一の繁華な町であるところの、道頓堀筋に軒を並べてゐる家々の裏側であつた。寫眞屋があつて、その隣にずらりと同じやうな構えをした芝居茶屋が並んでゐて、その隣には赤や青やの俗惡な色硝子の障子の嵌まつたうどんやがあつた。とある一軒の芝居茶屋の座敷では、阿珂丸位の年頃の男の子と、その妹らしい女の子とが、母親らしいのと向ひ合つて何か食べながら、笑つたり話したりして居る。その笑ひ聲が、堀割の水がどういふ作用をするのか、手に取るやうに阿珂丸と彼の新らしい友達との耳に羨ましく聞えるのである。うどんやでは數

組の客が、或客は赤色に見えたり、他の客は青色に見えたり、或ひは半分赤色、半分青色に見えたりして、飲食してゐる様が、他所の國の景色畫のやうに見えた。

さて又、向岸のそれ等の家と家とのある切れ目の間から、賑やかな道頓堀の通が見えるのである。家々の屋根の上を越して芝居小屋の櫓も見えるのである。模樣は分らないが、青や赤やに染められた役者の幟が、例の家と家との間から二三本も見えるのである。その前を、東から西に、西から東に、祭のやうに大勢の人々が歩いてゐるのである。

「賑かだな。」と見とれてゐた阿珂丸は溜息しながら言つた。

「あんたの前にゐた所は寂しいところだすの？」と太つた少年が聞いた。——

これが我々の赤木阿珂丸と伊能猪之吉の初對面であつた。猪之吉はその阿珂丸が引越して行つた町の隣の町の、小さな、一間半間口ほどの筆屋の息子であつた。

その後だん／＼に阿珂丸が知つたところに依ると、猪之吉は所謂人好きのしない質であつた、それは彼の太つた不恰好な身體の爲ばかりでなく、或ひはその異常に赤い皮膚の色の爲ばかりでなく、況して學課の成績がよくないからと言ふ譯ではなく、何か外に人が人と交際する爲に要するところの色々な條件の中の、最も肝腎なものにしみがあるとか、苦い素を持つてゐるとかいふ缺點があるらしかつた。だから、彼はそんな多くの子供たちが無邪氣に鬼ごつこをしたり、兵隊ごつこをしたりする年頃にも拘らず、彼の家からは二三町も離れてゐるところの、さういふ堀割の岸に一人でしよんぼりと立たねばならぬやうな境遇に陷ちてゐたのに違ひなかつた。

だが孤獨と言ふ點では阿珂丸も亦、猪之吉とは違つた性質からではあるが、同じことであつた。それは彼の內氣な、人見知りする、謂はば子供らしい濶達なところのない性質の爲であつた。然し、何かの機會があるとか、或ひは相當の時日さへ經過するとかした後には、彼の方からさへ望んで交はつて行きさへしたら、無論近所の他の子供たちは彼を拒みは

しなかつた。即ち交際の道さへ開けたなら、彼は最初の印象とは反對に、親しみを持たれる性質でさへあつたから。そして、その點では、猪之吉は彼とは全然反對であつた。と言つて猪之吉はその身體の大きさに比例して持つてゐるところの腕力を利用して他の子供たちに喧嘩をしかけるとか、或ひは又特別に狡い事をたくらむとか、意地が惡いとか、さういふ指摘され得るやうな缺點があるといふ程でもなかつた。だから、若し子供たちに「どうして君たちはさう猪之ちやんを除け者にするんだい！」と聞いたとしても、多分誰あつてそれに答へたものがないに違ひない。そして唯、「だつて、厭な奴なんだもの、」「どうして？」「だつて、僕、嫌ひなんだもの、」「まあ、それがどうしてなんだい？」「だつて、公ちやんも謙ちやんも皆さう言つてるもの。」斯う答へる外なかつたに違ひない。

實際、阿珂丸にしても、初めて、堀割の岸で猪之吉に會つた時、矢張り相手から餘りいゝ印象を與へられなかつたことは事實であるが、それと共に、相手がそんなに見も知らなかつた新來の子供に對して、一所懸命に親しみを寄せようと努めてゐる氣持は十分感じられた。初め阿珂丸はそれは猪之吉の不恰好な身體の附とか、變にどす赤い顔色とか、殊にその鈍い色でありながら、妙に大人びて見える目附とか、さういふ彼の體裁から來る不快さに違ひないと思つた。然し、人はたとへ目が片方潰れてゐようとも、足が一本位なからうとも、或ひは脊骨が曲つてゐようとも、さういふ理由で友達が出來ないといふことはあり得ない、その人が善い魂を持つてゐるなら、それはどんな醜い容貌の中にも光を放つものであるそして各々の子供はそんな理窟を知らなくても、心でそれを感じるものに違ひない、して見ると、小さい猪之吉はその不恰好な身體の中に、それに比例するやうな心持を持つてゐたのであつたらうか。

然し、阿珂丸は何よりも猪之吉の孤獨な姿に心を引かれて行つた。横町の、一度や二度通つた人の目からは必ず見逃されるやうな、汚くて狹い荒屋の店の間の奥には、いつでも朝から晩まで一人の變に年寄り染みた男が、一人の下職も小僧も使はずにせつせと一本一本筆を製造してゐた、それが猪之吉の父であつた。彼はいつ見る時でも仕事をする爲に腰から

上を屈めてゐた爲か、ひどく小つぽけな人間に見えた。實際、彼は何方かと言ふと小柄な男で、子の猪之吉を生んだのは母親に違ひなかつた。彼女は恐らく五尺四寸もあつたに違ひない、そしてその丈の脊に比例して横にも十分太つてゐた、全く彼女は大女であつた、やがて阿珂丸は成人の後、外國の小説本などを開いて、その挿畫の中に太つた大女の像を見ると、その度毎に少年の頃見た猪之吉の母を思ひ出した位である。

間口一間半のその店の間は、奥行の方が稍々長くて、多分六疊敷位の廣さであつたらう、全體板敷になつてゐて、入口の右手に疊一枚分程の上り下りの土間があつた。そしてこの家は自分の家でその製品を賣るといふよりも、他所の大きな家の仕事を引受けることを本職にして、殘りの、謂はゞローズ品を、そこに無雜作に並べてある四五箱の硝子蓋の箱の中に ボール紙に書いた定價の札と共にほり込んで、並べてあるといふに過ぎなかつた。だから、私たちは滅多にその店に立つて買物をしてゐる客人を見かけたことはない、そして見かけるのは奥の方で干からびた機械かなぞのやうに默々として仕事をしてゐる父親と、それからその疊一枚分の土間のところに、ぺつちやんこの下駄を穿いて、上り框にもたれて、丁度口に指を啣へんばかりの恰好で、その鈍い目付で何を見てゐるのであらう? 繼子のやうにぼんやりと往來を眺めてゐる猪之吉の姿とであつた。町の子供たちは通りがゝりにそれを見ると「やーい、金時やーい、金時の馬鹿やーい!」と彼の綽名を叫びながら駈けて通るのが常であつた。彼は然し馴れてゐるので さういふ嘲笑に接しても、相變らず虫のやうに默つてゐた。だが、彼とても決して虫ではなかつたので どんな彼の鈍い目でも それが罵り聲を立てゝ往來を濶歩する子供たちでなく、默つてその片隅をこそ／＼と歩いて行く阿珂丸の姿を見出した時は、忽ち彼並の動きをもつて動かねばならなかつた。彼は無言のまゝで今迄立つてゐた場所を離れて、颱のやうな走り方で往來を横切つて阿珂丸を目がけて走つて行つた。

「阿珂ちやん、何處へ行くの?」と彼は相手と顔見合はして、稍々暫くしてからやつとのやうに斯う聞くのが常であつ

た。

そんな時、阿珂丸は用のない時でも、その時の氣分で、用があるやうに答へることもあつた、又さうしてから相手の餘りがつかりしたやうな姿に氣の毒になつて、「だけど、一寸ぐらゐ遊んでもいゝの、」と言ひかへることもあつた。そんな時の猪之吉の喜びは、氣の毒にも！　彼が喜ぶ時の表情が赤人に好感を與へなかつたやうなそれであつたが、その出來損ひの張りこのやうな顏に溢れて見えた。そして、無論、斯ういふ性格の二人のことであつたから、それから二人でどれだけの間町を歩いたとしても、或ひは堀割の土手や、砂利の山へ出かけて行つたとしても、面白い話や笑ひ聲が交換される譯ではなかつた。然し、それがどんなに退屈に見える時でも、猪之吉にとつては何とも言へぬ喜びであると共に、阿珂丸には一種の負擔であることが多かつた、が、阿珂丸の性質として、一緒にゐる時にはそんなに負擔を感じながら、さて離れてゐる時、或ひは彼が妙に外の子供たちから除け者にされてゐるのを見る時、彼は忽ち猪之吉に、彼に對する唯一の同情者であるといふことの、同情を感じた。

さう言へば、少年時代に於ける彼と猪之吉との交際は悉くその同じ感情が附き添つてゐたものと見られた。彼等が高等小學校の二年級に進む時、猪之吉は落第した。阿珂丸は級中での最優等生であつたし、猪之吉は劣等生の部であつた。さういふ點からでも、後者はその大きな體格にも拘らず、いつも心の中で前者を尊敬してゐた。だが、この物語の初めに書いたやうに、この時代は赤木阿珂丸の所謂だんだら染の影の時代で、彼は初め同級の者たちから啞かと疑れた程、音無しく振舞つた頃であつた。即ち彼は伯父の家の方に越して來て間もなく、猪之吉等の通つてゐる學校に轉校したのであるが、そこで彼が級中の何十人かの生徒の中で、知つてゐるのは『恥づべき』猪之吉一人であつた。だから、彼は彼の内氣と虛榮心とから、家にゐる時よりも一層、猪之吉と言葉を交さなかつた、實際、町でさうであるやうに級中でも除け者であるところの、猪之吉一人を知つてゐる位なら、誰も知らない方が氣がきいてゐるといふ彼の考へは間違つてゐなかつ

たかも知れなかつた。そして又猪之吉も、彼自身外の者たちから蔑視されてゐる折柄、新來の友達のない阿珂丸が同じ學校には入つて來たのは、彼等同志にとつての好都合であると考へたのは水の泡で、阿珂丸がさういふ態度をとつたのに一時は落膽もし驚きもしたが、これ迄さういふ逆境に馴れ切つてゐた彼は、直にそれに辛抱することが出來た。のみならず、家に歸つたら兎に角、學校では阿珂丸に物を言つたら、彼は機嫌を惡くするといふことを、當然のやうに思ひ做すやうになつてしまつた。そんな譯で、阿珂丸は到頭その學校での三年間の間、殆ど誰とも物を言はずに、そして甚だ學課のよく出來る、驚くべき變つた少年として通つてしまつたのである。

その學校での、阿珂丸が二年級で、猪之吉が二度目の一年級の時代のことであつた。その一年級に、大瀬川といふ、當時大阪角力の大關を張つてゐた力士の息子が入學して來た。彼は入學して來ると共に、忽ち級中の者から小瀬川といふ綽名をもらつた、何故と言つて、彼は行く行く親の職業の跡を襲ふものと見えて、そんな子供の癖に、もう角力取流のちよん髷を結んでゐた、それればかりでなく、彼の父の大瀬川は弟子なども相當に澤山あつたので、自分の家に土俵場もこしらへてあつて、子の彼も恐らく七歲八歲頃からその土俵場で褌一つになつて角力の稽古をさせられてゐたものらしく、その時年齡は僅か十一歲であつたが同じ級中の誰よりもずば抜けて大きく、大きくてそして毎日土俵でいぢめた身體であるだけに身體の肉が締まつてゐたので、丁度本物の角力取の縮寫のやうに見えた。落第したので、彼と同級になつた猪之吉は、阿珂丸と同じく遲生れだつたので、その時十三歲であつたから、そして彼も亦生れ質大男であつたから、多分身體の大きさから言ふと、彼の方が幾分小瀬川より大きかつたに違ひない。兎に角、この二人は學校での大きな子供の二つの標本となつた。

だが、この小瀬川が現れたことは、猪之吉に非常な打擊であつた、と言ふのは、彼のやうな比較對稱が現れて、彼は一層肩身の狹い思ひをしなければならなかつたからである。幾ら大きくても、小瀬川には、あれは角力取の子で、そして角

力取になるのだからと言ふ無言の申譯があつた、それは申譯どころか、彼を却つて尊敬させることに役立ちさへした。だが、猪之吉は何の爲に大きいのだ、何の爲に赤いのだ、何の爲に太つてゐるのだ？。彼の光の鈍い目附が稍々下つてゐるのも、ちよん髷に結つてないのも、男振りの悪いのも、落第坊主であるのも、恐く周圍の者たちのからかい氣分を刺戟して、よい嘲笑の種になつた。そのうち、誰が言ひ出すともなく、この二人の者を角力はせようといふ相談が密かに企てられた。

それが同級生たちの間の相談であるうちは、彼の斷りも、姿を隠すことも、眞面目な怒り顔で退けることも、どうやら斯うやら成功してゐたのであるが、やがて上級生たちの興味を引き出すと共に、彼は絶對絶命に陷つた。それでも最初の一二回は大勢の上級生たちに捕虜のやうに取圍まれたり、手を引かれたりして小瀬川の前に連れて來られた時、彼はその場に蹲んでしまつて、それ以上動かうとしなかつたので、結局角力にまで至らなかつた。が、いつ迄もさういふ譯に行かなかつた。或時、彼は三四人の上級生に、言ふことを聞かなければ毆ると脅かされて、そこへ體操の教師なども現れて、「負けたつて勝つたつて何でもないぢやないか、伊能、やつて見ろ……」と言はれたので、到々角力ふことになつた。無論、いつも運動場の隅に一人で立つたり蹲んだりしてゐた阿珂丸のことであるから、彼はこゝまでのいきさつを知らなかつたのであるが、この時運動場に遊んでゐた大勢の生徒たちが、譯を知つてゐるものも知らないものも、急にわツと言つて事の起りの渦巻のまん中に馳け集まつて行つたので、阿珂丸は元よりそれ等の群集の中に這入つて行く氣はしなかつたが、何事が起つたのだらうと思つて、教員室の傍の石段の上に上つて見た。すると、蠅のやうに一ところに群がつてゐる群集の渦のまん中で、まぎれる方もなくちよん髷の小瀬川と、赤面の猪之吉とが角力を取らうといふ光景が、外の群集たちはどうしてあんなに押し合つて人と人との間から無理に覗き込むことの代りに、阿珂丸が立つてゐるところから見ることに氣が付かないのだらうと思はれる程、手に取るやうに見下ろされた。

斯ういふ對稱は世の中にそんなにさらにあるものではない。小瀬川の憎らしい程落着いた態度と、猪之吉のべそを掻いたやうな顏、そして忽ち死を決した者のやうな眞劍な顏附と。……突然、わーッ！といふ叫び聲が上つた。見ると、油斷をしてゐたらしい小瀬川が、猪之吉の馬鹿力に押し倒されて、尻持を突いてゐるのである。が、小瀬川はゆつくりした態度で立上つて、今度はひどく眞面目な顏附になつて、本式に、多分口の中で「おう！」といふやうな掛聲をしたに違ひない、そして双方が立上つたかと思ふと四つに組んだ、見物の群集が火事場のやうな呻りを立てゝ揺れた。遠方から見てゐた赤木阿珂丸の身體も固くなつた。そして今度はそんなに早く勝負が附かなかつたが、やがてどういふ手が用ひられたのかと、わッ！といふ觀集の叫びと共に、猪之吉の大きな、不細工な身體が俵のやうに小瀬川の足元に轉がつてゐた。

その日もそれ切りではなかつたし、その後も屢々この二人は大勢の輪の中で角力を取らされてゐたが、阿珂丸の目に觸れた範圍では十度に一度猪之吉が勝つことが稀であつた。そしてその度毎に、猪之吉の澁面と、眞劍な顏と、そして汗と恥とが繰り返された。或日曜日の夕方、ふと阿珂丸は例の堀割の砂利の山の上で猪之吉に會つたことがある、どんな言葉を交したか、後になつては無論悉く忘れてしまつたが、「私、もう學校いやでかなはん。」と猪之吉がぽつりと一言いつたのだけは忘れられない。彼のやうな者でも、落第よりも何よりも、餘程その角力を取ることが辛かつたに違ひない。

それから思ふと、中學時代は彼にはずつと幸福だつたに違ひない。彼は阿珂丸より一年遲れて中學に入學した。相變らず學課は出來なかつた。が、彼の友達である阿珂丸の所謂だんだら時代が、中學生活と共に忽ち快活な時期に這入つたので、それだけでも猪之吉には便利であつた。阿珂丸も亦猪之吉が友達であることを少しも恥ぢることは入らなかつた。それどころか、中學時代では、變つた人間を友達に持つてゐることを、自慢にさへすることが出來るのである。そして又、猪之吉にしても、こゝでは小學校時代と違つて、普通の學課の外に、柔術とか、腕力とか、惡戯とかゞ、學生たちの生活

の一項目となつてゐたので、その方で彼は多少手足を延ばす餘地を與へられた譯だつた。

現に彼は二學年の時から柔道部の選手に選ばれた。選手は柔道の課目の時には、教師の助手として、外の生徒たちと區別される爲に赤い帶を締めて、弱い生徒たちを教導する役目を當てられた。この柔道の時間が一週間に二度あつて、一度目の時は二年級と三年級と、二度目の時間は三年級と四年級とが一緒になつた。だから、阿珂丸が三年と四年との二年の間、一週間に一度づゝは必ずこの柔道の時間に猪之吉と一緒になることが出來た。そして、その時は阿珂丸の方から挑んで、助手である猪之吉とよく柔道の稽古をしたものである。

ところが、こゝに面白いのは阿珂丸の柔道であつた。彼は讀者にも略々想像されるだらうが、脊は稍々高かつたが、蟋蟀のやうに瘠せてゐるといふ點までは、普通によく見る神經質な學生と別に變りはないのであるが、一つ彼の最も人並でない特徴をなしてゐたのは、その身體が蒟蒻のやうにぐにや〳〵してゐたことであつた。と言つて、見たところは別に骨なしでも何でもないのであるから、普通の人間と變りはないのであるが、角力を取るとか、柔道をとるとかすると、忽ちその特徴が現れるのであつた。現にそのことを、大阪地方の言葉で「ふにや〳〵」といふ言葉で形容することから「ふなふな」ともぢつて、更に轉化して「鮒」といふ綽名で呼ばれてゐた位であつた。さういふ體質の彼の身體は、柔道などをする時はゴムのやうに容易に曲るが、又ゴムのやうに忽ち元の通りに戻つた。それにもう一つ身體が輕かつたのが、そのゴム的な體質と助け合つたものか、譯なく牛若丸のやうに飛び上つて、そして極めて輕く足から先に下りて來ることが出來た。だから、彼には大抵の柔道の手が掛らないのである。彼はそれを知つてゐるので、大男で、馬鹿力のある猪之吉と勝負をすることが好きであつた。何故と言つて、相手は技こそそんなに巧みではなかつたが、その體力と腕力とで、多分一級とか二級とかいふ柔道上の腕前を持つてゐた。

だが、さういふ猪之吉が何も猪之吉だけに限らなかつたが、勝負に於いて到底阿珂丸の敵ではなかつた。と言ふのは、

猪之吉がいくら技をかけても、阿珂丸の身體はたゞ蒟蒻のやうに搖れるだけで、決して倒れなかつたし、又どんなに暴力をもつて相手を振り廻しても、阿珂丸の身體は毬のやうに飛び上るだけであつた。そして彼が少し焦れ出して、疲れが出た時分に、阿珂丸が眞似事のやうに足を出したり、身體をひねつたりすると、見事に相手の大きな身體がころりと轉がるのであつた。もつとも相手が轉がると共に、疲れてゐる阿珂丸もそれに連れてひよろ〳〵と轉がることが珍しくない。そんな譯で、あの捲き込みと言つて、自分の身體を相手の腕に捲き込んで、自分の身體の重みと一緒に相手を倒す手があるが、あれだけは阿珂丸に禁物であつた、あれは彼に飛ぶことも、曲ることも許さない技だからである。あれをやられると、阿珂丸の身體はうんと呻いて、猪之吉の身體の下敷きになつた。だから、捲き込みの一手だけは、阿珂丸は誰を相手にする時でも、豫め斷つておかねばならなかつた。

さて、阿珂丸が中學を卒業した年のことであつたが、猪之吉に彼の生涯の運命を定めることになつたやうな、大きな事件が起つたのである。その年の三月の初め、阿珂丸が中學五年級の最後の試驗、即ち卒業試驗を受けてゐる時、猪之吉は二度目の三年級の進級試驗を受けてゐた、と言ふのは、その前の年、彼は同じ試驗に落第した爲に、三年級を二度繰り返したからである、ところが、その二度目の試驗に彼は又もや落第したのであつた。

これはよく〳〵の事に違ひなかつた、何故と言つて、學校の規則として同じ學年の間に二度つゞけて落第した者は退校させることになつてゐたので、學校の方でも又受持教員の方でも、大抵の場合は採點の上で無理な融通をして通過させてやるのが例であつた、餘程それ〳〵の科目の成績の惡いものでも、受持教員の斡旋なり、その他の教員の同情なりで、最後の教員會議といふもので救はれるといふことも、斯ういふ場合の生徒の爲に屢々適用される方法であつた。だから、これ迄の學校の歴史を參照しても、稀に二度つゞけて落第して、退校させられた例がないではないが、それは學課の劣等よりも品行の方に甚しい缺點があつて、學校や教員たちからさういふ機會にでも退校さした方がいい、と言ふやうな意見

を暗々のうちに持たれてゐるやうな者の場合であつた。
然し、伊能猪之吉、彼は何方かといふと、鈍に見える生れつきで、決して不良少年になり得るやうな慧敏な氣性は爪の垢ほども持つてゐなかつたやうに見えるし、その大きな身體に反比例して可成り氣の弱い性質だつたし、要するに教員たちに幽擾い思ひをさせることはあつても、決して彼等に反感を持たれるやうなそれではなかつた。それにも拘らず、彼は落第したのである。それが發表された時、阿珂丸は他の二三の級友と相談して、學校の當事者に嘆願に行つたことがあつた。受持教員が言ふには、「それは君たちを煩はす迄もなく、我々の方でどんなに心配したか知れないんだ。教員會議でも一時間位あの事で話が出たんだが、結局、伊能は落第させるといふよりも、今のうちに退校さして、何か外のもつと適當な方面に向はせる方がよからう、といふ事になつたんだ。諸君の伊能に對する友情は我々も記憶しておくよ、伊能も永久に忘れないだらう。然し、さういふ譯だから、我々の意のあるところを了解して、引取つてくれ給へ。もつとも、發表する前に、伊能の父兄を呼んでよく話しておいたから……」
この發表の前に、既に猪之吉の父兄を呼んで、學校の方から話をしたといふ言葉は、こゝに談判に來た阿珂丸たちには初耳だつた。そんな事があるなら、どうして彼等が談判に來る前に、猪之吉が談判委員たちに打明けなかつたのだらう、「不都合だね、不愉快だね、」果ては「さういふ奴だから、こんな事になるんだ。」などと彼等は言ひ合つた。その上、尚教師の附け足したところに依ると、大抵の落第生は受驗の諸科目のうちで、外の科目は相當の點であるが、中で、一科目とか也いく二科目とかが落第點になるのが普通であるが、猪之吉の場合は體操を除く他の科目は唱歌から習字圖畫に至るまで悉く落第點か、それに近い點で、殊に英語などは零に近い、斯ういふ出來ない生徒といふものも珍しい、現にどうして彼がこれ迄一年と二年と通過したか、教員會議でそれが問題になつた、多分カンニングを巧妙にやつたのだらう、然し、これではカンニングをするだけの腦力さへ疑はれる、などといふ話が出た位である、とのことだつた。この話も、阿珂丸

たちが斯うして交渉に來るに就いて、猪之吉から聞いて來た時には、英語だけがどうも不得手だから、それがいけないんだらう。といふ話だつたのだ。で、交渉に來た生徒たちは、もうその上嘆願する氣力を失つて引取つた。彼等は彼等の初めの目的だつたところの、猪之吉を落第から救ふことが出來なかつた遺憾さよりも、彼が成績發表以前に父兄を呼び出された事を隱してゐたこととか、どの課目も悉く出來なかつた癖に英語だけが惡かつたと言つたこととか、總てあの大きな鈍な顏をした人間としては可愛氣のない、何方かといふと不純と見えるやり方に反感を感じてゐたので、互ひに馬鹿馬鹿しいことをしたやうな、白けた氣持になつてゐた。で、誰が言ひ出すともなく、その結果を早速猪之吉に知らせに行くことの代りに、千日前にでも廻つて遊んで來ようといふことになつた、そして、猪之吉への返事は、手紙でもいゝから、それを阿珂丸に任さうと言ふことに定められた。

人々と別れて、夕方、阿珂丸は家へ歸つて來ると、猪之吉にどういふ落度があつたにせよ、折角彼から賴まれて行きながら、多分どんなにか首を長くして待つてゐるだらうところの猪之吉を無視して、千日前あたりを遊んで廻つたことに、外の者は兎に角、その復命を賴まれもし、又猪之吉と一番近所に住み合つてゐる間柄として、非常に濟まない氣持に攻められた。けれども、どんなに遲くなつたとはいへ、成功の報告をするのならば此方に勇氣が與へられる譯だが、それが全然絶望のそれなのであるから、あの猫の額ほどの間口の もうこんなに日が暮れてしまふと 昔の家の夜のやうに薄暗い、忙しい樣子をした糸屋の前に立つことと、あの小つぽけな父親と、西洋婦人のやうに大きな母親と、赤面で、無口で、どうかするとこの世の邪魔物かさうでなければ見世物かになりに生れて來たやうに見える猪之吉と、三人が三樣の悲しい顏をしてゐる中に交りに行くことを考へると、迚も出かけて行く勇氣が起らなかつた。そこで、そんな近所に住みながら、變な氣がしたが、仕樣がないので、彼は手紙に、賴まれ甲斐もなく交渉がうまく行かなかつたこと、然し學校だけが我々の唯一の立身の途といふ譯ではない、却つてこれを機會に災を轉じて福とするやうなことになるかも知れないから、決し

て失望しないで今後の善い策を講じられたいなどと書いてゐるうちに、ふと先に學校へ出かける前に猪之吉がすつかりの事情を自分たちに打明けてくれてなかつたので、教師の前で面喰つたことを、多少攻めるやうな調子で附け足した。

それに對して、猪之吉からの形式的な禮狀も、或ひは改めてもう一度頼んで見てくれといふやうな手紙も、何にも來なかつた。そして、後になつて考へて見ると、この手紙を境界にして、彼と彼との交際が一時氣まづくなり、且つ一時絶えたのである。たつた一度、それから二三ヶ月ほど後のことであつたが、或日曜日の朝、阿珂丸は、――その頃から次第にこの年頃の少年獨特の熱情を以て、彼は文學に沒頭し出してゐたので、――中の島の圖書館に行つたことがあつたが、どうしたのか、その日は早く倦きたので、晝飯を濟ますと間もなくそこを出て、當時未だ電車のなかつた時分なので、浪花橋を渡つて、あの長い一直線の通を南向いて歩いて行つた。その頃からの癖で、阿珂丸は心に何も考へてない時でも、考へてゐるやうに俯向いてとぼ〳〵歩いてゐた。と、

「はい！」

斯う突然後から走つて來た車屋に警戒の聲をかけられて吃驚した。それはたとへ此方に七分の非があつても、何とか、馬鹿！とか、後に目があるか？　とか、言ひ返してやりたいやうな高飛車な聲なので、阿珂丸は一歩横に避けながら、立止まつて、むツとしてその聲の方を睨みつけた。實際、それは以前の大阪の特長をなしてゐたところの、立派な本通ではありながら、俥が擦れ違ふのに困難を感じるやうな狹い町筋だつたので、阿珂丸が棒立ちに立つてゐる傍を、殆んどすれ〳〵に、今の聲はこの男の口から出たのか！　と疑はれるやうな、小つぽけな、年寄り年寄りした車夫に依つて引かれる一臺の俥が、割合ひ早い驅け方で追ひ拔けて行つた。

「おゝ！」と阿珂丸は思はず叫びかけて、危くその聲を呑み込んだ。

すると、車上の人物もはツとしたらしく、一瞬間路傍の阿珂丸の方を振返つて、一瞬間何か言はうとして、忽ち半分出

かゝつた言葉を口の中に呑み込んだと見えた。そして、二人が上と下とで顔を見合はしたのは、矢張りほんの一瞬間であつた。車上の人物――それは伊能猪之吉の外のものではあり得ないところの、不恰好に太つた、それは大人でなく未だ少年であるだけに妙に不釣合な、不具的な印象を人に與へるところの人間が、後から知人に見られてゐる意識で、その短くて太い眞赤な頸筋をうづ〳〵さしてゐる感じが、此方の阿珂丸にも十分感じられるやうな後姿を、次第に遠ざからせて行つた。阿珂丸は何とも名状することの出來ない、兎に角相手がそんな俥に乘つてゐるだけに、見下ろされたやうな不快さと、彼が當然挨拶をしかけなければならぬ筈を、他人のやうな顔をして臨み拔けて行つた無禮さとに、苛立たしい、憂鬱な感じに取殘された。が、ふと、そんな筈があり得ないのであるが、猪之吉を乘せて走つてゐる車屋が、猪之吉の父親とそつくりの體格の男であることに氣がついて、可笑し味を覺えた、その可笑し味に幾分か救はれた氣持で、彼は再び南に向つて歩き出した。

その時から、彼は二年以上彼を見なかつたのである。その間に、阿珂丸は東京に出て文學の修業の爲に大學に這入り、その間に猪之吉に前に言つたやうに、大關茨木山の弟子になつて、角力の修業を始めたのである。或日、彼は思ひがけなく、鹿兒島から、そこの高等學校に入學してゐるところの、彼の中學同窓の友達二三人からの連名の繪葉書の中に、伊能猪之吉の文句は唯拙い字で、無沙汰の侘を書いてあつたゞけだつたが、外の友達が惡戲したのであらう、彼の名前の下に括弧をして、（角力名、大淀――大した名前だらう）と書いてあつた。そして、當時彼――大淀が茨木山の地方巡業の一行に加はつて、鹿兒島に來てゐるといふことが附加へられてあつた。後になつて阿珂丸は知つたことであるが、曾て浪花橋の通り、鬪牛館歸りの彼の傍を俥で通り拔けた時、猪之吉は當時神戸に地方巡業に來てゐた茨木山に、弟子になりたいと頼みに行つて、どうやら斯うやら許可してくれさうだつた返事を得て、新しい希望に胸を躍くしながら、梅田の驛から俥で彼の家へ歸る途だつたといふことである。無論、その時の車屋は彼の父ではない。

だから、二年振りで、それは阿珂丸が例の神樂坂の三階建の下宿屋にゐた時であつたが、ひよつこり猪之吉が褌擔ぎの姿になつて中學以來の顏を見せた時は「やあ、」と彼は流石に懷しさに充ちた聲で叫んだ。「やあ、」と猪之吉も木魂のやうに應じた。その聲が？二年間かなかつたうちに、角力の修業がそんな聲を爲したのであらうか、急にしつかりした、底力あるものになつてゐたのに阿珂丸は驚かされた。驚かされたのはそればかりではなかつた。

「君、どうしてそんなに目が釣り上つたんだ？」と阿珂丸が尋ねた。「以前は君の目は助平型だつたぢやないか？」

「これは髮を上げたからだよ、」と言ひながら、褌擔ぎの猪之吉の大淀は、自分と自分の、未だちよん髷には結つてないで、元結で尖を結えてある毛端を片手で持つて、わざとそれを引詰めて見せながら。「こんな風にするからね、痛いあ。」

「おゝ、君、その耳はどうしたんだ。その耳の穴は？」と阿珂丸は叫んだ。「すつかりぐぢやぐぢやになつて、殆ど穴がなくなる程潰れたやうになつてるぢやあないか？　然しもつとも、角力取の耳は誰のでもそんな風になつてるらしい、どうしてそんな風になるんだ？」

「これや張手といふ奴で、」と猪之吉は平手で横に叩く眞似をしながら「これで稽古の時に容赦なくばちばちやられるからだよ、殊にうちの大將の茨木山の稽古といふのは、猛烈で有名だからね。」

「それや、そして、一生なほらないんだらうね、その耳の穴は？」

「それや、このままだよ、」と褌擔ぎの猪之吉は答へた。

（つゞく）



やうか月の晩

中條百合子

夜、銀座などを歩いて居ると、賑やかに明るい店の直ぐ傍から、いきなり眞闇な可怖い横丁が見えることがあるでせう。此から話すお婆さんは、あゝ云ふ横町を、何處迄も何處迄も眞直に行つて、曲つてもう一つ角を曲つたやうな隅つこに住んで居ました。それは貧乏で、居る横丁も穢なければ家もぼろでした。天井も張つてない三角の屋根の下には、お婆さんと、古綿の巣を持つ三匹の鼠と、五匹のげじ〳〵が居るばかりです。

朝眼を覺ますと、お婆さんは先づ坊主になつた箒で床を掃き、缺けた瀬戸物鉢で、赤鼻の顏を洗ひました。それから、小さな木鉢に御飯を出し、八粒の飯を床に撒いてから、朝の食事を始めます。八粒の米は、三匹の鼠と五匹のげじ〳〵の分でした。さつきから眼を覺し、むき出しの梁の上で巣を片づけて居た鼠やげじ〳〵は、木鉢に箸の鳴る音を聞くと、揃つて床に降りて來て、お婆さんの御招伴をするのでした。

お婆さんも鼠達も、食べるものは澤山持つて居ません。食事はすぐ濟んで仕舞ひま

ず。皆が行儀よく又元の梁の巣に戻つて行くと、お婆さんは「やれやれ」と立ち上つて、毎日の仕事にとりかゝりました。仕事と云ふのは、縫とりです。大きな眼鏡を赤鼻の先に掛け、布の張つた枠に向ふと、お婆さんは、飽きるの疲れるのと云ふことを知らず、夜までチカチカと一本の針を光らせて、いろ〱綺麗な模様を縫ひ出して行くのでした。

下絵などと云ふものは何處にもないのに、お婆さんの縫つたものは、皆真個に生きて居るやうでした。彼女の縫つた小鳥なら吹く朝風にさつと舞ひ立つて、瑠璃色の翼で野原を翔けさうです。彼女の縫つた草ならば、布の上でも靜かに育つて、秋には赤い實でもこぼしさうです。

町では誰一人、お婆さんの縫とり上手を知らないものはありませんでした。又、誰一人、彼女を「一本針の婆さん」と呼んでこわがらない者もありませんでした。

何故なら、お婆さんは、どんな模様の縫をするにも、決して一本の針しか使ひません。その上、如何程見事な縫ひとりを仕ようが、其がちやんと出來上つて仕舞ふ迄は、假令頼んだ人にでも、仕事の有様は見せませんでした。そして、彼那貧乏だのに御禮に金はどうしても貰はず、たゞ、よい布と美しい絹糸を下さいと云ふばかりなのです。お婆さんの家へ行くと、いつも鼠やげじ〱が、まるで人間のやうに遊んで居るのも、皆には氣味が悪かつたのでせう。

一本針の婆さんの處では、滅多によその人の聲がしませんでした。けれども、目の覺めるやうな色の布と絲とで、燈光をつけないでも夜部屋の隅々がぽうと明るい程でした。

赤鼻の、大眼鏡の、青頭巾の婆さんは、朝から晩までその裡で縫をして居るのです。

ところが或時のこと、町ぢゆうの人を喫驚させることが起りました。其はほかでもない、春の朗らかな或朝、人々が朝の挨拶を交し乍ら元氣よく表の戸や窓を開けて居ると、遥か向ふの山の城の方から、白馬に騎り、緋の旗を飜した一隊の人々が町に入つて來、家もあらうに、一本針の婆さんの處へ止つたと云ふのです。

頭に鳥毛飾りの帽子をかぶり、錦のマンテルを着た人は、王樣の使者でなくて誰でせう。
風邪をひいた七面鳥のやうな蒼い顏になつたお婆さんに、使者は恭々しく禮をして云ひました。
「お婆さん、ちつとも驚くことはありません。私共は王樣の姫君から寄來された使です。今度王女樣が隣りの國の王子と御婚禮遊ばすについて、どうか、朝着る着物を、貴女に繍つて貰ひたいと仰云います。夜のお召は、寶石と云ふ寶石を鏤めて降誕祭の晩のやうに立派に出來ました。朝のお召は、何とかして、夜明けから晝迄の日の色、草木の樣子を、そのまゝ見るように拵へて貰ひたいと仰云るのです」
人さし指と親指で暫く顋を撫で乍ら考へた後、お婆さんは、
「よろしうございます」
と答へました。
「拵へて差上げせまう。どうぞ直ぐ絲と布とを下さいませ。」
お城の倉からは、早速三巻の七色の絹絲と、眞珠のやうな色をした白絹の布とが運ばれました。それを受取るとお婆さんは、いつもの通り「九十日目に來て下さい」と云つて、ぴつたり家の扉をしめて仕舞ひました。
九十日目に來た使者は、決して途中で開けないと云ふ約束で、一つの小さい茶色の紙包みを渡されました。中に、どんなお召が入つて居たでせう。翌朝、暗いうちに鏡に向つて、初めて其を着て見た時は、流石の王女も、暫くは息もつけない程でした。
着たまゝ、人魚にでもなつてしまふのではないでせうか。着物の裾には、睡い、深い、海の底の樣子が一面に浮上りました。銀の珠でも溶かしたやうに重く、鈍く輝く水の中では、微かに藻が搖れ、泡沫が立ちのぼります。肩にたれた髮から潮の薫りが流れ出して、足許には渚の櫻貝が散りさうです。

次第にお城の柱に朝日が差して來る頃になると、鏡の前に立つたまゝ、王女の着物は、ほつそりした若木の林が、朝の太陽に射とほされる模樣に變りました。海底の有樣は柔かい霧の下に沈み、輝く薔薇色の光線の裡に、葉をそよがせる若い樹が、鮮やかな黒線で現れます。晝頃になると、王女の體全體はまるで天降つた太陽そのままに燃え輝きました。胸と云はず脚と云はず、歡びを告げる平和な焰色にきらめき渡る頂に、澄んだ彼女の碧い二つの瞳ばかりが、氣高い天の守りのやうに見えるのでした。

此着物を身につけさへすると、王女は假令如何那泣き度いことがあつても、それを忘れることが出來ました。つきない泉のやうな悦ばしさ　照る日のやうな望みが絲の縫ひめをくぐり出て、日々新たに王女の魂を滿すのです。

不思議なことに、一本針の婆さんは、着物を王女に差上げると、そのまま姿を隱して仕舞ひました。家の扉の錠前は赤く錆つき、低い窓には蜘蛛が網を張りました。部屋の中には、唯一枚、大きな黒天鵞絨の垂幕が遺つて居るばかりです。

然し、その垂幕には、此世で又と見られさうもない程素晴らしい繡がどつしりとしてありました。

そよりともしない黒地の闇の上には、右から左へ雪白く夢のやうな天の河が流れて居ます。光つた藻のやうな金星銀星その他無數の星屑が綠や青に閃きあつて居る中程に、山の峰や深い谿の有樣を唐草模樣のやうに彫り出した月が、鈍く光りを吸ふ鏡のやうに浮んで居ます。白鳥だの孔雀だのと云ふ星座さへ其處にはありました。凝つと視て居ると、ひとは、自分が穢い婆さんの部屋に居るのか、一つの星となつて秋の大空に瞬いて居るのか、區別のつかない心持になるのでした。

お婆さんを見かけたものはありません。

併し、毎月、八日の月が丁度眼鏡の半かけのやうな形で、蜘蛛の巣越しにお婆さんの窓を照す夜になると、黒天鵞絨の垂幕の面は、さも嬉しさうに活氣づきました。

赤や黄色の星どもは、布の上からこぼれ落ちさうに煌きます。假睡んで居た月は靜かに一廻りして皎々と照り出します。

いつか出て來たお婆さんはその中で、樂しさうに美しい絹絲を卷き始めました。三匹の鼠は三つの處に分れて立ち、糸車のやうに體の周りでクル〳〵かせを走らせ乍ら、お婆さんの手傳ひをします。其那時、金剛石のやうな光りの尾を引いた流星達は、窓の外まで突ぬけさうな勢で、垂幕の端から端へと滑りました。

けれども誰一人此を知つて居る者はありませんでした。お婆さんが糸を卷くのは、もう風見の鷄さへ、羽交に首を突こんで一本脚で立つたまゝ、ぐつすり眠つて居る刻限でしたもの。

終



風の烈しい日の記憶

小川未明

十歳と、二の年は違つてゐたのではなかつたけれど、女は若く、主人は、非常に老けて見られた。

女は、はき〳〵としてゐた。そして、醜い方ではなかつた。主人は、默り込んで、のそり、のそりと歩いた。顔は髭深く、その脊は曲つてゐるやうにすら見られた。しかし、少し付合つた人々なら、主人は、非常な好人物であつて、女は、勝氣な、負け嫌ひな性質であることが分つたのである。

秋が至ると、なんで、私は、この夫婦者のことを思ひ出すだらう？　村では、主人のことを牛と綽名してゐた。そして女房を蝮を食つたちんころと言つてゐた

その比喩は當つてゐた。主人は、毎朝、のそり、のそりと歩るいて、脊を圓くして、辨當箱を下げて、小學校へ行つた。一里ばかり、離れた村の分校の教師であつた。その留守は、細君は、乳飲子を脊負つて、前の圃に出て働いてゐた。

「おかねさん、あんた程の器量好しなら、どんな働きのある男とでも夫婦になれたのに……」と、村の者で、じやうだんではなく、ほんたうにかう考へて言つたものもあつた。

しかし、これは格別彼女の心を動搖せしめるに足らなかつた。

彼女は、脊中の子供が泣かうが、叫めかうが、するだけの仕事をやり終はせずには置かなかつた。

小供は、ヒイ、ヒイ、と脊中で泣いてゐる。それでも構はずに、彼女は、野菜に肥料もやれば、また、ある時は、家の前で張物もしてゐた。

ある時などは、子供を負つたまゝで、仰向いて柿の實を竿で落してゐることもあつた。自分のしようと思つたことは、なんでもした。かうして、柿の實が、あやまつて小供の頭に當つたこともあつた。

子供は、火のつくやうに泣いた。近所の女達は、出てこの有樣を魂消た顏付をして見てゐた。しかし、彼女は、知らぬ顏をして、したいと思ふだけのことは、せずには置かなかつた。

村で、中學校敎師の住んでゐた家、屋敷が賣物に出た當時であつた。

「圃も廣いし、家の周圍の杉の木だつて、あれ程あるのに、その價では安いものだ」と、みんなは噂し合つたが、さらばといつて、それを買ひ得るだけの人もなかつた。

「おかねさんは、あの家を買ひなさんか？ しかし、いくら働きがあつても女の手では、買はれないだらうね」と、彼女に向つて、言つたものがあつた。

勝氣な彼女は、さつと顏の色を赭くした。

「妾、買つてもいゝわ」と、答へた

相手の者は、彼女の言ふことをほんたうとはしなかつた。

しかし、それから、そんなに後のことではなかつた。彼女が、その家と屋敷を買つたといふことが、村の評判となつた

彼女は、いままでの家を賣拂つた。そして足らないところを借金した。そして其の家と屋敷を買つた。

「畑が澤山ありますから、これから、妾が精を出して稼いで、借金は返して見せます」と、知つた者に彼女は洩らした。

いくらきかぬ氣の女でも、それは、畢竟空想に過ぎなかつた。人間の力には、殊に、女の力では、もとより稼ぐのに限りがあつた。彼女は、勝氣から、そして、虚榮からのために出來ぬことを空想したのであつた。

どんな場合に立至つても、牛は、牛であつた。世間では、蝮食つたちんころは、どうするだらうと笑つて見てゐた。

それから、後のことであつた。

「おかねさんの樣子が、馬鹿に、派手に、美しくなつたぢやないか？ これには、仔細があるのだらう」と、言ひ觸らしたものがある。

「色男が、できたんでないか？」

「さうでない、誰か、金のある男の妾になつたんだらう」

「あの勝氣の女が、誰の？ 妾には、なりやしまい」

こんな話があつた。また、その後である。

「行つて見なさい。おかねさんは。立膝をして、煙草をすぱ〳〵やる樣子たら。立派な姐御だから、この頃は、盛に賭博をやるさうだ。なんでも、自分の家でもやるさうだ。牛さんが、外に立つて、張番をしてゐるといふ話だ」と、かう言つた者があつた。

おかねが、大儲けをして、借金を立派に返してしまひ、家、屋敷を全く自分のものにし、その上柔らかな着物を被て、贅澤な暮しをし、主人は、安月給の學校教師を退いてしまつて、いつも暇には釣竿を下げて、どこかの河へ出かけて行くやうになつたのは、それからのことであつた。

彼女を、そしるより、評判の方が高かつた。

「よく女の腕で、あれだけのことをやつたもんだ」
村では、かう言ふ者が多かつた。

秋が來ると、なんで、私は、この若い、美しい、勝氣であつた女のことを思ひ出すだらう?
秋晴のした、風の烈しい日だつた。雲は、あちらの森の頭の上を、ちぎれて飛んで行つた。森の中には、すでに色づいた木立も混つてゐた。しかし、傍の桑の葉には、日の光りがユラ〳〵と反射してゐた。
おさと婆が、あちらからやつて來た。この老婆は、つけ〳〵思つたことは、誰に向つても言ふので、村の人達の中には、却つて憚るものもあつた。もう頭髮の白くなりかけた、その辭正直一面に親切なところのある老婆であつた。
おかねは、頭を櫛卷にしてゐた。やはり背に子供を負つて、村端の方へ急ぎ足で行きつゝあつたが、途上で、ゆくりなくもおさと婆に出逢つた。
(私は、まだ子供で、外に遊んでゐて、この時の有樣を見て記憶してゐるのである。)
「おかねさ、また、賭博しに行くのだらう。玄人相手に負けやしやんな。いんまに、家も屋敷も取られてしまふから」
おかねは、餘程、思ひつめてゐたものか、顏の色が青かつた。ほつれた髮の毛が、風になぶられながら顏の上にかゝつてゐた。しかし、老婆にかう言つて、聲をかけられると、彼女は、こちらを向いて、につこりと笑つた。そして、いつものはつきりとした調子で、
「どうせ、儲けて買つた家や、屋敷ですもの、取られて、もともとなんだわ」と、答へた。
おさと婆は、怖しい顏付で、睨むやうな眼付をした。

「いはんこつちやない。いまのうちに、やめやつしやい。しまひには、一文なしになるぜ」と、言つた。

「お婆さん有がたう。妾、うんと儲けて來るわ」

彼女は、さつさと行つてしまつた。

北國の秋にあり勝ちな、凄まじい烈風は、圃や、森の中の木々の梢を吹いて、きれ〴〵な痛ましい、鋭い叫びが聞かれた。

「ほんとうに、碌でなしめが……」

おさと婆は、眞に、心からいま〳〵しさうに舌打をして、つぶやきながら、風に吹かれて反對の方向に歩るいて行つた。

霙の降る時分には、もうおかねの家、屋敷は人手に渡つてゐた。

牛のやうな主人は、その前に、田舍の親類へ行くといつて出たぎり、二たびこの村には戻つて來なかつた。

主人の故鄕へ歸るには、船で行けば、岩鼻を迂廻して、一日餘りの旅に過ぎなかつたけれど、秋の末には、もう海が荒れて船は立たなかつた。

歩るいて行くには、山脈を一つ越さなければならなかつた。おかねは、もうこの村にゐては、何うすることもできなかつた。あちらから米を借り、こちらから味噌を借り、至るところに借金ができて、不義理をしてゐたので。身には、まだ。汚れたうすい袷を被て震へてゐたのであつた。

ある日、彼女は、誰にも氣付かれない間に子供を負つて家出をした。もう、山を越して主人のゐるところに行くよりは。仕方がなかつたからだ。

秋から冬にかけては、北國の山中は、終日天氣といふ日は稀であつた。そして、その當座は、鋭い寒い日がつゞいた。朝になつて、あちらの山々を見ると、頂きの方が眞白であつた。牙のやうに。鋭く逆に尖つた刀のやうに。山々は、青い

空に、姿をくつきりと露はしてゐた。

畑のとり殘された、野菜の葉は、すつかり傷んで、常盤木を除いて、林の木々の葉は、崩落し盡してゐた。

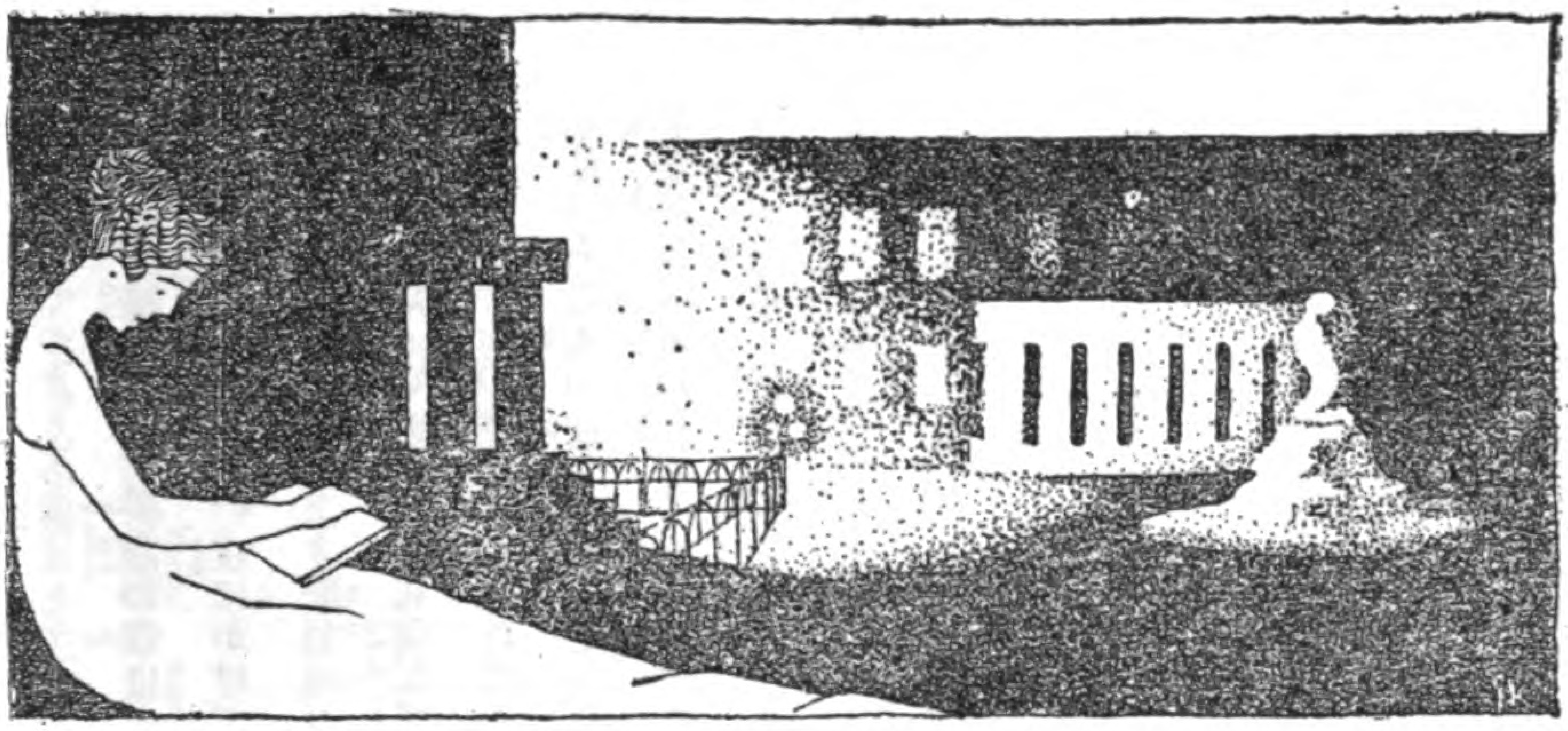
山の中は雪であつた。夜にかけて、おかねは、子供を負つて、その山を越した。そしてあちらの村に着いた時は、子供は、凍え死んでゐた。

そんな噂が、いつとなしに傳つて來たが、二度目の噂は、さらに、村人の身の毛をよだつた。彼女は、子供を山中で殺したのだ。その嫌疑で捕はれてゐる——と、いふのであつた。

私は、その後の彼女について知らない。

秋が來て、風の烈しく吹く日になると、どういふものか、彼女を記憶から呼び起すのである。

——彼女は、新しい女として、この世の中に生れて出るには、なほ少し早かつたやうな氣がした。——果して、鼬を食つたちんころのやうな、他に取柄のない、惡い女に過ぎなかつたらうか？



女詩人と天才と不思議な殺人

ホフマン原作

辻潤譯

ルイ十四世の御代の榮えに榮えた時の御話であります。マドレイヌ・スキュデリイと云ふ獨身者の女詩人が居りました、この女詩人は若い時から才德兼備の評判が高く、殊に美貌で純潔な生涯を續けて來たことが一際この詩人の名聲を重からしめ、やがてルイ十四世陛下の認めるところとなつて、朝廷に出入するやうになり、陛下から頗ぶる寵愛を受けて居りました。しかし、彼女はかくの如きことを少しも誇りとせず、相も變らず聖オノレ街の小やかな住居に閑居して彼女の藝術の道にいそしんで居りました。

恰度、一六八〇年の秋のある晩のことで御座います。この女詩人の家の戸を荒々しく敲く音が聽えます、なにしろ夜も大分更けて居りますので、その音が靜かな住居の隅々迄もひときわ高く響き渡りました。折惡しく、この小やかな家庭を預かつて料理番から馬丁から門番の役廻りを一人で兼ねてゐたバプテイストと云ふ男が、

妹の結婚式の爲めに田舍に行つて不在でありました。殘つてゐるのはこの家の女主人とマルティニエと云ふ年寄りの下婢とたつた二人きりで御座います。その老下婢は未だその時、起きて居りました。この激しい物音を聽きつけた時に、彼女の心に先づ浮んだ考へはバプティストが留守だと云ふこと、それに後には自分と女主人ばかり、實に不氣味で無用心なことだと老婆には無理もない恐怖心に忽ち襲はれたのであります。すると今まで巴里で行はれた色々な殺人や强盜の記憶がアリ〱と浮んで來るのでした、――これはなんでも恐ろしい强盜かなにかに相異ない、なんでも、この家が女ばかりだと云ふことを付け覘つてやつて來た者にちがひない、ウッカリ戸などを開けて御主人にどんな災難が降り罹らないものとも限らないと、部屋の隅の方に小さくなつて慄えあがりながら、早くバプティストでも歸つて來てくれればよいがと只管空頼みをしながら耳をすまして居りました。

しかし戸外の戸を敲く音は愈々激しくなりまさるばかりです、そしてその音の合間に「どうか、御願ひです、後生だから、開けて下さい！」と云ふ聲さへきこえるやうに思はれました。

老下婢は次第に恐ろしさが增してくるばかりではありましたが、遂に決心して、燭臺の蠟燭に火を灯して廊下に出て見ました。その時彼女はたしかに「後生ですから、戸を開けて下さい！」と云ふ男の聲をハッキリ聽きつけたのでした。

「どうもあの聲の樣子では滿更盜賊でもなささうだ、これはなにか迫害でも受けた男が御主人の常々慈悲深い方だと云ふことを聽いてゐるので、助けてもらひに來たのかも知れない。だがなにしろ用心するにしくはない」とマルティニエは心の中で一人思案を廻らせました。

下婢は窓を開けて、全體、夜夜中、名前も名告らずにドン〱と人の家の戸を敲くと云ふのはどうしたことだ、御前さんは全體何者だと、彼女は出來るだけ男のやうな假り聲をしてその男に呼びかけました。

その時、恰度黑雲の破れ目から現はれた月の光りで、彼女は下にゐる男の姿を見てとりました。それは丈のかなり高い

男で、鼠色の外套にスッポリ包まれて、緣の廣い帽子をまぶかにかぶつてゐました。彼女はそこで又わざと下の男にきこえよがしに大きな聲で怒鳴りました。

「バプティスト、クロオド、ピエル、さあみんな御起きなさい、そしてどんな奴が戸を敲いてゐるか、早く行つて御覽んなさい！」

すると、下の方から柔しい訴へるやうな聲がきこえて來ました。「マルティニエさん、あなたがいくら色々に聲を變へようとしてもチヤント私にはわかつてゐます。バプティストさんは田舍へ行つて留守で、今夜はあなたが御主人と二人きりでゐると云ふことも、私はよく承知して居ります。ですが、兎に角、勇氣を出して、戸を開けて下さい、別段、怪しい者でも、恐ろしい者でもありません。私は是非今夜中に、今直ぐに御主人に御目にかかつて御話しなければならないことがあるのです。」

「だが、おまへさんは、そんならなにもこんな眞夜中に來て、わざわざ御主人の安眠を妨げないでもよささうなものだ。もう御主人はとうに御休みになつてゐる。私には折角、よく眠つて御出の御主人をおまへさんのやうな人の爲めに御起し申すことは出來ませんよ。」

「私にはよくわかつてゐます。御主人は今恰度、永年苦心して御出になる「クレリラ」の物語の草稿の筆を置いて、明日、メイントノン公爵の前で朗讀なさる詩作に耽つて御出になるに相異ありません。マルティニエさん、御生です、御願ひです、可哀想だと思つて戸を開けて下さい。不憫な男の命が一匹助かるのです。私が御主人にそのことを打明けさへすれば人間の生命が一人助かるのです。どうか御願ひです。若し、後で、萬一御主人の御慈悲に縋りに來た人間を、冷酷にも追ひかへしたのがあなただと云ふことが耳に入れば、キツトあなたはいつまでも御主人の憎しみを受けることになるでせう。どうか私を信じて下さい。」

「けれど、なぜおまへさんはこんな時ならない時にやつて來て御主人の思し召に預からうとするのだい。また出直して明日の朝早くおいでなさい。」用心深いマルティニエはかう窓から斷はりました。

しかし下にゐる男はなほ性も懲りもなく、

「若し今夜この機會を失ふと、運命が恐ろしい仕業をやるのです。もう一瞬間も猶豫は出來ません。どうか、可哀想な男の爲めに、恐ろしい運命に呪はれて、苦しみ苛なまれてゐる男を助けると思つて、どうか戸を開けて下さい！」と叫ぶのです。

この泣かんばかりに苦しさうな男の哀願を聽いてゐるうちに、マルティニエ婆さんにはこれがまだうら若い男のやさしい聲だと云ふことがわかつて來ました。すると、彼女も根が情深い女のことでありましたから、この上言ひ張ることも出來ず、思はず階段を駈け下りて、錠を外してしまひました。

彼女が戸を開けるか開けないうちに、男は恐ろしい勢ひで飛び込んで來て、いきなり、廣間の方へ大股で歩きながら、

「主人の部屋へ案内をしろ！」と今迄の調子とはまるで打つて變つた荒々しい聲で怒鳴りました。

マルティニエが吃驚して倒れた拍子に、手に持つた蠟燭の光りが、若者のいたく困惑した、死人のやうに蒼ざめた顏を照らしました。すると件の若者は外套をぬぎ棄てて、鋭どい短劍の鞘を拂つてこれを彼女の面前に突きつけました。マルティニエはもう恐ろしさに人心地もなく、蒼くなつてブル／＼慄えて居りました。男は鋭どい眼で彼女を睨みながら、前よりも一層聲を荒らげて「さあ、早く主人の部屋へ案内しろ！」と威嚇しました。

この時、マルティニエには主人の一大事だと云ふ考へが强く胸の底に浸み渡ると同時に、不思議な勇氣が何處からともなく湧き起つてまゐりました。これは無理もありません。日頃から主人ではあると云ひながら、自分の一人娘でもあるかの如く愛し敬まつて來たやさしい主人に對する獻身的な愛が猛然とこの老婆の心に炎えあがつて來たのです。彼女は今

迄開けひらいておいた部屋の戸を閉ぢて、その前に立ち、聲を改めて毅然となつて云ひました。

「おまへさんのその氣狂ひ染みた容子は全體どうしたと云ふのです。今迄戸外であれ程、歎願してとう〳〵あんなに私の心を動かして置きながら、今になつて私を欺すつもりなのですか？　もうあなたのやうな亂暴な人にはどうあつても主人を會はせるわけにはゆきません。若しおまへさんの心に惡事を企てやうと云ふ考へがないなら、明朝出直しておいでなさい。さあ、早くこの家から出て行つて下さい！」

若者は深い溜息を吐きました。そして恐ろしい眼付でマルティニエを睨めながら、刄の柄を握つてゐます。

老婆は靈魂の底ではひたすら神に祈りながらも、大膽に若者の方を睨めながら、戸の前に立ちふさがつて行途をさへぎりました。

「さあ、早く案内をしないか。」男は又してもそれを繰り返へすのでした。

「おまへさんの好きなやうにするがいい。」とマルティニエは答へました。「私は此處から一歩も動くものぢやない。さあ、おまへのやりかけた惡事をかまはずやるがいい。どうせ、終ひにはおまへの仲間と同樣な死目に遇ふだけなんだから！」

「ッリッリー、お婆さん、おまへの云ふことは尤もだ。いかにも己の風體はさも恐ろしい惡黨か人殺者のやうに見える。だが、己の仲間はまだつかまりはしない……安心してもらゐふ！」かう云つて若者は物凄い顏をしながら短劍を一振り振りまはしました。

老婆は最早、生命をとられることと思はず「人殺し、助けて！」と絶叫しました。恰度その時に戸外の方でサーベルのチャラン〳〵する音や蹄の音がきこえてきました。マルティニエはこれを聽くが早いか「憲兵さん——助けて！　助けて！」と續けざまに叫びました。

「エー氣狂ひ婆あー　おまへは己の計畫を滅茶々々にしようとするのか。もう仕方がない――さあ、これを今夜でも明朝でもいいから、主人に渡すのだ。」から云つて、その男はマルティニエから燭臺を奪つて火を吹き消し、彼女の手に小函を押し付けました。「おまへの生命が惜しければ、必ずこれを主人に渡すことを忘れるな」男はこれを捨臺詞にして、何處ともなく消え失せました、

　マルティニエは床の上に倒れたきり、しばらくは身動きも出來ませんでした。それでもやうやく手探りに彼女の部屋の中に入り、失神したやうに椅子の上に倒れてしまひました。

　すると、やがて彼女は彼女が入口の戸に置き忘れて來た鍵の音を聽きました。その戸の閉まる音がして、靜かな足音が彼女の部屋の入口に近づいて來ます。もう椅子から一寸も動く力もなく、彼女は又も新らしい恐怖に襲はれました。しかし、その戸が開らかれた時に、彼女は始めてホツト安堵の思ひをすることが出來たのです。それは夜目にもまがふことない待ちに待つてゐたバプティストの姿が彼女の眼に映じたからでした。

　入つて來たバプティストの顔もどうやら蒼ざめて、様子がなんとなくソワ〳〵してゐるのです。「マルティニエ、まあ一體全體、――どうしたと云ふのだ……これだから俺の心配したのは無理もなかつた……なんとなく蟲が知らせたものか……昨夜の婚禮がすむと俺はスグと大急ぎで向ふを出發つて來たのさ……まあでも御孃さんは御無事なのだらうね――俺は道々今頃まだ婆やは寢ついたばかりだらうから、俺が輕くソツト戸を敲きさへすれば、スグト開けてくれるにちがひないなどと考へながらやつて來たのさ。すると、つい先の横丁の處でイキナリ俺を「誰何」する者がゐる、見るとどうやら夜廻りの巡査らしい、すると後から又ドカ〳〵と厳めしい服装をした憲兵やら巡査やらが出て來たので俺は膽を潰してしまつた。けれど幸ひ、俺の知つてゐる、そらあの警部長のデスグレがゐたので俺はヤツト地獄で佛の思ひさ、デスグレは俺の鼻先へ角燈を突きつけて「おお、バプティストか、なんだつて今時分歩いてゐるのだ？　近頃は兎角物騷だから、夜な

どはあまり出歩かないで家内の警戒が必要ぢや、今夜、俺共はなにかスバラシイ獲物を引ッかけようと思つて網を張つてゐるところぢや」これを聽いただけで澤山なところへ、俺が今門の處まで來ると怪し氣な男が拔身を片手に持つたままイキナリ撥れちがひさまに俺に突當つたのだ、ギヨツトして氣をとり直した時には、もうその男の姿は闇にまぎれて見えなくなつた。門口の戸は錠に鍵がブラ下つたままで開いてゐるぢやないか。まあ、全體どうしたと云ふことなのだ、早く話して聽かせてくれ。」

　マルティニエ婆さんはやうやく正氣づいて一部始終をバプティストに物語りました。やがて二人は廣間の方へ出て行きました。其處の床の上にはかの怪し氣な男がマルティニエの手から奪ひとつた手燭が投り出してあります。

「彼奴はたしかに强盜に相違ない、なにしろ家の御孃さんに御怪我のなかつたのはなにより幸せなことだつた。彼奴は、おまへに云つたやうにたしかに家の樣子を知りぬいてやつて來たにちがひない。なんでも奴等の仲間は一人や二人ぢやない。大勢ゐるに相違ない。まづ〳〵なにも盜まれもせず、生命にも別條なかつたのはなによりだつた。それはさうとマルティニエ、あの男が置いて行つた小函と云ふのは、なんだか知らないが、明日でも早速セイヌ河へでも投り込んでしまふがいい。またなにか仕掛けでもしてあつて、家の御孃さんがそれを開けるとスグと顏色が御變りになつて倒れてしまふと云ふやうな一大事にならないとも限らないからな。そらおまへも知つてゐるだらう、トルネイ公爵樣は、いつぞや何處だかから來た手紙を開けて御覽になるが早いか、その場ですぐと倒れたなりさ……嗚呼！　ほんとうに油斷もスキもならない物騷な世の中になつたものだ！」

　かうして二人の忠實な下僕達は色々と相談し合つた結果、兎に角明朝、主人に一切の顚末を打ち明けようと云ふ決心をいたしました。そして、その不思議な小函も一應は主人に注意した上で御目にかけようと云ふことに相談を一決いたしました。

つまり、二人は色々と談合の末、かの怪し氣な男の來訪はなにか他に深い仔細でもあつてのことなのかも知れない、……これは自分達の淺薄な考へで決めるより、賢明な御主人の判斷に兎も角も任せた方がよからうと云ふことになつたのです。

バプティストがこのやうに色々と疑惑を抱いたのは無理もないことなのです。その當時の巴里はまつたく世にも恐ろしい犯罪の巷なので、晝と云はず夜と云はず、頻々として物凄い不思議な殺人や凶變が致る處に勃發してゐたのであります。ザット先づこんな風な有樣です…………

たとへば、その當時第一流の化學者と云はれてゐた、獨逸人の藥種屋でグラゼルと云ふ男が居りました。この男はよく化學者にはありがちな御話ですが、頻りに錬金術にうき身をやつして、日夜、所謂「哲學者の石」と稱せられてゐる不思議な元素を發見しやうと苦心慘憺して居りました。するとこの男と仕事を共にして同じくその目的を遂しやうと熱心に協力してゐる伊太利人でエキジリと云ふ妙な人物が居りました。しかし、このエキジリと云ふ男は錬金術に名目を借りて、實はグラゼルが種々混合したり、變化させたり、化合したりして種々寄せ集めてゐる毒素の研究をしてゐたのであります。エキジリはかうして研究を續けてゐる間に、世にも恐ろしい微妙な毒藥を發見したのであります。それは無味無臭で、立所に人を殺すことも出來れば、また徐々に相手を殺すことも出來ると云ふ不思議な毒藥で、それで倒れた人體には少しも異常の變化を來すことがないので、如何に巧妙な醫者も科學者も、遂にその毒殺であることを見極めることが出來ず、自然の死であると診斷するより方法がなかつた位、それは巧妙を極めた毒藥だつたのであります。

エキジリは巧みに世人の眼を眩まして、この恐ろしい仕事を續けて居りましたが、ある時、とう〳〵毒藥を賣買したと云ふ嫌疑の下にバスティルの牢獄に入れられました。すると間もなくゴダンと云ふ大尉で十字架の刺青をしてゐるところからサンクロワと綽名されてゐる名代の惡黨が彼と同じ部屋に監禁されることになりました。この男は永い間、ブリン

ギリエの公爵夫人と醜關係を結んで居りました、その夫人と云ふのは一族の上に一世の汚辱を蒙らした程の淫婦で、公爵も遂に持て餘した結果、見て見ぬふりをして居りました。しかし、夫人の父君であるドウフレイ中將は娘の不品行を見るに見かねて、遂にその醜關係を公にし、惡大尉を捕へて、バスティルの牢獄に投じたのであります。しかし、この大尉はなにせよ、若い時から放蕩無頼に身を持ち崩し、凡そ惡事と云ふ惡事に染まり切つてゐる男なのですから、自分がかくの如き目に遇はされたことはどうしても我慢が出來ず、加之、公爵に對する嫉妬も手傳つて居りましたので、出獄の機會を待つてなんとかして復讐をしたいものと、明暮それればかりに思ひ惱んで居りました。恰かも、同室にゐるエキジリが恐るべき毒藥の秘法を心得てゐると云ふことを聽いて、彼はどんなに喜んだことでありませう。早速、彼はエキヂリの熱心な弟子になつて、毒藥の製法を研究することになりました。なんにいたせ、性來惡事にたけて居りますサンクロアのことで御座いますから、忽ちの間に師をも凌駕する程の巧妙な技倆を有するに至りました。

プリンヸリエの公爵夫人は性來の毒婦でありまする上に、出獄したサンクロアの入智慧を得て愈々益々恐るべき妖婦になつたのであります。サンクロアは先づ最初に夫人の父を徐々に毒殺する手段を彼女に授けました。夫人は老年の父君の看護をすると云ふ口實の下に、日夜、ひそかに毒を盛つて遂に哀れなる老人を死に至らしめ、更に續いて、彼女の兄弟と、最後には妹までを毒殺してしまひました。彼女は父を復讐の意味で殺し、兄妹達をば、かれ等の財產を自分のものとする爲めに殺したのです。彼女は毒殺の技術の進むと共に次第にそれに興味を覺えて、恰かも科學者が單に自分の興味の爲めにさまぐ\の實驗をするやうに、なんの利害關係もない人々までも、面白づくに毒殺するやうになりました。たどへば、プリンヸリエが毎週慈善の爲めに訪問する慈善病院の人々が遽かにバタ／＼と續いて死んだり、彼女の家に招待を受けた人々が間もなく原因不明な死を遂げたりしました。勿論、その恐ろしい御馳走の犧牲になつた者の中には知名な人も少なくはなかつたのです。

サンクロアや、その共犯者のラ・ショウセやプリンギリエ夫人など云ふ恐ろしい毒殺者は永い間、かれ等の物凄い惡事を巧みに隱蔽することが出來たのですが、天はいつまでもかくの如き罪惡をそのままに見逃しては置きません。とうとうかれ等の罰せられる時がやつて來ました。サンクロアの用ゐてゐた毒藥はなにしろ、非常に微妙な效力を持つてゐて、その藥を一寸でも嗅げば、忽ち生命がなくなると云ふ程に激烈なものでしたから、サンクロアはいつでもそれを製造する時には薄い硝子の假面をかぶつてゐたのです。ところが、或日、彼がいつもの通り、藥を造らへてそれを瓶に詰めてゐる時どうした機會か、彼のかぶつてゐる假面が外づれたのです。その途端に彼は思はず、その毒藥を吸ひ込んでそのまま其處へ倒れて、自業自得な最期を遂げてしまひました。

彼の死骸が發見され、家宅搜索が行はれた結果、彼の恐ろしい毒藥製造の秘密室の正體もわかり、又プリンギリエ夫人の書簡や、その他の證據物件が發見されました。プリンギリエはいつの間にか姿を隱して、リエージュの御寺に身を隱しました。

警官のデスグレが彼女の逮捕に向ひました。彼は先づ僧侶に化けて、彼女の隱れてゐる寺へ出かけて行きました。色々と技巧を弄して彼はその恐ろしい女を誑かし、ついに郊外のある庭園で密會の約束をすることになりました。女はうかうかとその手に乘つて約束の場所に來た時は、既に彼女は多數の警官にとり圍まれてゐました。彼女は其處から、馬車へ乘せられて巴里へ護送されました。これより先に共犯者のショウセは既に首を刎ねられてゐました。プリンギリエも直に火焙りの刑に處せられました。

これ等の毒婦兇漢達がゐなくなつて、巴里の人達は永い間の不安と恐怖からホット一息吐くことが出來たのです。ところが、間もなくサンクロアの恐ろしい技術の繼承者が何處かにまだひそんでゐると云ふ噂が何時の間にかひろがりました。さう云へば、いつの間にか方々で、變死の出來事が瀕々と起るやうになつたのです。今日まで血色のいい艶々として

丈夫だつた人が、翌日になると、まるで人ちがひをしたやうに蒼白く痩せこけてしまふのです、そしてどんな醫師もその病狀を診察することが出來ないうちに、當人はいつの間にか冷たくなつてしまつてゐるのです。そしてこのやうな變死が極めて親密な家庭に起るので、遂には夫は妻を、父は息子を、妹は兄を恐れると云ふやうになつて、食事も碌々安心しては出來ず、各自で自分の食物を遠方から取りよせて食すると云ふやうな不愉快と不便とを到る處の家庭で餘儀なくされるやうになりました。

陛下は日夜この巴里の物騒な有樣をいたく御心配遊ばされて、少しも早くその犯人を發見して人心を安堵させようと思し召したので、警察以外に特に探偵局をバスティユの傍に置いて、レグニと云ふ男をその局長に撰んで嚴密な搜索を御命じになりました。レグニはその名譽ある位置に對してでも、少しも早く犯人をあげようと熱心な努力を續けましたがその甲斐もなく、遂に狡猾なデスグレにむざ／＼とその功を奪はれてしまひました。

フォーブルグと云ふ處にボアザンと云ふ一人の老婆が住んで居りました。この老婆はかねてから卜占や、魔法をやると云ふ噂を立てられてゐましたが、中々それどころではありません。彼女は又實にサンクロアと同じくエキヂリの弟子だつたのです。そして無頼な息子の依頼を受けて、その父母を毒殺し、或は姦婦に力を藉して、夫を毒殺し、さま／＼の惡事を密かに働いてゐたのです。デスグレは遂にこの惡婆の秘密を嗅ぎつけて、とう／＼一切の事を白狀させました。彼女はブリンギリエと同じやうにプラース・ド グレエヴと云ふところで火焙りの刑に處せられました。

彼女の死後に發見された名簿には、直接間接に彼女の恐ろしい技術を利用した人達の名が殘らず記されてゐたので、それを證據として、續々と犯人が捕縛され、日毎に死刑が執行されました。名簿の中には身分のある人々の名が少なくなかつたので、やがてそれ等の人々の上にも嫌疑がかゝるやうになりました。

ボンジイと云ふ僧正はナルボンヌの管長として多くの人々に年金を拂つてゐましたが、それを自分の懐に入れる爲め

にボアザンと結託して、これ等の人々の死を早めたと云ふ嫌疑がかかりました。その他、ブイヨンの伯爵夫人、ソアソンの子爵夫人なども妖婆と密かに交際してゐたに相違ないといふことになりました。つまりそれ等の人々の名が名簿中に發見されたと云ふだけの理由に過ぎなかつたのです。又ルユクサンブルグの公爵で佛蘭西でも當時有名だつた貴族のフランシス・ヘンリイもその嫌疑を受けて拘引されることになりました。公爵はなにかの理由で特にレグニに憎まれてゐたと見えて、バスティユの最も狹隘い土牢に入れられました。しかし、それから數箇月經つて、公爵は偶々運勢を卜占つてもらふ爲めに一二度ボアザンの處に出入したに過ぎないものであることがわかつたのでやうやく、出獄することが出來るやうになりました。なにしろ、かう云ふやうな出來事がそれからそれへと日毎に起つたのであります。

探偵局長のレグニは性來殘忍酷薄な鬼のやうな男だつたので、ずゐぶんと無茶苦茶な寃罪を蒙つてヒドイ目に遇はされた人々が數知れない程でありました。ブイヨンの伯爵夫人は法廷で彼の訊問を受けてゐる間に、今迄に惡魔と云ふものを見たことがあるかと訊ねられた時に、彼女は『左樣、今現に私の眼の前にゐるのがどうやら惡魔と云ふ者らしう御座います』と答へたので、さすがのレグニも苦笑を禁じ得なかつたと云ふことです。

プラース ド グレエヴの死刑執行所では日毎に無數の人々の血が瀧のやうに流されたのです。さうかうしてゐる間に、毒殺されるものも次第に少なくなつて行きましたが、こんどは又更に新らしい不思議な犯罪が現はれ始めました。それは、恰かもある盜賊の一團が巴里の凡ゆる寶石や、裝飾を、悉く奪ひ取らうとする計畫を立てたかのやうに思はれました。從つてそれ等の高價な品物を所持してゐる富豪や貴族はみな戰々兢々として、いづれも容易に人目にふれない場所に隱して置きましたが、それがいつの間にか紛失してしまふのです。殊にそれを身にまとふて夜外出を敢へてする人々は大方、無事に歸宅する者はなく、必ず何處かの横町や、小路で殺されてゐました。辛うじて生命拾ひをした者の話によりますと、鐵のやうに堅い拳が何處からともなく電光のやうに現はれたかと思ふと、その時は既に氣絶して、やうやく我に

かへつた時には飾りはいつの間にか奪はれてゐるのです。そして自分はまるで思ひもよらない處に投げ出されてゐることに氣が付くのです。毎朝、必ず何處かの街りや、玄關先に見出される死骸はみんな同一の方法で殺されてゐるのです。それは極めて鋭利な刃物で心臟を一突きに刺されてゐるのです。當時、ルイ十四世の亂れた宮庭ではさま〴〵の戀愛事件が行はれてゐて、夜ひそかに愛人の家に高貴な贈り物を携へて出かける連中なども勿論少なくはなかつたのです。しかし、不幸にも、これ等の人々はたいていその恐るべき毒刃の爲めに倒されました。中には愛人の家の門口で無慘な死に方をして、翌朝、それを發見した愛人があまりのことに氣を失なつて共々に歸らぬ旅におもむいたなどと云ふのもありました。

警視總官のアルゲンソンを始め、レグニもデスグレも、出來るだけの智慧を絞つて、手を盡しましたが一向それらしい犯人も見出されませんでした。唯だ、夜行の巡査の數を出來るだけふやして、警戒を嚴重にする他、別に手段も方法もありませんでした。

それに又不思議なことには、盗まれた寶石や、頸飾りが何處からも發見されなかつたことです、ですから、手掛りのしようがなかつたのです。（つゞく）



被征服者

佐々木味津三

理由なくして私は義妹の上京を拒んだのではないが、靜江の方では何をどう勘違ひしたかちよつと憤慨でもしてゐるらしく、明日と言はずに今日すぐにも上京いたしますと言ふやうなことを言つて　また私にいやがらせな手紙を送りつけた。

「……いやです。いやです。あなたもあんまり冷淡すぎます。」

と言ふやうな文句さへかいてあつた。そして手紙は、あれ程固く直接には送りつけるなと言つてあつたにかゝわらず、今度は公然私宛のものであつた。

元より私は靜江の上京を喜ばないではなかつたが、正直言ふと私にはちよつと面白くない理由がふたつ三つあつたのである。今となつてはかくしたつて初まらないから、おのれの恥もあからさまに白狀するが、本來ことの順序から言ふと、私は現在妻である姉の方とではなく、寧ろ妹の靜江と結婚するのが當然であつた。

一口に言つたら私と妻とは古くからの許嫁と言ふやうな間柄で、しかし私は却つて妹の靜江を好いてゐたのである。好いてゐたと言ふのが不穩當ならば、靜江の方でも普通以上に私を好いてゐたから、二人は早くから戀しあつてゐたと言つても

差支へはなかつた。

靜江の周圍も私の周圍も肝心の妻でさへ、私と靜江の心持はちやんと承知してゐた位だから、私にもし一人前の勇敢さがあつたならば、恬然として妻との許嫁は破約したに違ひなからうが、それをしかし敢然と蹂み躙じりえなかつたと言ふそもそもは、いざと言ふどたん場に及んでから、私は不思議な發作的亢奮があつたからである。

今でも忘れずに覺えてゐるが、私が學校を出た年の夏であつた。いちにち彼女達の家を訪ねたことがあつて、晩景に及んで歸りしな、突然私は篠つくやうな夕立雨に出あつた。タスカンを眞深かにかぶり直ほして平然と尻からげですたすたやつてゐると、

「兄さん傘は？」

と言つて靜江があとから呼びかけたのである。歸へるのも臆劫だつたから、振り向きもしないで大股にやつてゐると、

「ちよつと、要らないの傘は、だめよそんな亂暴しては。」

言ひ乍ら靜江が追つかけて來て、序にそこ迄送りませうかと言ひ出したので、私もなにげなく相合傘で歩き出した。

恰もそこは、細い小道のだらだら坂であつた。右側は田の畔道で左側にはすすきが一杯繁つた小道のだらだら坂であつた。

坂の出鼻は里道への曲り角で、曲り角には驟雨にぬれた石の燈籠が一つあつた。石燈籠の影のところで、私は靜江と分れ乍ら、出あひがしらに何氣なくひよいとまなこを轉ずると、所が私は計らずも高臺の森の中から、妻がしよんぼり二階の窓際によりそつて、ぢつとこちらを見つめてゐたのにふと打つかつたのである。

距離をはからば一町も二町も隔たつてゐた筈なのに、私はしかし力なくしよんぼりと佇んでゐたおぼろげな妻の顏のうちに、確かにひとつの寂しい微笑をはつきり認めたやうな氣がしてならなかつた。

不思議に心惹かされて、私もちつと立ち止まつてゐると、やがて彼女は遠くから、さいならとでも言ふやうにかすかに一つお叩頭し乍ら、いきなりさつと姿をかくしたのである。

今から思へばそのお叩頭ひとつから、私は奇怪な義俠的亢奮の暗示にとりつかれたやうなものであつたが、とにかく私はその瞬間に、凡からしよんぼりと見離された人間でもあるかのごとく、あきらめ切つてゐるらしい彼女が何んとなく見棄てかねて、妙にほろりと涙ぐみさへし乍ら敢然として彼女と結婚しようと言ふ決心をつくつたのであつた。

そして私はその年中秋上院の頃妻を東京へ呼び寄せた。呼び寄せたとは言ふものの、私はまもなくその亢奮からは醒めたのである。

「だつてひどいわ。」

結婚してからであつたが、はげしく靜江から詰られて、

「なあに一年だよ。僕がまた別れやうつて言へばいつだつて平氣で別れられるんだからね。」

と言ふやうな出たらめな言質を私は平然として靜江に與へて置いた。元より一年でどうのこうのと言ふやうな歴然とした成算が私にあつたのではなかつたが、その位私は結婚そのものにも出たら目であり、また例の亢奮からはすつかりさめ切つてゐたのである。

だけそれだけに靜江との關係は平氣で今迄續け乍ら、また恬然としてそれについては省みるところもなかつた。

それをしかし妻はよく知つてゐた。またそれをよくあきらめてゐた。決してうらみがましい顏もしなかつた。一言半句も愚痴らしい言を吐かなかつた。只いつしよに置いてさへくれたなら、と言ふ滿足のみにちやんと覺悟をきめてゐるらしかつた。

却つて妻から愚痴のひとつも手痛く詰られでもしやうものなら、私の方でも意地になつてもつと公公然として、靜江と

も大つぴらに文通も續け、また靜江一人に心も全部傾け了へたに違ひなからうが、永生柔順そのもののごとき妻の全幅に打つかゝると、つひ肝心の私の方でも妻靜江兩人に煮え切らない態度になつて、まあまあと言ふやうな出たら目な氣にもならざるをえなかつたのであつた。

靜江が上京すると言ふ問題に就いて、私がそれを拒んだと言ふのも理由の一つはそこに介在してゐたのである。上京そのものが機會になつて、猛然靜江に傾くだらうそう言ふ場合が私にちよつと恐かつたからであつた。

また二つには上京の理由が、それとはつきり打ち明けてこそは寄來さなかつたが、この頃すでに靜江について一二縁談があるんださうで、それがいやさに逃げ出すだらうと言ふ臆測がつく限り、私迄がにはかに狼狽喰つてなあに一年だよと言つて置いたその言質が、今にしてほんとうに實現するのを恐れたからであつた。

それらはまだまだ手前勝手な理由であつたが、それにもまして最後にひとつ私に最も恐れられた問題があつたのである。

妻の臨月と言ふこと柄であつた。くにの方へも知らせてあるので、元より靜江とて妻の姙娠は耳に入れてゐること柄に違ひなからうが、私としてはさう言ふところをまのあたり靜江には見せたくなかつた。また見られたくなかつた。ましてや靜江は私にとつてこの世に一人の愛するものであつた。私にとつて妻はまたこの世に一人の愛なきものであつた。愛なきものをいつのまにかさう言ふ結果にものしたと言ふこと柄を、おめおめと靜江に向つてさらしたくはなかつたのである。

しかし靜江は毫末も忖度がなかつた。ないが故にあなたもあんまり冷淡すぎますと言ふことが恬然として口外出來たに相違なかつた。

また彼女の平生から言つて今日にも上京すると言へば必ずその通り上京するに違ひなかつた。それをさうと知り乍ら、

今になつて理由を附して、私は彼女の上京を一概に拒もうと言ふ氣にもなれなかつた。只上京の一件を妻に知らさうか知らすまいかと言ふ問題だけが、私に新な惱みであつた。

「どうだい。まだ動くやうな容子はないかね。」

そして私は他意なささうな顏つきで、そんな風に遠くから婉曲に切り出した。

「おなかのこと？」

妻は私の殘酷な伏線なぞは想像さへもしないもののごとく、ぱつと兩眼をみはり乍ら直ちに素直に答へた。

「もう產れるつて ころになると、手首や足なんぞがおなかの皮へ打つかるつて咄しなんだがね。どうだね。當らないかね。」

「ときどきくすぐつたくなりますのよ。」

「それぢや………もうまもなくなんだね。」

そして私はそのきつかけから、人手を借りるために田舍から靜江を呼び寄せてもいいんだが、と言ふ宣言をするつもりであつた。

言はないうちに、

「靜江も上京したがつてゐませうから、お呼びになつてはどうですの。」

妻の方から先手を打つた。

はつと思つて注視したが、妻はさながら平生のごとく眉毛ひとつ動かさなかつた。何んの嫉妬がましい顏付はみぢん現はさない妻の容子つきを瞥見すると、私もそれをかくす氣にはなれなかつた。

「そんな風な手紙も二三來てはゐるんだが、お前知つてるのかい。」

見たかとは言はないで、しかしそれとなく脈をひいた。

「いつのだかは存じませんけれど、今日にも出かけますつてやつだけちよつと拜見したんですけれど……」

言ひ乍らさすがに妻は、こころもち視線をうつぶした。

「あいつあ昔から一本氣だからね。來るつて言ふならてうどいいね。」

肚からてうどいいとは思はなかつたが、私も勢ひそんな風に言つておく他はなかつた。

まさかとは思つてゐたが、しかし靜江はその晩岐阜から夜行に乘り込んだとみえて、イマデカケマスと言ふ電報を臆面もなくまた公然と私當に打つた。

「敷布だけでも洗つておけばよかつたんですのね。」

電報をみてからでも妻は泰然として平生の態度をくづさなかつた。

私はしかしその反對で、お恥しいほど胸をおどらした。來るときまれば來てくれる方が遙かにいいこと柄に違ひなかつた。數へて見れば約半歳である。去年の秋にあつたきりで、思へばよくもこんなに辛棒が出來たものであつた。と言ふやうなことまでも私は他愛なく考へた。

泰然自若たる妻の手前も、さも無關心のやうな顏つきでぐうぐう高いびきでもかいてやりたかつたが、しかし私はつひに曉まで寐返へりの打ち通しであつた。

「荷物があると困るでせうから、お迎へにいつて下さいませんの？」

滿更皮肉ばかりでもなささうに、しかしちよつと淋しげに微笑し乍ら、妻は甲斐々々しく起き直つて言つた。

「いいさ、子供ぢやあるまいし。」

と言つてはみたが、私はやがて起き上らないではゐられなかつた。

「ちよつと行つてやらう！」

そしてまた大急で、着物も着換へないではゐられなかつた。

三等だらうと思つてゐたのに、靜江はつと立ち上り乍ら青い窓から首を出した。私の前を素通りし乍ら、そしていきなりふりかへつて、感極まつたと言ひたげに、睫毛にこぼれるやうな微笑をつくつた。

私は默つて昇降口に近寄つた。彼女も默つてバスケットを手渡した。揉み返へすやうな人ごみを押しわけ乍ら、危うく唇がすれすれになりさうなところまで身を寄せて、なに故かいきなり靜江は、ぱつと眼がしらをうるませた。

「なんと言つて、うち、出て來たんだい？」

釣り込まれやうとする感情を押さへ押さへ、私は言葉を途切り乍ら、心をすばやくよそへそらした。

「あんまりですもの。」

「どうして？」

「わたしおよめにいつても構はないの！」

「まあそうむきにならなくたつていいだろ。こんなところで。無理して出て來たんぢやないだらう。」

「姉さんお產だからつて言つて逃げ出したんだわ。」

「やつぱり？まさに遇然の暗合だね。」

「あらツ。ぢや姉さんにもそんなこと言つて？」

「ううん。言つたつてわけぢやないんだけれど、どうせ來るならそんな理由でもつけておかないとね。」

「わりいつて言ふの！すまないつて言ふの！そう言ふ理由を姉さんにつけないと！」

「ばかツ。醜をみるそうそう拗なくつたつていいぢやないか。それよりすぐお前はぼくんところへ行くのかね。」

「わかつたら行かないわ……。」
「ばかだね。そんな人前で泣くまねなんぞしなくつたつていいぢやないか。來てわりいつてわけぢやないんだけれどね。なにしろあいつもうぢきに産まれさう……。」
なんだからね、と言ひかけて私ははつと口を噤んだ。なによりそれを靜江に見られたくないために上京も拒んだことにふと思ひ當つて、愕然とおどろき上つたからである。
「いいことよ。わたし小石川のおばさんうちへ行くんだから。そんなに行つてわりいならもう今晩うちにまた歸つちまふわ。」
それをしかし靜江の方ではまたひねくれて考へた。
「とにかく二三日小母さんところにゐてくれよたのむから。」
そして私は言ひ作らさつさと先へ電車へ這入り込んだ。
「あら省線で行くの？」
いつかしかし靜江はもう感情の方向轉換が出來たとみえて、明るい顔をし作らあとに從つて乘り込んだ。
「だつて小石川ならこの方が二人とも便利だろ。」
「さうね。やつぱりわたしおとなしく小母さんところへいつてるわ。姉さんだつて困るでせうから。」
却つて私に謝罪がましい態度までつくつたが、私はしかし答へなかつた。
「ぢやあした行きませうか？」
水道橋へかゝらうとする手前際で靜江は人前を憚り作ら小聲でそつと囁いた。
「僕が行かうか。」

「だつて變よ小母さんに。」
と言つてゐるまに、電車はぴたりと構内へ止まつた。
「どうするの？どうするのよう！」
片足を降ろしてから靜江は心配さうにせいた。突嗟の間には私にもなんら工夫はつかなかつたが、危うく發車間際になつてから、慌てて窓から首を出すと、
「あした、おひるに、代々木でまつてろ！」
辛じてそれだけを呼びかけた
「雨が降つても？」
すぐに靜江が聞き返へしたが、答へるひまを待たないうちに、もう電車は動き出した。
靜江はなにかもつと確かめたいらしい顔付で、そのまゝ氣がかりさうに見送つてゐたが、私は人前を憚つて、がちやりと硝子窓をしめ切つた。
別な意味から妻も待ち遠しかつたと見えて、
「あら。どうしましたの靜江は？」
私の顔をみるとすぐ玄關先で不審さうに問ねた。
「小石川へね。なにか腐る土産物があるさうだから先へまわるんだとさ。小母さんひとなつかしがり屋だから、二三日は離さないだらうよ。」
しかし私は出たらめな嘘をついた。
來ないと決まつて安神なのか、またそれだけに内心氣が揉めるのか、妻は何んとも答へなかつた。

私はまたお恥しい咄であるが、暫くのまも別れてゐること後悔を覺えて、さながら十七八の青年ででもあるかのごとく、その夜一晩身をよじり乍ら、逢ひたさ待ち遠しさに睡りかねた。

約束の翌日は相憎の淫雨であつた。

「もうきつとけふあたりから入梅ですわね。」

私が立つたり坐つたりそはそは居つかないのを、なにか妻は淫雨のせいとでも解釋したのか、同感を求めるやうな言葉つきで話しかけた。

「なん時だろな。」

私はしかし上の空であつた。雨であらうが、なからうが、行くだけは代々木までいつてみる氣であつた。

「まんだおひるまへなんですけれど……あのうどこかへお出かけならお序に小石川へお寄りになつたらどうですの…」

ところが妻は意外であつた。なにもかもちやんとこころへたやうな口吻であつた。

「靜江におまへなにか用があるのかい。」

ちよつとくすぐつたかつたが、私もしらを切つた。

「靜江にもですけれど、小母さんにお產婆さんのことを聞いて來ていただくといいんですけれど……」

「ぢや行くよ。今からすぐに。」

私はふたつ返事でもう玄關口に降り立つた。いさゝか氣がとがめないでもなかつたが、私はレインコートをひつかけると、蛇の目をわしづかみにかゝえ乍ら、ふりむきもしないで格子戸を締め切つた。

代々木へ降りた時はおひる少し廻はつたところであつた。自らおどろき自ら耻ぢて、決して女なんぞ待つてる人間ではないと言ふことをさも人前に證明でもするかのごとく、私はいかにも退屈なひま人さうに、ことことそこいら邊をほつき

歩いた。

私の姿を認めるとうれしいところをぐつとこらへて、はにかみ乍ら靜江は降りて來た。

「雨だつたから心配したんですけれど。でも……長くお待ちになつて。」

眞實忍ぶ戀でもするやうに、ためらひためらひ靜江は近寄つた。私も同じくためらひ乍ら、近寄つたり離れたりどこへゆかうと言ふあてもなく只默つてぬかるみを歩いた。

「小母さんはなんていつてたい？」

明治神宮への一本道で、やつと私は口を切つた。眞實乙女の戀心から靜江はひとりなにかを思ひ詰めてゐるのか、それにはしかし一言も答へなかつた。只そこはかとなくうなだれて、はにかむやうに後に隨つた。

ひとつ魚鳥捕るべからず、またひとつ樹木折るべからず、と言ふお禁制の札が立つてゐるあたりまでやつて來てから、

「ね。この雨合羽似合ふでしよ。」

初めて靜江は靜江らしい彼女にかへつた。

「お前なんぞ女茶目は、なにを着たつて田舎もんだよ。」

初めて私も亦私らしい私にかへつた。

「いいことよ。だつて小母さん要らないつて言ふのにどうしても着てけつて利かないんですもの……ね、神宮の中へ這入りませうか。」

「叱られるだらうよ。神域をけがすことだとかなんとか言つてな。」

「どうして？」

「解らないのか－ばかだな。卽ち自ら省みればだね。」

「二人で歩いちやいけないつてなにか書いてあるの？」
「そこがその曰く言ひがたしつてとこなんだよ。」
「ぢやよしませうか。どつかほかへ歩きませう！」
そして彼女自身寂しいところ寂しいところと選ぶやうにし乍ら、先へ立つて歩き出した。練兵場へ出がけの所で私はちよつとした木立を見つけ出すと、濡れてゐないところを見計らひ乍らマントを敷いて腰をおろした。
「やつぱり結婚しろつて言ふんだろね。」
靜江が並んで腰をおろすと私はすぐに口を切つた。
「あたりまへだわ。」
「それでおいきにならうつてつもりかい。」
「しどいわそんな皮肉言つて。あなたこそわたしに行けつて言ふつもりなの。」
私はわざと答へなかつた。
「だつてわたしから言へばずい分ひとを弄つてるとしか思へないわ。」
「わかつてるよわかつてるよ。」
「姉さんとだつてあんなに突然に結婚して了ふんですもの。」
「しかたがないさ。」
「ぢやいつたいわたしはどうしたらいいの。」
「そこが心配だから相談に來たんだろ。」
今度は靜江が答へなかつた。

「なんぺん言つたつて同じことなんだけれど、僕が輕卒に結婚したつてこと柄はどこ迄もすまないと思つてるんだよ。身から出た錆なんだ。と言つてしかしお前に思ひ切つて結婚されるのも不愉快なんだ。思ひ切らないでゐるのも亦お互ひにちれつたいこと柄なんだからね。萬止むをえなかつたとかやつぱりそれが自然の數だつたんだとでも言ふべき一大變事でも出來したらつて、そんなことまで僕は考へたんだがね。……そうしたら…そうしたら…お互にはつきり考へも決まるだらうしね……また…さうと決まれば…これが運命だとかなんとか言ふ…つまりあきらめだな。あきらめもつくだらうしな。……正直言つてボク…身體兩離の苦しみだと思つてるんだ…決してそいつを廻僻しやうつて考へは毛頭ないが…お前にもあれにも…ボクは頭が上がらないんだ…だいぶきざな咄しになつて來たね。柄にないことかなボクがそんなこと言ふのは。…然しだね。然し然しだ…どうせお前に結婚されると言ふ場合になつたら…知らない人と結婚して貰ひたいね…僕とは全然知らない人とね…」

「わかつてます。わかつてますそれを言はないで下さい！　言はないで下さい！」

「まあそを允許すんな。これは僕の希望なんだ。かりにもしさう言ふ場合が起つたとしてだね。愈々お嫁に行くと決まつたら、僕の知つてゐる人のところへだけは行つてほしくないんだ…お前が意地になつて見せつけにわざとさう言ふ人を選ぶんなら仕方がないが、でない限りはだね。……おまへになに程かの誠意があつたら、知らない人を選んでほしいんだ……」

「こらへて下さい！　言はないで下さい！　決して決して…わたしどこへも行きたくはなかつたんです！　うんと兄さんに…あなたに…うらみを言ふつもりで出て來たんです！　だけどやつぱり…やつぱり…」

「やつぱりなんだい？」

「…やつぱり…あへばわたしにはもうなんにも言へなくなつたんです！　いけといつたら…およめに行けつておつし

やつたら……わたしだまつて知らない人のところへ參ります！　參ります……」

「ばかツ！　さう言ふ意味ぢやないんだ。反對に、反對に今日にもあれとは別れるやうな場合にもならないとも限らないんだからね。とにかくもすこし出來るならば待つてくれつて言ふ意味なんだ。待てないつて言ふ考へならば……お前の方で先んじたいつて言ふ考へならば……」

その時ふと氣がつくと、靜江はハンケチ一枚ではたまりかねたか、いきなり袂に面を伏せて肩をふるはし乍らはげしくすすり泣いたのである。

私はなんと言ふことなしに、不思議なくすぐつたさと馬鹿らしさを覺えた。自ら省みて常規を逸した亢奮の仕方がまたひどく恥かしかつた。

「おい！　つまらないね！　變なこと喋舌つちまつたな！　どうだいかへろぢやないか！　ぼくんところへやつていこうよ！」

そして言ひ乍ら靜江の肩をよいよいと二つばかりゆすぶつた。暫くほんの暫く靜江は泣きじやつくりをやつてゐたが、なんと思つたかいきなりはつと面をあげると、睫毛にいつぱい涙をためたまゝで嫣然とひとつ笑つてのけ乍ら、

「いきましよか。今から。」

言ふまにもう立ち上つた。

並んでぼくぼく歩いてゐたが、

「風のまにまにまゐりましよかねつてやつなんだね。」

ふとそんな言葉を思ひ出して、私は出たらめに靜江の方へ聲をかけた。

「なにが？」

言ひ乍らこちらをふりむいて近寄つて來たが、私は已に以前の沈默にかへつた。靜江も默つてぼくぼくあとからしたがつた。

暫くたつと今度は靜江の方から、

「ね、利根川のつて唄があるんでしよ。」

とんちんかんにうしろから呼びかけた。

「どこによう！」

言ひ乍ら私はふりかへつたが、しかし靜江はもう已に二度とは言葉をつがなかつた。

私も默つてぼくぼくと先へ歩いた。

その氣で私が二人分の切符を買つて了ふと、

「ね、わたしやつぱり小石川へかへるは。」

突然靜江は態度をひるがへした。私が了解に苦しんでゐるのも平氣な顏で、

「なんだか姉さんところへ行きづらいのよ。」

勝手にひとりで決めて了つて、言ふまにも早や水道橋を買つた。たつて連れて行かうと言ふ亢奮は私にもなかつた。いびつ乍らも滿足のあとの倦怠と言つた風な無氣力なこころもちで、私もとつとと階段を拾つて行くと、

「氣がむいたらあしたお訪ねいたしますわ。」

と言ひおいたまゝで靜江は小走りに向ふへかけぬけた。

電車へのると、妻には甚だ氣の毒であつたが、なにか妻の一身上に分れ話の好材料になるやうな天災地變が湧いてくれと言ふことばかり一心に私は心で念じ願つた。

お産が重くて死んで呉れたら……思ふ次から馬鹿ッ馬鹿ッと打ち消しはしてみたが、私はそんなこと迄も空想を描いた。今から家へかへるあひだに、家もろ共に燒け死んでゐたら……と思ふあひだもはげしく首を振つたが、私の心はまた執拗に同じ空想を描きつゞけた。

默つて茶の間へ這入り込むと、妻はちやんと三人前の支度をつくつて、靜江の來るのも豫想してゐた風であつた。

「小母さんはどんな風でムいましたの？靜江は來るつて申しませんでしたか？」

そして彼女は遠慮しいしい私の方へ話しかけたが、場合が場合だつたので、私は却つて氣を荒立てた。もつと妻からむきになつて、嫉妬のひとつも言はれたかつた。また態度なり言葉なりで、不平のひとつも示されたかつた。せめてなんとか面前でろこつにふる舞つてでもくれたならば、一議に及ばず私の方にもその決心が造れたに違ひなかつた。

所がしかし妻の方では、あまりに萬事柔順であつた。またあまりに凡が寛大であつた。取りつく島のない程までに、あまりに彼女は冷やかであつた。

「ね。小母さんのところへは行かなかつたよ。」

なんとか言ふだらうと言ふ豫想を以つて、私はわさといやがらせを言ひ出した。

「あらさうでムいますか。ぢや靜江にもお遭ひにならなかつたんですの。」

しかし妻はなんの言葉尻も捕へさせなかつた。

「遭つたよ。靜江には代々木の原で。久しぶりだつたからね。」

またいちだんといやがらせを言つてやつた。

「だつて、こんなに雨が降つてゐましたのに。」

しかし妻はおどろかなかつた。また眉毛一つ動かさなかつた。

「この雨にご執心さまつて顔してたぜ。通りすがりの馬鹿たちが。」

私はやつきになつてそんな粉色までほどこした。

「まあ……」

言つたまゝで妻はご戯談ばかりと言ふやうな笑ひ顔さへつくつた。

私はほとんど歯が立たなかつた。これ迄言へばなんとか言ふだらうと思つてゐたのに、妻は歎ずべき泰然自若さであつた。たつた一言で充分だから、なんとかうらみがましいいやみでも言はうものなら、その場に馬鹿ツ出て行けとでもきつかけになつた筈なのに、妻はしかし死人のごとく冷やかであつた。

ほとんど歯が立たないどころか私は却つて馬鹿にされたやうに感じた。

一人でやきもき苛立つてゐると、突然妻が顔色を替へて、そそくさと慌て乍ら四畳半へ駈け込んだ。

「どうした？おい？どうしたんだ？」

啻ならぬ顔色であつたから、私も及び腰になり乍らつい釣り込まれて聲をかけた。

しかし彼女は答へなかつた。

「どうしたんだ？腹いたか？おい？どうしたんだ？」

やはり彼女は答へなかつた。とたんにうんと言つて歯でも喰ひしばつたらしい呻吟の聲が突然私の耳をおそつた。

「なんだ！産れさうか！おい！まだか！まだか！もう出たんか！」

瞬間、私は狼狽の極に達した。殆んど茶餉臺なんぞをくつがへさんばかりにうろたへ上つて、二足半目に四畳半へ飛び込んだ。

「出たか！まんだか！」

私は變に鳥毛が立つた。しかし妻は答へなかつた。只うんと齒ぎしりを噛んでゐるだけであつた。突嗟のうちにも部屋のうちを一瞥すると、いつのまに妻はその用意を整へたものか、床までちやんとつくろつて、脱脂綿からタオルまで、なに一つ不用意はなかつた。

私はしかしその反對に、只狼狽のあまりうろたへ上つた。

「まてまて！だめだぞ！今産んぢまつては！出來るものなら一二時間待つてろよ！」

言つては見たが、しかし突嗟に手の施しやうはなかつた。やうやくにしてはつと産婆のことに思ひ當ると、

「僕がかへるまで堪へてろ！」

言ひ乍らも私は女下駄と男下駄とを片一方宛で、まるくなり乍ら表へ飛び出した。往來まで走つていつたが、また思ひついて引つかへした。

「あのちよつとすみませんが……家内がなんですから手を一つ貸してくれませんか！」

そして表からお隣りへ大聲で呼つた。

「どうしました？どうなすつたんです！」

言ひながら妻君が出て來たところへ、

「もう出かゝつてるんです！産まれるんです！うんうん言つてますからたのみます！たのみます」

追つかぶせるやうに言つておいて、ろくろく賴みも言はないで、またまるくなつてかけ出した。

往來を右角へ曲つたが、また思ひついて走り戻つた。

「ねー おい！小石川のおばさんを呼ばうか！よさうか？」

表から妻に呼びかけた。不思議に私にはなに程も靜江のことなぞ念頭になかつたので、私は勝手に小母さんだけを電報で呼ぶ考へをつくつて、遮二無二停車場の方へ急いだが、突然靜江のことに思ひ當ると、奇怪な道念にかり立てられて、急に私は心をひるがへした。

反對の方角へくるりとくびすをひつかへすと、遮二無二產婆の家へ走つた。瞬間のうちにまた走つて歸ると、

「おい產んだか！まだか！」

叫び乍ら馳け上つた。

「そんなにおせきになつたつて潮どきが來るまでは駄目なんですのよ」

しかしお隣りの妻君なぞは、存外平然たるものであつた。

「おい！だいじようぶかい！だいじようぶかい！」

言ふまも私は心配になつて、只うろたへ乍らのぞき込んだ。

しかし妻は答へなかつた。窪んだまなこをしつかりつむつて、物をも言はずに齒ぎしり噛んだ。ぢつとそれを見つめてゐると、突然私はたまらなく變に悲愴なこころもちになつた。

「おい！抱いてやろか！手傳つてやろか！」

そして聲をふるわせ乍ら、枕元へ近づいた。

「駄目ですよ、駄目ですよ、こんなところへお這入りになつては。男の方がゐない方がずつとらくに產まれるんですよ。いつてらつしやいなあつちへ。」

妻ではなくて、お隣りの妻君が遮ぎつた。

「さうですか。」

と言つゝ腰を浮かせたが、障子に片手をかけてからいかにも變に去りかねて、いきなりひよいとふり向いた。

てうどその出合がしらに、突然妻がはつとまなこをみひらいたのである。ぢつとみつめたそのまなさしに打つかつて、

私は瞬間たぢたぢとおののいた。

おそらく妻の方では只一意しのげぬ苦痛を訴へたくて、ぢつと私を見返へしたものに相違なかつたらうが、私はしかしそのまなざしの底のうちから、この世に最後なる妻の怨言を今にして初めてま正面から投げかけられたやうに感じた。

ぢつとみすゑたそのまなざしはあなたはどこまで私を苦しめるんです！　と言つてゐるやうにかんぜられた。

睫毛ひとつ動かさなくて、肚の底まで射ぬくやうなそのまなざしは、あなたはこんな時でも私をふり棄てるのですか！と言つてゐるやうにかんぜられた。

「抱いてやらう！」

つひに私はたまりかねて叫んだ。

「産まれるまでついてやるからな！　大丈夫しつかりしてゐろよ！」

言ふまにも私はうしろへまはつて、いきなり妻の両手を強く千切れるほどにぎりしめた。

彼女ははつとまなこをとぢた。

またみるまに睫毛をいつぱいにうるませた。

「よしよし！」

憚るやうに小聲で囁くと、泣くまいとして、見せまいとして、ふるへる唇を嚙みしめ乍ら。

「まさか双子ぢやないでしよな。」

わざと他を顧みてお隣りの妻君に頓狂な戯談を言つた。

その夜深更に及んでからである。

私は産まれたての赤ん坊の枕元にそつとかしこまつて、

「いつなんどきなりともこころおきなくご結婚なさるべく候。」

と言ふ手紙を小石川にゐる靜江あてに、たつたひと息で書いた。

（完）

短篇小說募集

先月號に短篇小說募集の件を發表して以來今號〆切日までに、その應募原稿はかなり多數にのぼつて居ります。優秀と認めた作品は何篇でも採用しますから更に多數の御投稿を待ちます。そしてその當選順によつて每月發表して行きます。

一、枚數　四百字詰原稿紙二十枚以內。寄稿原稿は返送せず。

一、〆切日　八月二十七日

一、原稿料　一枚に付二圓五十錢以上。

一、「短篇小說」と封筒に朱書のこと。

一、宛名　女性改造文藝係。

一、第一當選を十月號にて發表します。

女性改造編輯部

編輯者より皆さんへ

◇本誌八月號「有島武郎氏追想號」は前例なき歡迎を受け初版は二三日にして賣切れ、再版までいたしまして全く近來雜誌界の新記錄をつくりました。こんなことは雜誌界稀有のことです。

◇九月號は内容を一層充實して讀者にお目にかゝることゝなりましたが、武者小路氏が「或る對話」と題してかいて下さつた論文は實に氏が苦惱の現れとして氏が將來の立場を宣言したものです。有島武郎氏は雜誌「改造」で「宣言一つ」を發表されたが、氏は本誌に於て含蓄多き、そして男氣に充ちた本文を發表して下さいました。この一文を讀む人がどうして涙なくして讀み得ませうか。

◇そして高柳、厨川、長谷川賀川氏等が轡を並べて本號で論文を發表して下さいましたことを謝します。横、木暮兩登山家が、この夏の全收獲を我誌に傾けて下さつたことゝ併せて本誌の光彩を一層鮮かにするものです。かくして本誌は我國で最も充實した最高級の婦人雜誌たるに恥ぢぬものとなりました。

◇秋の文藝講演會はいよ〱九月下旬に慶應大學で開きます。尚ほその詳細は次號で發表いたします。それから兩女子大學女子專門學校等の聯盟になる女子談話會も九月に開催いたします。それも次號で委細を發表します。

◇光明皇后の懸賞は應分集まりましたが、當選圏内に這入るもののなかつたことを返す返すも遺憾に思ゐます。

◇まだあつい、が、それでも爽かな秋に入りました。これから讀書の季節です。夏きたへられました體でミツシリと讀書の三昧境に入つて下さい。

くさむらにすだく蟲も、秋空に清くすむ月も、しみ〲と人生の深みへつれて行きます。わたしどもは巷に發つもの人生の悲痛が横はつてゐると思ゐます。しかしそれにすべて生への歡喜の試錬です。かく私どもは思ゐたいのです。

◇本誌の「運動講座」は思つたより大物が毎號あつまります。それは一流の運動雜誌でも集まらないと思はれる貴重な原稿が集まります。我國の女子運動は本誌によりてすべてが指導さるる時代が近く到來することと思はれます。

◇谷崎潤一郎氏は自分の思索に一轉機を劃すべき一大戯曲を構想中でしたが、このほど漸く案成り、いよ〱十月の本誌から掲載することが出來るやうになりました。十月號は一週年記念號です。堂々たる陣容で皆さまにお目にかゝることが出來ることと思ゐます。

女性改造定價表

冊數	定價	郵稅
壹冊	五十錢	壹錢五厘
六冊	參圓	郵稅共
十二冊	六圓	郵稅共

注文の注意

◇増大號共他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇注文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の注文は壹部郵稅拾六錢を申受く（但し支那を除く）
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割増のこと
◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料（一等百圓 二等七拾圓）

◎本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

（九月特別號定價金六十錢）

大正十二年八月十八日印刷納本
大正十二年九月一日發行

編輯兼發行印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貢一郎
印刷所 東京市京橋區南鍋町廿七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社
電話芝 一六三八 二八五四 四三〇三
東京振替 八四〇二



大正十一年九月十三日第三種郵便物認可 大正十二年八月十三日印刷納本
大正十二年九月一日發行（毎月一日一回）
第二巻第九號
九月號
定價六拾錢（送料二錢）

ライオン煉歯磨

初秋の氣分に
ふさはしい
ライオン煉歯磨の
香味！
御家庭にも………
御旅行にも………



ライオン煉歯磨チューブ入